原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第31集

原の辻遺跡

はる　つじ

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

2005

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第31集

原の辻遺跡

はる　つじ

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

原の辻遺跡全景（南から北をのぞむ）

原地区遺構検出状況（上方が北）

高元地区調査状況（上方が北）

発刊にあたって

本書は国庫補助を受けて実施した，平成16年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は，弥生時代を代表する環濠集落であり，日本最古の船着き場遺構を始め，大陸や朝鮮半島との交流を物語る数多くの貴重な遺物が出土しています。壱岐島内における同時代の遺跡と比較すると，遺物の質や量，および遺跡の規模などすべての面で卓越した存在であるため，中国の歴史書『魏志』倭人伝に記載された「一支国」の王都と特定されました。『魏志』倭人伝に記載された国々の中で，原の辻遺跡のように中心域が特定された例は他に無く，非常に学術的な価値の高い遺跡と言えます。このため，平成９年９月に国史跡，平成12年11月には国特別史跡の指定を受けました。

本年度の範囲確認調査は，台地上の原地区・高元地区と，台地北東部の石田高原地区で実施しました。原地区では祭儀場南端部の調査を行ない，昨年度の調査で問題提起されていた遺構群の変遷について，一応の結論を示すこととなりました。高元地区では，南北に約200mのトレンチを設定し，岩盤まで掘り下げたことにより，台地上における遺構面の深さと土層の堆積状況が明らかとなり，当時の地形の復元を試みることができました。石田高原地区では，平成５年の緊急発掘調査で発見されていた環濠の延長部分が検出され，その他の新たな環濠の存在も確認できました。

このように，調査の進展にともなって次々に新たな発見があり，原の辻遺跡の姿がより具体的に明らかになってきました。今後，これらの調査成果を保存整備にも取り入れて広く公開し，地域の皆様により親しまれる遺跡となるよう心掛けていかねばならないと考えています。

本書が学術資料として活用されるとともに，文化財への理解を深めるために役立てていただければ幸いです。

平成17年３月25日

長崎県教育委員会教育長　立　石　　暁

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡調査研究事業にともなって実施した，平成16年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。

2．本書に収録した調査区の所在地は，長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触字原・字高元，石田町石田西触字高原である。

3．調査は長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会　委員長　西谷　正（九州大学名誉教授）
委　員　工楽善通（大阪府立狭山池博物館館長）
委　員　小田富士雄（福岡大学名誉教授）
委　員　宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授）
委　員　日野尚志（佐賀大学名誉教授）
委　員　沢田正昭（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）
委　員　松井　章（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化センター遺物調査技術研究室長）

原の辻遺跡調査事務所

所　長　安楽　勉
課　長　野中滋生（壱岐教育事務所兼務）
係　長　冨永宏美（壱岐教育事務所兼務）
係　長　村川逸朗
主任文化財保護主事　福田一志
文化財保護主事　林　隆広
文化財保護主事　溝上貴稔（調査担当）
文化財保護主事　中尾篤志（調査担当）

調査協力　片岡宏二（小郡市教育委員会）　壱岐市教育委員会

4．本書で使用した遺構と遺物の実測・製図および写真撮影は，原の辻遺跡調査事務所が行なった。

5．本書に収録した遺物・図面・写真類は，原の辻遺跡調査事務所が保管している。

6．本書の執筆担当者は本文目次に（　）で示した。

7．本書で用いた座標は日本測地系である。

8．本書では，環濠を含む溝状遺構にSD，土坑にSK，竪穴住居跡にSCの略字を使用した。

9．原地区の周溝状遺構の調査に際して，小郡市教育委員会の片岡宏二氏に現地にてご指導いただくと共に玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。

10．本書の総編集は中尾が行なった。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地と環境……1（溝上）

Ⅱ　調査に至る経緯……5（中尾）

Ⅲ　調査

1．原地区の調査　（中尾）

(1)　調査概要……7

(2)　各トレンチごとの調査成果……14

(3)　小結……31

(4)　付編：片岡宏二「原の辻遺跡検出の周溝状遺構とその意義」……35

2．高元地区の調査　（中尾）

(1)　調査概要……45

(2)　各調査区における成果……47

(3)　小結……82

3．石田高原地区の調査　（中尾）

(1)　調査概要……99

(2)　各調査区ごとの成果……101

(3)　小結……123

4．まとめ……135

挿 図 目 次

第１図　壱岐島の位置と関連遺跡図……3
第２図　平成16年度調査区位置図……6
第３図　原地区調査位置図……8
第４図　原地区遺構配置図……9
第５図　原地区トレンチ内土層図①……10
第６図　原地区トレンチ内土層図②……11
第７図　原地区トレンチ①遺物出土状況および出土遺物……15
第８図　原地区トレンチ②・トレンチ③・トレンチ⑥遺物出土状況および出土遺物……17
第９図　原地区トレンチ④遺物出土状況……19
第10図　原地区トレンチ④出土遺物……20
第11図　原地区トレンチ⑤遺物出土状況……21
第12図　原地区トレンチ⑤出土遺物①……22
第13図　原地区トレンチ⑤出土遺物②……23
第14図　原地区トレンチ⑤出土遺物③……24
第15図　原地区Ｈ７トレンチ遺物出土状況および出土遺物①……26
第16図　原地区Ｈ７トレンチ出土遺物②……27
第17図　周溝状遺構の平面プラン……32
第18図　調査区内における遺構群の変遷……32
第19図　祭儀場の変遷……34
第20図　各地の周溝状遺構……37
第21図　高元地区調査区位置図……46
第22図　高元Ａ区平面図および土層図……48
第23図　高元Ａ区出土遺物……49
第24図　高元Ｂ区平面図および土層図……51
第25図　高元Ｂ区出土遺物……52
第26図　高元Ｃ区平面図および土層図……54
第27図　高元Ｃ区出土遺物……55
第28図　高元Ｄ区平面図および土層図……57
第29図　高元Ｄ区出土遺物①……58
第30図　高元Ｄ区出土遺物②……59
第31図　高元Ｅ区平面図および土層図……61
第32図　高元Ｅ区出土遺物①……62

第33図　高元E区出土遺物②　……63
第34図　高元E区出土遺物③　……64
第35図　高元F区平面図および土層図　……66
第36図　高元F区北半部遺物出土状況　……67
第37図　高元F区出土遺物①　……68
第38図　高元F区出土遺物②　……69
第39図　高元F区出土遺物③　……70
第40図　高元F区出土遺物④　……71
第41図　高元F区出土遺物⑤　……72
第42図　高元G区平面図および土層図　……74
第43図　高元G区出土遺物　……75
第44図　高元H・I区平面図および土層図　……77～78
第45図　高元H区出土遺物　……79
第46図　高元I区出土遺物……80
第47図　旧地形復元ライン位置図……83
第48図　旧地形の復元（南北ライン）……85～86
第49図　旧地形の復元（東西ライン）……87
第50図　石田高原地区調査区位置図　……100
第51図　石田高原A～C区遺構平面図　……102
第52図　石田高原A～C区土層図……103～104
第53図　石田高原A～C区トレンチ内土層図……105～106
第54図　石田高原C区SD1遺物出土状況　……108
第55図　石田高原C区SD1出土遺物　……109
第56図　石田高原A・B区SD3・SD4・SD5礫群出土遺物①　……112
第57図　石田高原A・B区SD3・SD4・SD5礫群出土遺物②　……113
第58図　石田高原A・B区SD3・SD4・SD5礫群出土遺物③　……114
第59図　石田高原A・B区SD3・SD4・SD5礫群出土遺物④　……115
第60図　石田高原D・E区調査区位置図および土層図　……117
第61図　石田高原F区平面図および土層図　……118
第62図　石田高原F区SD6出土遺物①　……119
第63図　石田高原F区SD6出土遺物②　……120
第64図　石田高原F区SD6出土遺物③　……121
第65図　石田高原地区その他の遺物　……122
第66図　北東低地部の遺構群　……124
第67図　北東低地部における遺構群の変遷　……125

表　目　次

第１表　原地区トレンチ内土層注記……12～13
第２表　原地区トレンチ内土層対応表……13
第３表　原地区出土遺物観察表①……29
第４表　原地区出土遺物観察表②……30
第５表　高元地区出土遺物観察表①……89
第６表　高元地区出土遺物観察表②……90
第７表　高元地区出土遺物観察表③……91
第８表　高元地区出土遺物観察表④……92
第９表　石田高原地区出土遺物観察表①……127
第10表　石田高原地区出土遺物観察表②……128
第11表　石田高原地区出土遺物観察表③……129

図 版 目 次

図版１　原地区遺構検出状況（東より）／　作業風景①　／　作業風景②
図版２　H７トレンチ土層（西壁）　／　トレンチ①遺物出土状況　／　トレンチ①完掘状況
図版３　トレンチ①土層（東壁）　／　トレンチ②土層（西壁）　／　トレンチ②土層（東壁）
図版４　トレンチ④土層（西壁）　／　トレンチ④土層（東壁）　／　トレンチ④土層（南壁）
図版５　トレンチ⑤遺物出土状況　／　トレンチ⑤出土鉄鎌　／　トレンチ⑤出土鉄剣
図版６　高元地区調査区近景（南→北）／E 区遺物出土状況（南→北）／F 区遺物出土状況（南→北）
図版７　A 区完掘状況（南→北）　／　B 区出土銅鏃　／　B 区出土刀子
図版８　B 区出土銅釧　／　C 区北端土層（西壁）　／　D 区遺物出土状況（SK１）
図版９　E 区遺物出土状況　／　F 区北端遺物出土状況　／　G 区ピット掘り下げ風景
図版10　H 区出土青銅製鋤先　／　H 区環濠検出状況　／　I 区貯蔵穴（SK１）断面
図版11　石田高原 A 区作業風景　／B 区トレンチ D 完掘状況　／C 区 SD１検出状況（東→北）
図版12　A 区 SD３・SD４検出状況　／　A 区 SD５礫群出土状況　／　A 区 SD４須恵器出土状況
図版13　A 区トレンチ A 南壁（SD３断面）／　B 区礫群出土状況　／　B 区 SD５出土銅鏃
図版14　B 区トレンチ D 東壁（SD３・５断面）／C 区 SD１トレンチ完掘状況／C 区 SD１断面（東壁）
図版15　C 区 SD１断面（北壁）　／　F 区 SD６検出状況　／　F 区 SD６断面（南壁）

Ⅰ．遺跡の立地と環境

原の辻遺跡は，玄界灘に浮かぶ東西約15km，南北約17km，総面積約138km²の壱岐島の東南部にあり，島の南側を西から東にかけて緩やかに流れる幡鉾川の河口部に位置する。そこは現在，「深江田原」と呼ばれる穀倉地帯となっており，干拓を伴わない沖積平野としては，島内はもとより長崎県内でも随一の広さを持つ。行政区分に従えば，原の辻遺跡は壱岐市芦辺町深江鶴亀触を中心として，芦辺町深江平触，石田町石田西触などの２町６触にまたがる。壱岐では古くから農村のことを「触」，漁村のことを「浦」と呼び集落を区分してきたが，その名残から今でも行政名称に「触」「浦」が使われている。

平成16年３月１日，郷ノ浦町，勝本町，芦辺町，石田町の４町が合併して新たに壱岐市が誕生した。今日，「平成の大合併」といわれる全国的な合併ラッシュの流れに沿ったものであるが，壱岐島の行政区分はこれまでも中央の施策を受け，幾度も改変されてきた。以下，歴史的な変遷を概観してみよう。

壱岐島が中国の歴史書『魏志』倭人伝に登場する「一大国」（一支国の誤記と考えられる）に相当することは周知の通りであるが，正式に行政区分されたのは７世紀後半以降のことである。すなわち律令制度の制定によって全国は「国」「郡」「里」に分けられ，対馬国とともに西海道11国の中のひとつに数えられることになった壱岐国には，石田郡と壱岐郡の２郡が設置された。辺境の小さな島でありながら一国に遇せられた理由は，その立地にあろう。壱岐島には島中央部の亀石地区を中心に，全長91mの大型前方後円墳である双六古墳をはじめ，長崎県全体の60％以上の古墳が存在する。それらは築造年代が６世紀後半以降に偏ることや，石室の規模と構造，及び副葬品の内容などから中央政権との強い結びつきがあったことを想像させる。また，白村江の戦いの翌年（664年）には防人と烽がおかれたことが『日本書紀』に記されている。壱岐国は中央政府にとって国防上の重要地点としてとらえられていたのである。

対馬と同様，大陸への中継地点でもあり，国境線でもあるという壱岐島の立地は，戦乱による多くの悲劇を生み出した。1019年の女真族の襲来（刀伊の入寇）や1274年と1281年の２度にわたる蒙古の襲来（元寇），さらには南北朝から戦国時代にかけての松浦党諸氏や波多氏を中心とした領有権争いなどがそれである。近世に入ると壱岐島は平戸藩松浦氏の支配下におかれることとなり，城代とともに藩から派遣された郡代が石田郡と壱岐郡を統治した。明治維新期には一時平戸県となったものの，間もなく長崎県に併合され，明治11（1878）年に石田・壱岐２郡と22村に，明治29（1896）年には石田郡と壱岐郡が合併して壱岐郡となった。戦後，昭和22（1947）年に壱岐郡は武生水町・勝本町・田河町の３町及び９村となったが，その後もいくつかの改変を経て，昭和45（1970）年に旧４町の体制となり，34年後の平成16（2004）年に壱岐市が誕生した。

新生壱岐市が抱える問題は多い。大都市博多とフェリー２時間15分，ジェットフォイル１時間で結ばれている一方で，長崎県本土と直接つながる交通手段は航空機のみであり，航空機と呼子フェリー

の利用者を合計しても博多－壱岐間の利用客数の半数にも満たない。このため，壱岐市は行政的には長崎県に属するものの，経済的・文化的には福岡県に依拠するところが非常に大きい。豊かな自然環境を活かした観光事業は島の重要な財源の１つであり，平成15年には延べ数にして約66万人の観光客が訪れているが，長引く不況の影響や，他の観光地との競合などによりその数字は伸び悩んでいる。また，島外への移住も多い。国勢調査によれば，平成２年に37,308人いた人口は平成12年で33,538人にまで減少しており，人口最多であった昭和30年の約65％にまで落ち込んでいる。

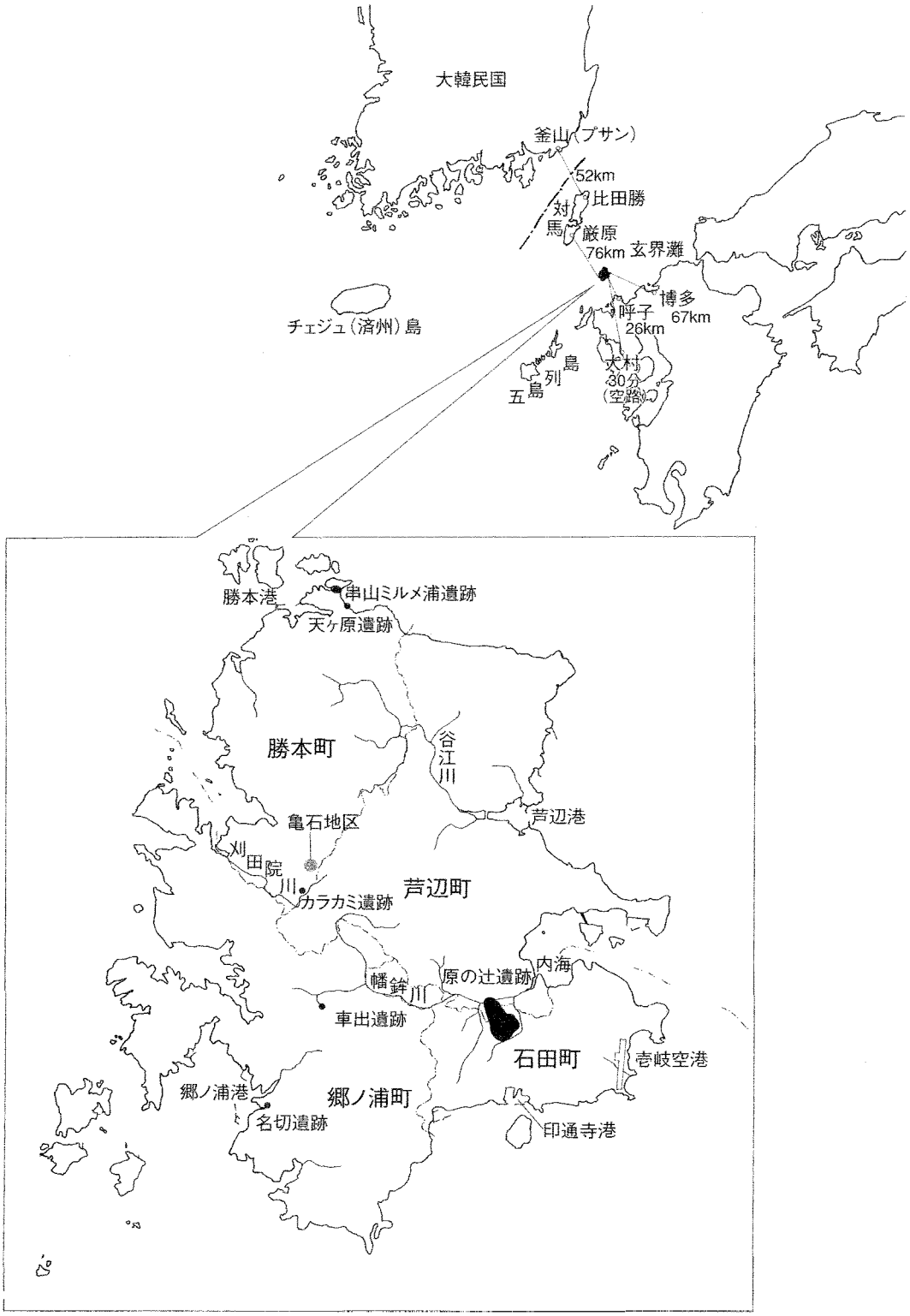
そのほか壱岐市の特徴として，第１次産業就業者が高いことがあげられる。平成12年10月１日現在の統計では，県平均の9.6％に対し，市平均が26.8％となっており，中でも農業従事者の割合が高い。これは壱岐島が，県内でもっとも農業の条件が整った地域だからであろう。島の面積に対する耕地の割合は29％あり，県平均の13％，五島の７％，対馬の1.5％を大きく凌駕している。基幹作物は肉牛，米，葉たばこで，原の辻遺跡がある「深江田原」でも，季節に応じたさまざまな作物や飼料の栽培風景を見ることができる。しかし，人口の減少と歩調を合わせる形で農家の戸数や農家人口も減少を続けており，今後どのように島を活性化していくべきか，住民・行政ともに様々な模索をしているところである（註１）。

以上述べてきたような立地環境にある壱岐島は，玄界灘の荒波と時代のうねりを受けながら，いくつかの転機を経て今日に至った。なぜこの島に大規模な集落が存在したのか。弥生人はこの島をどう活用しようとしたのか。壱岐市の誕生は，これまで壱岐島が歩んできた道のりと培われた文化を再度見つめ直す機会を与えている。ここで改めて原の辻遺跡を中心とした壱岐島の歴史を振り返ってみよう。

壱岐島における人類の最古の足跡は，３万年前以降の後期旧石器時代に認められる。原の辻遺跡を始め，内陸部の数箇所でナイフ形石器，台形石器，細石核，細石刃などが見つかっている。そのほか原の辻遺跡ではナウマン象の臼歯が発見されており，そういった大型動物を追って当時陸続きだった壱岐へ人々が移動してきたことが想定されるが，現在のところ石器が共伴して出土した例はない。

続く縄文時代の遺跡は24ヶ所が知られている。それらは沿岸部に集中し，干潮時にだけ姿をあらわす場合が多く，ドングリの貯蔵穴が発見された名切遺跡を除けば，どれも遺構は不明確である。具体的な生活の解明は今後の調査に委ねられているが，漁撈具などわずかに出土した遺物の状況から見れば，環境の変化に柔軟に適応し，資源を積極的に活用しようとした様子がうかがえる。この時代の集落が安定して営まれていたとすれば，弥生時代の原の辻遺跡やカラカミ遺跡を築いた集団との連続性が考えられるが，弥生早期の突帯文土器を出土した遺跡は名切遺跡を含めた３ヶ所に過ぎず，それらも弥生前期には廃絶している。壱岐島における本格的な集落の形成は，縄文時代とは別系譜の集団によって行なわれたと考えるのが妥当であろう。

弥生時代の原の辻遺跡に集落が形成されたのは前期後葉～末段階である。遺跡は平野部に南から突き出した標高８ｍ～18mほどの低い台地と，その周囲を取り巻く標高５ｍの低地部によって構成されるが，これまでの調査で前期後葉～末の資料がまとまって出土しているのは台地北部とその周辺の低地部である。同時期に集落の形成が始まったカラカミ遺跡は，島の中央部から西側に流れる刈田院川



第１図　壱岐島の立地と関連遺跡図

の北側に位置しており，標高80mの丘陵部を取り囲む高地性集落である。これまでの調査で，Ｖ字形の環濠や豊富な漁撈具，膨大な数の土器類や石器類に加え，金属製品や卜骨などが出土しているが，カラカミ遺跡の範囲は約５ha程しかなく，原の辻遺跡の方が集落形成の初期段階から規模が卓越していた（註２）。

平成５年度より本格化した発掘調査によって範囲が約100haにも及ぶことが判明した原の辻遺跡の

最大の特徴は，台地の周囲を幾重にもめぐる環濠の存在と大陸から運ばれた豊富な舶載品，及び船着場の存在であろう。集落に環濠をめぐらす慣習は大陸から伝播したものであるが，大陸の飛び石とも言える対馬・壱岐を飛び越えて北部九州でいち早く導入された。原の辻遺跡で始めて環濠が掘削されたのは，それから３世紀ほど遅れた中期前葉段階である。前期末～中期前半の時期，九州から東海にかけて全国的に集落が拡大する傾向が見られ，関東でも大型の集落が発生する。また，北部九州では集落間に階層構造が見え始め，中国の史書に記載される「国」に該当する政治的な組織ができた（註３）。そのことを考え合わせれば，原の辻遺跡は北部九州のように集落の発展過程として居住域を拡大させ，環濠を掘削したというよりも，比較的短期間のうちに一挙に壱岐島の中での中核的存在となり，島内外に大きな影響力をもたらした計画性の強い集落であったと言えよう。台地の北西約300mの低地部で発見された船着場も中期前半には築かれており，敷粗朶工法という大陸直移入のハイテク技術を導入していることからも，原の辻遺跡の集落形成の背景には，それを可能にした豊富な経済力と大きな政治的意図が働いていたことを推測させる。これまで『魏志』倭人伝の中に登場する国々の中で，その国の範囲と中核となる集落の存在が裏づけされた「国」は一支国以外に無い。今後，原の辻遺跡を中心としながら一支国がどのようなまとまりを持ったのか，「国」の実態面の解明が求められる。

一支国を考える上で，原の辻遺跡とカラカミ遺跡以外にもう１つ重要な集落がある。幡鉾川の上流部に，原の辻遺跡から直線で約５キロ離れた場所に位置する車出遺跡である。そこは「深江田原」に次ぐ穀倉地帯となっており，近くには壱岐一の宮とされる天手長男神社が鎮座する鉢形山がそびえる。調査の結果，やはり環濠がめぐり，中期中葉頃に集落が形成されたことが判明している。原の辻遺跡と同じく，貨泉や方格規矩鏡など大陸との交易を示す遺物や祭祀的な性格を持つ土器溜り，卜骨も出土しており，両遺跡間は類似性が非常に強い。車出遺跡の調査はまだ部分的にとどまっており，その規模や周辺遺跡との関連など，これから徐々に解明されていくであろう。

その他，壱岐島の最北端には天ヶ原遺跡がある。集落遺跡ではなく，壱岐では５点しか発見されていない銅矛のうちの３点が同時に，ほぼ完全な形で出土した遺跡である。防波堤建設の工事中に見つかったため，出土状況は不明であるが，これまで120本を越す銅矛が発見された対馬に最も近い場所から出土していることを考えれば，航海安全を祈願して埋納されたものと考えられる。また，近くには奈良・平安時代に朝廷に献上するための干しアワビの生産工場であったと考えられる串山ミルメ浦遺跡があり，そこでは亀卜も発見されている。

壱岐島は，小さな島でありながら，それぞれに個性を持った豊富な歴史遺産に恵まれており，「文化財の宝庫」と呼ぶにふさわしい島である。

註

(1) 壱岐市の統計資料については長崎県壱岐支庁「壱岐島勢要覧」（2003－2004）を参照した。

(2) 宮崎貴夫「原の辻遺跡における歴史的契機について」（西海考古第４号，2001年）

(3) 武末純一『弥生の村』（日本史リブレット３，2002年）

Ⅱ．調査に至る経緯

原の辻遺跡は，明治37・38年頃に，当時小学校教員であった松本友雄によって発見された。松本は原の辻遺跡での調査成果を中央学界に積極的に報告し，その後鴇田忠正や山口麻太郎が断続的に報告を行い，原の辻遺跡の存在が世に知られることとなった。

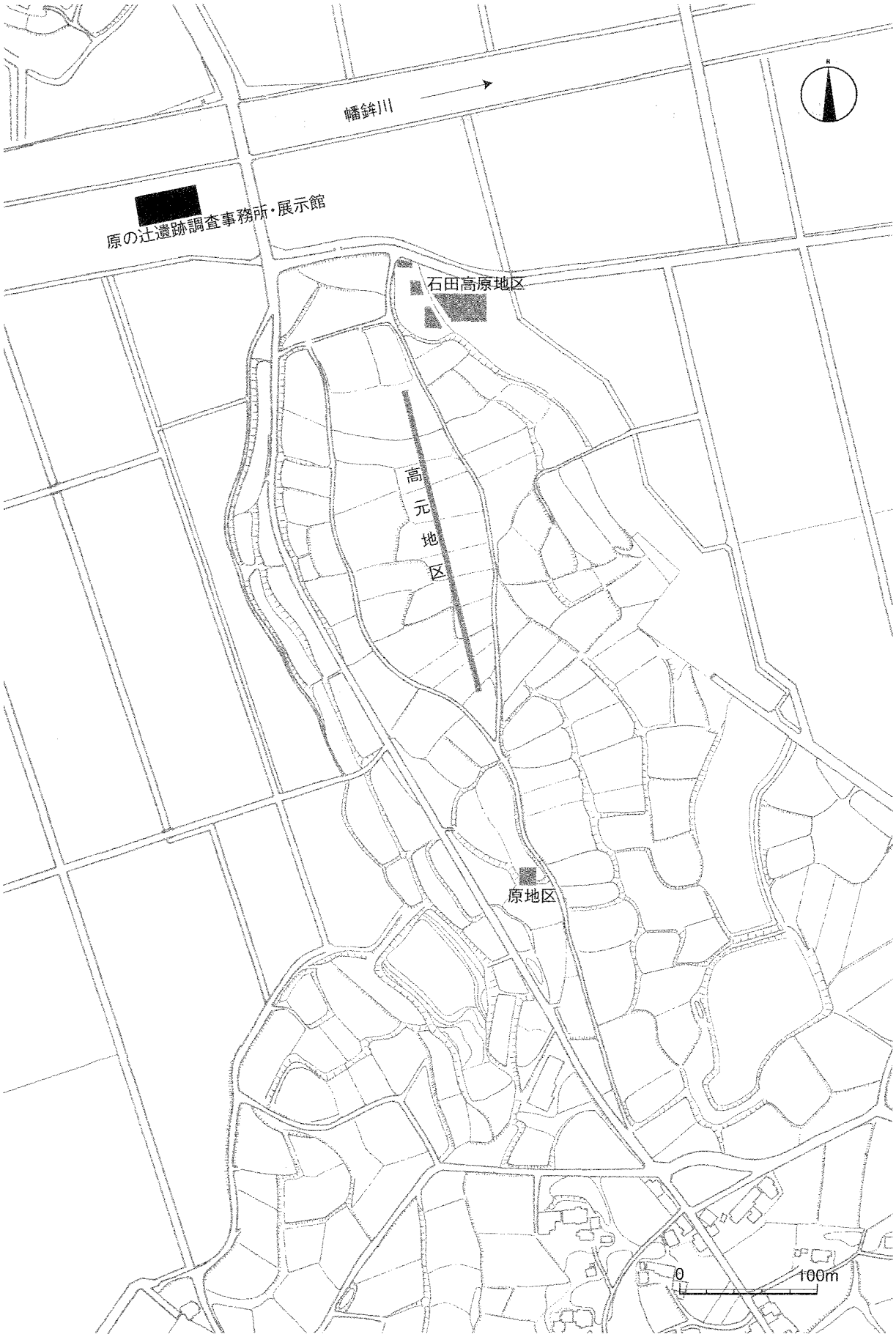
第二次世界大戦後の昭和26年～36年には，京都大学や九州大学を中心に組織された東亜考古学会によって，はじめて本格的な発掘調査が行われた。この調査では，大量の弥生土器のほか各種鉄器類や青銅器，韓半島系土器・楽浪系土器が出土したことから，朝鮮半島や大陸との関連性が指摘され，中央学界の注目を集めた。しかし，地元への理解は浸透しておらず，高度経済成長期には遺跡内でも畑地から水田への転換が図られ，これに伴って遺跡の破壊が進むことになる。

こうした中，昭和49年の水田改良工事の際，偶然に甕棺墓や箱式石棺墓からなる墓域が検出された。現在の石田高原地区に相当する。50基以上からなるこれらの埋葬施設には，戦国式銅剣やトンボ玉をはじめ豊富な副葬品が納められ，有力集団の墓域として注目された。しかし，それ以上に重要な成果は，従来考えられていた遺跡の範囲が大きく広がる可能性を強く示唆した点にある。これを契機に，昭和50年～52年度にかけて確認調査を実施することとなり，南北に伸びる低台地上を中心に，やや南側まで遺跡の範囲が広がることが確実となった。

平成にはいると，幡鉾川流域総合整備事業が計画され，平成３年～４年度の範囲確認調査を経て，平成５年以降，低地部を中心に広大な面積の発掘調査が実施されることとなる。これにより，低地部に環濠を幾重にもめぐらす巨大環濠集落であることが判明するとともに，船着き場跡など重要遺構の発見も相次いだ。この一連の調査により，原の辻遺跡の範囲が約100haにも及ぶ広大な面積を有することが明らかになったのである。

平成14年度以降，原の辻遺跡の集落構造の把握を目的とした調査研究事業に伴う発掘調査が継続的に実施されている。対象地域は，祭儀場周辺から低台地上の北端部および東西低地部までにおよび，竪穴住居や土坑群・竪穴住居群など遺構に関する情報が蓄積するとともに，時期別の変遷についても徐々に明らかになってきた。本年度は低台地上２カ所，北東低地部１カ所の合計３地点の調査を行った（第２図）。低台地上では，遺跡の中枢部分と目される祭儀場南端部の調査を行い，昨年度の調査でその存在が指摘された周溝状遺構の切り合い関係や構造の把握を試みた（原地区）。また，同じく低台地上では，弥生時代の旧地形の復元を目的として，南北約200mにわたって帯状の調査区を設け，調査を実施した（高元地区）。北東低地部では，平成５年度調査区の周辺に調査区を設け，環濠群のつながりや周辺での環濠群の東側への広がりについて検討を行った（石田高原地区）。

調査は，平成16年５月17日～平成17年２月25日まで行った。



第２図　平成16年度調査区位置図

Ⅲ．調　　査

1．原地区の調査

(1) 調査概要

原地区の調査は，遺跡の中枢と考えられる祭儀場の調査を行った。原の辻遺跡の最高地点に位置するこのエリアは，平成６～７年度の調査で，200基以上のおびただしい数のピット群が検出され，北半部で掘立柱建物26棟，南半部で大型掘立柱建物２棟とともに，これらの遺構を取り囲むような柵列が復元された。最高地点周辺は，現地形で周囲よりも約２ｍほど高く盛り上がった地形をしており，これらのことを踏まえて周辺から隔絶された遺跡の中枢域としての機能が想定された。さらに，南半部の大型掘立柱建物が「高床主祭殿」「平屋脇殿」と位置付けられるに及んで，この空間の機能が「祭儀場」として明確化されることになる（宮本1995）。

その後，平成15年度に祭儀場周縁部の調査を実施したところ，祭儀場に関する重要な３つの知見が得られることになる。すなわち，周辺より２ｍほど高い祭儀場の現地形が，近世以降の盛り土によって形成されたもので，弥生時代のピットから復元される旧地形は，南から北に向けて緩やかに下る緩斜面に復元できることである（**第３図**）。また，北端部を中心に従来柵列とされてきたピットを再検討し，覆土の特徴や床面標高に違いがあること，出土土器に複数の時期のものが認められることが明らかとなり，これらのピット群が同時期に一連の遺構として存在していた可能性は考えにくくなった。祭儀場北端部周辺では，近年壱岐市教育委員会（旧芦辺町教育委員会）を中心に重点的に調査が行われており，おびただしい数のピット群が検出されている。このことから，従来柵列とされたピット群も，祭儀場北半部を含む原地区周辺の掘立柱建物群の一部を構成するピットの一部である可能性が高くなった。

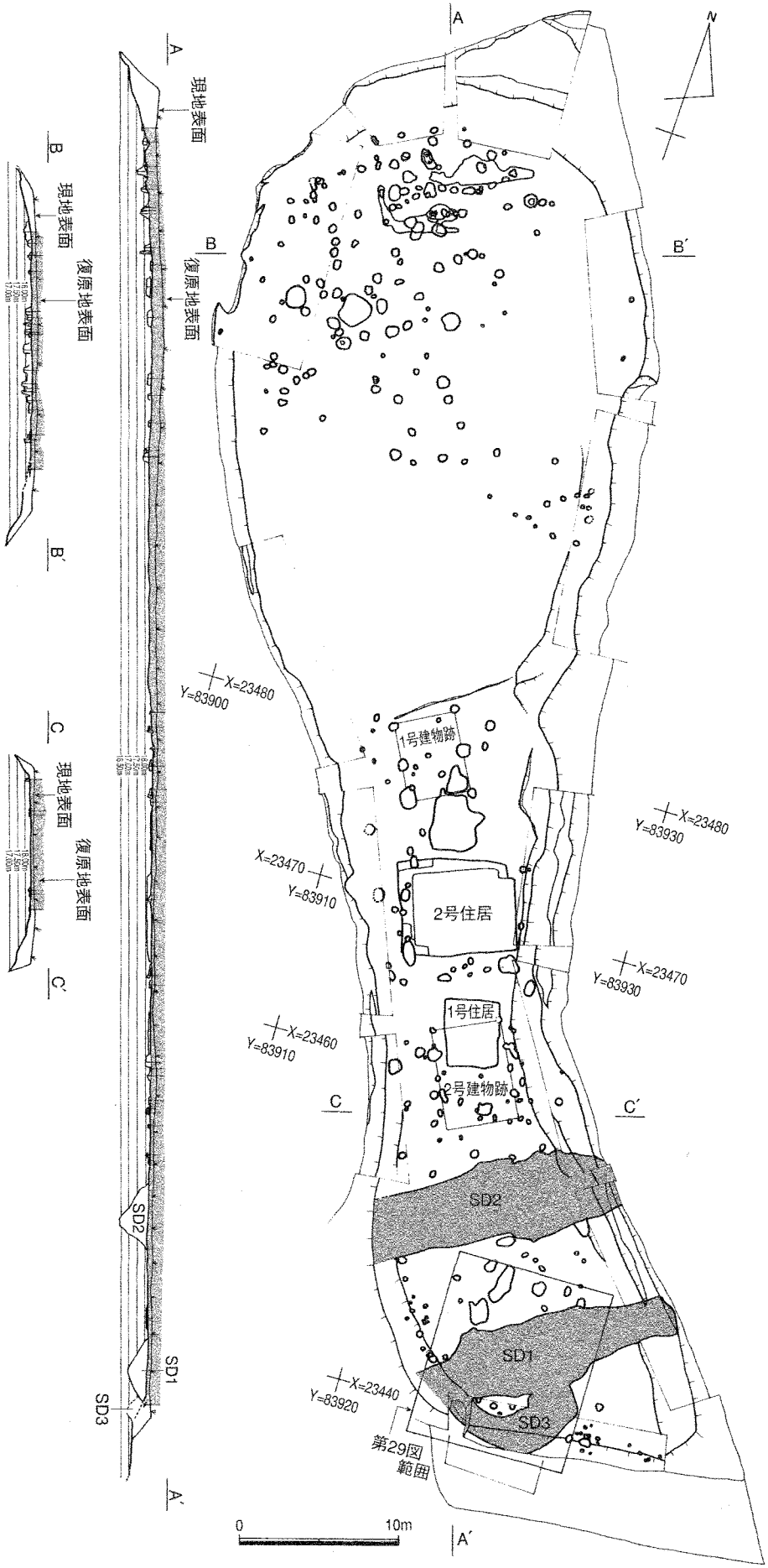
一方，祭儀場南端部では，平成７年度の調査で儀場を東西に横切る２条の環濠が検出されていたが，平成15年度の調査で新たに南側に伸びる環濠（SD３・SD４）を検出することになる。この環濠は南側環濠（SD１）の南側に半円形に取り付く形で検出したが，SD１の北側堀方の不自然なふくらみや，出土土器が時期的にSD１と共通することから，両者の環濠が時期によって複雑に切り合いながらも，ある時期に周溝状遺構として機能していた可能性を指摘した。しかし，調査面積が狭かったこともあり，具体的な遺構の構造把握には至らなかった。

平成16年度の調査は，SD１とSD３・SD４の切り合いを確認することを目的として，両者を面的に広げて平面形を確認するとともに，６カ所のトレンチを設定して調査を行った（**第４図**）。調査面積は120m²である。平成７年度や平成15年度調査時のトレンチも含めて，改めて各トレンチの土層の検討を行ったところ，弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構群の変遷が明らかとなった。特に弥生終末期の周溝状遺構が確認できたことは，祭儀場の構成を把握する上で貴重な成果となった。

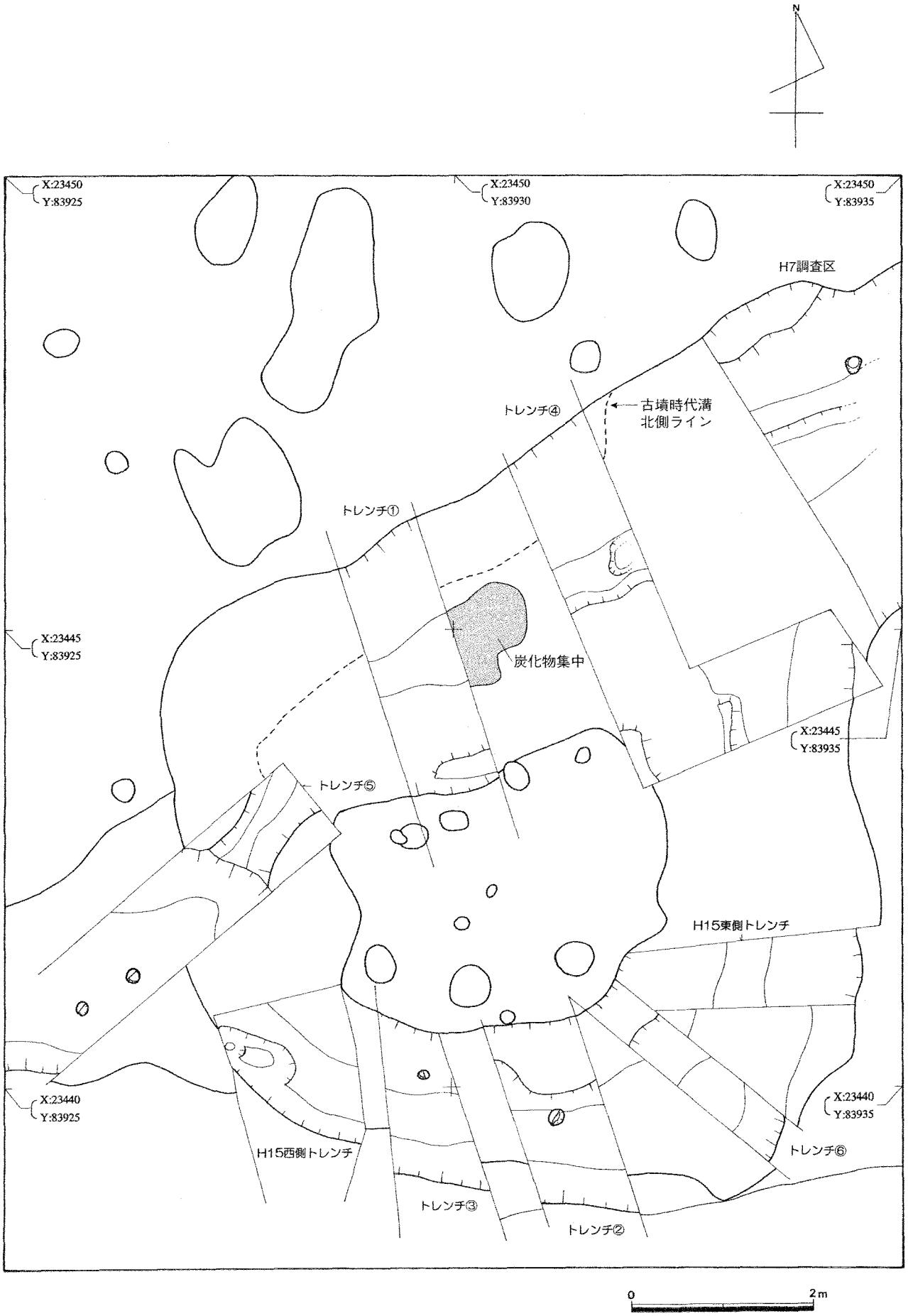
ここでは，各トレンチ毎に個別に説明を加え，調査区内での遺構群の切り合い関係を把握した後，祭儀場の変遷をまとめることにする。

【文献】

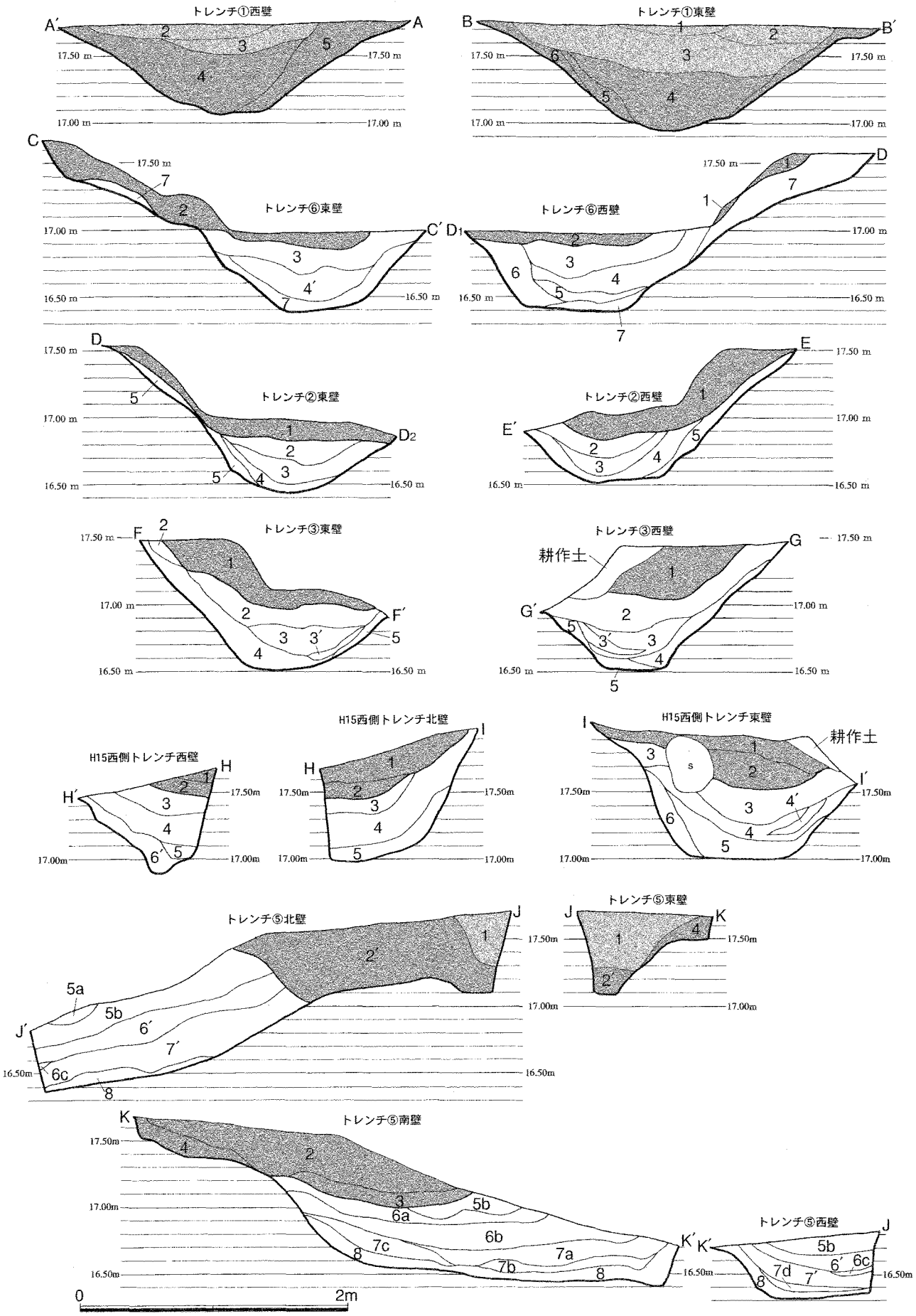
宮本長二郎1995「弥生時代の祭儀建築と外来文化」『邪馬台国への海の道』大阪府立弥生文化博物館



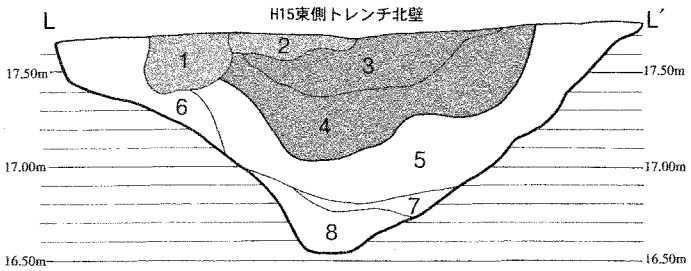
第３図　原地区調査区位置図（Ｓ＝１/400）

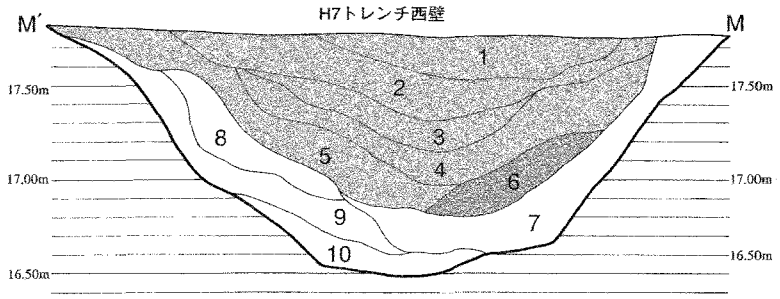


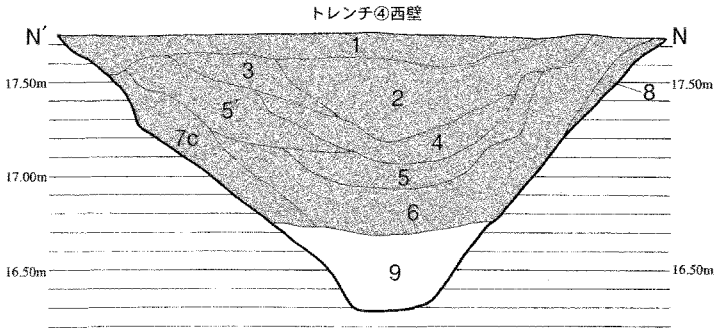
第４図　原地区遺構配置図（Ｓ＝１/60）

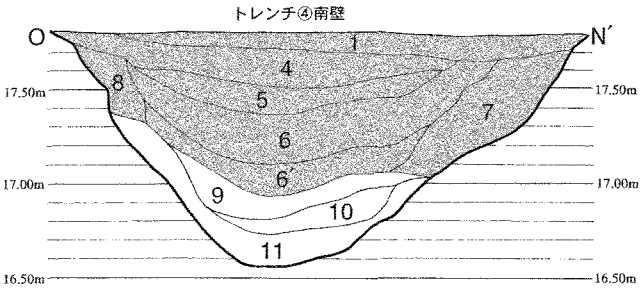


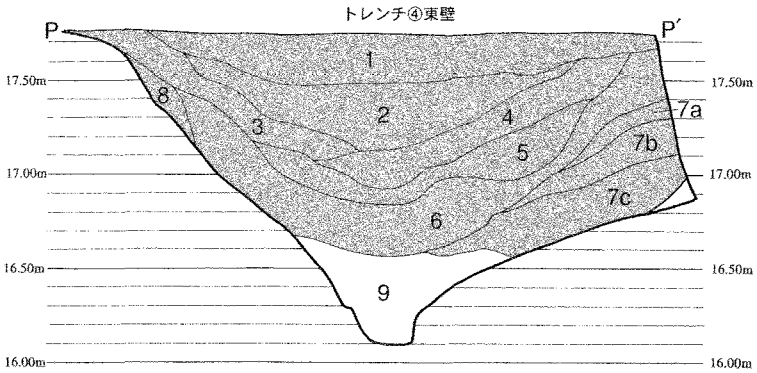
第５図　原地区トレンチ内土層図①（Ｓ＝１/40）

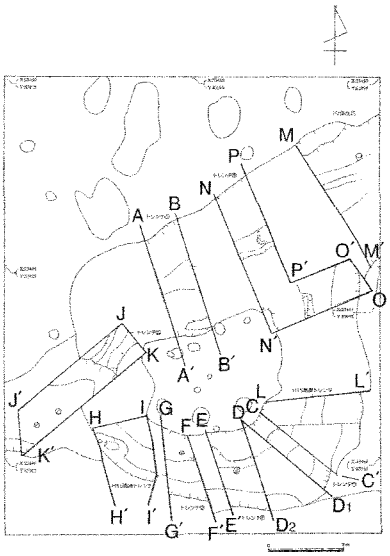


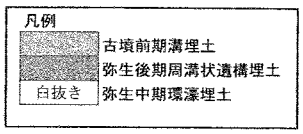


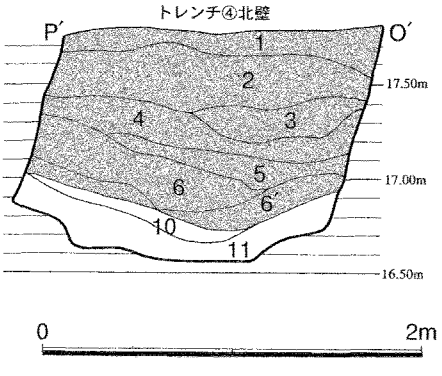












第６図　原地区トレンチ内土層図②（S＝1/40）

第１表　原地区トレンチ内土層注記

トレンチ①土層（東壁・西壁共通）

１層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）カーボン集中
２層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）
３層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　カーボン・黄褐色粒子散在
４層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）
　　カーボン・黄褐色粒子散在
５層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　地山類似粘質土でカーボン散在
６層　黄褐色粘質土（Hue10YR5/8）
　　地山類似の粘質土

トレンチ②土層（東壁・西壁共通）

１層　褐色粘質土（Hue10YR4/3）
２層　灰褐色粘質土（Hur7.5YR4/2）
　　カーボン散在
３層　黒褐色粘質土（Hue7.5YR3/2）
　　カーボン・焼土粒集中
４層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　地山類似。カーボン散在
５層　にぶい褐色粘質土（Hue7.5YR5/4）
　　地山の崩落土

トレンチ⑤土層（北壁・東壁・南壁・西壁共通）

１層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/4）
　　カーボン・中型の黄褐色粒子散在
２層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　カーボン・黄褐色粒子の細粒が散在
2'層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）
　　南壁２層・３層の混合層
３層　黒褐色粘質土（Hue10YR2/2）カーボン集中層
４層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR5/4）
　　混入物少ない
5a層　黒褐色土（Hue10YR3/3）
　　混土貝層。マガキ・サザエ主体
5b層　暗褐色粘質土（Hue10YR4/6）
　　カーボンおよび小粒の黄褐色粒子散在
6a層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
6b層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　カーボン・小粒の黄褐色粒子散在するが
　　混入量は少ない。
6c層　黒褐色土（Hue10YR3/3）カーボン集中層
6'層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　南壁６a・６b層混合層
7a層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　黄褐色粘土がまだらに混じる。
　　カーボン・中型の黄褐色粒子散在
7b層　暗褐色土（Hue10YR3/3）
　　カーボン・中型の黄褐色粒子散在
7c層　褐色粘質土（Hue10YR4/6）
　　カーボン・中型の黄褐色粒子散在。
7d層　黒褐色土（Hue10YR3/2）カーボン集中層
7'層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　南壁７a・７b・７c層混合層。
　　大型の黄褐色粒子が多く混じる。
８層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　地山に類似。中型の黄褐色粒子散在

トレンチ⑥土層（東壁・西壁共通）

１層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/4）
２層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）小粒の黄褐色粒子を含む
３層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　黄褐色粒子含まずカーボン散在
４層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）
　　カーボン・小粒の黄褐色粒子散在
4'層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）
　　４層・５層の混合層。カーボン多い
５層　黒褐色土（Hue10YR3/1）カーボン集中層
６層　にぶい黄褐色粘質土（Hue104/3）
　　地山に類似。小粒の黄褐色粒子散在
７層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　地山に類似。大型の黄褐色粒子散在

トレンチ③土層（東壁・西壁共通）

１層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）小粒の白色粒子散在
２層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）
３層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）
　　カーボン多く含む。黄褐色・赤褐色粒子散在
3'層　にぶい赤褐色土（Hue5YR4/3）焼土・カーボン集中
４層　褐色粘質土（Hue10YR4/6）
　　地山類似。カーボン散在
５層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　中型の黄褐色粒子散在

H15東側トレンチ北壁土層

１層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　小粒の黄褐色粒子・カーボンがわずかに混じる
２層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）
　　中型の黄褐色粒子およびカーボン散在
３層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　カーボン比較的多い。密度は少ないが大型の
　　黄褐色粒子散在
４層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　カーボン・中型の黄褐色粒子散在
５層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　中型の黄褐色粒子・カーボン混じる
６層　黄褐色粘質土（Hue10YR5/8）
　　地山類似。混入物ほとんどなし
７層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　大型の黄褐色粒子散在。地山に類似
８層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　中型の黄褐色粒子がまばらに混じる。

H15西側トレンチ土層（西壁・北壁・東壁共通）

１層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）カーボン散在
２層　黒褐色土（Hue10YR3/1）カーボン集
※東壁土層はにぶい黄褐色粘質土でカーボン散在
３層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　カーボン・大型の黄褐色粒子散在
４層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　カーボン密に混じる
4'層　黒褐色土（Hue7.5YR3/2）焼土・カーボン混合層
５層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　地山類似。大型黄褐色粒子混じる
６層　褐色粘質土（Hue7.5YR4/4）地山流れ込み堆積土
6'層　褐色粘質土（Hue7.5YR4/4）
　　地山類似で小粒の黄褐色粒子散在

H7トレンチ北壁土層

1層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　カーボンわずかに散在
2層　褐色粘質土（Hue7.5YR4/6）
　　中型の黄褐色粒子を多く含む
3層　暗褐色粘質土（Hue7.5YR3/3）
　　黄褐色粒子・カーボンをわずかに含む
4層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）
　　カーボン・小型の黄褐色粒子散在
5層　褐色粘質土（Hue10YR4/6）
　　中型の黄褐色粒子散在
6層　黒褐色粘質土（Hue10YR2/2）
　　カーボン多く中型の黄褐色粒子散在
7層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　カーボン・中型の黄褐色粒子散在
8層　暗褐色粘質土（Hue7.5YR3/3）
　　小粒の黄褐色粒子散在
9層　褐色粘質土（Hue7.5YR4/4）
　　大型の黄褐色粒子が密に混じる
10層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）混入物なし

トレンチ④東壁・西壁土層

1層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）
　　カーボン・小粒の黄褐色粒子散在
2層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　カーボン・黄褐色粒子をわずかに含む
3層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　カーボン・黄褐色粒子がわずかに含む
4層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）カーボン多く含む
5層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）混入物少ない
5'層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）混入物少ない
6層　にぶい黄褐色粘質土（Hue10YR4/3）
　　カーボン多く中型の黄褐色粒子も散在
7a層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）黄褐色粒子散在
7b層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）
　　カーボン散在・黄褐色粒子は少ない
7c層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）
　　黄褐色粒子がまだらに散在。カーボン少量散在
8層　黄褐色粘質土（Hue10YR5/6）地山に類似
9層　灰黄褐色粘質土（Hue10YR4/2）玄武岩粒子が散在

トレンチ④北壁・南壁土層

1層　黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）中型黄褐色粒子が少量分布
2層　暗褐色粘質土(Hue10YR４／６）カーボン比較的多い
3層　暗褐色粘質土（Hue7.5YR4/6）カーボン・焼土集中層
4層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）黄褐色粒子散在
5層　褐色粘質土（Hue10YR4/6）大型玄武岩粒子が密に混じる
6層　暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）小粒の黄褐色粒子少量分布
6'層　灰黄褐色粘質土(Hue10YR4/2)
　　黄褐色粘質土がまだらに散在。カーボン少量散在
7層　にぶい黄褐色粘質土(Hue10YR4/3)
　　中型の黄褐色粒子がわずかに散在
8層　褐色粘質土（Hue7.5YR4/4）小粒の黄褐色粒子少量含む
9層　褐色粘質土（Hue10YR4/6）
　　黄褐色粘質土がブロック状に堆積
10層　黒褐色土（Hue10YR2/3）カーボン集中層
11層　褐色粘質土（Hue10YR4/4）大型の黄褐色粒子散在

第２表　原地区トレンチ内土層対応表

	トレンチ①	トレンチ②	トレンチ③	トレンチ④東壁・西壁	トレンチ④北壁・南壁	トレンチ⑤	トレンチ⑥	H15東側トレンチ	H15西側トレンチ	H7トレンチ
古墳時代前期	1層			1層	1層			1層		1層
	2層							2層		
	3層			2層	2層	1層				2層
				3層						3層
				4層	3層					4層
				5層						5層
				5'層						
				6層						
				7a層	4層					
					5層					
				7b層	6層					
				7c層	6'層					
					7層					
				8層	8層					
弥生後期	4層	1層	1層			2層	1層	3層	1層	6層
						2'層				
						3層	2層	4層	2層	
						4層				
弥生中期		2層	2層		9層	5a·5b層	3層	5層	3層	7層
			3層			6a·6b層	4層		4層	8層
		3層	3'層		10層	6c層	5層		4'層	
						7a~7c層				
								6層	5層	
	5層	4層	4層				6層	7層	6層	9層
	6層	5層	5層	9層	11層	8層	7層	8層	6'層	10層

(2) 各トレンチごとの調査成果

・トレンチ①

東西方向に伸びるSD１と，周溝状遺構の切り合い関係を把握する目的で，SD１のほぼ中央に幅１mのトレンチを設定した（**第４図**）。土層は６層で構成されるが，遺物の出土状況からは大きく上下２枚に分けることが可能である（**第５図**）。

上層は１層～３層で，炭化物の混じる黒褐色粘質土である。３層下面の標高は，西壁で17.01m，東壁で17.38mである。古墳時代前期の遺物を包含する。出土土器は，布留式併行の鉢（**第７図１～３**）や小型の短頸壷（**第７図４・５**）を主体に，ミニチュア土器（**第７図６・７**）などで構成されるが，布留甕は全く出土していない。このほか，ガラス小玉８点（**第７図14～21**），碧玉製管玉１点（**第７図23**），同小玉１点（**第７図22**），鉄製ヤリガンナ１点（**第７図13**）が出土している。また，覆土最上層には炭化物が集中する箇所が認められた。

下層は４層～６層である。上層と同じく粘質土であるが，色調が褐色系と上層に比べるとやや明るい。床面標高は西壁で17.07m，東壁で16.95mとなる。弥生時代終末期の甕および小型の甕（**第７図９・10**）が出土したほか，鉄製の袋状鉄斧１点（**第７図12**），鉄片１点（**第７図11**）が出土している。このうち袋状鉄斧は，錆膨れのために詳細な観察は困難であるが，全長７㎝弱の小型加工斧である。片刃の刃部が袋部直下に迫っており，相当に使い込まれたものであろうか。袋の突き合わせは甘く，若干開き気味である。

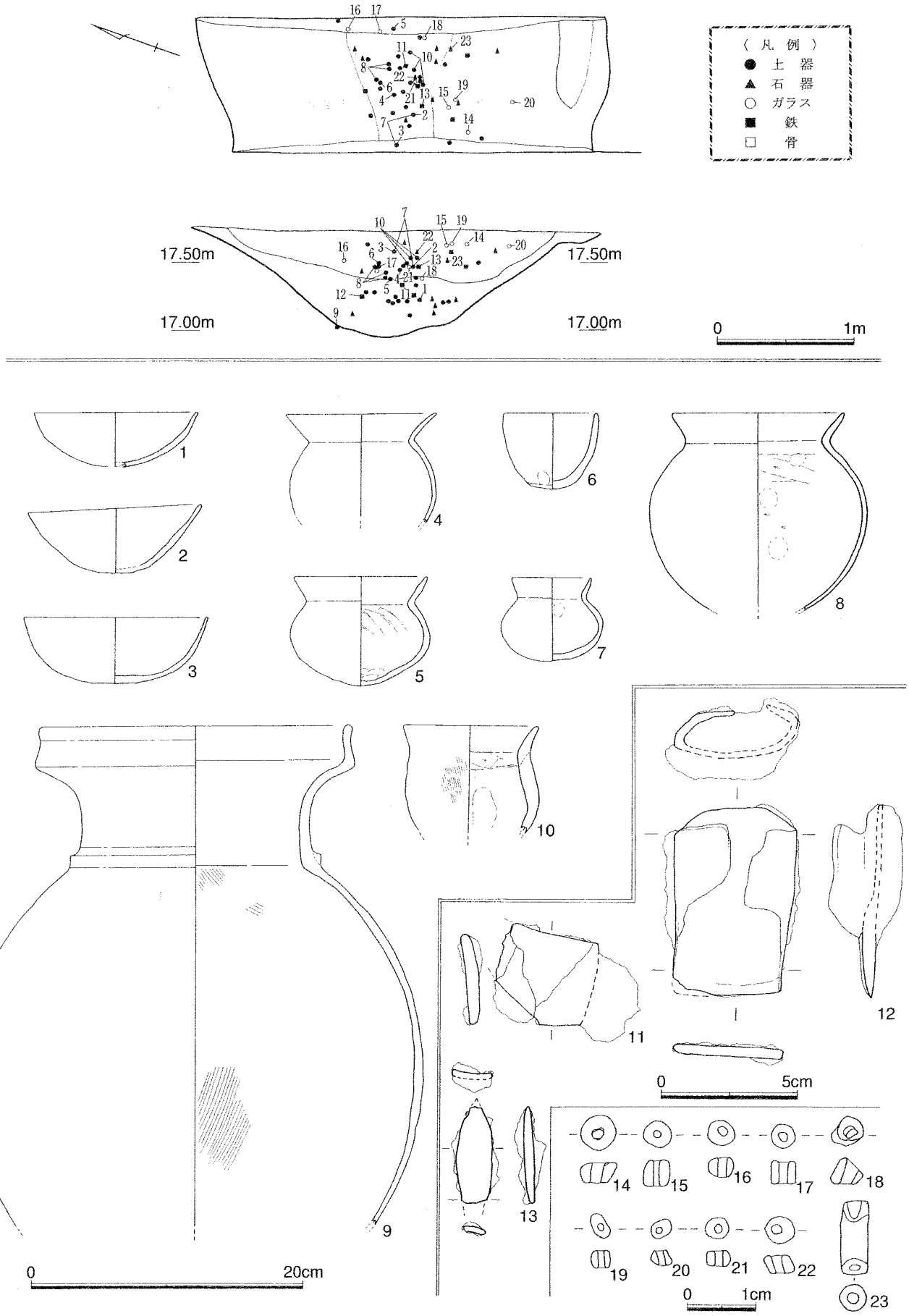
・トレンチ②

トレンチ①と平行してSD４に幅１mで設定した。SD３の床面標高と遺構の切り合い関係の把握を目的として設定したトレンチである（**第４図**）。土層は１層～５層で構成されるが，遺物の出土状況から上下２枚に分けることが可能である（**第５図**）。

上層は１層で褐色の粘質土である（**第５図**）。１層下面の標高は，西壁で16.84m，東壁で16.83mである。遺物はほとんど出土しておらず，弥生中期中葉の須玖Ⅰ式古段階の甕口縁部が１点出土しているにすぎないが（**第８図７**），後述するように隣接するトレンチ③・トレンチ⑥では下層で主体となる時期の遺物であることから，下層からの混入と考えられる。

下層は２層～５層である（**第５図**）。全体的にカーボンを多く含む層であるが，特に３層ではカーボン・焼土粒が集中する。床面標高は，西壁で16.52m，東壁で16.44mである。遺物は２層を中心に出土しているが，量は多くない。第８図６は下層から出土したもので，弥生時代終末期の壷口縁部である。隣接するトレンチ③・トレンチ⑥では上層で主体となる時期の遺物であることから，上層からの混入と考えられる。

なお，トレンチ②の床面からは直径20㎝のピットを検出している（**第８図**）。検出面からの深さは10㎝にも満たない。覆土は黒褐色土が充填していた。覆土４層・５層が堆積した後，床面に対して垂直に掘削されたピットと考えられる。



第７図　原地区トレンチ①遺物出土状況および出土遺物（Ｓ＝１/40）

・トレンチ③

先述の通り，トレンチ②の調査により床面からピットを検出した。このピットの西側での展開を探ることを目的としてトレンチ②の西隣に設定したトレンチである（**第4図**）。土層は5層で構成されるが，遺物の出土状況から上下2枚に分けることが可能である（**第5図**）。

上層は1層の褐色粘質土である（**第5図**）。1層下面の標高は西壁で17.04m，東壁で17.06mである。遺物は「く」の字に折れる袋状口縁壷（**第8図4**）や，頸の太い広口壷（**第8図5**）が出土しており，弥生時代終末期と考えられる。

下層は2層～5層で構成される（**第5図**）。土層の色調は全体的に暗めであるが，3層および3'層でカーボンおよび焼土の集中が認められ，この点が下層の最大の特徴である。床面標高は西壁・東壁ともに16.51mである。遺物はカーボン・焼土集中層から円礫が多く出土している。一般に磨石類として使用される川原石ではなく，やや軟質の玄武岩が多く使用痕もはっきりしない。**第8図3**は西壁土層では耕作土に対応するものの，東壁土層では2層に対応するレベルであることから，本来は下層に伴う遺物と考えられる。弥生中期中葉の須玖Ⅰ式古段階の甕底部片で，上げ底気味で厚みもある。

なお，北壁の床面付近でピットを1基検出している（**第8図**）。直径14cmで壁面から斜めに掘削されている。検出面からの深さは約10cmである。黒褐色土が充填しており，4層以下の覆土が堆積した後，床面に対して斜めに掘削されたものと考えられる。

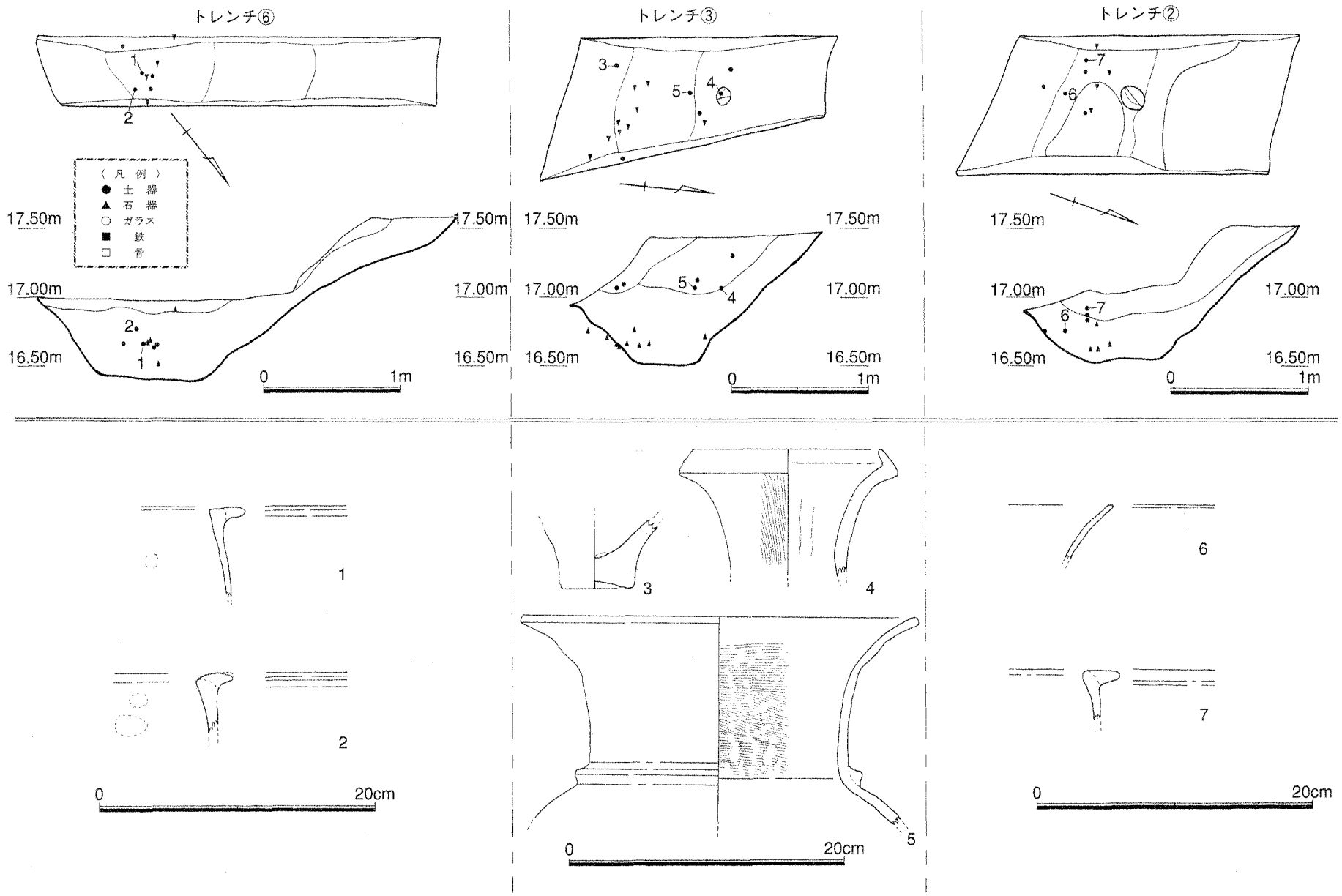
・トレンチ④

遺構群の東西方向および南北方向での切り合い関係の把握を目的として，幅1mのトレンチをL字形に設定した（**第4図**）。平成7年度，平成15年度に検出したSD1およびSD3・SD4の東側合流部分に相当する。検出面からの深さは約1.5mにおよび，壁面全体の断面形はV字形となる。土層は多いところで11層で構成されるが，遺物の出土状況から上下2枚に分けられる（**第6図**）。

上層は1層～8層に相当する。上層下面の標高は北壁で16.72m，南壁で16.94m，東壁で16.58m，西壁で16.69mとなり，東壁付近を最深部として南側・西側にかけて徐々に浅くなる傾向が認められる（**第6図**）。この傾向は南側において顕著であり，上層下面の標高だけでなく，玄武岩粒子の混入が特徴的な5層の下面で比較すると，北壁土層に比べて約40cmも高くなっている。このことから，上層覆土はトレンチ④南壁より南ではそれほど長く伸びずに途切れるものと考えられる。

上層覆土の特徴は，中位に堆積する4層である。東西壁面で明確に確認できる黒褐色土層で，カーボンが多く混じる点が特徴である。この土層を中心に下位の5層にかけて遺物が集中していた（**第9図**）。なお，南北壁面では4層および5層に相当する土層は確認できなかった。南北壁面に挟まれたトレンチ内からは，上層での遺物の出土量が相対的に少なく（**第9図**），このことも4層・5層が上層の遺物包含層の主体であることを暗示している。

上層からは，古墳時代前期の遺物がまとまって出土した（**第10図**）。出土土器は器種構成に特徴がある。すなわち，丸底で薄手の鉢（**第10図1～4**），小型短頸壷（**第10図6・7**）小型丸底壷（**第10**



第８図　原地区トレンチ②・トレンチ③・トレンチ⑥遺物出土状況（Ｓ＝１/40）および出土遺物（Ｓ＝１/４）

図８～12)，低脚の高坏（第10図14～16）を主体とし，甕（第10図５），壺（第10図13）で構成される点である。いずれも布留式の範疇に入る土器群であるが，布留甕を１点も含まない点は注目される。なお，第10図16は灰白色を呈する山陰系の台付皿である。また，第10図９・12は表面に化粧土を塗布した痕跡が残る。土器以外では，ガラス小玉３点が出土している（第10図20～22)。

下層は９層～11層に相当する（第６図)。北壁・南壁土層ではカーボンが集中する黒褐色土層（10層)が特徴で，この土層より上位で遺物が出土している(第６図)。床面の標高は，北壁・南壁で16.56m，東壁で16.10m，西壁で16.29mとなる。下層出土遺物は少なく，図化に耐えうるものはごく少量である。第10図17は弥生中期土器の底部である。南北壁面に挟まれたトレンチ内から出土した。第10図18・19は上層からの出土であるが,上層でも比較的下位のレベルから出土しており,本来下層にあったものが混入したものと考えられる。いずれも須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階に相当し，弥生時代中期中葉～後葉の土器である。

・トレンチ⑤

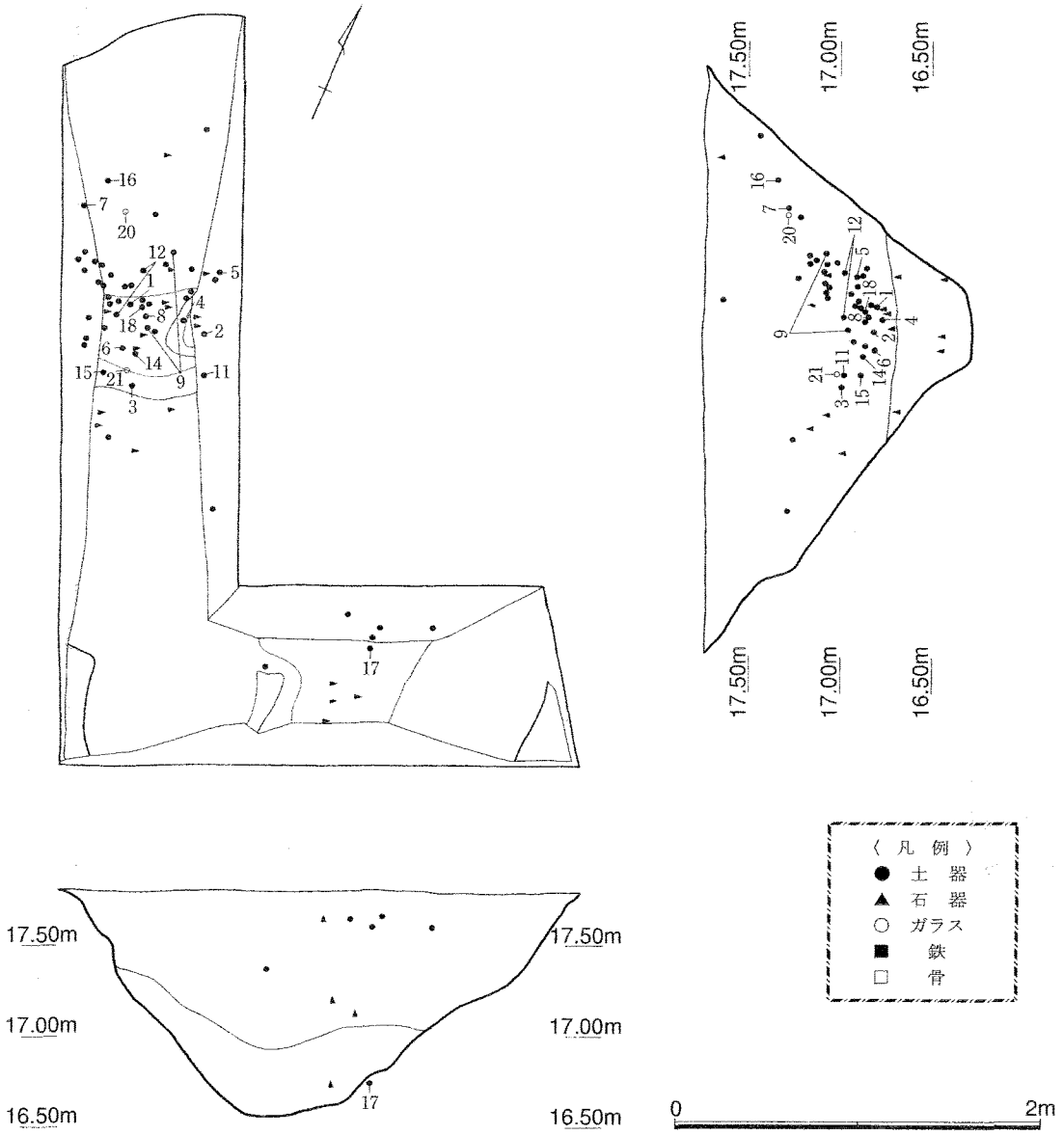
遺構群の南北方向での切り合い関係を把握する目的で，幅１mのトレンチを東西方向に設定した。トレンチの位置は，平成７年度，平成15年度に検出したSD１とSD３・SD４の西側合流部分に相当する（第４図)。完掘状況の平面図では，東側が標高が高く，床面ラインは東から西側へ伸びた後，南側に丸みを帯びつつ屈曲している。また，標高の低い西側の床面ラインは南側から大きく北西方向へ屈曲している（第11図)。これを反映して，土層床面の形態も東側が浅く西側で急激に落ち込む形態となる（第５図)。土層は８層で構成されるが，覆土の特徴や遺物の出土状況および平面形の検討から大きく３つに分けることが可能である（第５図)。

上層は１層に相当し，暗褐色粘質土で東側隅にわずかに堆積する。遺物の出土はみなかったものの，覆土の特徴からトレンチ①の１～３層に対応する古墳時代前期の層と考えられる。１層下面の標高は，北壁で17.28m，東壁で17.27mとなる。

中層は２層～４層に相当する（第５図)。南壁では２層の暗褐色土と３層のカーボン集中層が明確に区別できるものの，北壁では両者の区分は曖昧で，２層と３層の混合層（２'層）と捉えた。床面の標高は北壁で17.04m，南壁で17.00m，東壁で17.09m，平面プランの床面最深部で16.99mとなる。床面の勾配は東側から南西側に下っており，両者の比高差は約10cmである。

下層は５層～８層に相当する（第５図)。カーボンや基盤層である玄武岩岩盤に由来する黄褐色粒子が混じる粘質土で，それぞれの混入量やそれに伴う色調の違いで細分した。床面レベルは，北壁で16.37m，南壁で16.40mである。床面からは２基の小ピットを検出した（第11図)。トレンチの東西方向に沿って並列しており，東側ピットが直径16cm，深さ６cm，西側ピットが直径15cm，深さ２cmといずれも非常に浅い。覆土は黒褐色粘質土で，８層が堆積した後に掘削されたものと考えられる。

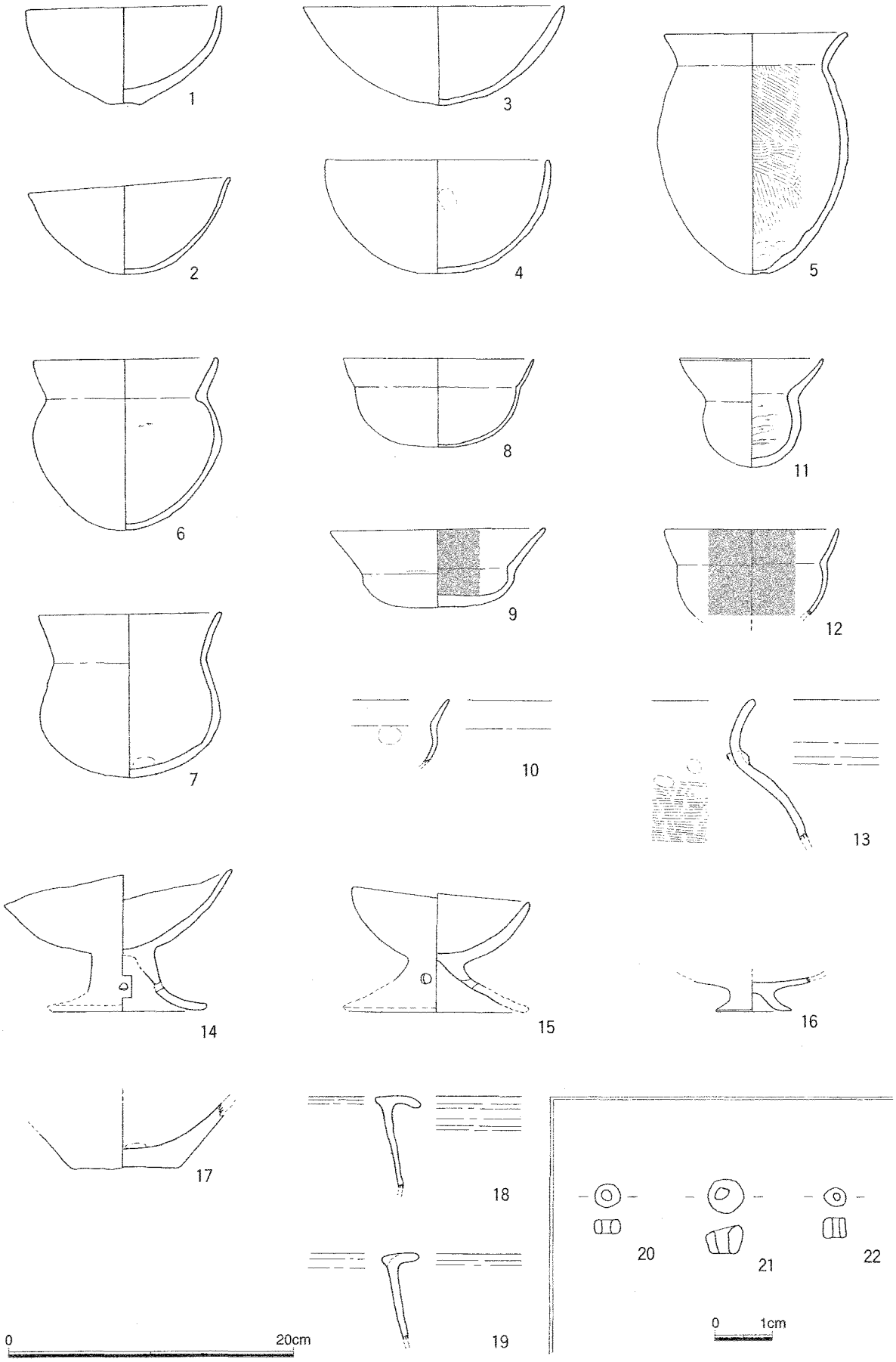
遺物は，中層床面付近から下層上面にかけておびただしい数の土器が出土した。弥生時代中期中葉～後葉の土器と，弥生時代終末期の土器で構成される。第11図のドットマップでは，両者は混在した



第９図　原地区トレンチ④遺物出土状況（S＝1/40）

状態で出土しており，中層・下層で厳密に遺物を分離することはできない。これは，遺構のコーナー部分に相当することから堆積状況が複雑なことや，トレンチ壁面の位置が遺構の中央を通っていないことから，遺物のレベルと土層の中層・下層境界レベルが一致していない可能性があるためと考えられる。特に，**第11図**のトレンチ東半部において弥生時代終末期の土器が下層の上位で出土しているように見えるのは，実際の中層・下層境界レベルが南壁土層よりも20cmほど低くなるためと考えられる。したがって，掘り直しに伴う攪乱は認められるものの，概ね下層が弥生時代中期中葉～後葉，中層が弥生時代終末と考えてよいであろう。

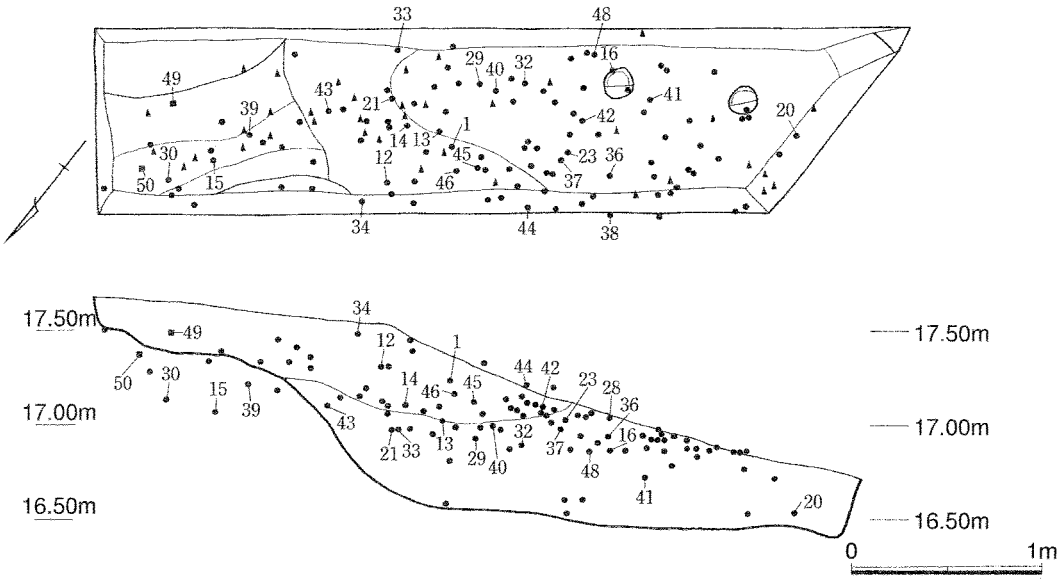
第12図は弥生時代中期の土器である。器種構成としては甕の破片が圧倒的に多く（**第12図１～10・17～24**），次いで高坏（**第12図11～13**）・壷（**第12図14～16**）と続く。丹塗り土器も認められるものの



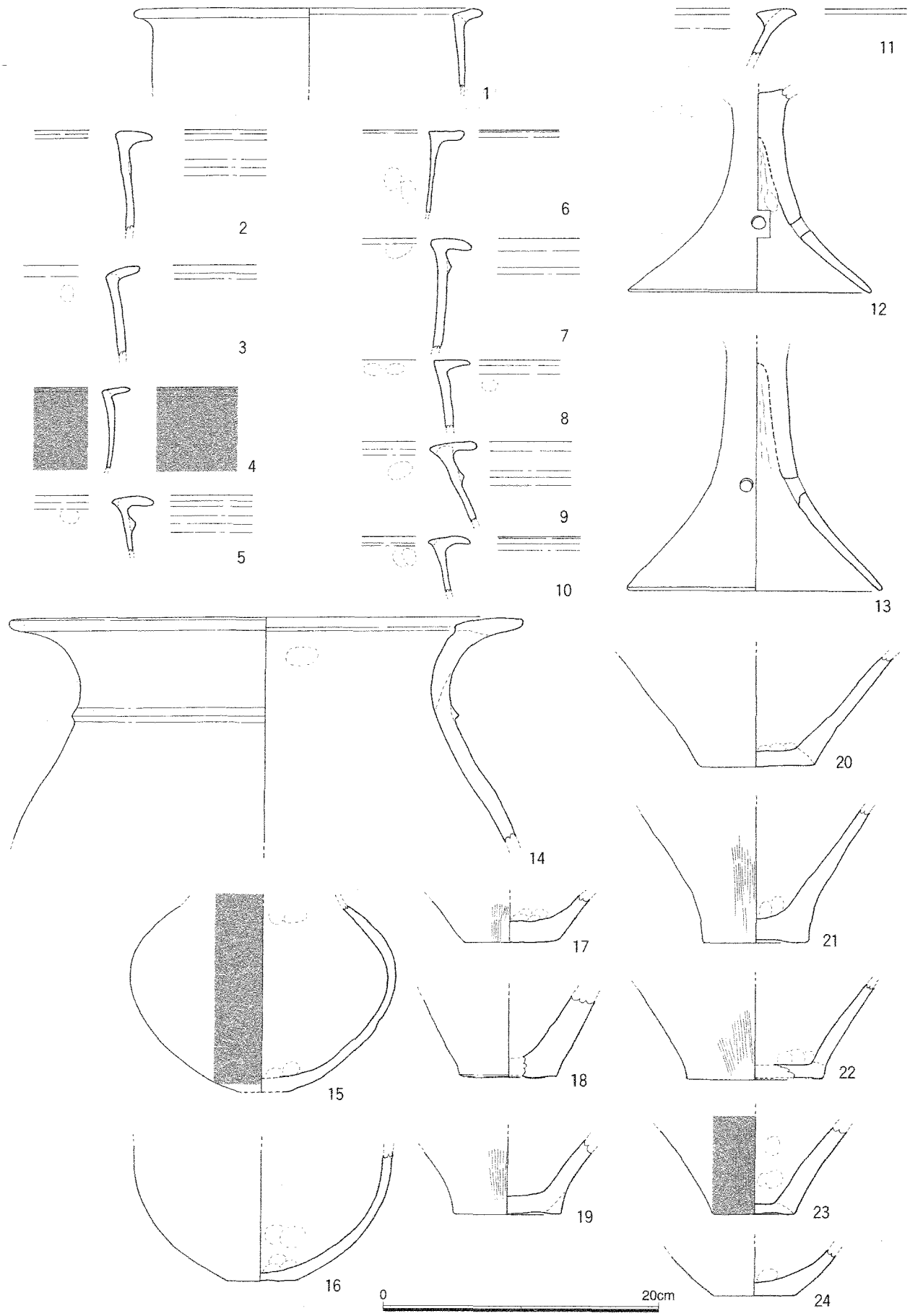
第10図　原地区トレンチ④出土遺物

（第12図 4 ・15・23），全体に占める割合はそれほど高くない。第13図～第14図は弥生時代終末の土器である。器種構成の特徴は，甕とともに壷がかなりの頻度で出土している点で（29・32～40），中には丹塗りを施したものも存在する（第13図33）。このほか鉢（第13図30・31）や器台（第13図42）で構成される。

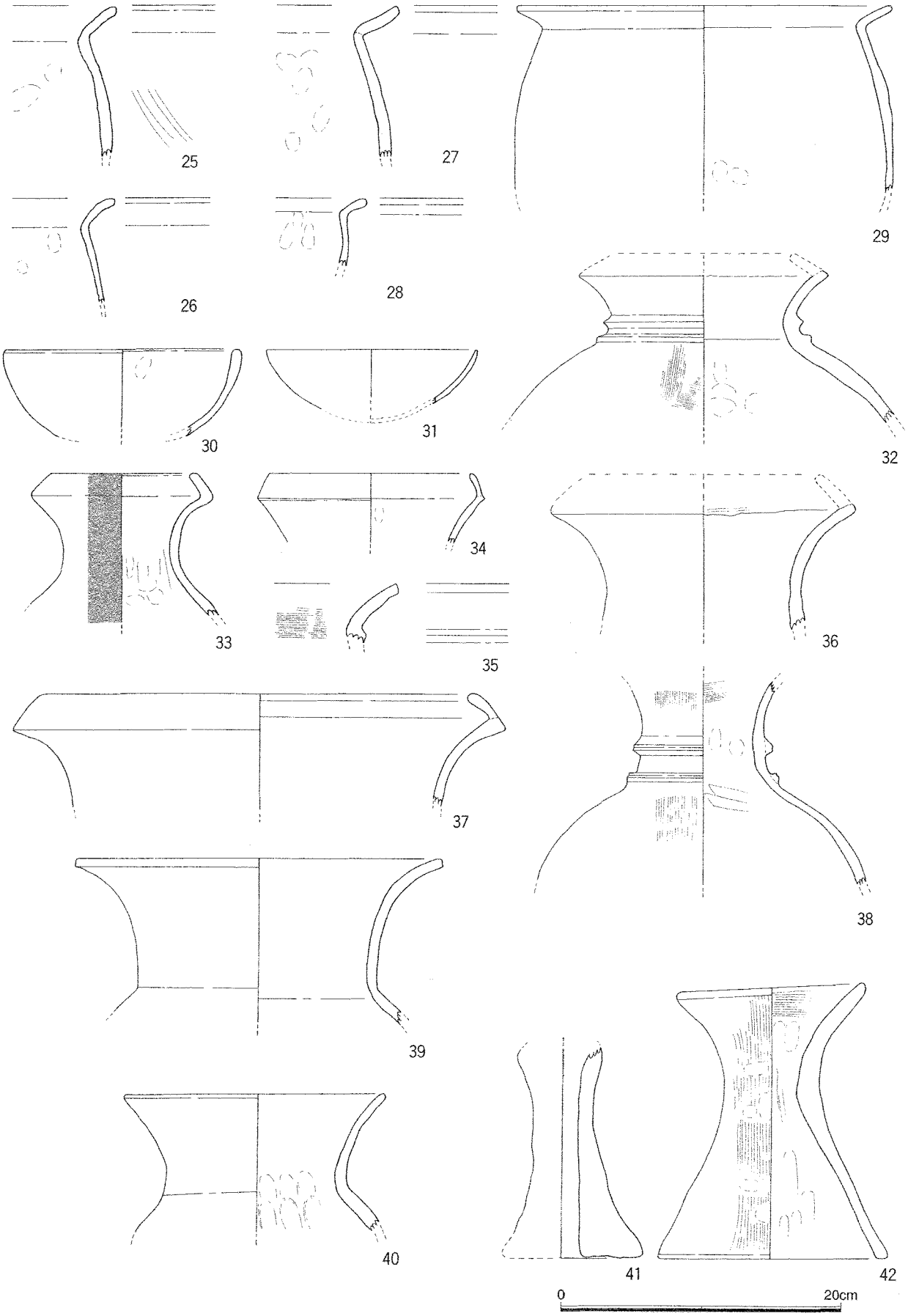
土器以外では鉄製品が注目される。第14図49は鉄鎌である。切先が欠損するものの，現存長16.6cmで中型に属する。基部は基部幅全体を刃部に対して直角に折り曲げているが，端部は身部と完全に接しているため，この状態で柄に装着して使用することは不可能である。刃部は内湾刃である。下面観は，基部から刃部にかけて長軸方向に沿って大きく湾曲するとともに，身部中央付近を境に短軸方向にも若干のねじれが認められる。50は鉄剣である。全長40cmを超える長剣に属する。錆膨れのため詳細な観察は困難であるが，切先付近に最大幅を有し，基部にかけて徐々にすぼまる形態である。関は肉眼観察では確認できないため，基部と身部の区別は不明瞭である。基部端はやや膨らむように図化したが，そのまま自然にすぼまる形態となる可能性もある。切先は丸みを帯びており鋭利さに欠く。鎬はなく横断面はレンズ状で，幅と同様，切先付近に最大厚を有し基部にかけて徐々に厚みを減じる。側面観は十分な観察が困難であるが，厚みが一定しておらず，部分的に短軸方向へねじれている可能性もある。49・50はトレンチ⑤東壁付近でまとまって出土している（第11図）。いずれも湾曲やねじれが認められるほか，49の基部にみられる本来の機能を殺すような加工や50にみられる実用品とは考えにくいなまくらな加工などは，非実用的な用途に供された可能性をうかがわせる特徴である。出土レベルは上層と中層の境界付近に位置し，微妙ではあるが調査時の所見で中層の遺物と判断した。トレンチ⑤の中層は，後述する周溝状遺構の北西コーナー部分に相当しており，これらの鉄器を周溝内に配置して，何らかの祭祀行為が行われたものと推測される。



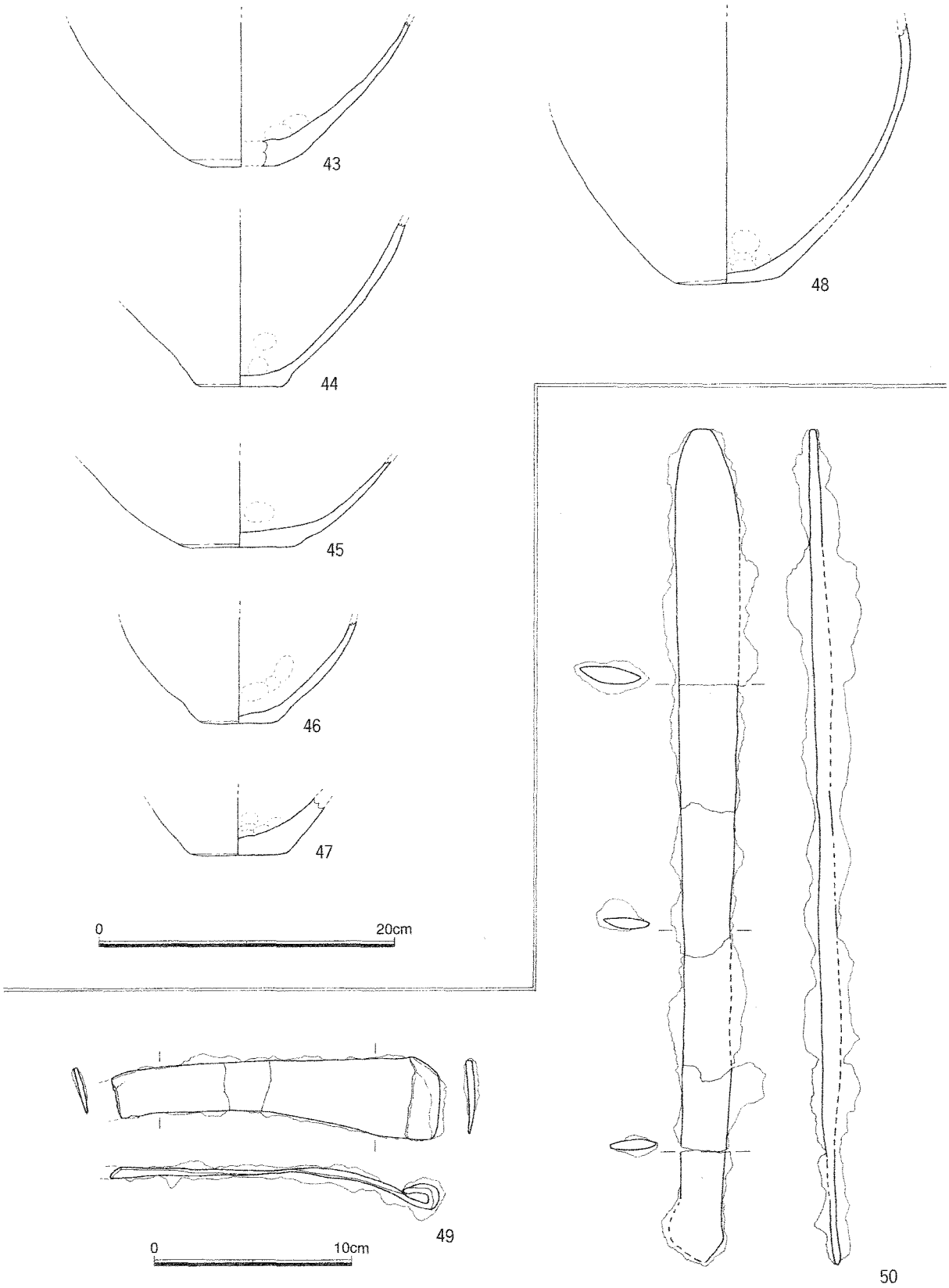
第11図　原地区トレンチ⑤遺物出土状況（S＝1/40）



第12図　原地区トレンチ⑤出土遺物①（S＝1／4）



第13図　原地区トレンチ⑤出土遺物②（S＝1／4）



第14図　原地区トレンチ⑤出土遺物③（S＝1／4，1／3）

・トレンチ⑥

平成15年度検出のSD４南東コーナーの検出を目的として設定した幅50cmのトレンチである（**第４図**）。土層は７層で構成されるが，遺物の出土状況から上下２枚に分けることができる（**第５図**）。

上層は１層～２層の暗褐色粘質土に相当する（**第５図**）。平成15年度調査でほとんど掘削されており，現状では厚さ約10cmを残すのみである。下面の標高は，西壁で16.88m，東壁で16.86mである。遺物の出土はなかった。

下層は３層～７層に相当する（**第５図**）。床面の標高は，西壁で16.40m，東壁で16.39mである。カーボン集中層（５層）を介在する点が下層の特徴で，このカーボン層より上位の層を中心に遺物が出土している（**第８図**）。図化したのはいずれも弥生時代中期中葉（須玖Ⅰ式古段階）の甕口縁部である（**第８図１・２**）。このことから，下層の時期もこの時期と考えられる。

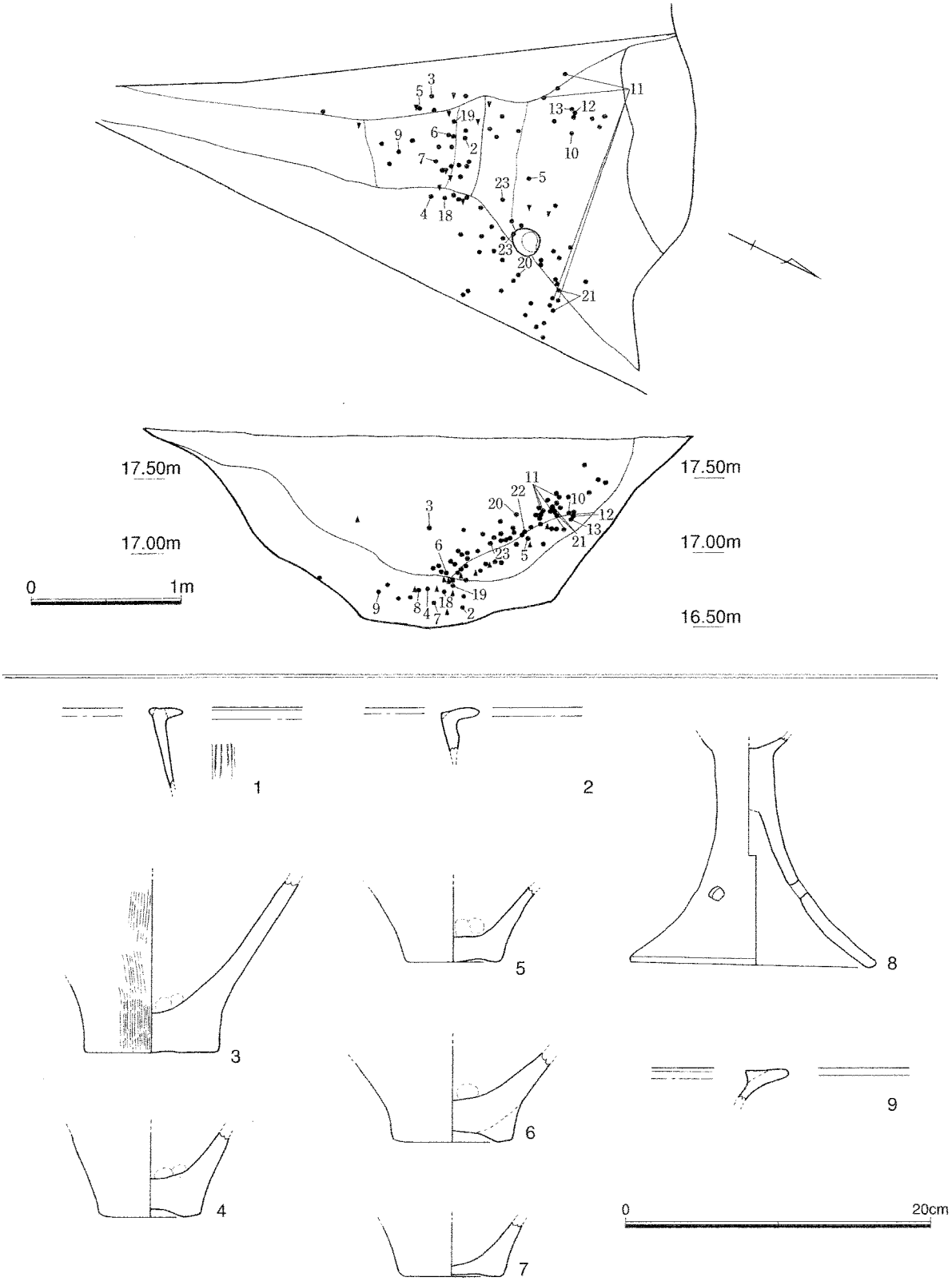
・H７トレンチ

平成７年度に調査を行ったトレンチである。本年度調査区の北東隅に位置する（**第４図**）。平成７年度調査区の西壁付近が本年度調査区にかかったため，土層確認のために再度掘り下げたところ，弥生土器が大量に出土した。当時の調査担当者に確認したところ，平成７年度トレンチの東壁付近の土器は全て取り上げて土層を観察したが，西壁は上層の布留系土器群を取り上げたものの完掘にはいたらず，そのまま埋め戻したとのことである。そこで同トレンチを本年度**H７トレンチ**として新たに設定し，残った遺物の取り上げと西壁土層の観察を行った。

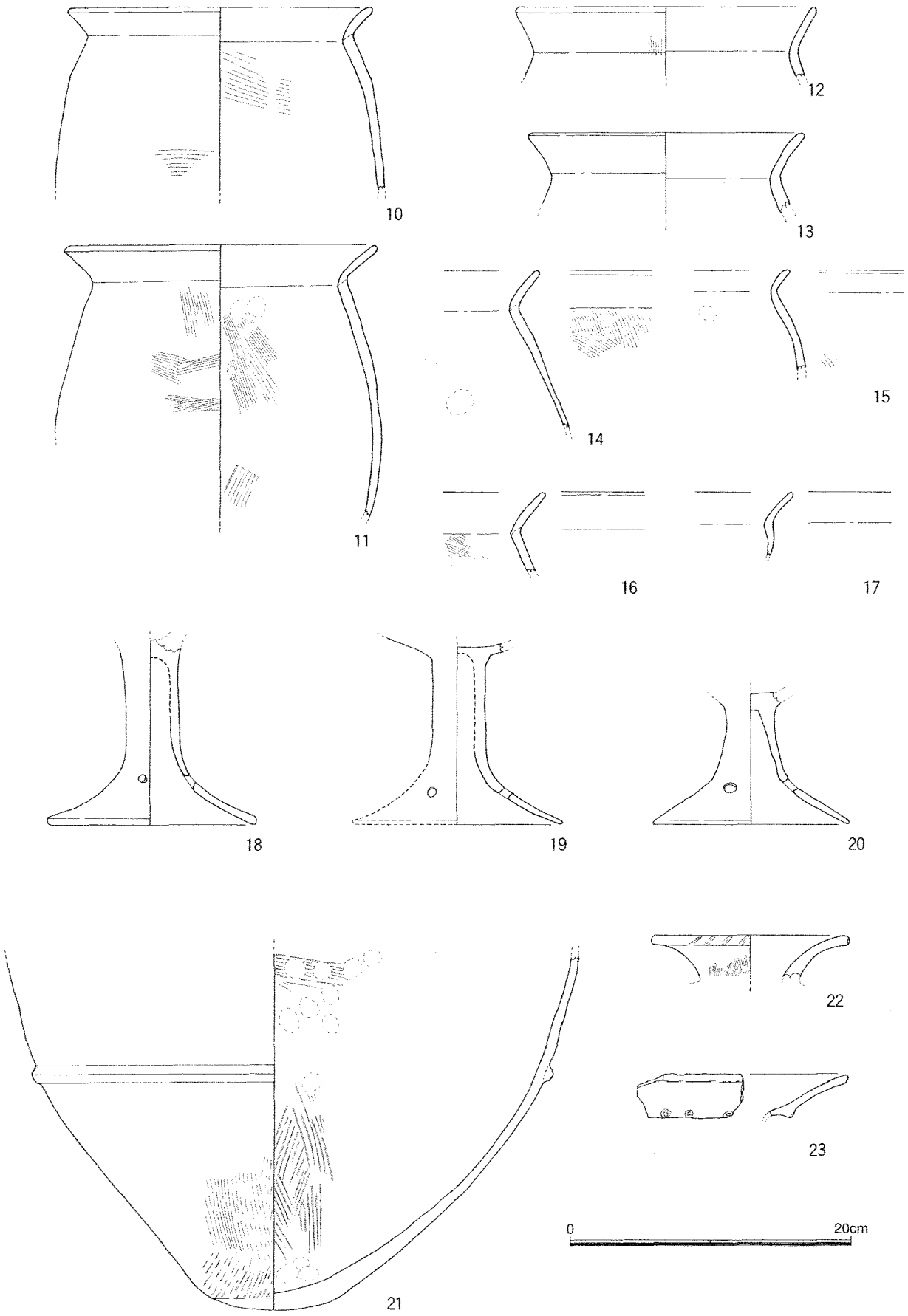
H７トレンチ西壁土層は10層で構成される。平成７年度調査時の所見によれば，H７トレンチ東壁土層５層を中心に，古墳時代前期の布留系土器がまとまって出土している（調査事務所報告書第11集参照）。H７トレンチ東壁土層５層は黒褐色土で下面レベルは17.00mであり，これらの特徴に該当する西壁土層は４層である。本年度調査での遺物の出土状況では，西壁土層５層まではほとんど遺物が出土しておらず（**第15図**），この層までは平成７年度の調査で遺物を取り上げた層と考えられる。本年度の再調査時での所見では，後述するように西壁土層６層以上と７層以下で遺物の出土状況が異なることから，平成７年度調査時の所見を加味すると，西壁土層１～５層を上層，６層を中層，７層～10層を下層として捉えることができるであろう（**第６図**）。

上層土層の特徴は，玄武岩岩盤由来の黄褐色粒子が密に混入する褐色土層と，カーボンを多く含む黒褐色土層が互層で堆積する点である。先述の通り，平成７年度の調査で西壁４層相当の黒褐色土層中から布留系土器群がまとまって出土しており，カーボン混入黒褐色土層が遺物包含層を考えられる。

中層は６層のカーボン集中層である。下面の標高は16.80mである。出土土器は，弥生時代中期終末の土器を中心に弥生時代中期の遺物も認められる（**第16図**）。弥生時代中期の遺物は，後述するように下層で多く出土していることから，下層からの混入と考えられる。器種構成は甕が最も多く（**第16図10～17**），その他高坏（**第16図18～20**）・壷（**第16図21～23**）で構成される。甕の口縁部は「く」の字口縁で立ち上がりは直立に近くなっている。**21**は大型壷の底部付近であるが，底部はわずかに稜



第15図　原地区Ｈ７トレンチ遺物出土状況（Ｓ＝１/40）および出土遺物①（Ｓ＝１/４）



第16図　原地区Ｈ７トレンチ出土遺物②（Ｓ＝１／４）

線を残すものの，丸底に近い形態となる。23は畿内系の二重口縁壺口縁部である。口縁部下端が突出し，突出部外面に渦巻き状の浮文を貼り付けている。以上の土器は弥生時代終末の土器群である。

下層は７層～10層である（**第６図**）。地山に類似した褐色系粘質土が主体であるが，７層はカーボンが散在する暗褐色粘質土で，遺物はこの層を中心に出土した（**第15図**）。床面標高は16.48mである。弥生時代中期中葉～後葉の須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式新段階の土器が中心である（**第15図**）。器種構成は甕が最も多く，高坏（**第15図８・９**）が少量出土している。

このほか，北壁の床面付近で小ピットを検出している（**第15図**）。直径20cm，検出面からの深さ７cmで，床面に対してやや斜めに掘り込まれていた。覆土は黒褐色粘質土で，西壁土層８層まで埋没した時点で掘削されたピットと考えられる。

・その他のトレンチ

ここでは平成15年度調査時のトレンチ土層の再検討結果について報告する。平成15年度は本年度調査区の南半部に調査区を設け，溝状遺構の上層を半円形に掘った後，東側と西側にトレンチを設けて調査を行った（調査事務所第28集参照）（**第４図**）。本年度再検討を行ったのは，この東西トレンチ壁面であり，それぞれ**H15東側トレンチ，H15西側トレンチ**と呼称する。

H15東側トレンチ北壁土層の再検討では，基本土層については平成15年度とほぼ同様の内容が確認できた。本年度変更および訂正した点は，①溝状遺構の最上層を切るように黒褐色系粘質土の落ち込みを確認した点（１層・２層），②平成15年度５層・６a層・６b層を一括して７層とした点，③平成15年度７層・８層を一括して８層とした点の３点である（**第６図**）。１層・２層は，プランの観察でも不定形でシミ状に確認されており，トレンチ①周辺のカーボン集中層と同様，古墳時代前期のブロック状堆積物と考えられる。３層・４層が弥生時代終末の包含層，５層～８層が弥生時代中期の包含層であることが昨年度の調査で確認されており，この点については変更はない。ちなみに４層下面の標高は17.03m，８層下面の標高は16.54mである。

H15西側トレンチについては，重要な変更点がある。平成15年度調査時点でSD３覆土と認識していた東壁２層・３a層・３b層が，本年度の再検討の結果，現地形に改変する際の造成土であることが判明した。平成15年度調査時の東壁土層は，４a層以下をSD４として一括しているが，昨年度の調査所見から４a層～４c層の弥生時代終末の包含層（SD３），５層以下の弥生時代中期包含層（SD４）に分かれることが明らかになっている。したがって，平成15年度調査時の４a層～４c層を本年度調査の１層～２層に，平成15年度調査時の５層以下の層を本年度調査の３層～６層に対応させ，それぞれを上層・下層とする。平成15年度調査時の４c層下面と本年度調査２層下面の標高がいずれも17.00m付近で一致することから，本年度の再検討で大別した上層・下層は，昨年度の調査成果と合致するものと考えられる。トレンチ床面の標高は，東壁床面で16.50m，北壁床面で16.49mである。

なお，平成15年度の調査の際に西壁沿いでピットを確認している（**第４図**）。楕円形の二段掘りピットで，長軸長75cm，ピット径30cm，検出面からの深さ35cmである。

第３表　原地区出土遺物観察表①

土器

報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
第７図	1	SD1①	鉢	灰オリーブ	5Y5/2	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	表面剥落
	2	SD1①	鉢	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～胴部	摩滅により不明	摩滅により不明	底部にスス痕
	3	SD1①	鉢	暗灰黄	2.5YR5/2	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ナデ	ケズリ・ナデ	全体的に表面剥落
	4	SD1①	短頸壺	橙	5YR7/8	橙	5YR7/8	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	
	5	SD1①	短頸壺	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部～底部	ナデ	ヘラナデ・指押さえ	
	6	SD1①	鉢	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部～底部	指押さえ	ナデ	ミニチュア土器・表面剥落
	7	SD1①	壺	にぶい橙	10YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部～底部	ナデ	指押さえ・ナデ	ミニチュア土器
	8	SD1①	壺	橙	5YR7/6	橙	2.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ナデ	ケズリ・指押さえ・ナデ	
	9	SD1①	壺	橙	5YR7/8	橙	7.5YR67/6	長石・石英	口縁部～胴部	ナデ	ナデ・ハケメ	
	10	SD1①	甕	にぶい橙	10YR7/3	にぶい橙	10YR7/3	長石・石英	口縁部	ナデ	ナデ	
第８図	1	SD4①	壺	明赤褐	5YR5/6	赤褐	5YR4/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	2	SD4①	壺	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	摩滅により不明	摩滅により不明	頂部剥落
	3	SD4①	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	裏面スス痕
	4	SD4①	壺	明赤褐	2.5YR6/8	赤褐	2.5YR4/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	しぼり	頂部丹塗り
	5	SD4①	壺	にぶい褐	7.5YR5/4	灰	5YR4/1	長石・石英・金雲母	口縁部～頸部	ナデ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	6	SD4①	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	7	SD4①	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	摩滅により不明	摩滅により不明	
第10図	1	SD1②	鉢	浅黄橙	10YR8/4	淡黄	2.5Y8/3	長石・石英	底部～口縁部		ナデ	両面スス痕・表面剥落
	2	SD1②	鉢	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・金雲母	底部～口縁部			表面スス痕・両面剥落
	3	SD1②	鉢	にぶい橙	5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部～口縁部		ナデ	表面剥落
	4	SD1②	鉢	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部～口縁部		ナデ	表面剥落
	5	SD1②	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	摩滅により不明	ハケメ	
	6	SD1②	短頸壺	灰白	2.5YS/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	底部～口縁部	ナデ	ケズリ・ナデ	裏面スス痕
	7	SD1②	短頸壺	橙	5YR6/6	黄灰	2.5Y6/1	長石・石英・金雲母	底部～口縁部		ナデ・指押さえ	剥落・裏面スス痕
	8	SD1②	壺	浅黄橙	8/4	浅黄橙	8/4	長石・石英・金雲母	底部～口縁部	ナデ	ナデ	
	9	SD1②	壺	橙	7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	底部～口縁部	ナデ・ハケメ・ケズリ	ナデ	裏面黒塗り
	10	SD1②	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片		指押さえ	表面剥落
	11	SD1②	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英	底部～口縁部	ナデ	ナデ・ケズリ・ナデ	表面スス痕
	12	SD1②	壺	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	両面黒塗り
	13	SD1②	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片		ナデ・指押さえ・ハケメ	表面剥落
	14	SD1②	高坏	赤	10R4/8	赤	10R5/8	長石・石英	脚部～杯部		ナデ	脚部穿孔・表面剥落
	15	SD1②	高坏	橙	5YR6/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	ほぼ完形			
	16	SD1②	台付皿	浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	山陰系・両面剥落
	17	SD1②	甕	橙	7.5YR6/6	明赤褐	5YR5/8	長石・石英・金雲母	底部		指押さえ	両面剥落
	18	SD1②	甕	橙	5YR6/6	明赤褐	5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片			両面剥落
	19	SD1②	甕	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
第12図	1	SD1②	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部			両面剥落
	2	SD1③	甕	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	3	SD1③	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	4	SD1②	甕	橙	5YR6/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	両面丹塗り
	5	SD1③	甕	明赤褐	5YR5/6	明褐	7.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片		ナデ・指押さえ	表面スス痕・剥落
	6	SD1②	甕	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片		指押さえ	両面剥落
	7	SD1②	甕	明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片		指押さえ	表面摩滅
	8	SD1①	甕	灰黄	2.5Y7/2	淡黄	2.5Y8/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	9	SD1③	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片		ナデ・指押さえ	表面剥落
	10	SD1③	甕	明褐	7.5YR5/6	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	表面剥落
	11	SD1③	高坏	赤	10R5/8	暗赤灰	10R3/1	長石・石英・金雲母	口縁部片			両面剥落
	12	SD1②	高坏	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ?	指押さえ・しぼり	表面剥落
	13	SD1③	高坏	明黄褐	10YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	穿孔４箇所
	14	SD1③	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	15	SD1③	壺	黄橙	7.5YR7/8	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ナデ	指押さえ・ナデ	表面丹塗り
	16	SD1③	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部		指押さえ・ナデ	表面剥落
	17	SD1②	甕	明赤褐色	2.5YR5/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ	
	18	SD1③	甕	赤	10R5/6	灰赤	10R4/2	長石・石英・金雲母	底部			両面剥落
	19	SD1③	壺	橙	5YR7/6	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・指押さえ	ナデ	
	20	SD1③	甕	にぶい赤橙	10R6/4	赤橙	10R6/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	21	SD1③	甕	橙	7/6	橙	7/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
	22	SD1②	甕	明赤褐	2.5YR3/6	赤褐	2.5YR4/8	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ	表面スス痕
	23	SD1②	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	表面丹塗り
	24	SD1③	甕	橙	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英	底部		指押さえ	両面剥落
第13図	25	SD1②	甕	橙	2.5YR6/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	ナデ	両面剥落
	26	SD1③	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	両面剥落
	27	SD1②	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ヨコナデ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	28	SD1②	鉢	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	29	SD1③	壺	橙	5YR6/6	明黄褐	10YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片		両面剥落	
	30	SD1③	鉢	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ	表面スス痕
	31	SD1①	鉢	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部		ナデ	表面剥落

第４表　原地区出土遺物観察表②

報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
第13図	32	SD1③	壺	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	33	SD1③	壺	黄橙	7.5YR7/8	明黄褐	10YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部		しぼり・指押さえ	表面丹塗り
	34	SD1②	壺	浅黄橙	10YR8/4	黄橙	10YR8/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	35	SD1③	壺	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片		ハケメ	
	36	SD1③	壺	明褐	7.5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ		両面剥落
	37	SD1③	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	裏面剥落
	38	SD1③	壺	橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	頸部～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ・ナデ・ヘラナデ	
	39	SD1②	壺	橙	2.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ		両面剥落
	40	SD1③	壺	明赤褐	2.5YR5/8	明黄	10YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ	
	41	SD1③	支脚	橙	2.5YR6/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	脚部			両面剥落
	42	SD1②	器台	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	完形	ナデ・ハケメ・指押さえ	ハケメ・指押さえ	
第14図	43	SD1②	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部		指押さえ	両面剥落
	44	SD1②	甕	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	底部		指押さえ・ナデ	表面剥落
	45	SD1③	壺	褐灰	10YR5/1	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	46	SD1②	甕？	明黄褐	10YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	底部		ナデ・指押さえ	表面スス痕・表面剥落
	47	SD1②	甕	明赤褐	2.5YR5/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部		指押さえ・ナデ	
	48	SD1③	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
第15図	1	SD1①	甕	暗赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・暗文		裏面剥落
	2	SD1①	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片			両面剥落
	3	SD1①	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	4	SD1①	甕	橙	5YR6/8	橙	5YR7/8	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	表面剥落
	5	SD1①	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部		指押さえ	両面剥落
	6	SD1①	甕	橙	5YR6/8	浅黄橙	7.5YR8/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・指押さえ	ナデ	
	7	SD1①	甕	にぶい赤褐	2.5YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	底部			両面剥落
	8	SD1①	高坏	明赤褐	2.5YR5/8	赤褐	2.5YR4/8	長石・石英・金雲母	脚部			脚部穿孔・両面剥落
	9	SD1①	高坏	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片			両面剥落
第16図	10	SD1①	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ハケメ	
	11	SD1①	甕	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
	12	SD1①	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい褐色	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ	ハケメ	両面剥落
	13	SD1①	甕	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ		裏面剥落
	14	SD1①	甕	明褐	7.5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ	指押さえ	
	15	SD1①	甕	明褐	7.5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
	16	SD1①	甕	明赤褐	5YR5/8	明赤褐	5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片		ハケメ・ナデ	表面剥落
	17	SD1①	甕	橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部			両面剥落
	18	SD1①	高坏	明赤褐	2.5YR5/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	脚部穿孔
	19	SD1①	高坏	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	指押さえ・ナデ・ハケメ	脚部穿孔
	20	SD1①	高坏	橙	7.5YR7/6	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	脚部			両面剥落
	21	SD1①	壺	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ナデ	ハケメ・ナデ	
	22	SD1①	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ・キザミ	ナデ	
	23	SD1①	壺	橙	5YR7/8	明赤褐	5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・浮文（過文）	指押さえ・ナデ	庄内式・表面剥落

石器

報告番号		種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材
第７図	22	SD1④	小玉	0.50	0.55	0.35	0.10	碧玉
	23	SD1④	管玉	0.85	0.50	0.50	0.40	碧玉

金属器

報告番号		遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	素材
第７図	11	SD1④	鉄片	3.80	3.30	0.40	36.50	鉄
	12	SD1①	袋状鉄斧	6.90	4.55	0.45	116.40	鉄
	13	SD1①	ヤリガンナ	3.50	1.30	0.20	4.30	鉄
第14図	49	SD1①	鉄鏃	16.60	4.15	0.30	108.90	鉄
	50	SD1①	鉄鋤	42.30	3.30	0.90	467.70	鉄

ガラス

報告番号		遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	色
第７図	14	SD1①	ガラス小玉	0.65	0.65	0.40	0.10	エメラルドグリーン
	15	SD1①	ガラス小玉	0.50	0.50	0.55	0.10	コバルトブルー
	16	SD1①	ガラス小玉	0.48	0.50	0.40	0.10	エメラルドグリーン
	17	SD1①	ガラス小玉	0.49	0.42	0.45	0.10	コバルトブルー
	18	SD1①	ガラス小玉	0.60	0.50	0.50	0.10	コバルトブルー
	19	SD1①	ガラス小玉	0.45	0.35	0.35	0.1未満	コバルトブルー
	20	SD1①	ガラス小玉	0.45	0.40	0.30	0.1未満	コバルトブルー
	21	SD1①	ガラス小玉	0.30	0.40	0.30	0.1未満	エメラルドグリーン
第16図	20	SD1①	ガラス小玉	0.40	0.45	0.25	0.1未満	エメラルドグリーン
	21	SD1①	ガラス小玉	0.60	0.65	0.50	0.10	エメラルドグリーン
	22	SD1①	ガラス小玉	0.35	0.39	0.35	0.1未満	エメラルドグリーン

(3) 小　　結

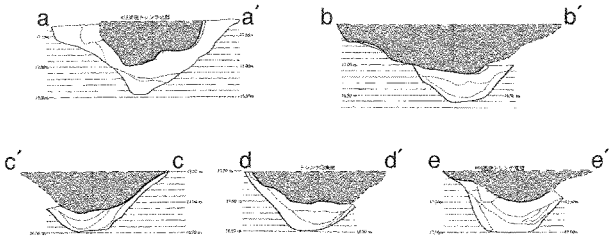
本年度の原地区の調査は，祭儀場南端部での遺構群の構造を把握するために，先述の通り６カ所のトレンチ調査区を設定するとともに，平成７年度や平成15年度調査時のトレンチ土層の再検討を行い，出土土器に基づいて土層を大別しながら遺構群の切り合い関係を探った。ここでは，各トレンチ土層の対応関係を把握しながら，遺構群の構造と時期別の展開について考察を加える。

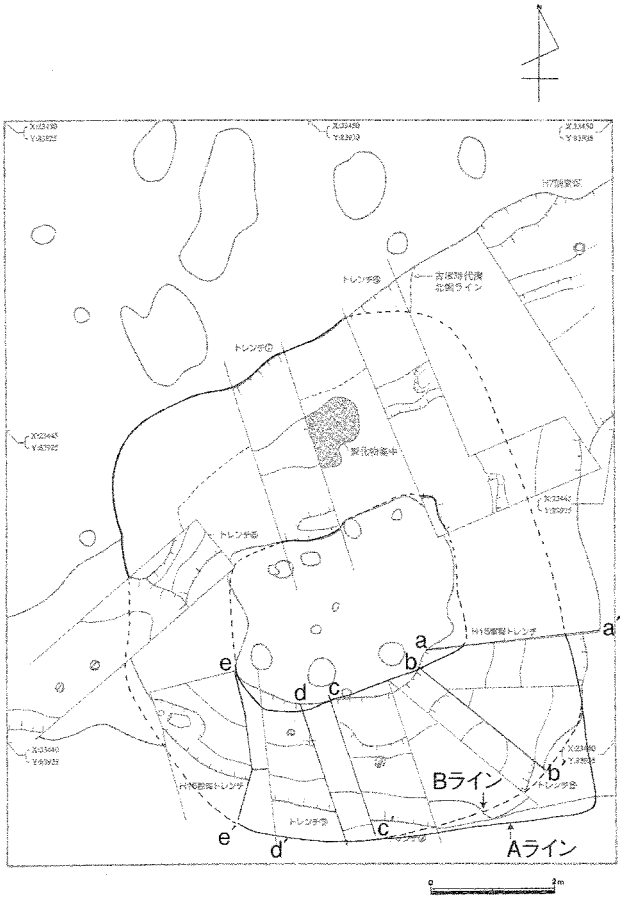
①各トレンチ土層の対応関係と遺構群の展開

本年度設定トレンチに平成７年度および平成15年度調査トレンチを加えて，土層の対応関係をまとめたのが**第２表**である。本年度調査区の遺構群は，遺物の出土状況から，①弥生時代中期中葉，②弥生時代終末，③古墳時代前期の３つの時期にまたがって営まれている。

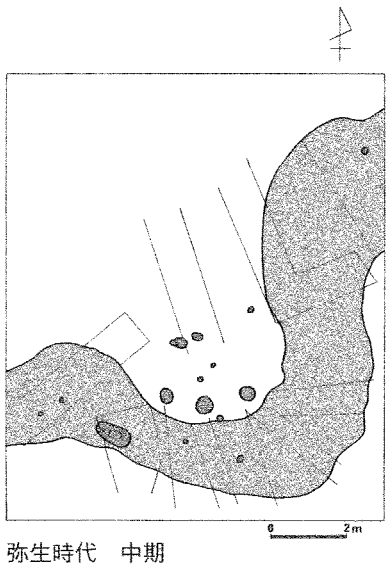
弥生時代中期中葉は須玖Ⅰ式古段階～新段階に相当し，Ｈ７トレンチ・トレンチ④・H15東西トレンチ・トレンチ⑥・トレンチ②・トレンチ③・トレンチ⑤で確認できる。これらのトレンチの平面プランをつなぐと，南側に半円形に張り出す断面Ｖ字形の環濠に復元できる（**第18図**）。床面標高は，トレンチ④東西土層で若干低いものの，ほぼ16.50m付近で揃っている。覆土の特徴は，最下層に地山から流れ込んだ褐色～赤褐色粘質土が堆積した後，カーボン集中層が薄く堆積する点にある。特に，トレンチ②・トレンチ③ではカーボンとともに焼土粒が厚く堆積していることから，南側の張り出し部分を中心に焼土およびカーボンの廃棄が行われたものと考えられる。また，環濠床面からは，合計６基の小ピットを確認した。覆土の特徴から，褐色～赤褐色系粘質土の堆積後に掘削されたと推測されるが，H15西側トレンチピットを除いて10cmに満たない浅いものばかりである。また，床面に対して垂直に掘削されたもののほか，北壁の床面付近に斜めに掘削されたものもある。環濠張り出し部の北側にはピット群が展開し，張り出し部に沿って配置されていることから，弥生時代中期の環濠に伴うピット群と考えられるが，床面検出のピット群と併せて一連の構築物を形成していた可能性は考えられる。ただし，ピットの配置が不規則であることや，ピットの規模を考慮すると堅牢な施設は考えにくく，仮設的な構築物と考えるべきであろう。

弥生時代終末の遺物は，トレンチ①・Ｈ７トレンチ・H15東西トレンチ・トレンチ⑥・トレンチ②・トレンチ③・トレンチ⑤で出土している。Ｈ７トレンチを除く各トレンチの平面プランをつなぐと，北東部付近が不明瞭であるが，略方形に一周する周溝状遺構に復元できる（**第18図**）。覆土の特徴は褐色系の粘質土でカーボンが散在する点が特徴である。断面逆台形で床面標高は17.00m前後でほぼ共通する。一方，Ｈ７トレンチで検出した弥生時代終末の包含層は，カーボンが集中する黒褐色粘質土で，下面の標高も16.80mと，他のトレンチの弥生時代終末期包含層との違いは大きい。平成７年度の調査では，祭儀場の東側で，弥生時代終末の土器を含む環濠を東西方向に検出しており，Ｈ７トレンチのこの時期の包含層もこの環濠につながるものと考えられる。周溝状遺構との関係については，トレンチ④でこの時期の包含層が未確認であることから不明な点も多いが，ここでは略方形にめぐる周溝状遺構の手前で途切れると推測しておきたい。周溝状遺構の周溝内からは，北西隅部を中心に大量の出土遺物をみた。土器の器種構成では甕と並んで壺の出土量が多い点を特徴として指摘できる。

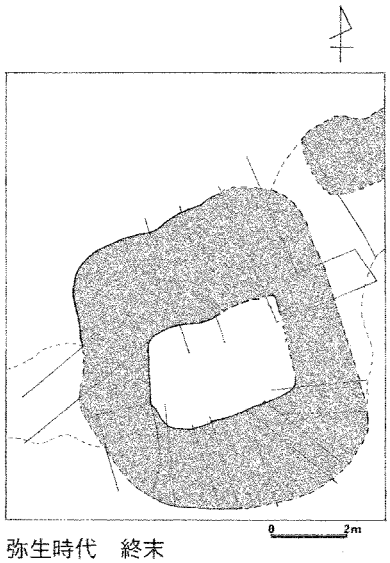




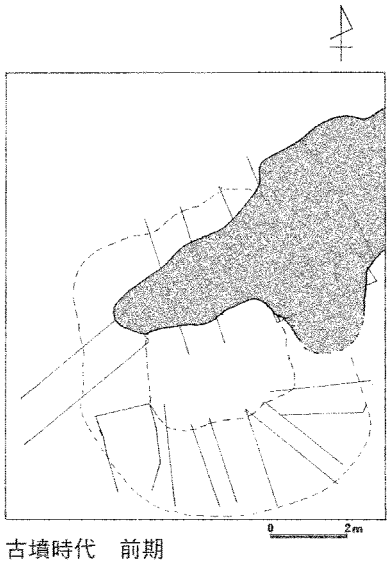
第17図　周溝状遺構の平面プラン（S＝1/100）



弥生時代　中期



弥生時代　終末



古墳時代　前期

第18図　調査区内における遺構群の変遷（S＝1/200）

また，鉄剣や鉄鎌・袋状鉄斧といった鉄製品が豊富に出土している点も注目される。これらの鉄製品には，実用品にはそぐわない特徴も認められ，これらの鉄器が祭祀に供された可能性をうかがわせる。

古墳時代前期の包含層はＨ７トレンチ・トレンチ④・トレンチ①・トレンチ⑤で確認できる。平面プランの検討と併せて，東側から西側・南側へと不規則に伸びて途切れる溝状遺構に復元できる（**第18図**）。床面標高はトレンチ④東壁で16.58m最も深いものの，トレンチ①東壁では17.38mと極端に高くなっている。この傾向は，南側への展開でも認められる点は先述したとおりである。東側への展開は，Ｈ７トレンチ西壁の包含層下面標高16.80mで，同じくＨ７トレンチ東壁で標高17.00mとなることから，徐々に浅くなっていくようである。出土遺物は，鉢・短頸壺・小型丸底壺やミニチュア土器で構成される祭祀土器群で構成される点が特筆される。ガラス小玉をはじめとする装身具類もまとまって出土しており，弥生時代終末に周溝状遺構として具現化された祭祀空間としての認識が，古墳時代前期まで引き継がれていたことを示している。

②周溝状遺構の平面プランと規模

弥生時代終末の周溝状遺構について検討を加える。周溝状遺構の平面プランは，北西隅のコーナー部分を除いて，古墳時代前期の削平や近世以降の削平を受けているため，往時の状況をとどめていない。そこで，各トレンチの土層から復元を試みたい。各トレンチ土層のうち，周溝状遺構の床面幅が推測できるものに中軸線を引き，中軸線を挟んで北側のラインを南側に反転することで，周溝状遺構の南側ラインを復元したのが**第17図Ａ**ラインである。これに各トレンチの周溝状遺構掘り込み地点を線で結ぶと，隅丸長方形プランに復元できる。しかし，南東隅が直角に近い点は北西隅と比較してやや違和感を覚える。トレンチ⑥東壁は周溝状遺構床面幅が不明確であり，南東隅は実際にはより北側に位置する可能性が高い。そこで，北西隅とのバランスを考慮して復元したのが**第17図Ｂ**ラインである。これによれば，長軸長8.5m，短軸長7.2m，テラス部分の南北軸長2.7m，東西軸長3.8mに復元できる。東西に位置する周溝は幅1.5～1.7mであるのに対して，南北に位置する周溝は2.5～3.2mと幅広い点が特徴である。

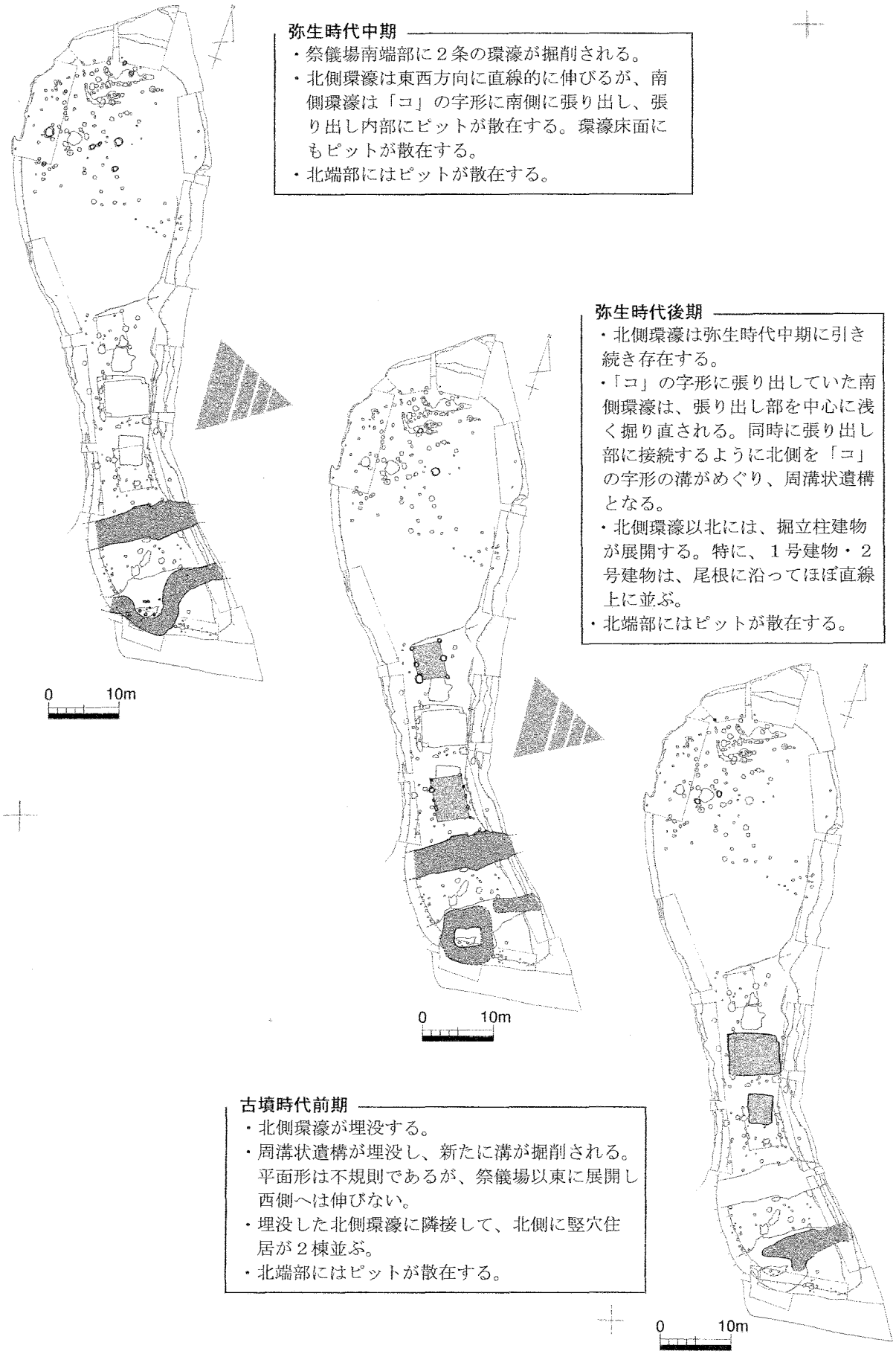
③祭儀場の変遷

本年度の調査成果を踏まえると，祭儀場の変遷は次の通りとなる（**第19図**）。

弥生時代中期中葉には，祭儀場北端部にピットが散在するとともに，南側に東西に伸びる２条の環濠が掘削される。南側の環濠は南側に半円形に張り出し，環濠の床面や張り出し内部にピットが掘削される。南側環濠に絡むこれらのピットは，何らかの仮設的な構築物となる可能性も考えられる。

弥生時代後期になると，北側環濠は埋まらずに残るものの，南側環濠はいったん埋没し，終末に周溝状遺構として再掘削される。北側環濠のさらに北には，この時期２棟の掘立柱建物が建つが，周溝状遺構とほぼ等間隔で直線上に並ぶことから，一連の遺構として位置付けられるであろう。

古墳時代前期には北側環濠が埋没し，終末の掘立柱建物に重なるように大型竪穴住居が築かれる。周溝状遺構は埋没して新たに溝が掘削されるが，祭祀色の強い遺物が出土することから，この時期に至っても祭祀空間として機能していた可能性が強い。



第19図　祭儀場の変遷（1/800）

(4) 附編：原の辻遺跡発見の周溝状遺構とその意義

小郡市教育委員会技師　片岡　宏二

発見の意義

周溝状遺構は，北部九州を中心に，東は少なくとも四国香川県高松市までは確実に広がりを見せ，近畿地方でもその可能性のあるものがいくつか報告されている。そうした中で原の辻遺跡で発掘された周溝状遺構は，原の辻遺跡で唯一の例となるだけでなく，玄界灘沿岸から対馬海峡にかけての西北九州でも初めての発掘例である。

今までの調査例から見ると，周溝状遺構は筑紫平野で発生して各地域に広がる可能性が高いが，筑紫平野で出現する時期とほぼ同時期に周防灘沿岸でも類例があることから，その出現や系譜には，まだ解明されていない点も多い。そうした中で，従来発見例がなかったこの地域で初めて周溝状遺構が発見されたが，この原の辻遺跡が朝鮮半島との交易拠点にあること，クニの中心集落であることなどから，その出現の契機にどのような背景があったのか，当時の社会情勢の問題も含めて興味がもたれるところである。

時期・規模・形状

原の辻遺跡の周溝状遺構はその出土土器の検討から弥生時代後期終末とされる。北部九州の周溝状遺構は，筑紫平野の一部で弥生時代前期末～中期初頭に出現し，中期中葉には筑紫平野西部に，中期後半から後期初頭には，筑紫平野南部や福岡平野にまで広がりを見せ，後期後半から終末には北部九州各地域で多数見られる。しかし，長崎県地方・糸島半島・唐津平野・壱岐島・対馬島は例外で，今までにも発見例がなかった。

弥生時代中期に出現した段階では，周溝状遺構は小型の円形プランを基本としていた。そして，後期以後になると，浮羽地方から豊後地方にかけてのように楕円形を基本プランとするところもあるが，おおむね方形プラン・隅丸方形プランのものが主流を占めている。そうした点で，原の辻例のプランもそうした流れに乗るものかどうか注目される。この原の辻遺跡の周溝状遺構は，この遺構を含めて，弥生時代中期の環濠と古墳時代の溝の３時期の遺構が重複しているため，プランは錯綜しているが，土層などを手がかりにして，周溝状遺構のプランが**第17図**のように復元されている。

この平面プランから見ると，現在，平面図で図示されている台状部の線のうち，北側辺は古墳時代溝によって切られているため，台状部の形状は失われている。いっぽう，南側辺を含めてその東西両脇の辺は，楕円形にめぐるように見えるが，これは弥生時代中期の環濠の線であって，ここに設置されたH15東・H15西・②・③・⑥の各トレンチ堆積状況を詳細に検討して，周溝状遺構が切込んでいる点をつないで見ると，**第17図**のように周溝状遺構台状部の線は隅丸方形に復元できた。

周溝状遺構が本来の役割を果たす場所は，溝に囲まれた内側の台状部であるから，その部分の形状がどのようになるかは，周溝状遺構全体がどのようなプランを意図して作られていたのか重要なヒントになる。台状部が方形プランであるのに，周溝が円形プランという例はない。

周溝状遺構の溝外側の線は，北側から西側にかけてはプラン確認が可能で，北側辺は東西に直線状に伸び，北西隅コーナーが丸みを持って折れ，西辺も直線状に南北に伸びている。東側辺は古墳時代溝に切られているため一部しかわからないが，中央付近は直線状に南北に伸びている。南側辺は，全体が削られて南側の立ち上がりを出すことが不可能であるため，形状は良くわからない。

このような検討結果から，この周溝状遺構は隅丸方形プランを意図して掘られていたと考えてよいだろう。

周溝状遺構の大きさは溝の外側で東西が約7.3m，南北が8.5mを測り，通常の大きさか，やや大きい部類に属す。しかし，台状部は東西3.8m，南北2.7m前後となり，全体の大きさに比較すれば，かなり小さい。これは，通常の周溝状遺構であれば，溝断面はU字形をしたものが多く，溝壁は比較的急角度で立ち上がることが多いのであるが，ここでは溝壁の立ち上がりがややなだらかな感じを受け，溝の立ち上がりが斜めになると，内側台状部の面積が狭くなるためである。

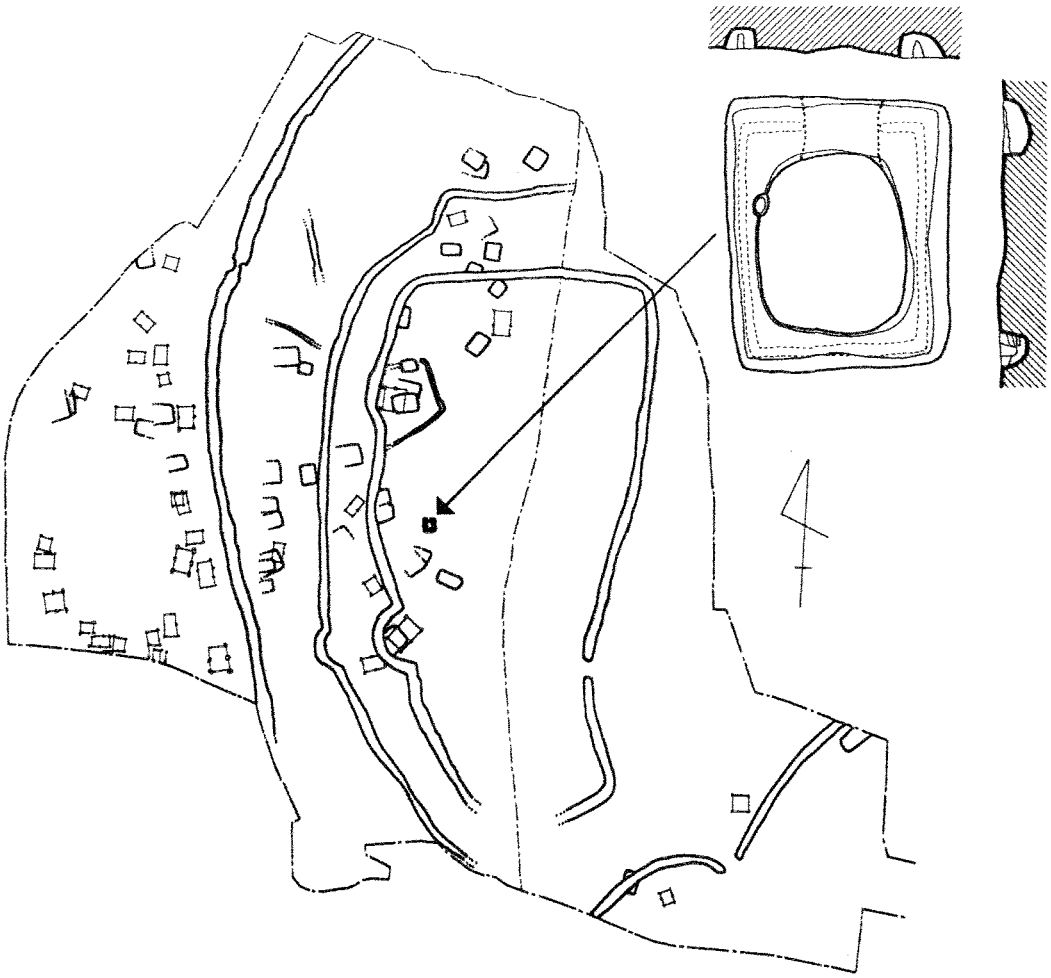
台状部のピットは弥生時代中期の環濠に付随するものと判断されている。このピットの並びが中期の環濠に沿って弧状に配されている点や，ほとんどの周溝状遺構では，内部に施設を持たない点も，周溝状遺構に付随しないと考える根拠になるだろう。

性格

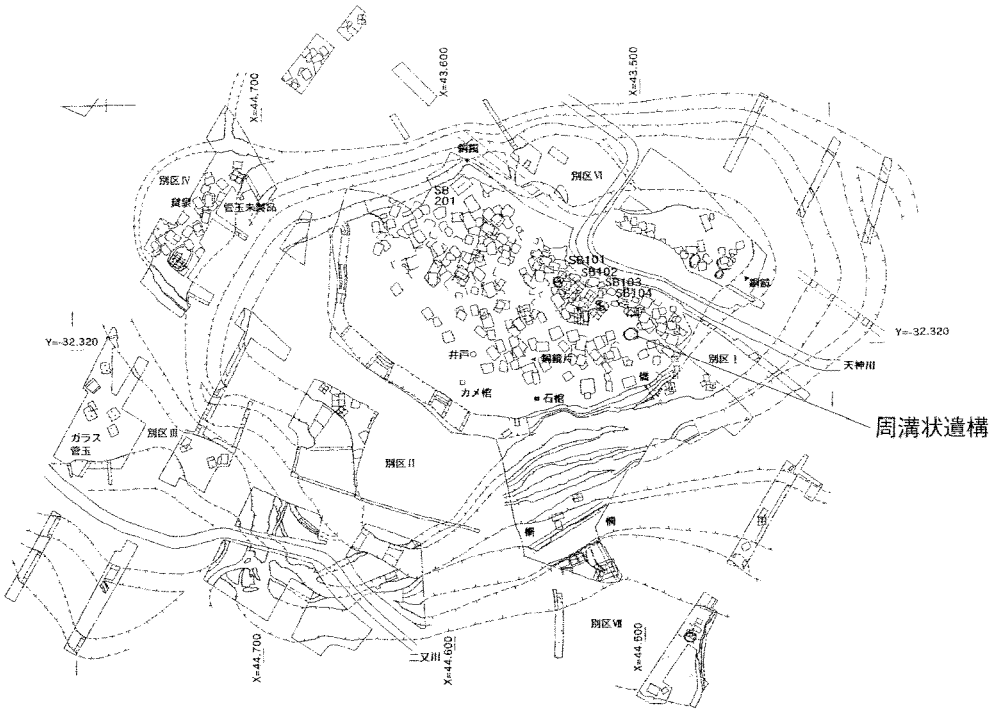
周溝状遺構は，現在確認されている遺跡数は160以上，遺構数は340以上あるが，集落から発見されるという性格が共通するだけで，具体的に集落の中でどういう機能を果たす施設なのか，その実態は不明である。今までは，特に祭祀性の強い遺物を出土するわけでなく，むしろあまり多くの遺物を出土しないこともあって，住居説や墳墓説などもあったが，集落全体が調査される機会も多くなって類例の増加もあり，住居説・墳墓説の可能性が消去されていった。また，最近では青銅器生産の工房が湿気抜きのために溝をめぐらす例もわかってきたが，湿気抜きのために掘られた狭い細い溝とはその規模もかなり異なっている。その配置が，広場や逆に集落の隅にあることもわかり，出土遺物にも祭祀性の高いものが確認されるなどして，集落の祭祀に関わる施設という見解が強くなってきている。

原の辻遺跡同様，クニの中心的な集落と考えられる吉野ヶ里遺跡や平塚川添遺跡でも発見されていて，それらは，いずれも集落の中心部分で，しかも住居が希薄な広場と考えられる箇所に周溝状遺構が営まれる点が共通している。そうしたことから，この遺構が集落の祭祀に関わる施設である可能性を考えてきたが，本例においても，原の辻遺跡のまさに中心の祭儀場とされる一角で，しかも周囲に竪穴住居跡がない部分から発見されている。こうした点から原の辻遺跡の周溝状遺構は，吉野ヶ里遺跡や平塚川添遺跡と極めて似た性格を持つことが推測される。

周溝状遺構はその立地にはさまざまなパターンが見られる。詳細は，別に書いたものがあるので割愛する（片岡1989，1991，1994，1996）。一般的な集落においては，複数に周溝状遺構が作られたり，それらは重なって掘られていたり，溝を共有して連結して掘られている例もある。それらはそれぞれに意味がある。その中で，原の辻遺跡のように，ごく少数の周溝状遺構が集落の中心で広場のような



吉野ヶ里遺跡の弥生時代後期前半の遺構配置（S＝1/2000）と同溝状遺構（S＝1/100）



平塚川添遺跡全体図と同溝状遺構の位置（S＝1/4000）

第20図　各地の周溝状遺構（佐賀県教育委員会1992，甘木市教育委員会2001より）

位置にあるものがある。その代表的な遺跡から「吉野ヶ里タイプ」とでも分類できるものである。佐賀県吉野ケ里遺跡では，後期前半段階に二重環濠に囲まれて，周囲に住居跡が囲む真ん中の箇所に周溝状遺構が１基だけ営まれている（**第20図**）。周溝には板を立てて内部を遮断したような痕跡が認められる。平塚川添遺跡も後期後半以後の段階に多重環濠に囲まれた集落の中心にあって，入り口とされる橋を渡って中に進んだところの広場に作られている（**第20図**）。この原の辻遺跡や吉野ヶ里遺跡，平塚川添遺跡は，いずれも弥生時代のクニの中心的な集落である。こうした遺跡における周溝状遺構の意味は，一般的な集落における意味とは違ったものであるかもしれない。

原の辻遺跡の周溝状遺構は，弥生時代中期の溝が張り出した部分に重複して作られている。環濠が完全に埋まりきらなかった状態で残っていたと考えられる。そこは原の辻遺跡の中でも最も高い部分で，現状では，ここから南側に下っていくが，周溝状遺構のレベルをみると，周溝状遺構の下面のレベルはほぼ一定している。一番高い側の北側で床面のレベルは，トレンチ①で16.95m，一番低い側の南側で床面のレベルは，トレンチ②で16.90mとほぼ一定である。ということは，今では南側に傾斜しているこの部分も，もともとは平坦に近かったと考えられるだろう。

掘立柱建物との関係も注意される。平塚川添遺跡では，入り口から入ると周溝状遺構の後ろに４棟の大きな並び倉がある。この原の辻遺跡では逆に入り口が北方向なので，祭殿と考えられた建物の南側背後に周溝状遺構があることになる。

周溝状遺構から出土した遺物としては，土器のほか，鉄剣１・鉄鎌１・鉄片数個など鉄器の多さが際立っている。このように鉄器が多量に出土する点は周溝状遺構としては異例である。周溝状遺構が一般化している地域における，周溝状遺構とは違った機能を持っている可能性もある。

原の辻遺跡周溝状遺構の問題点

原の辻遺跡に限らず，周溝状遺構の持つ最大の問題点は遺構の性格である。前述のとおり，平塚川添遺跡や吉野ヶ里遺跡でもこの種の遺構が重要な位置に立地しながらも，整備対象にならなかったのは，整備時点で，この遺構の評価が定まっていなかったという点が大きかったと考える。

今回はこの地区を整備するに当たって，周溝状遺構の復元は避けて通れない状況である。実施されれば，全国的に見ても周溝状遺構復元の初めてのケースになるため，現段階におけるその考古学的位置づけも明確にする作業が必要になる。現在の研究では，周溝状遺構の性格について，状況判断から祭祀遺構と考える説が有力であり，筆者もそう考えている。祭祀でも集落からしか発見されないことを考えると，葬送儀礼にかかるものではないか，あるいは葬送儀礼にしても埋葬に関わるものではない，いずれにしても集落を舞台とした祭祀であると推測される。

復元について言えば，祭祀遺構としてもどのような祭祀か，その具体的な機能を示す積極的な根拠がまだ見つかっていない以上，台状部に何かを建てたり，置くなどして，その解釈に余分なものを付加することがないようにすべきだと考える。

原の辻遺跡は，広範に各地域と活発な交渉を持っている。そうした点で，主として筑紫平野以南に

密度濃く広がる周溝状遺構が，この遺跡に突然出現することは，原の辻遺跡の交易圏が，海を介して筑紫平野にも及んでいたことを示すかもしれない。平塚川添遺跡や吉野ヶ里遺跡のような集落で執り行われていた祭祀に影響を受けた可能性も否定できない。分布の薄い西北九州にあって，この原の辻遺跡にだけ，周溝状遺構が出現する背景にどういう社会状況があったのか，今後の調査の進展に期待したい。

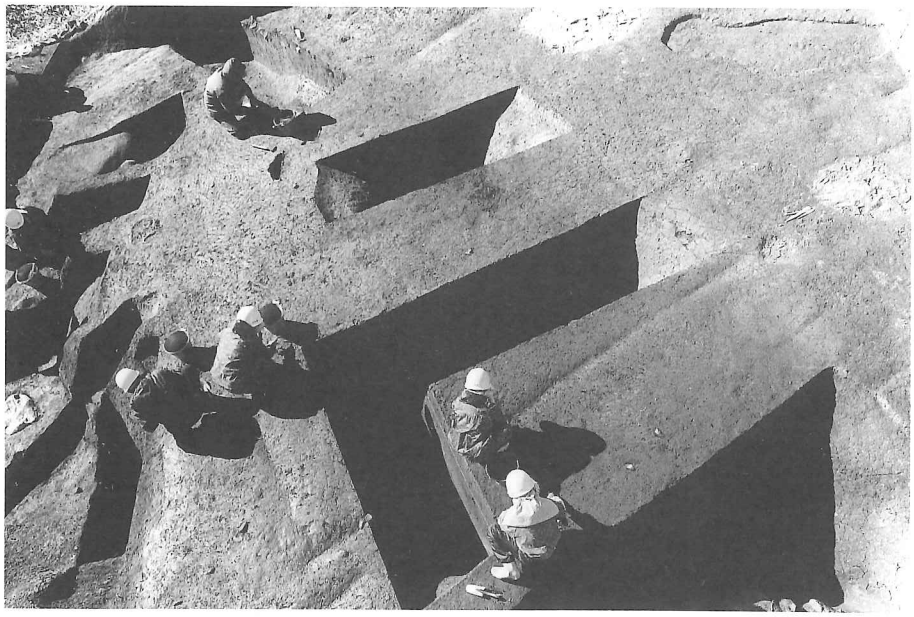
【文献】

甘木市教育委員会2001『平塚川添遺跡Ⅰ』甘木市文化財調査報告書　第53集
佐賀県教育委員会1992『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書　第113集
片岡宏二1989「『周溝状遺構』の検討（その１）」『福岡考古　第14号』
片岡宏二1991「『周溝状遺構』の検討（その２）」『福岡考古　第15号』
片岡宏二1994「『周溝状遺構』の検討（その３）」『福岡考古　第16号』
片岡宏二1996「『周溝状遺構』の検討（その４）」『福岡考古　第17号』

図版１

原地区
遺構検出状況（東より）

作業風景①



作業風景②

H7トレンチ土層
（西壁）

トレンチ①
遺物出土状況

トレンチ①
完掘状況

図版 3

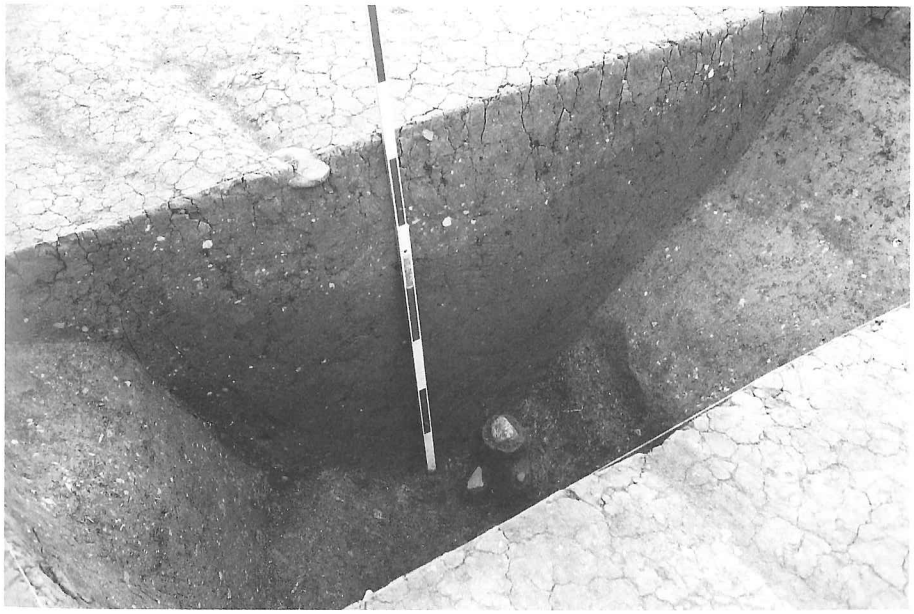
トレンチ①
土層（東壁）

トレンチ②
土層（西壁）

トレンチ②
土層（東壁）

トレンチ④
土層（西壁）

トレンチ④
土層（東壁）



トレンチ④
土層（南壁）

図版 5

トレンチ⑤
遺物出土状況

トレンチ⑤
出土鉄鎌

トレンチ⑤
出土鉄剣

2．高元地区の調査

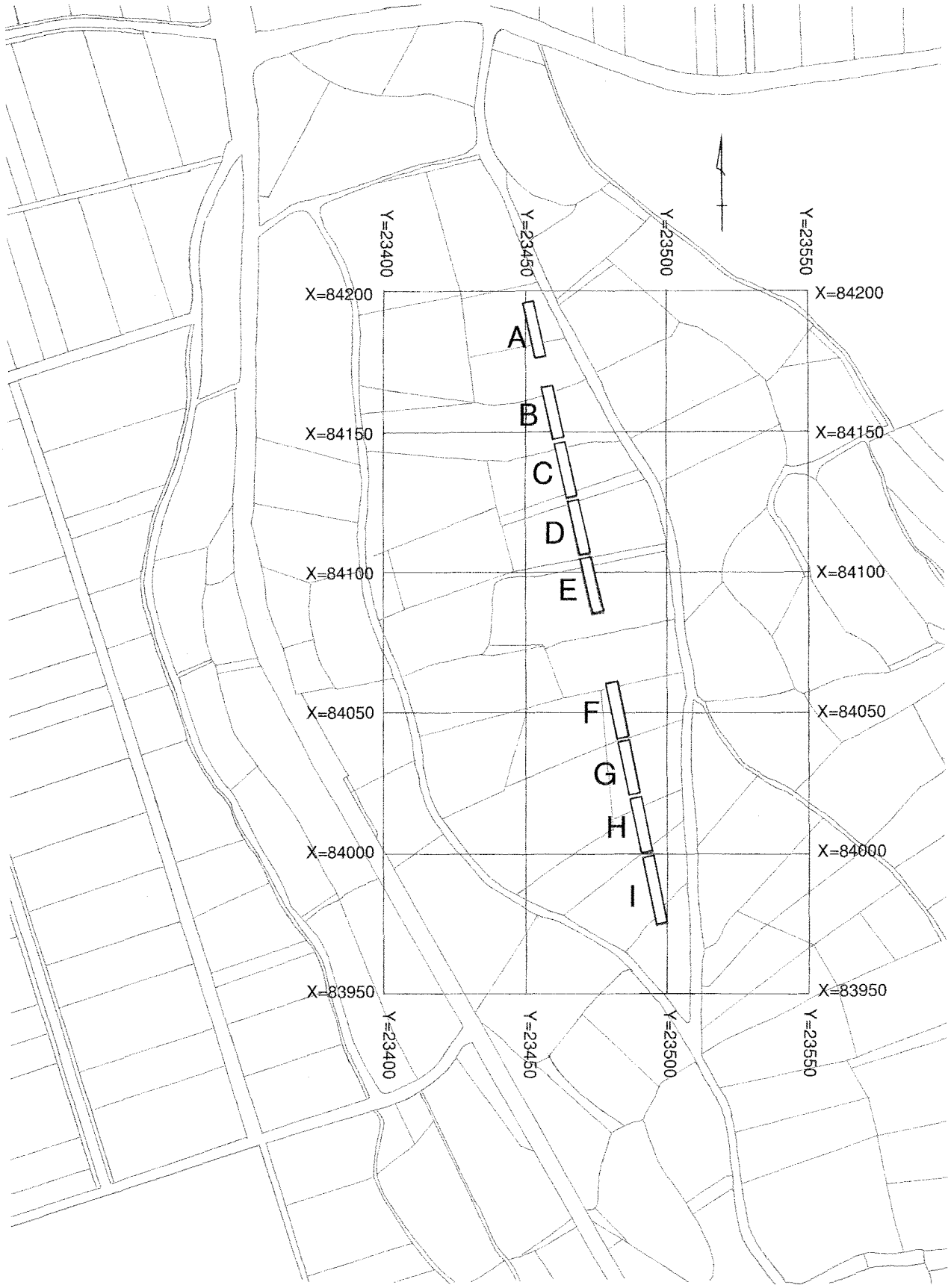
(1) 調査概要

高元地区は，原の辻遺跡の生活域である低台地上の北半部に相当する。このエリアは，平成６年度に旧芦辺町教育委員会（現壱岐市教育委員会）によってはじめて本格的な調査が実施され，多数の竪穴住居跡や土坑をはじめとする遺構群が検出された。従来，生活遺構は祭儀場周辺の原地区を中心に検出されていたが，この調査により，低台地上全域にわたって弥生時代の生活面が広がる可能性が高くなった。その後，低台地北半部における遺構群の把握を目的として，平成14年度以降，原の辻遺跡調査研究事業に伴う発掘調査を継続的に実施している。これにより，低台地北半部では，竪穴住居や土坑群が弥生時代中期～古墳時代前期にかけて展開していることが判明した。また，これら遺構群の時期的な変遷に関しても，弥生時代中期の土坑を中心とする遺構群から，弥生時代後期には遺構分布が希薄になり，古墳時代前期には竪穴住居群が展開することが明らかになってきた。

しかし，生活域の調査が集中して行われている原地区周辺の遺構群と比較するには，原地区と高元地区との間に未調査箇所が多く，原の辻遺跡全体の生活遺構の変遷を辿ることが困難な状況にある。また，平成15年度に実施した祭儀場周辺の調査成果から，原の辻遺跡周辺では，弥生時代以降現在までにさまざまな土地の改変が繰り返されており，現在我々が目にする原の辻遺跡の景観は，厳密には「弥生時代の原風景」とは異なることが明確となった。そこで，本年度の調査では，原地区から高元地区にかけて南北約200mにわたって幅４ｍのトレンチ調査区を直線上に設定し，弥生時代における旧地形の復元と未調査箇所における遺構群の把握を試みた（**第21図**）。

調査区は，幅４ｍのトレンチを20mおきに区分して９カ所設定し，北からＡ区～Ｉ区とした。各調査区の間に幅１ｍの土層観察用ベルトを設置したが，運搬車両の通路や耕作者の作業通路を確保する必要から，Ａ区・Ｂ区間を10m，Ｅ区・Ｆ区間を25m間隔をおくことにした。また，同様の理由から最南端のＩ区のみを南北長25mの調査区とした。なお，これらの調査区は，地籍上深江鶴亀触字高元から字原までを含むが，先に報告した原地区調査区と区別するため，ここでは一括して高元地区と呼称する。調査面積は合計740㎡である。

調査は，最南端のＩ区から開始した。当初，未調査箇所の遺構群を確認する必要から，調査区全面を遺構検出面まで掘り下げたが，遺構群の切り合い確認のために西壁沿いにサブトレンチを設定して掘り下げたところ，土層の特徴から複数の文化層が存在することが判明した。これらの文化層は，調査区全面に広がる可能性が強いことから，調査の方針を切り替え，未調査箇所の遺構群確認を断念して，サブトレンチの掘削による文化層の確認と，これに基づいた旧地形の復元に専念することとした。したがって，Ｆ区以南の調査区は調査区全面を遺構検出面まで掘り下げたものの，Ｅ区以北の調査区は旧耕土を全面除去した後，西壁沿いのみを幅１ｍで基盤層まで掘り下げることとなった。土層の詳細な観察の結果，調査区全体が少なくとも２枚の文化層に分かれることが判明するとともに，弥生時代の旧地形に関しても重要な知見を得ることができた。



第21図　高元地区調査区位置図（S＝1/2000）

(2) 各調査区における成果

・A区

●基本土層

A区は高元地区の最北端に位置する。平成14年度の調査で，古墳時代の住居群が密集して検出された調査区の西側に隣接する。調査は耕作面を全面除去した後，西壁沿いを幅1mで岩盤まで掘り下げた。なお，後述する第1文化層については，遺構検出ラインを記録し出土遺物もドットマップを作製して取り上げたものの，第2文化層以下は層位毎に一括して遺物を取り上げ，土層から遺構面の存在を確認した（**第22図**）。

土層は，最上層の耕作土直下に黒褐色粘質土が帯状に堆積し，弥生時代中期～後期の土器に伴って焼土面やカーボン集中域を検出しており，生活面と考えられる（第1文化層）（**第22図2層**）。第1文化層の下面は，部分的にピット状の落ち込みが確認できるものの，標高11.40m付近でほぼフラットに堆積している。先述の通り，遺構検出面で焼土面やカーボン集中箇所を検出していることから，複数の竪穴住居址が切り合っているものと考えられる。

3層は黄茶褐色粘質土で,2層の黒褐色土と基盤層である玄武岩岩盤から遊離した黄褐色粒子の混合層である。調査区全面で面的な広がりを見せることから第2文化層とした（**第22図**）。調査区南端部や北端部付近では，標高11.20m付近でフラットに堆積する箇所が認められ，竪穴住居跡の可能性があるものの，大半はピット状の落ち込みである。落ち込みの床面標高は10.80m～11.10mと幅があり，南側に向かうほど深く掘削する傾向にある。弥生時代中期の土器が出土している。

4層は灰褐色粘質土で南端部付近にのみ堆積する。下面に焼土が帯状に堆積することから生活面と考えられるが，調査区全面に広がることはなく，他の調査区でも対応する土層が確認できないことから，文化層として特定するには至らなかった。弥生時代中期の土器が出土している。

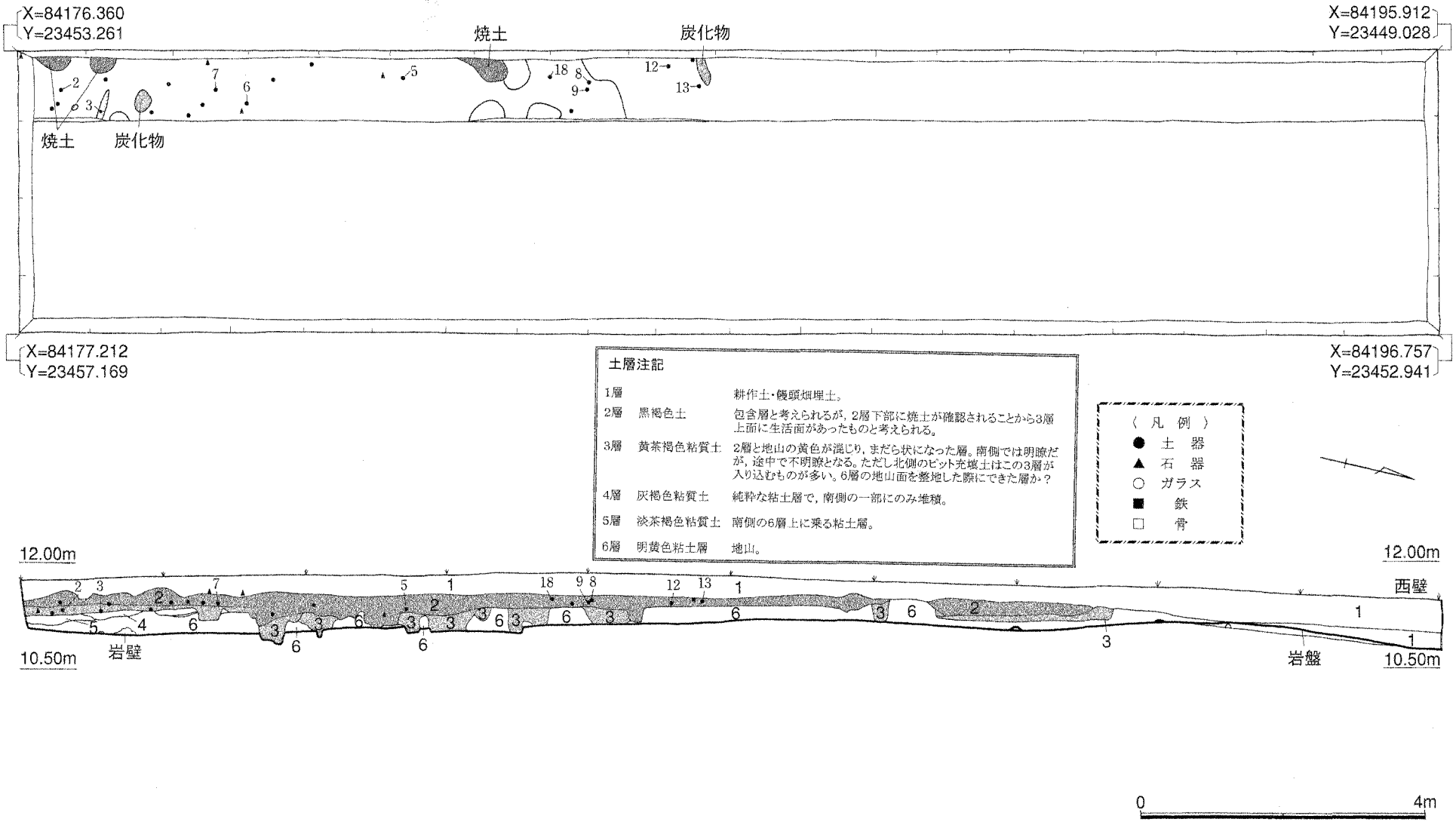
5層は短茶褐色粘質土で，南端部でのみ検出している。遺物は出土しなかった。6層は地山である。

●出土遺物

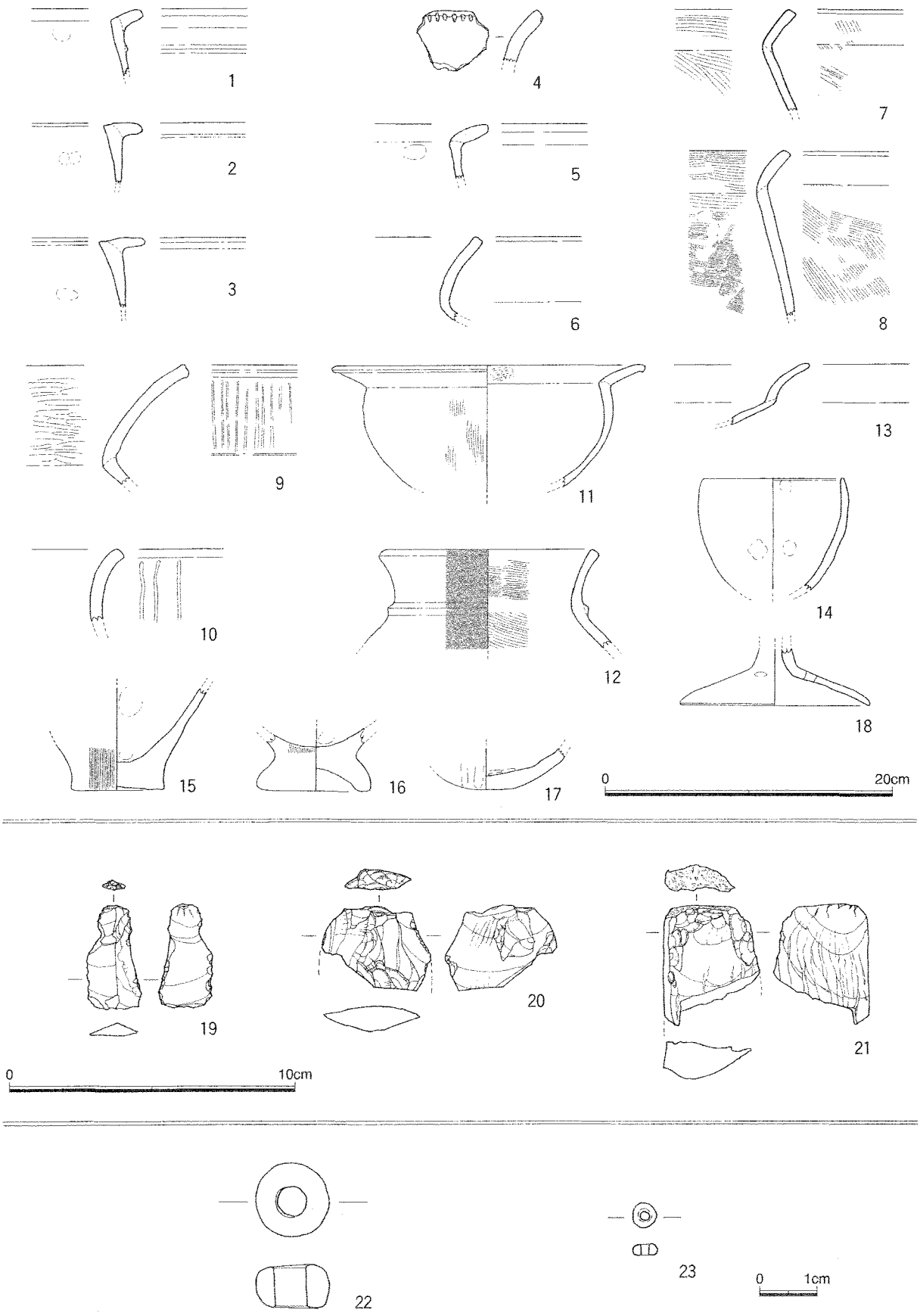
弥生時代前期後葉から弥生時代終末の土器が出土している（**第23図**）。**2**・**3**のように第2文化層に伴う遺物もあるが，大半は第1文化層に伴うものである。**4**は板付Ⅱb式の甕口縁部で，口縁端部に刻みがある。**16**は台付甕の底部付近で，肥後系の土器と考えられる。

A区では，第1文化層では弥生時代中期後葉の土器も若干含むものの，基本的に弥生時代後期後葉～終末の土器が主体となる。**8**・**12**・**13**・**18**は弥生時代終末の土器群であるが，調査区中央の第1文化層からカーボン集中層にともなって出土したことから，周辺にこの時期の住居跡が展開するものと考えられる。第2文化層は弥生時代中期中葉（須玖Ⅰ古段階）となる。

土器以外では，後期旧石器時代の縦長剥片（**19**・**20**），扁平片刃石斧の素材である頁岩製縦長剥片（**21**），ガラス小玉（**22**・**23**）が出土している。**21**は自然面を打面とし，節理と直交方向に剥出しているため，作業面および主要剥離面に節理が縞状に観察できる。側面に節理面を残す。



第22図　高元Ａ区平面図および土層図（Ｓ＝１/80）（第１文化層，第２文化層）



第23図　高元 A 区出土遺物

・B区

●基本土層

B区は，平成15年度調査区に隣接し，平成14年度調査区の一部と重なる。調査は調査区全面の耕作土を除去した後，西壁沿いを幅1mで岩盤まで掘り下げた。その際，第1文化層の遺構検出ラインを記録するとともに，これに伴う遺物もドットマップを作製して取り上げた（**第24図**）。

土層は最上層に客土が厚く堆積しており，地表面から遺構検出面までの深さは約60cmである（1層）（**第24図**）。客土中には弥生土器の小片が多数散在しており，饅頭畑を水田化する際に，西側の遺構を削平して盛り土した造成土と考えられる。

2層は黒褐色粘質土で第1文化層に相当する。大型の土器片を多く含む。弥生時代中期の遺物も含むものの，弥生時代終末～古墳時代前期を主体とする。調査区南半部および調査区中央部で下面ラインが標高11.20m付近まで落ち込んでいる。また，調査区中央部の第1文化層下面では，帯状に伸びる焼土を確認しており，複数の竪穴住居が切り合っているものと考えられる。

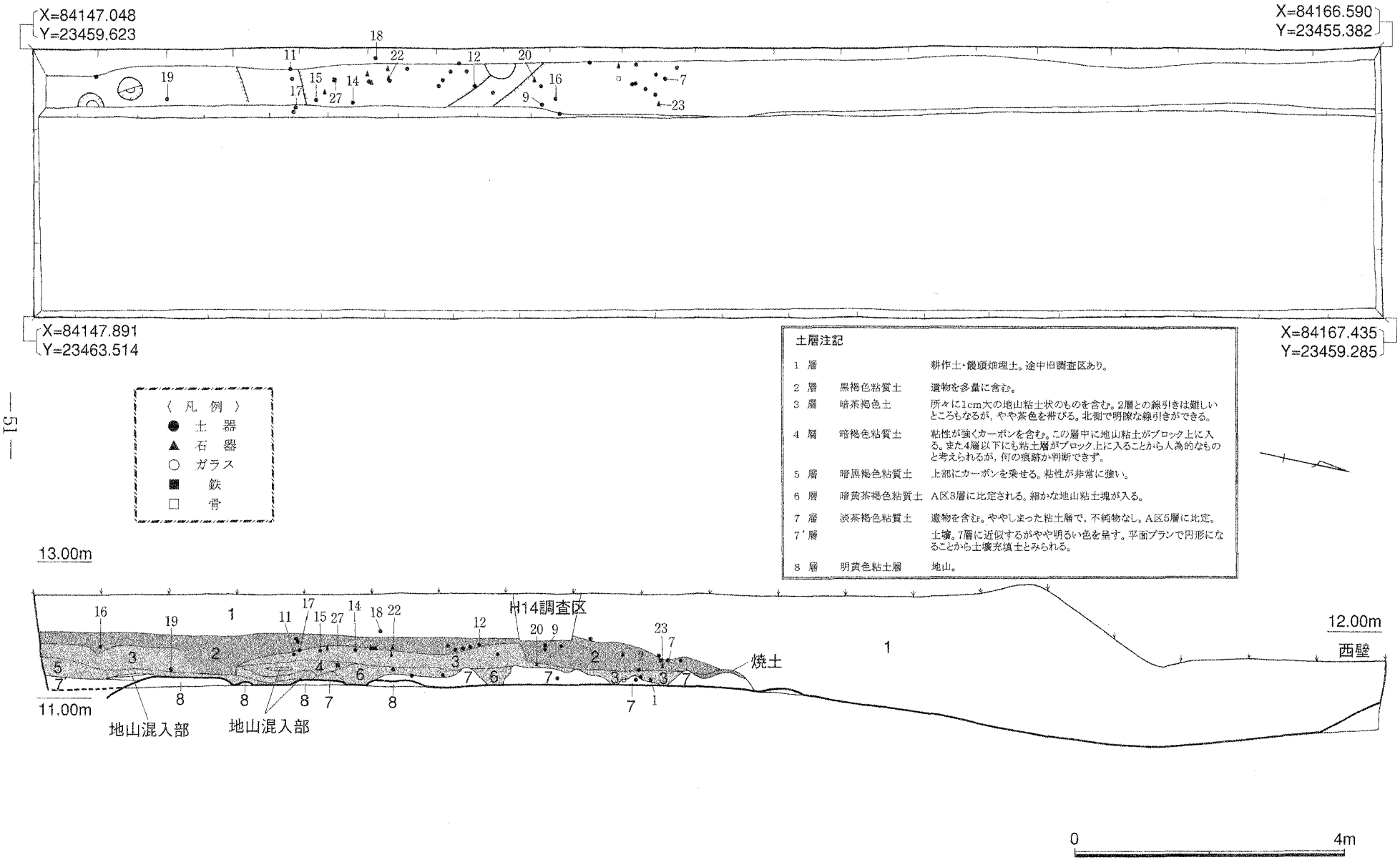
3層～6層は第2文化層である。地山に類似した黄褐色粒子が混じる点が特徴で，粒子の混入量やカーボンの混入量で細分している。4層下面や5層下面には地山に類似した粘質土が帯状に堆積しており，竪穴住居床面の張り床の可能性がある。弥生時代中期の土器を中心に，調査区中央部では弥生時代前期末～中期初頭の土器も出土している。

7層は淡茶褐色粘質土で遺物を若干含む。7'層は円形の平面プランが確認でき，土坑覆土であろう。8層は地山粘土である。

●出土遺物

第25図1・2・11・14・15・17は第2文化層から出土した土器である。弥生時代前期末～中期初頭および中期後葉の土器である。**1**は直立する口縁部に三角突帯を貼り付け，上面をやや平坦に面取りし，端部に刻みを付ける。口縁部下の胴部には無刻三角突帯を貼り付けている。**2・3・4**は板付Ⅱ式の土器胴部片である。**3**は斜め方向のハケメおよび横走する沈線が観察できる。**4**は横走する2条の沈線が確認できる。いずれも出土位置は明確でないが，**1・2**出土地点周辺の土器と思われる。**5**は板付Ⅱ式の壷頸部片である。横走する4条の沈線とヘラ描きの綾杉文の一部が認められる。**12・16**は第1文化層出土土器である（**第24図**）。**12**は弥生時代終末の甕，**16**は古墳時代前期の高坏である。

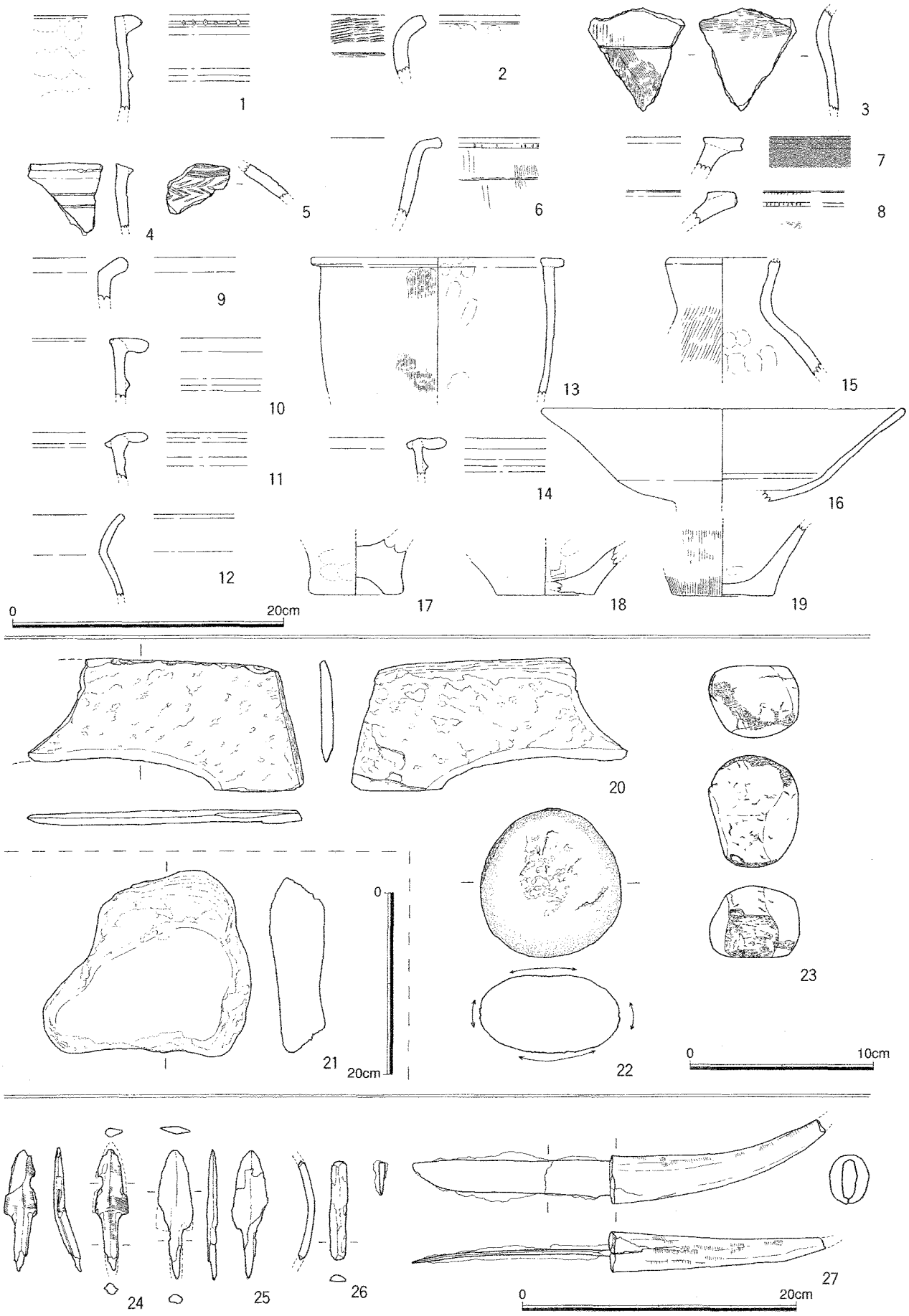
20～27には土器以外の遺物をまとめた。**20**は石鎌である。頁岩製で刃部は内湾刃である。背面と基部側面は鈍角をなし，基部の下面は面取りしている。第2文化層中から出土した。**23**は敲打具である。緻密な玄武岩製で，長軸両端部に細かい敲打痕が面的に広がる。特に下端部の敲打面は研磨を伴う運動の結果，面取りが複数確認できる。**24・25**は銅鏃である。**24**は身部と基部の境にタガネ状工具による刻みの跡が残り，側面観が屈曲している。**26**は銅釧の破片である。全体に湾曲し，内面は面取りしている。断面かまぼこ形である。**27**は鹿角柄付き刀子である。柄は鹿角先端部の髄孔をくりぬき，表面を丁寧に研磨している。刀子は刃部側に関を持ち，下面観がやや湾曲するものの，細身で比較的鋭利である。刀子柄下面に亀裂が認められる。



土層注記

1 層		耕作土・畝頭畑埋土。途中旧調査区あり。
2 層	黒褐色粘質土	遺物を多量に含む。
3 層	暗茶褐色土	所々に1cm大の地山粘土状のものを含む。2層との線引きは難しいところもなるが，やや茶色を帯びる。北側で明瞭な線引きができる。
4 層	暗褐色粘質土	粘性が強くカーボンを含む。この層中に地山粘土がブロック上に入る。また4層以下にも粘土層がブロック上に入ることから人為的なものと考えられるが，何の痕跡か判断できず。
5 層	暗黒褐色粘質土	上部にカーボンを乗せる。粘性が非常に強い。
6 層	暗黄茶褐色粘質土	A区3層に比定される。細かな地山粘土塊が入る。
7 層	淡茶褐色粘質土	遺物を含む。ややしまった粘土層で，不純物なし。A区5層に比定。
7' 層		土壙。7層に近似するがやや明るい色を呈す。平面プランで円形になることから土壙充填土とみられる。
8 層	明黄色粘土層	地山。

第24図　高元Ｂ区平面図および土層図（Ｓ＝１/80）（第１文化層，第２文化層）



第25図　高元 B 区出土遺物

・C区

●基本土層

C区は，平成6年度に芦辺町教育委員会（現壱岐市教育委員会）によって実施された調査区の一部である（**第21図**）。報告書によれば，複数の遺構を確認したものの，掘り下げずにそのまま埋め戻している。本年度は，調査区全面の耕作土を除去した後，西壁沿いに幅1mのトレンチを設置し，岩盤まで掘り下げた。その際，第1文化層および第2文化層の一部については，遺構検出ラインおよび出土遺物に関する記録を作製したものの，他の土層については層位毎に一括して遺物を取り上げた（**第26図**）。

第1文化層は2層黒褐色粘質土である。調査区北端部で古墳時代前期の土器が焼土面とともにまとまって出土し，竪穴住居が存在するものと考えられる（SC1）。2層は，調査区中央より南側では確認できない。3層～4層は第2文化層である。黄褐色粒子が多く混じる点で共通するものの，混入量やカーボンの有無で細分される。調査区北部で土坑状の落ち込み（SK1・SK2），調査区中央で竪穴住居と見られる落ち込み（SC2・SC3）が確認でき，弥生時代中期中葉～後葉の土器が出土している。5層は淡茶褐色粘質土である。地山直上に乗る堆積土で遺物は出土していない。

なお，調査区南半部では地山がせり上がり，これより以南では文化層を確認することができなかった。おそらく，旧地形の標高が部分的に高かったため，第1文化層・第2文化層ともに削平されて確認できなかったものと考えられる。

●出土遺物

1・2は第1文化層SC1出土土器である（第27図）。北端部で焼土などとともに出土しており，竪穴住居出土と考えられる。**1**は丸底の壷で非常に丁寧な作りである。胎土に金雲母を多く含み，胴部に横方向のヘラミガキが残る。**2**は完形の高坏で，脚部外面および坏部内面に暗文状のヘラミガキが残る。**1**と同様非常に丁寧な作りである。

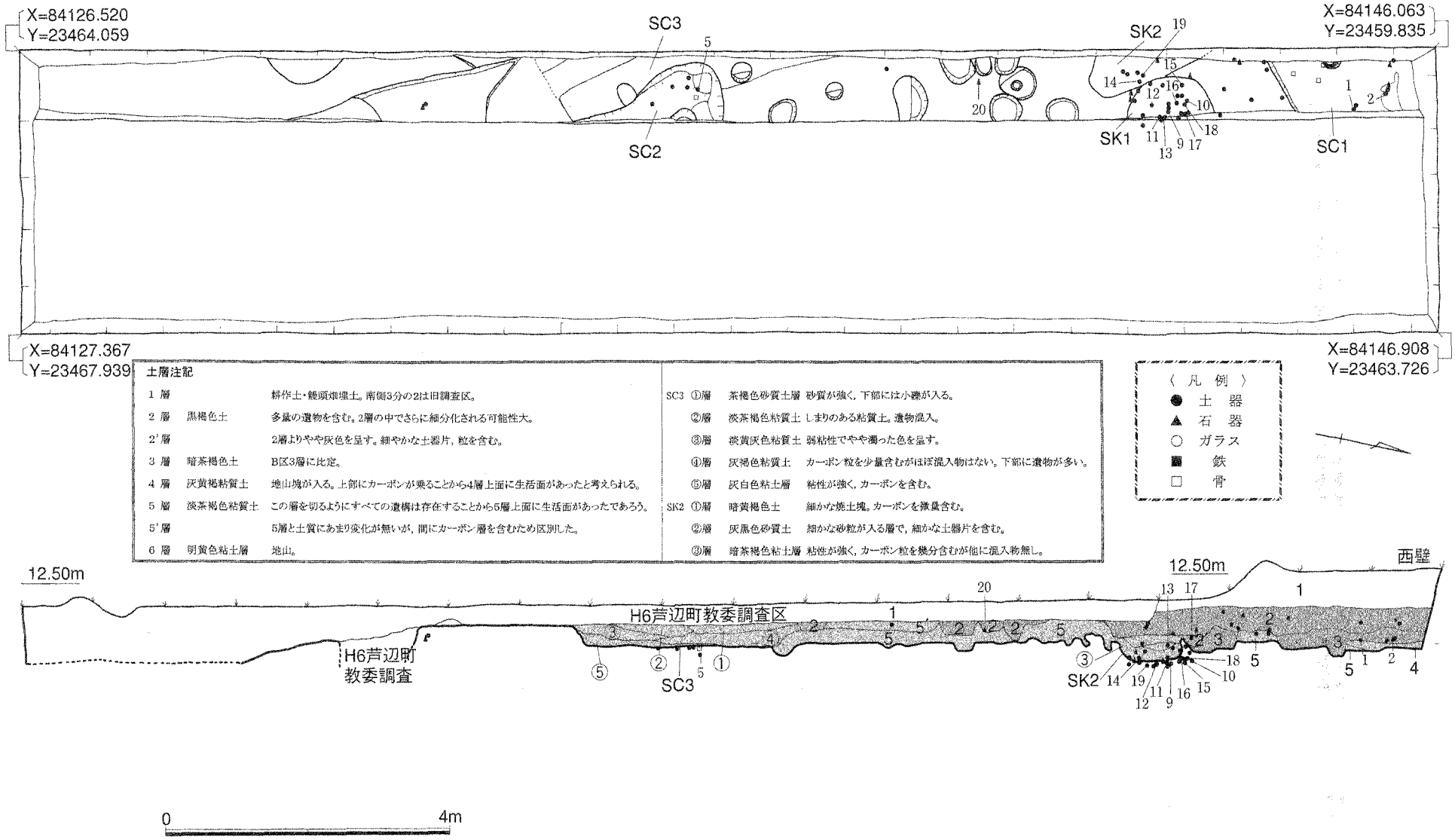
3～8は第2文化層SC2出土土器である。須玖Ⅱ式古段階の土器群で，甕を主体に丹塗りの広口壷（**6**）も出土している。**9～18**は第2文化層SK1出土土器である。須玖Ⅱ式新段階の土器群で，甕を中心とした構成である。**19**の甕底部は，第2文化層SK2からの出土である。

土器以外の遺物は多くないが2点を図化した。**20**は頁岩製の扁平片刃石斧であるが，幅狭で厚みがある。a面では基部寄りに浅い抉りがあり，扁平片刃石斧では珍しい加工である。**21**は磨製石剣の切先片である。頁岩製で鎬を中心に左右に節理の縞模様が見える。いずれも第2遺構面検出面からの出土で，弥生時代中期の遺物である。

・D区

●基本土層

D区は今回初めて調査した地点である（**第21図**）。A～C区と同様，全面耕作土を除去した後，西壁沿いを幅1mで岩盤まで掘り下げた。その際，第1文化層では遺構平面図を作製するとともに，ドッ

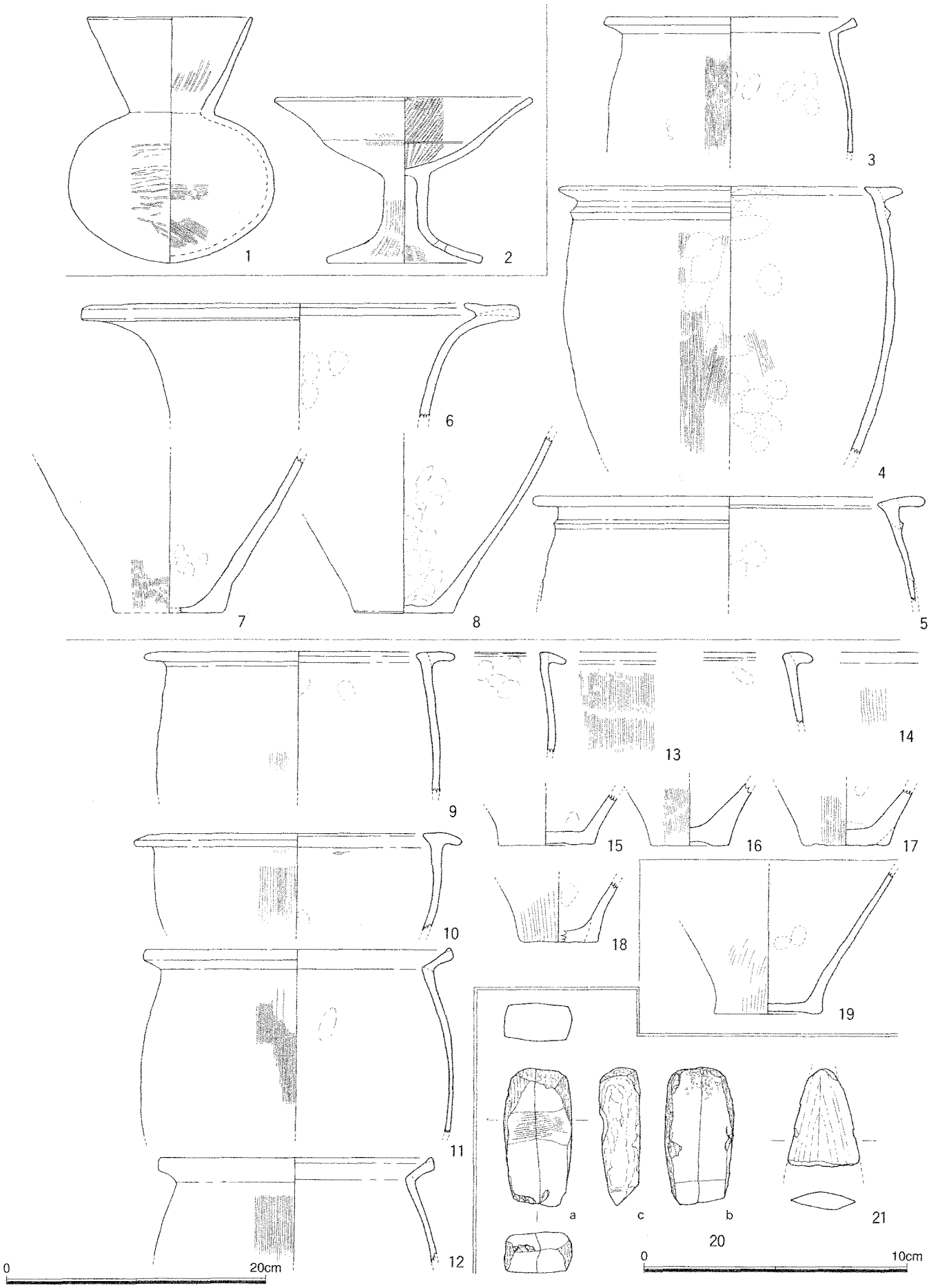


土層注記

1 層		耕作土・饅頭畑堀土。南側3分の2は旧調査区。
2 層	黒褐色土	多量の遺物を含む。2層の中でさらに細分化される可能性大。
2' 層		2層よりやや灰色を呈す。細やかな土器片，粒を含む。
3 層	暗茶褐色土	B区3層に比定。
4 層	灰黄褐粘質土	地山塊が入る。上部にカーボンが乗ることから4層上面に生活面があったと考えられる。
5 層	淡茶褐色粘質土	この層を切るようにすべての遺構は存在することから5層上面に生活面があったであろう。
5' 層		5層と土質にあまり変化が無いが，間にカーボン層を含むため区別した。
6 層	明黄色粘土層	地山。
SC3 ①層	茶褐色砂質土層	砂質が強く，下部には小礫が入る。
②層	淡茶褐色粘質土	しまりのある粘質土。遺物混入。
③層	淡黄灰色粘質土	弱粘性でやや濁った色を呈す。
④層	灰褐色粘質土	カーボン粒を少量含むがほぼ混入物はない。下部に遺物が多い。
⑤層	灰白色粘土層	粘性が強く，カーボンを含む。
SK2 ①層	暗黄褐色土	細かな焼土塊。カーボンを微量含む。
②層	灰黒色砂質土	細かな砂粒が入る層で，細かな土器片を含む。
③層	暗茶褐色粘土層	粘性が強く，カーボン粒を幾分含むが他に混入物無し。

〈凡例〉
- ● 土器
- ▲ 石器
- ○ ガラス
- ■ 鉄
- □ 骨

第26図　高元C区平面図および土層図（S＝1/80）（第1文化層，第2文化層）



第27図　高元C区出土遺物

トマップを作製して遺物を取り上げた。第２文化層以下は，層位毎に一括して遺物を取り上げ，土層の観察で遺構の有無を確認した。

第１文化層は２層黒褐色粘質土である（**第28図**）。微妙な色調の違いから細分できる。南端部で焼土が伴う浅い落ち込みを検出しており，竪穴住居と考えられる。出土遺物は明確でないが，隣接するＥ区の状況から弥生時代終末～古墳時代前期の文化層と考えられる。調査区南半部で厚く堆積するものの北側に向かうにつれて徐々に薄くなり，北半部ではピットがわずかに確認できるにすぎない。第２文化層は３層である。竪穴住居と考えられる方形の落ち込み（**SC１・SC２**）や土坑群（**SK１～SK３**）が認められる。出土遺物から弥生時代中期初頭～中期末の文化層と考えられる。４層は淡茶褐色粘質土，５層は淡黒褐色粘質土である。いずれも遺物は出土していない。

●出土遺物

第29図１・２は調査区北端部のSC１出土土器である。小片であるがいずれも弥生時代中期後葉（須玖Ⅱ式古段階）の甕である。**３～８**は調査区南端部のSC３出土土器である。弥生時代中期中葉～後葉の土器（**３・７**）と，弥生時代終末～古墳時代前期の土器（**４～６・８**）が出土しており，複数の時期の遺構が切り合っているものと考えられる。**９～11**はSC２出土土器である。弥生時代中期末（須玖Ⅱ式新段階）の土器である。**12～19**はSK１出土土器。弥生時代中期中葉～中期末にかけての土器が出土しており，複数の遺構に絡んでいる可能性がある。**19**は，口縁端部が内面に短く突出して，上面を平坦に仕上げており，須玖Ⅰ古段階まで遡る可能性がある。**12～14**は口縁部が「く」の字形に折れるが，内面・外面ともに稜線は不明瞭で後期までは下らないであろう。**第30図22～27**はSK２出土土器である。いずれも弥生時代中期末（須玖Ⅱ式新段階）の土器である。

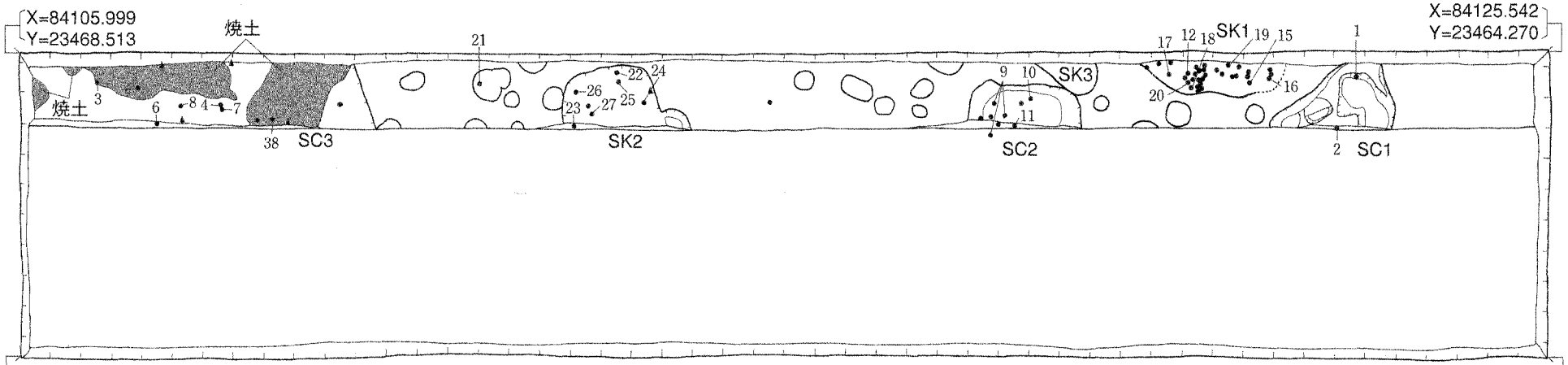
32は後期旧石器時代の黒曜石製剥片である。厚みのある寸詰まりの剥片で，台形石器の素材と考えられる。**33**は小型のナイフ形石器である。**34**は局部磨製石鏃である。調整剥離で形態を整えた後，体部を平坦に研磨している。特にａ面の研磨は入念に行っている。**35**は石戈の基部破片である。刃部および関を研磨し大きめの穿孔を施す。**36**は厚みのある頁岩製縦長剥片で石鑿の素材であろう。ａ面は主要剥離面で，部分的に研磨がみられる。ｃ面は節理面でこの面を打面としてａ面とｂ面に調整剥離を加える。ｂ面は自然面で縦方向に節理の縞模様が観察できる。**39**は鉄鑿である。身部には厚みがあり上端に袋部の一部が確認できる。

・Ｅ区

●基本土層

本年度はじめて調査した箇所である（**第21図**）。調査は調査区全面にわたって耕作土を掘り下げた後，西壁沿いを幅１ｍにわたって岩盤まで掘り下げた。その際，第１文化層については遺構検出ラインを記録するとともに，ドットマップを作製して遺物を取り上げた。第２文化層以下については，土層毎に一括して遺物を取り上げた。

第１文化層は２層黒褐色粘質土である（**第31図**）。色調の微妙な違いで細分できる。耕作土直下か

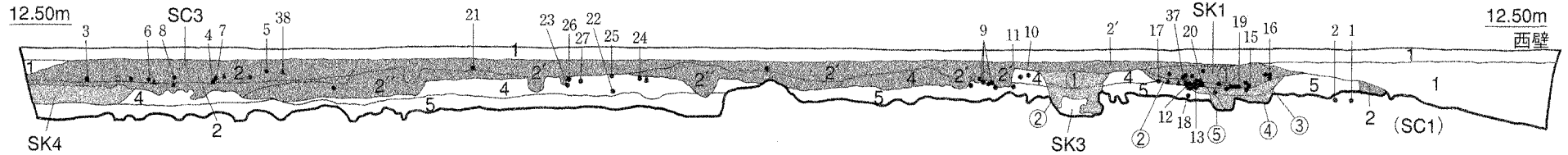


〈 凡 例 〉

- ● 土 器
- ▲ 石 器
- ○ ガラス
- ■ 鉄
- □ 骨

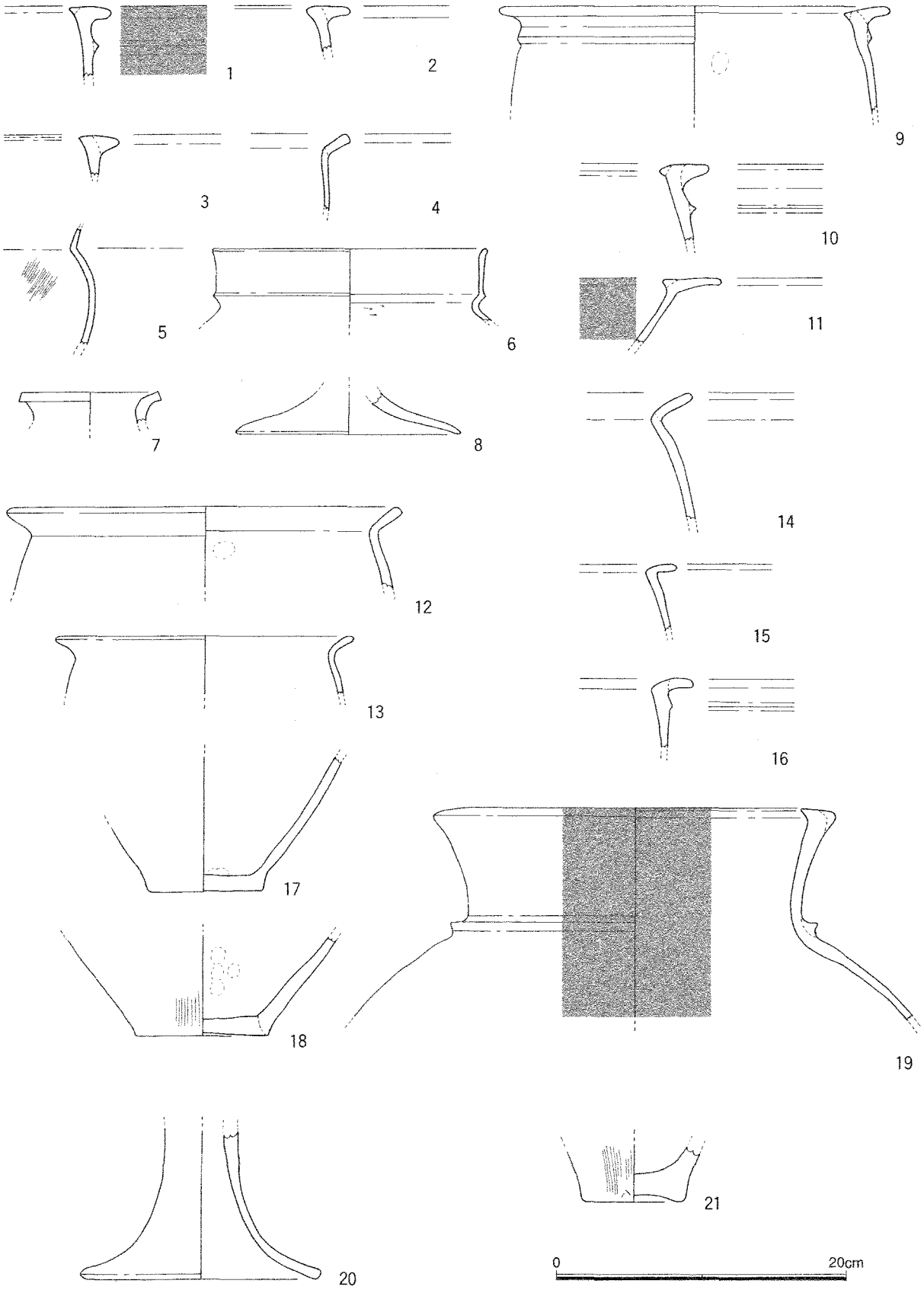
土層注記

1 層		耕作土・鍍頭畑埋土。	
2 層	黒褐色粘質土	下部に焼土が張り付く。この調査区では他の調査区の2層と明確に比定できる黒褐色土は見当たらない。	
2' 層		他の調査区で見られる2層よりやや灰色が強い。	
2" 層		2' 層よりやや暗く，しまりがある。	
4 層	淡茶褐色粘土層	地山黄色粘土層が上にのる。弥生時代の生活面。これ以下に遺構無し。A区に一部確認される。	
5 層	淡黒褐色粘土層	かなり古い堆積層と考えられ，遺物は含まない。南側にのびるが，A区では検出されていない。	
6 層	明黄色粘土層	地山。	
SK1 ①層	暗茶褐色土	やや硬質で土器を多量に含む。下部にカーボンが層をなす。他の調査区の2層に相当すると思われる。	
②層	黒褐色粘質土	①層より黒味が強い層で，カーボンを多く含む。	
③層	暗オリーブ色土	カーボン・土器片を幾分含む。①②層がある時期の土壙の埋土で③層はそれ以前の土壙か？	
④層	淡灰黄褐色土	Pit内充填土。少なくとも，①②層で形成される土壙の段階，③層を充填土とする土壙段階，Pit掘削段階の3段階がある？	
⑤層	灰褐色粘土		
SK3 ①層	淡黄灰色粘質土	焼土塊を含むしまった層	
②層	淡茶褐色粘質土	やや粘性をもつもので，ピット内に複雑に入り込む。内部の地山とした部分も②層の可能性がある。	
SK4 ①層	黄灰褐色粘土層	土壙内堆積物で2"層に近似。この付近に10cm程の焼土層が検出されており，今後の調査で遺構を検出する必要あり。	

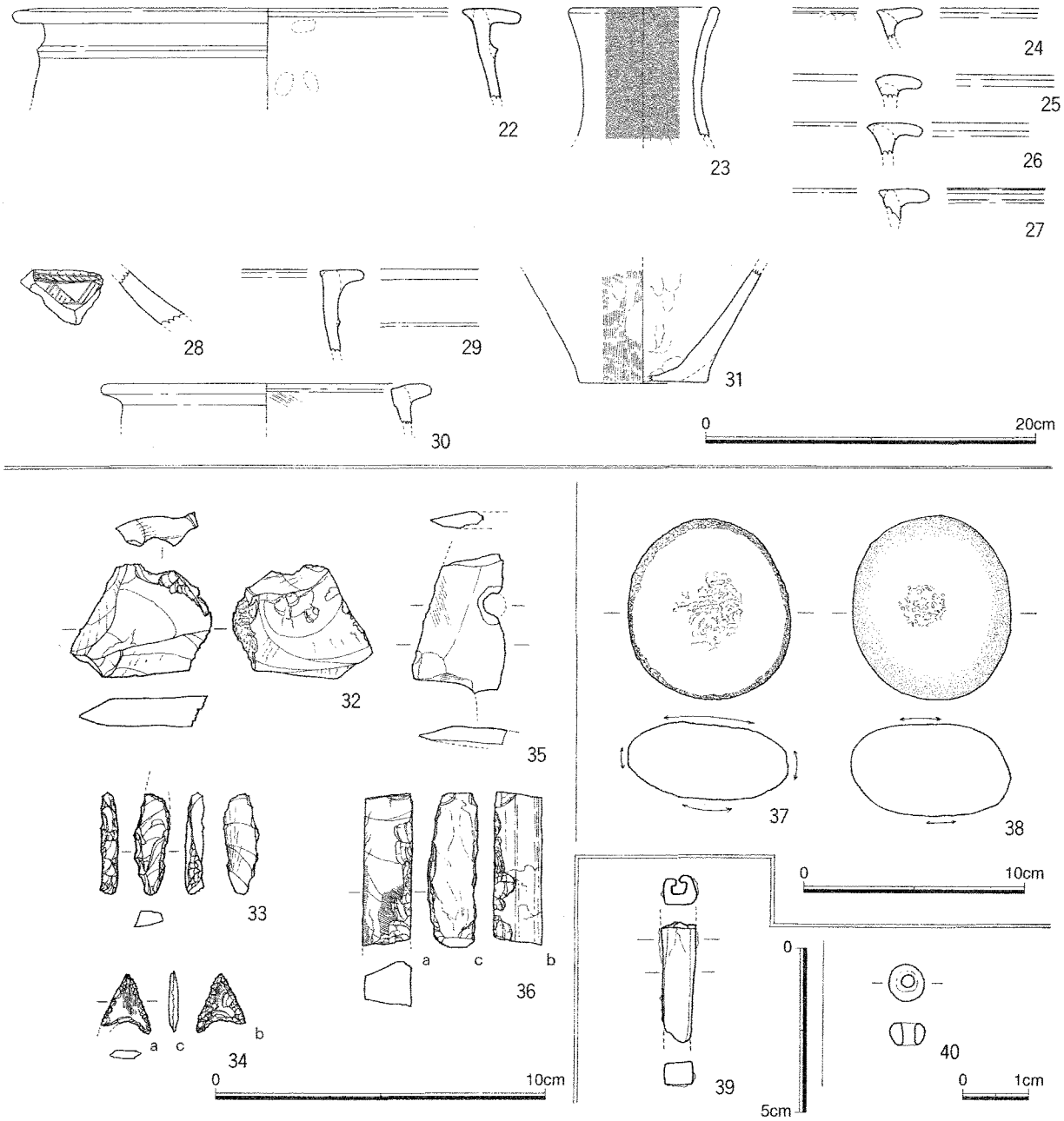


0 4m

第28図　高元D区平面図および土層図（S＝1/80）（▒第1文化層，▒第2文化層）



第29図　高元Ｄ区出土遺物①



第30図　高元Ｄ区出土遺物②

ら厚さ約40cm程度で調査区全体に展開する。弥生時代中期と古墳時代前期の土器が混在するが，古墳時代前期の土器が比較的残りがよく，この時期の文化層と考えてよいであろう。調査区南端部でSC１，調査区中央部でSC２を確認した。第２文化層は３層である。暗茶褐色粘質土で黄褐色粒子が散在する。弥生時代前期後葉～中期末にかけての土器が出土している。３層は，他の調査区と異なり比較的フラットな堆積で，複数の竪穴住居が切り合っている可能性がある。４層は淡茶褐色粘質土，５層は淡黒褐色粘質土で無遺物層である。

●遺物

第１文化層下面から第２文化層上面にかけて，おびただしい数の遺物が出土した(**第32図～第34図**)。

1～14は弥生時代前期後葉～中期初頭の土器である。外反口縁の土器で，端部に刻みを持つものには，深く密に刻むもの（1）と浅くまばらに刻みもの（2・3）の2者が存在する。6は胴部片で2条の刻目突帯を貼り付ける。10は壷頸部で，上下2条の沈線で区画された範囲に，貝殻施文の羽状文がめぐる。17も古手の壷口縁部である。15・18・19・24・25なども弥生時代中期初頭～前葉にかけての土器で，口縁部に厚みがあり上面が内傾している。21・26は須玖Ⅰ式新段階，22・23は須玖Ⅱ式新段階の土器であろう。いずれも第2文化層からの出土である。

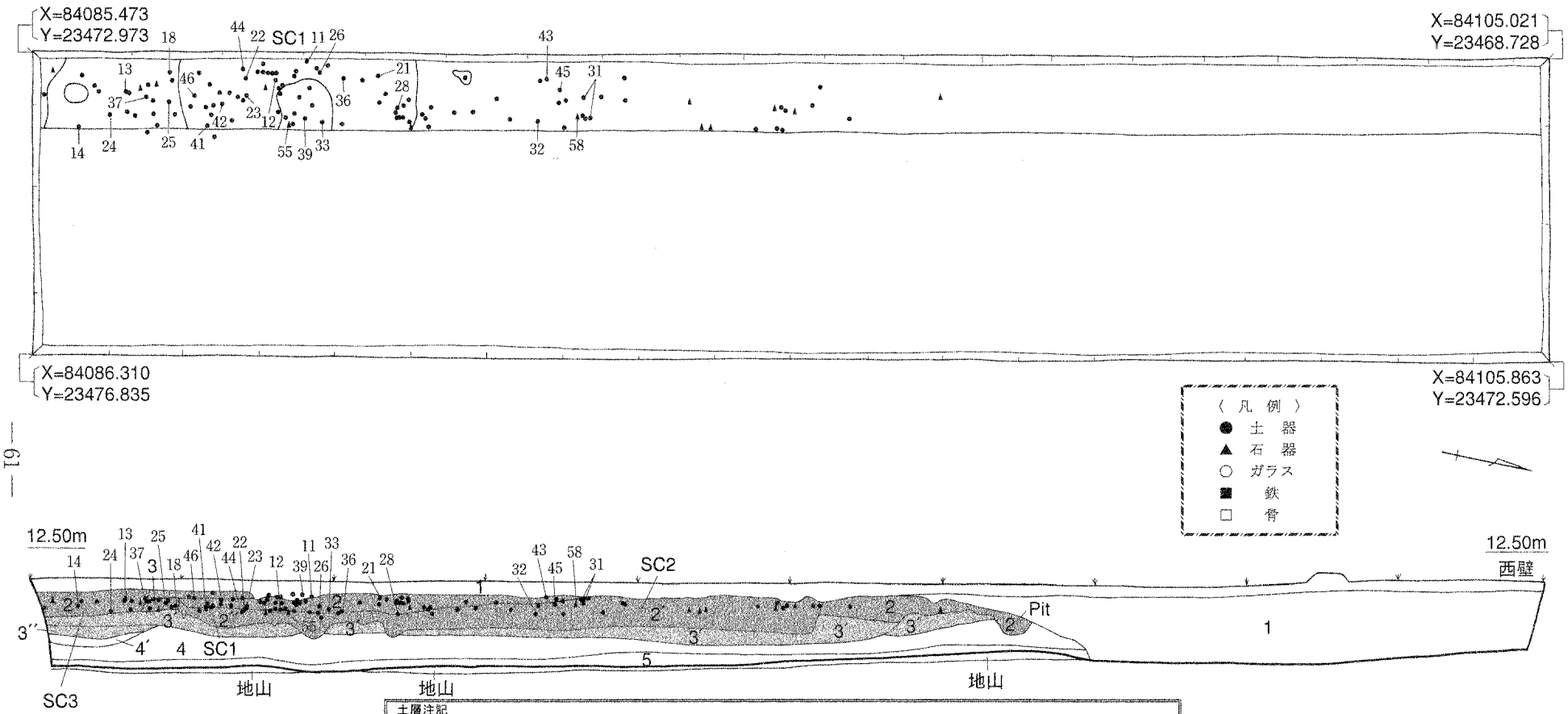
第33図27～34・36は古墳時代前期の土器である。布留系の甕を主体に，壷（34）・小型丸底壷（36）で構成される。いずれもSC2からの出土である。38はミニチュアの小壷で，第2文化層から出土した。小さな凹底で胴部上位に最大径を持ち，太めの頸部が直立気味に立ち上がる。須玖Ⅱ式古段階の広口壷をモデルにしたものと考えられ，中期後葉に位置付けられよう。第34図48は瓦質土器である。縄席文と横走する沈線が3条確認できる。49は楽浪系土器で，壷の口縁部であろうか。ラッパ形に大きく開き，端部をなでてやや拡張している。表裏とも回転ナデ調整である。いずれも第1文化層中から出土したものである。

50～59はその他の遺物をまとめた。50・51は後期旧石器時代の黒曜石製縦長剥片の一部である。50のような寸詰まりの剥片は，台形石器の素材と考えられる。52は頁岩製縦長剥片で，表裏に作業面および主要剥離面を残すが，側面からの調整剥離が加わるとともに部分的に研磨している。側面は節理面である。石鑿の素材であろう。53は石斧未成品か。頁岩製でa面・b面を中心に側面から調整剥離を加え，a面は研磨，b面は敲打で稜線をつぶしている。a面下端部は片刃状に研磨している。c面には節理面を残していることから，52のような頁岩製縦長剥片から製作されたものと考えられる。52は第1文化層，53は第2文化層からの出土であるが，52については第2文化層からの混入の可能性もある。54は敲打具で緻密な玄武岩製である。自然礫の稜線上を中心に，敲打痕が帯状に広がる。56・57は鉄片である。56は扁平で端部を鈍角に折り曲げている。57は断面楔形の棒状鉄製品で，刀子の可能性もある。56は第2文化層，57は第1文化層からの出土である。58は石製支脚である。SC2から出土した。硬質の凝灰岩製で体部中央から背面にかけて煤が付着する。59は厚みのある石皿である。機能部はフラットで摩滅痕が面的に広がる。第2文化層からの出土である。

・F区

●基本土層

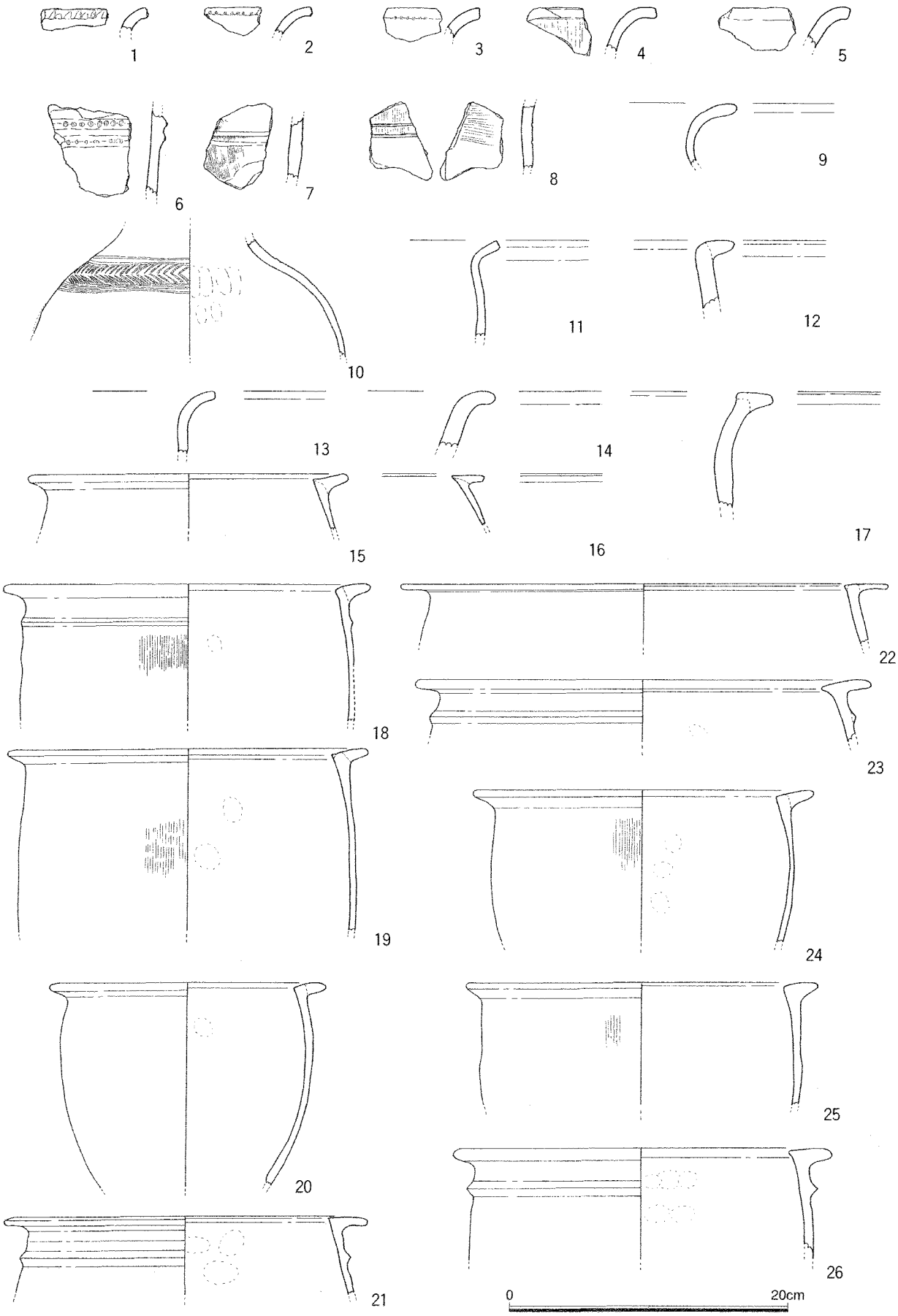
本年度はじめて調査する箇所である（第21図）。調査は調査区全面を遺構検出面まで掘り下げた。この際，弥生時代中期を中心とする，おびただしい数の遺物が出土し，当初攪乱層として捉えたため，調査区中央部以南については5mグリット毎に一括して取り上げた。その後，西壁沿いに幅1mでトレンチ調査を実施したところ，遺物出土レベルで複数のピットを確認するとともに，土器取り上げ後に行った床面の精査により，同様のピット群を確認したことから，一括して取り上げた土器群が第1文化層の遺物であることが判明した（第35図）。そこで，土器群が残る北端部について，南北方向と



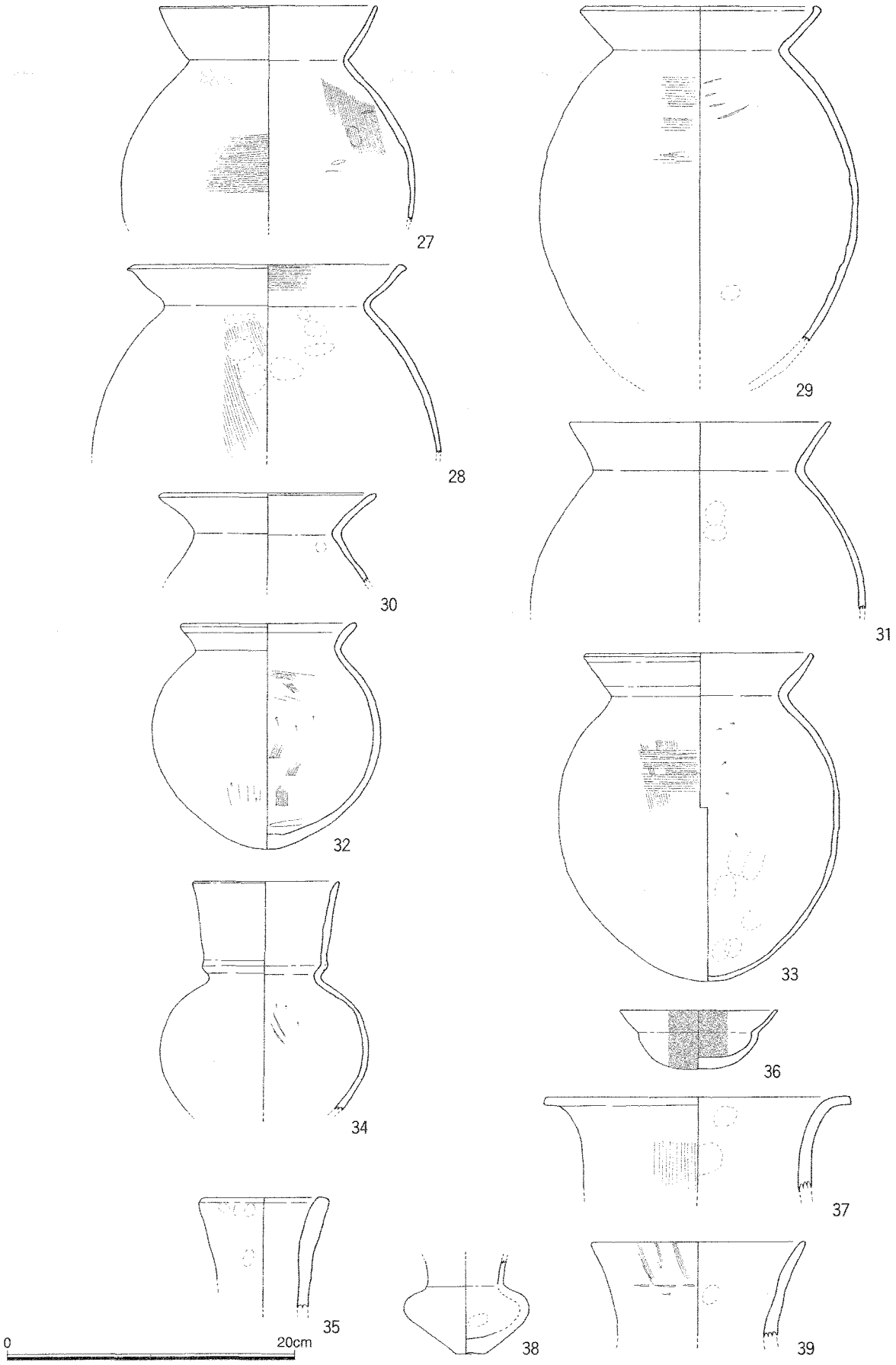
土層注記

1 層		耕作土・饅頭畑埋土。
2 層	黒褐色粘質土	遺物を多量に含む。
2' 層		SC2内の覆土で2"層よりやや明るい暗茶褐色粘質土。かなり大きく見えるが住居址を斜めに切っていると思われる。
2" 層		SC1内の覆土で暗茶褐色を呈する。カーボン・土器片などを含む。
3 層	暗茶褐色粘質土	
3' 層	暗灰白色粘土	3"層に似るがやや白っぽい層で，この層はこの地区で部分的に見られる。
3" 層	暗オリーブ色粘土	2～3cm大の玄武岩風化礫が密度は少ないが混入する。この層内よりほぼ完形の小型つぼが出土。後期か？
4 層	淡茶褐色粘土層	
4' 層		4層に近いがやや暗い層。4層と3"層との漸位層か？
5 層	淡黒褐色粘土層	
6 層	明黄色粘土層	地山。

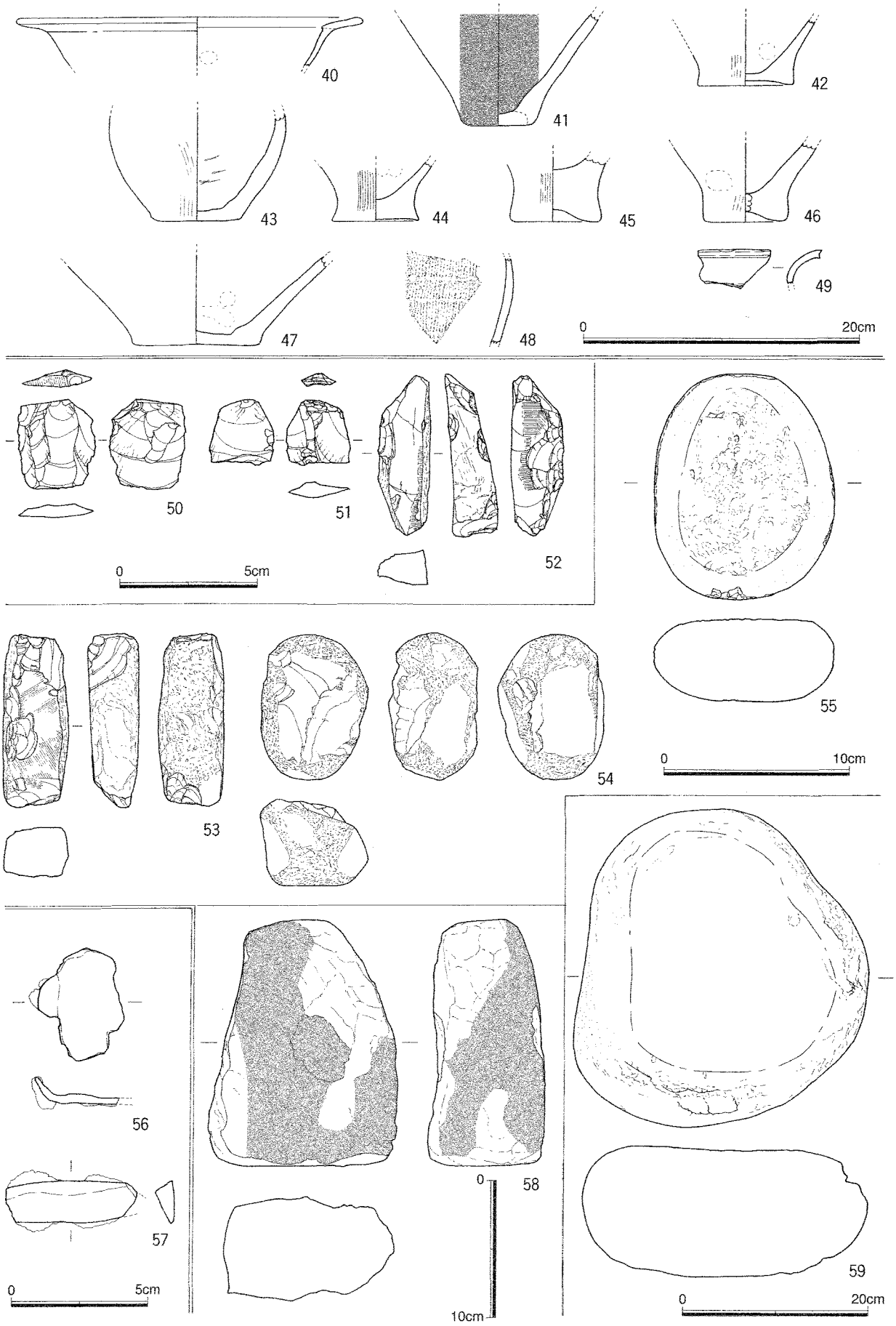
第31図　高元Ｅ区平面図および土層図（Ｓ＝１/80）（第１文化層，第２文化層）



第32図　高元Ｅ区出土遺物①



第33図　高元E区出土遺物②



第34図　高元Ｅ区出土遺物③

東西方向に幅１ｍのトレンチを設定し，ドットマップを作製して遺物を取り上げるとともに，土層の観察から遺構の確認を行った（**第36図**）。

第１文化層は２層・３層で，いずれも黒褐色粘質土である。厚さ10cm～20cmと薄いものの，調査区全面に広がり，南端部ではかなり深いレベルでも文化層の堆積が認められる。第１文化層の時期は，北端部では弥生時代終末を主体とするが，一括取り上げ分を加えると，特に調査区中央部では弥生時代中期後葉～末の遺構が展開している可能性が高い。第２文化層は４層である。カーボンおよび焼土粒と考えられる赤褐色粒子が混じる点が特徴である。他の調査区と比較すると，黄褐色粒子が混入する特徴的な堆積物は認められないものの，カーボン以外の混入物を含む点から第２文化層に対応できるものと考えた。北端部および南端部の一部で堆積を確認するにとどまる。時期は，北端部での出土状況から，弥生時代中期後葉～末と考えられる。北端部・南端部ともに基本的にフラットな堆積で部分的にピット状の落ち込みが確認できることから，複数の竪穴住居の存在が示唆される。

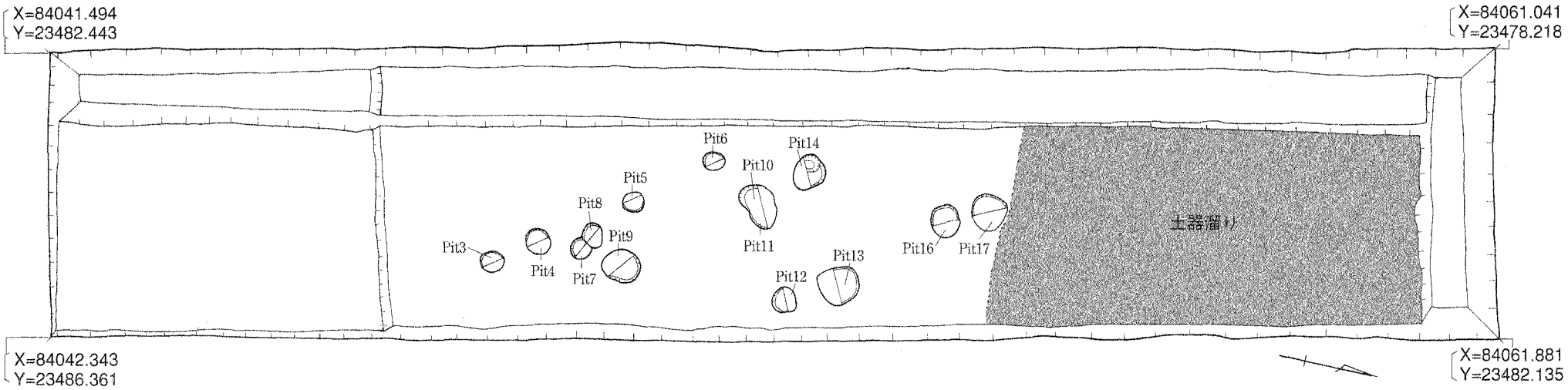
●遺物

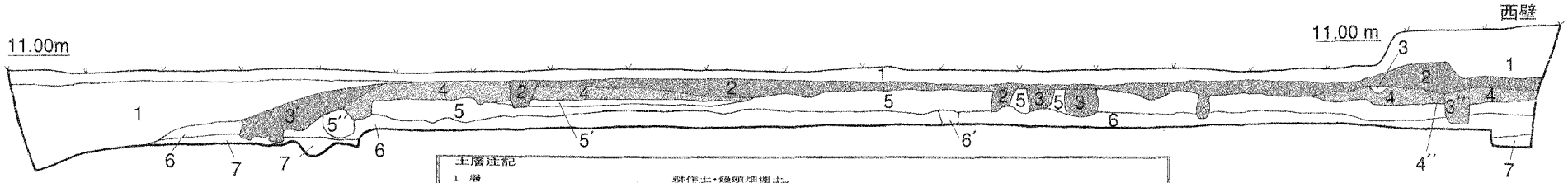
北端部を中心におびただしい数の遺物が集中しており，ドットマップを作製して取り上げただけでも，土器265点，石器38点，獣骨を中心とする自然遺物23点が出土している（**第36図**）。

第37図は，弥生時代前期後葉～中期末の土器をまとめた。**1～7**は弥生時代前期後葉～中期初頭の土器群で，いずれも小片である。外反口縁を特徴とする甕（**1～5**）や，頸部にヘラ描き沈線で羽状文や縦方向の充填沈線を施す壷（**6・7**）など，いずれも板付Ⅱb式の特徴を持つものである。**8～31**は，弥生時代中期の土器である。やや古手の土器もあるものの，ほとんどが弥生時代中期末の須玖Ⅱ式新段階のものである。甕を主体とするものの，**20～21**のような丹塗りの鋤先口縁壷や高坏（**23**），器台（**24～26**）で構成される。**27**は甕棺の口縁部片で，内面に大きく張り出すものの，外面への突出がわずかであることから，橋口編年のＫⅡc式に対比できよう。**28**は凹線文系の壷口縁部である。やや内傾する口縁部上面に２条の沈線が巡り，口縁端部にシャープな刻みを密に施す。胎土が精良で色調も須玖式系の土器と異なることから，搬入品と考えられる。これらの土器は第１文化層から第２文化層にまたがって出土している。

第39図～第40図は，弥生時代終末の土器群である。甕は「く」の字口縁で胴がやや張り，底部は凸レンズ状となる。**35**のように底部外面付近をけずるものもある。壷は，口縁部が内側に屈曲する袋状口縁壷の系譜を引くもの（**53・54・59**）や，鋤先状口縁壷の系譜を引き，口縁端部に刻みを持つ大型の壷（**55・56**）などがある。54は胴部に焼成後の穿孔がある。**57**はラッパ状に開く素口縁の壷であるが，口縁部外面から頸部にかけて丹塗りの痕跡が残る。**58**は胴部に幅広の突帯を貼り付け，大きめの粗い刻みを施す。**62・63**は高坏である。いずれも坏部中位から口縁部にかけて直立気味に立ち上がりゆるやかに外反するものである。**62**は口縁部上面を水平に面取りし，**63**は外面に丹塗りの痕跡を残す。

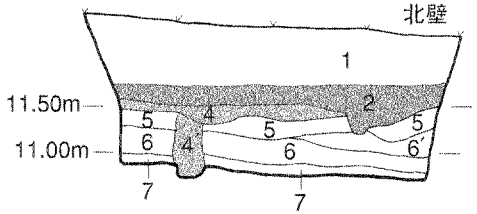
第40図66～72は，第１文化層に伴うピット出土土器である。弥生時代中期後葉～後期にかけての土器が出土している。**73～75**は楽浪系土器である。**73**は鉢口縁部片であろうか。口縁端部を面取りし，口縁直下に突帯が巡る。**74**は口縁部片であるが，傾きから壷と見られる。口縁部上半が屈曲気味に外





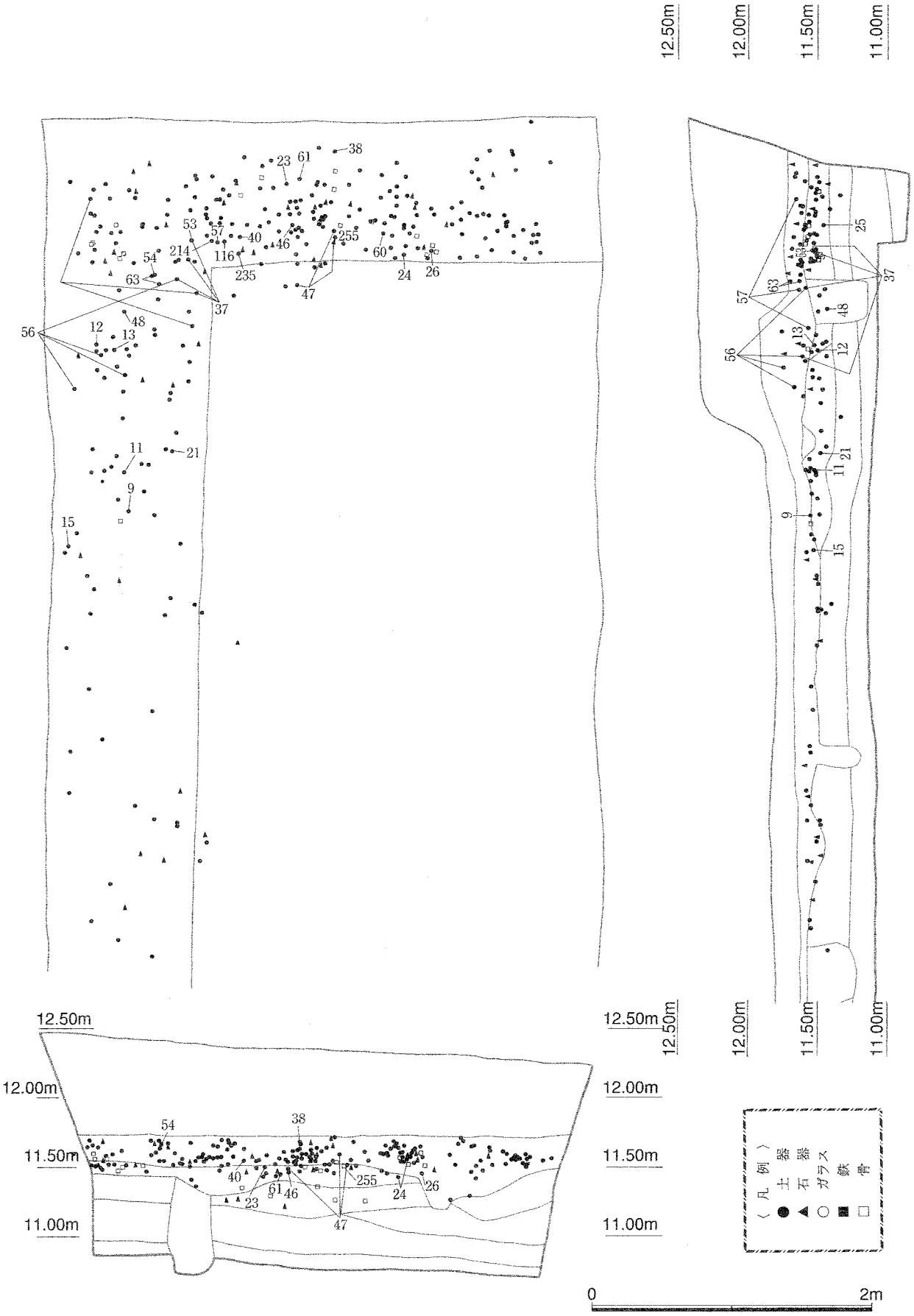
土層注記

1 層		耕作土・幾頭畑堆土。
2 層	黒褐色粘質土(7.5YR3/2)	耕作土がまだらに混じる包含層。一部以降の堆土が残る(特に北側)。2～5層にかけて弥生中～終末期の土器が大量に出土。
3 層	黒褐色粘質土(10YR2/2)	カーボン混じり。
3'層	黒褐色土(10YR3/2)	褐色，灰白色粒子(φ5mm未満)散在。カーボン含む。土坑か？
3"層	黒褐色土(10YR3/2)	カーボン多く含む粘質土。黄褐色粘土まだらにまじる。
4 層	暗褐色土(10YR3/1)	カーボン，赤褐色粒子(φ2mm)散在。
4'層	黒褐色土(10YR3/2)	黄褐色粘土がまだらに混じる粘質土。カーボン散在。丹塗り土器片があり，中期後葉か？
4"層	黒褐色土(10YR2/2)	周囲の4層と比べてやや暗めの色調。ピットか？
5 層	暗黒褐色粘質土(10YR3/3)	カーボンが散在。
5'層	暗褐色土(10YR3/4)	焼土粒が帯状に広がる。住居址の床面堆積物か？
5"層	暗褐色土(10YR3/3)	カーボン・赤褐色粒子(小粒)散在。
6 層	褐色粘質土(10YR4/6)	黒褐色土がまだらに混じる。
6'層	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	黄褐色粒子(φ2mm)散在。カーボン混じる。住居址埋土か？
7 層	褐色粘質土(10YR4/4)	6層に比べてやや暗め。混入物なし。

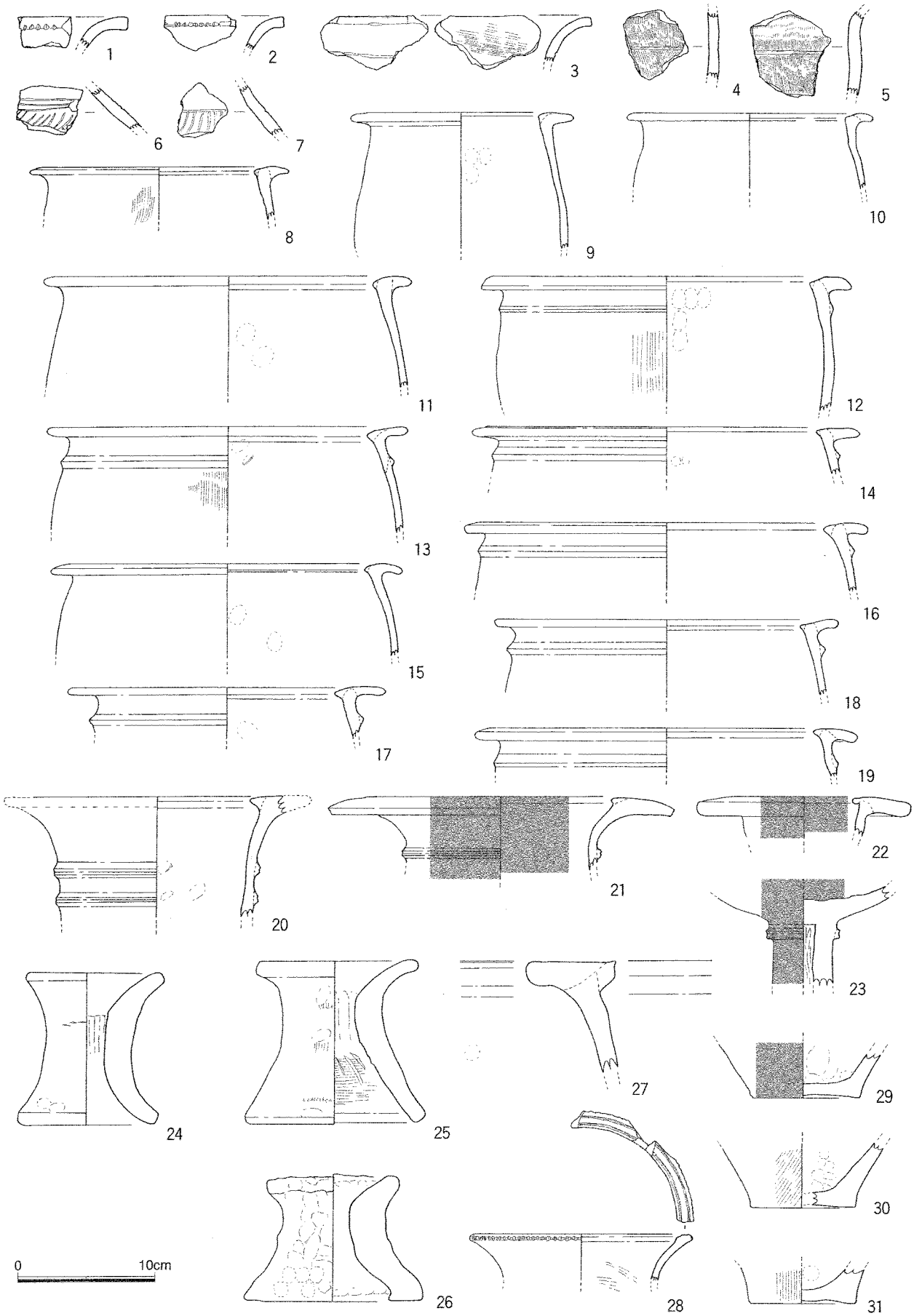


0 4m

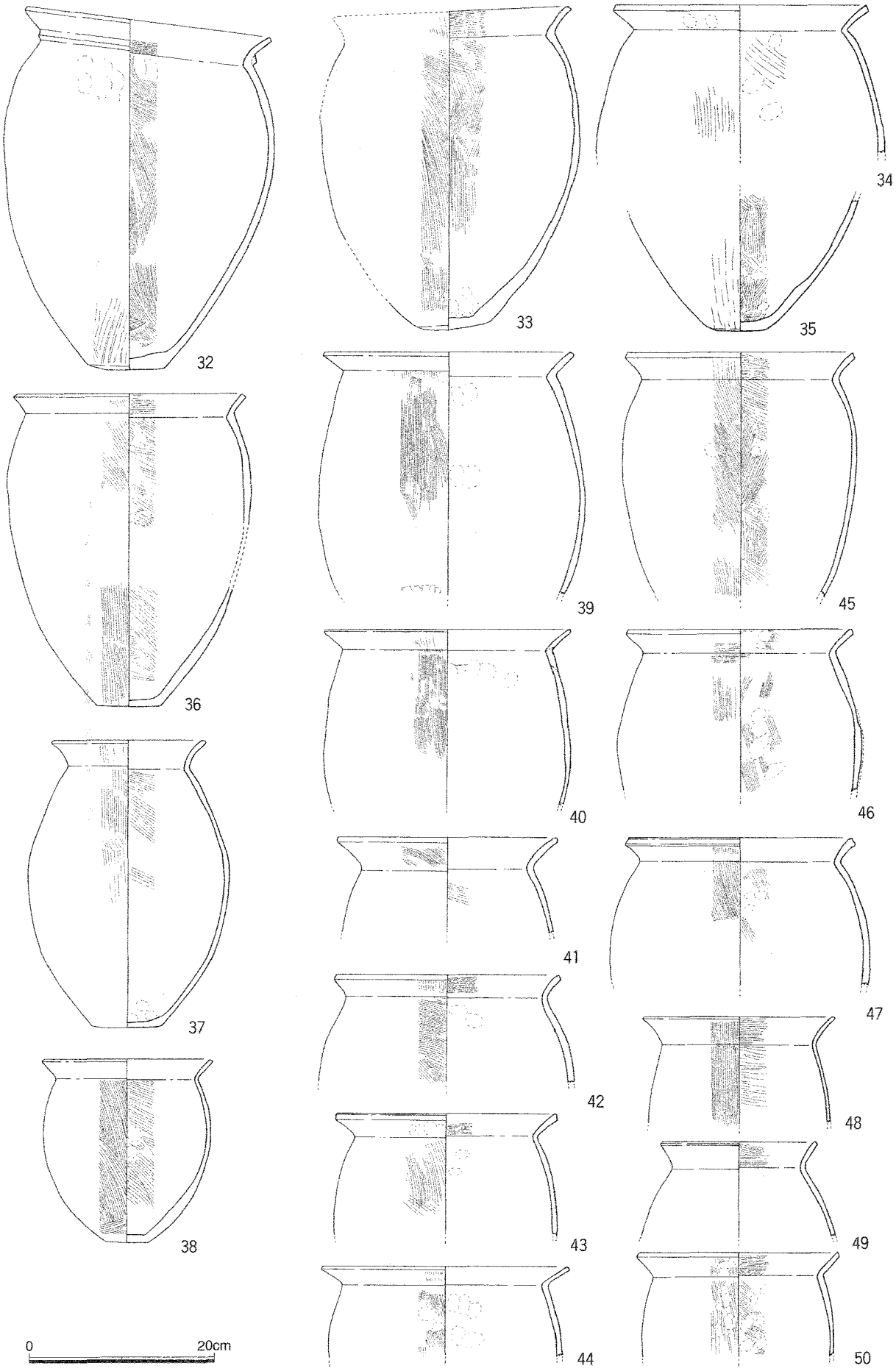
第35図　高元Ｆ区平面図および土層図（Ｓ＝１/80）（第１文化層，第２文化層）



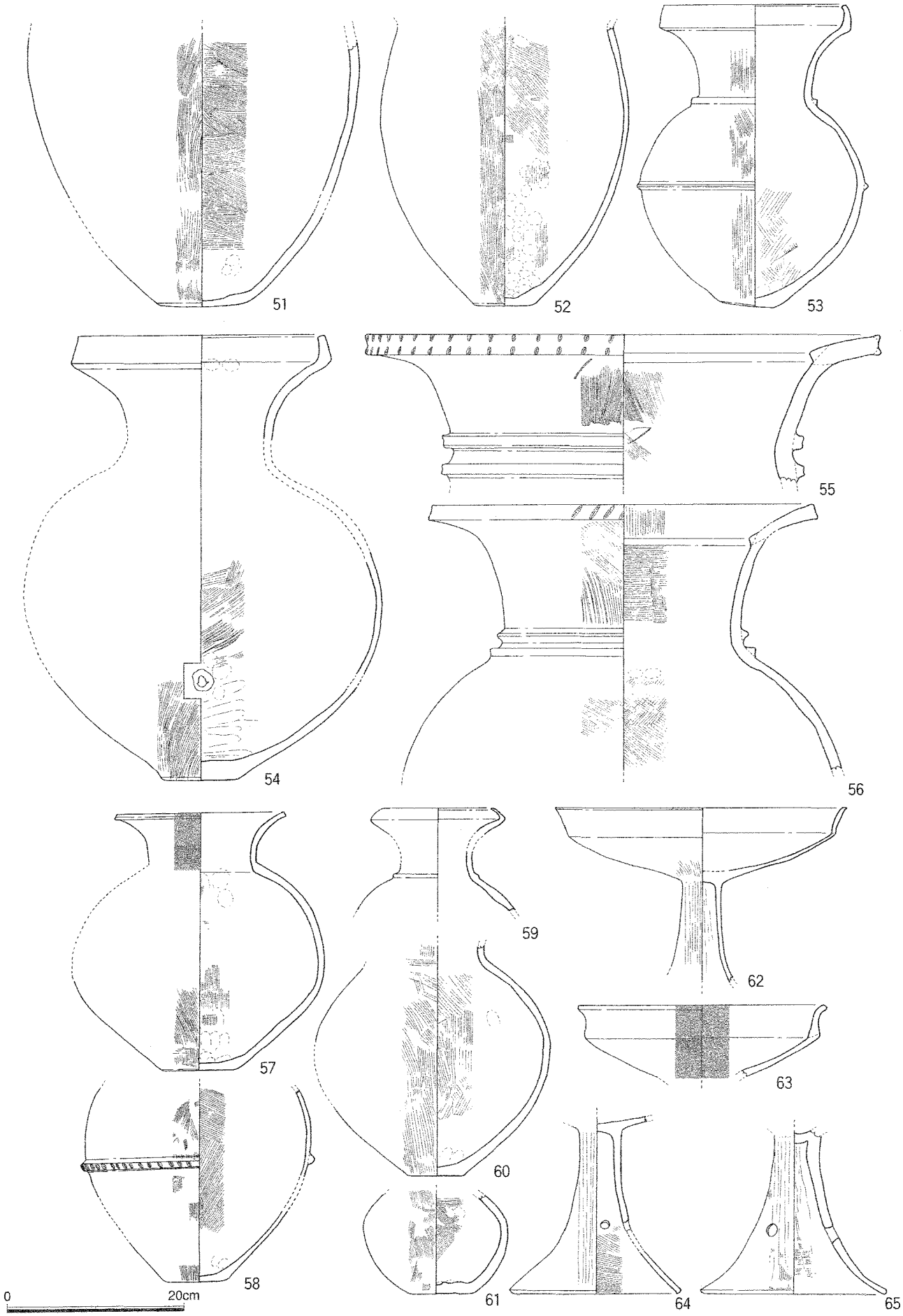
第36図　高元Ｆ区北半部遺物出土状況（Ｓ＝１/40）



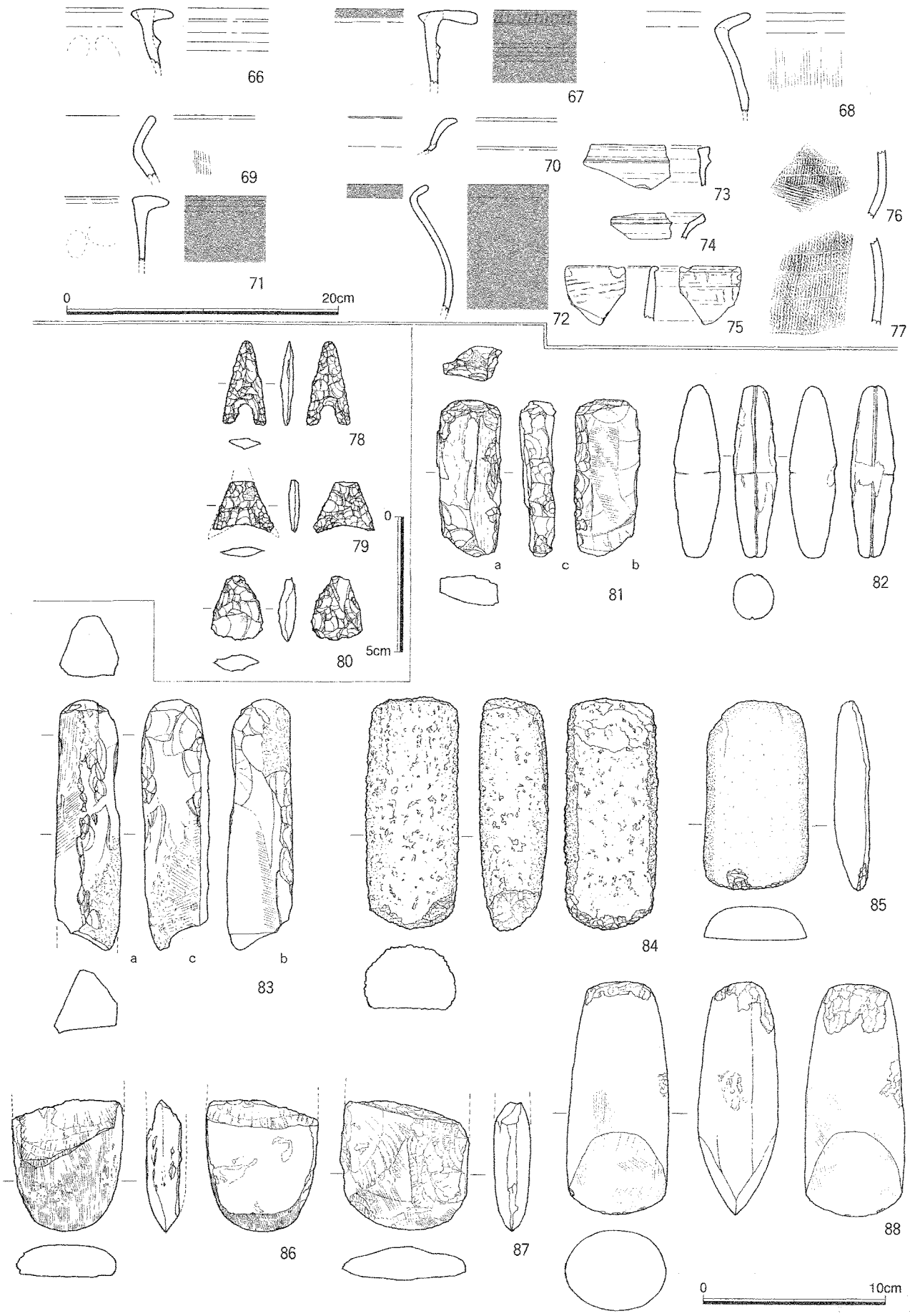
第37図　高元Ｆ区出土遺物①（Ｓ＝１／４）



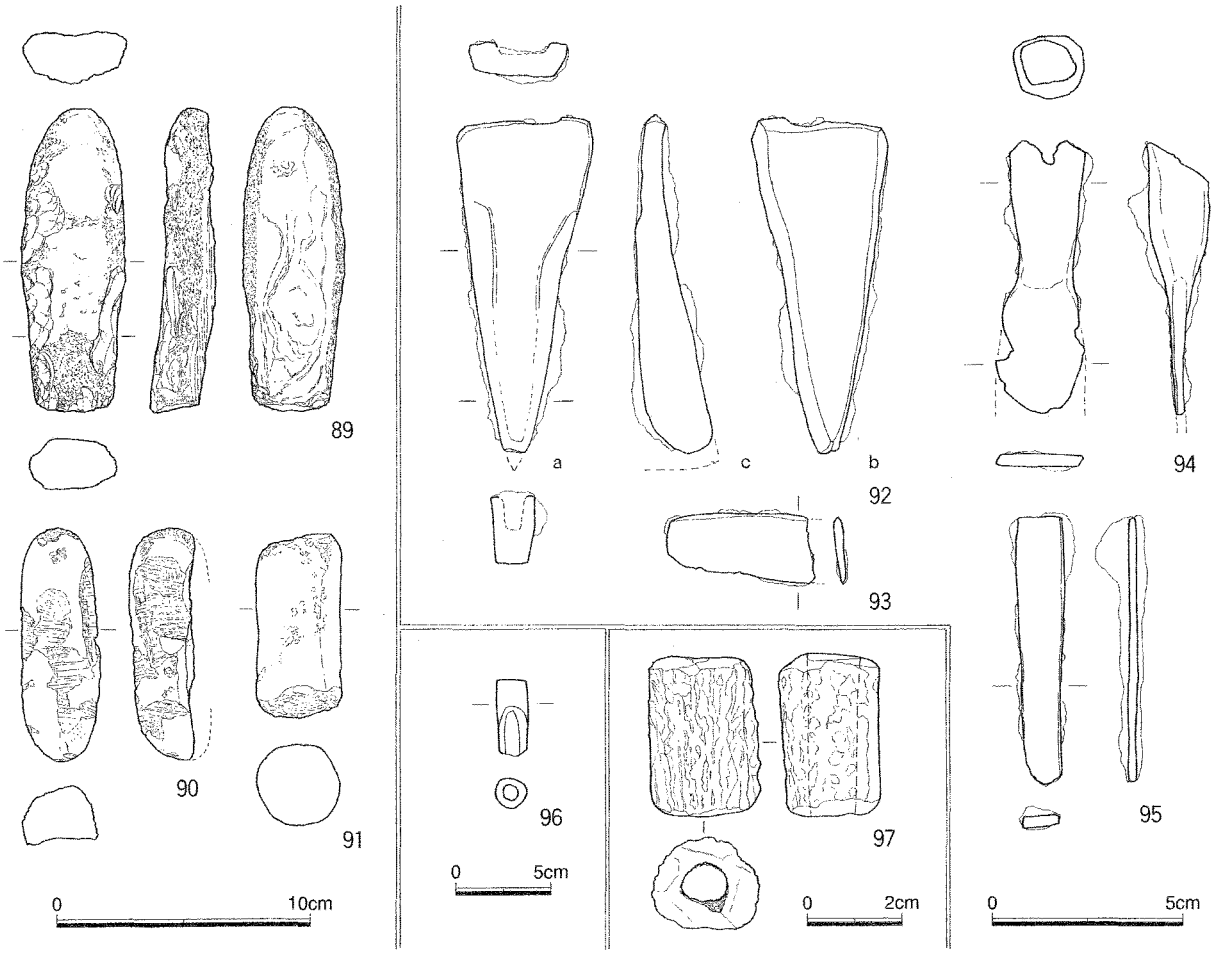
第38図　高元Ｆ区出土遺物②



第39図　高元Ｆ区出土遺物③（Ｓ＝１／６）



第40図　高元Ｆ区出土遺物④



第41図　高元Ｆ区出土遺物⑤

反し，口縁端部は尖り気味に納める。**73・74**はいずれも轆轤による回転ナデ調整で整形した痕跡を残す。**75**は大型壷の口縁部片である。口縁端部にかけて徐々に厚みを減じ，端部はやや外側に張り出す。表裏にはそれぞれ縦方向・横方向のタタキの痕跡を残す。**76・77**は瓦質土器である。いずれも縄蓆文と横方向の沈線が確認できるが，**76**は下半部がやや内湾気味で，この部分は斜位方向の縄蓆文となる。

第40図78から**第41図**にかけて，土器以外の遺物を掲載した。**79～80**は打製石鏃である。**80**は全体に粗い調整剥離を加えており，未成品と考えられる。**78**は玄武岩製，**79・80**は漆黒色の黒曜石製である。**81・83～88**は石斧およびその未成品である。**81**は頁岩製縦長剥片で，扁平片刃石斧の未成品である。b面は主要剥離面で，部分的に研磨を加える。c面を中心に側面への調整剥離が顕著であるが，節理面の軟質部分除去が目的であろう。**83**は柱状片刃石斧の未成品である。断面三角形で頂部から側面にむけて調整剥離を加え，敲打・研磨を加える。b面は特に入念に研磨し，平滑に整えている。**84**は玄武岩製の石斧で，風化による凹凸が顕著である。刃部付近を片刃状に研磨しているが，b面は刃部から基部にかけて剥離欠損している。**85**は黒色頁岩製の石斧で，裏面は節理に沿って欠損している。**88**は完形の磨製石斧である。厚手で両刃に加工しており，伐採斧であろう。敲打および研磨整形の跡が残る。**第41図89**は磨製石剣の未成品であろうか。厚みのある扁平な頁岩を素材とし，基部を中心に剥離および敲打により側面に抉りを付けている。側面全体に敲打痕が巡っており，明確な刃部の形成は認められない。**90**は敲打具である。体部中央に細長いシャープな敲打痕が集中し面的に広がる。**91**も

円柱状の敲打具とみられ，端部を中心に敲打痕が集中する。

92～95は鉄製品である。**92**は鋳造鉄斧の側面付近の破片である。c面側面がやや湾曲しており，撥形に開く鋳造鉄斧であったと推測される。a面には袋部の痕跡が先端部付近まで確認できる。錆膨れのため二次的に加工した痕跡は確認できない。**93**は刀子の切先片であろう。**94**は鉄鑿である。身部は扁平で，鉄鉾の可能性も考えられる。**95**は扁平な棒状鉄製品で，鉄素材であろう。いずれも第１文化層からの出土である。

97は鹿角製柄である。やや短いものの直線的で髄孔を丁寧に刳り抜いている。

・G区

●基本土層

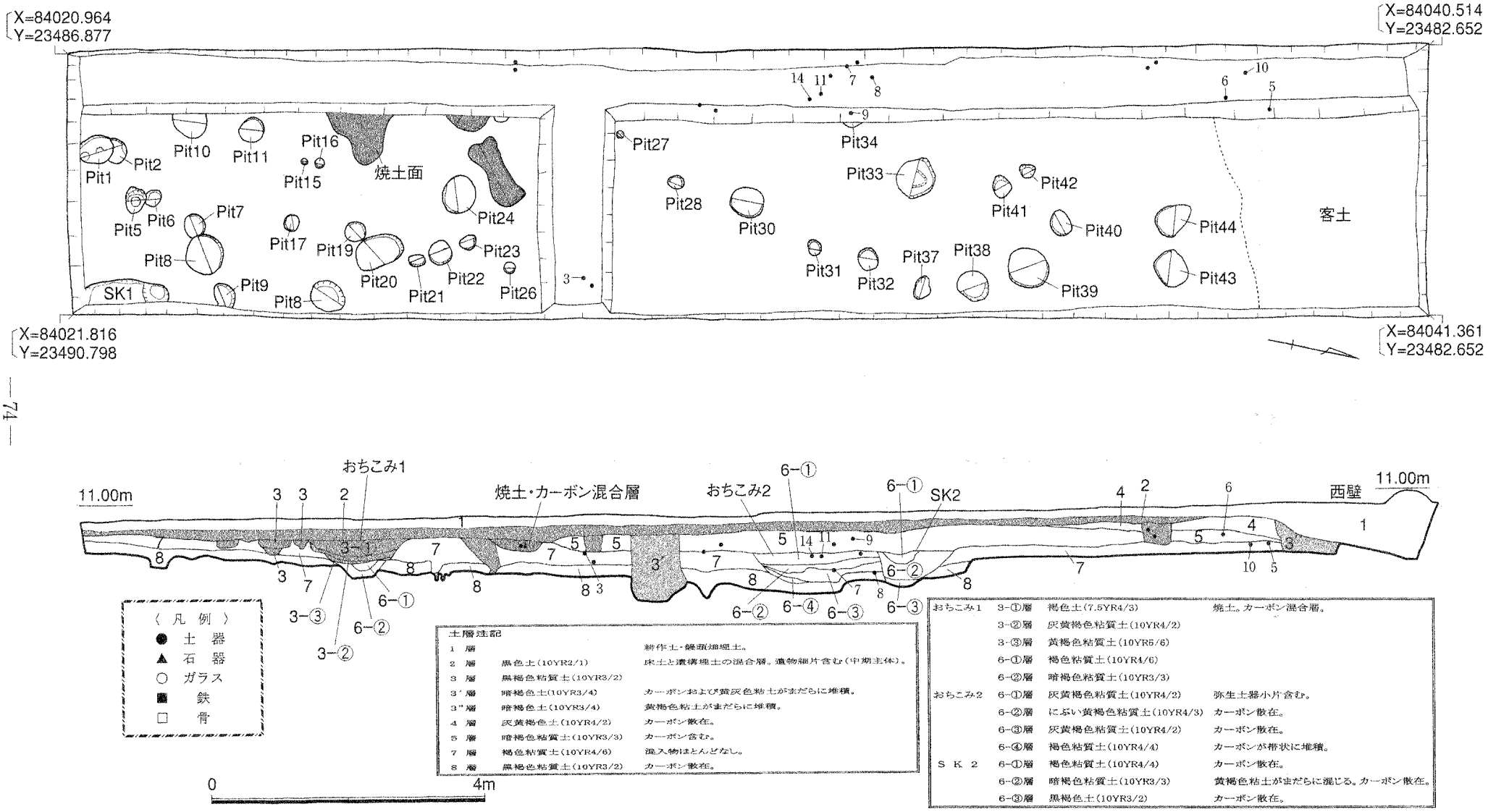
G区は本年度はじめて調査した箇所である（**第21図**）。調査は，調査区全体を遺構検出面まで掘り下げた後，西壁沿いおよび調査区中央部に南北方向・東西方向のトレンチを幅１mでそれぞれ設置し，岩盤まで掘り下げた（**第42図**）。遺構検出面ではピット群および焼土面を検出したが，検出したピットは全て半裁して規模および所属時期を検討した。また，トレンチ内の遺物は，第１遺構面から下層遺構面についてドットマップを作製して取り上げた。

第１文化層は２層黒褐色粘質土である。部分的に土坑状の落ち込みが認められるものの，厚さ約10㎝で調査区全体に展開する。検出したピット群も全て第１文化層に伴うものである。時期は弥生時代中期後葉を主体とし，弥生時代終末～古墳時代前期の遺物も散見される。第２文化層は３’層および３’’層である。黄褐色粒子が混じる点で判断した。調査区中央および調査区北端部で２基のピットを確認したにすぎない。遺物は出土しなかったが，後述する下層文化層の時期から，弥生時代中期中葉～後葉と推測される。

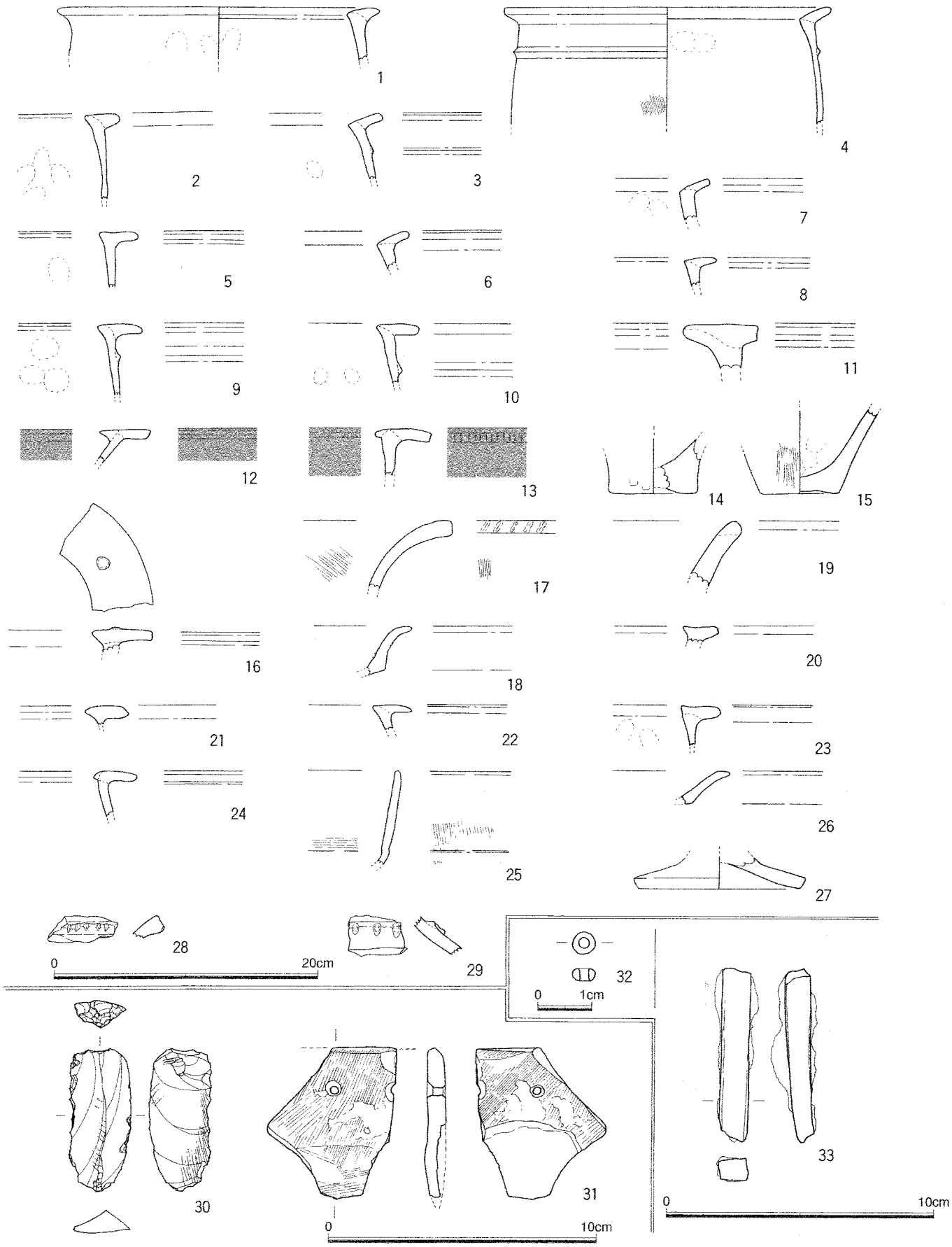
G区では第２文化層以下でも遺物の出土をみた。また，６層では土坑状の落ち込みが複数確認できた。落ち込み床面は標高9.7mにまで達しており，覆土の特徴も褐色系の色調でカーボンが散在する点で，他の調査区では認められないものである。他の調査区との比較ができないため，どの程度の広がりを持つかは不明であるが，仮に下層文化層としておく。この文化層からは弥生時代中期初頭の土器が出土している。

●出土遺物

第43図１～４・６・７は弥生時代中期初頭の土器である。下層文化層から出土した。いずれも口縁部上面が内傾し，口縁外面の立ち上がりもなめらかに外反するものが多い。**11**は甕棺口縁部で，口縁端部が内面に突出するものの外面への突出が少ない特徴から，橋口編年のKⅡc式に相当しよう。**12・13・16～27**は第１遺構面のピット群出土土器である。弥生時代中期後葉～末（須玖Ⅱ式古段階～新段階）にかけての遺物が主体である。**18・26**は弥生時代後期中葉以降の高坏口縁部と考えられるが，**26**については内面に口縁部立ち上がりの稜線が認められず，弥生時代終末期の二重口縁壺口縁部の可能性もある。**25**は古墳時代初頭の壺口縁部である。**27**は弥生時代終末の台付鉢脚部であろう。**28**は板付



第42図　高元G区平面図および土層図（第1文化層，第2文化層）



第43図　高元 G 区出土遺物

式系土器の口縁部である。やや幅広の口縁端部下端に大きめの刻みを付ける。29は壺の頸部付近であろうか。楕円形の浮文を貼り付け，中央部を指で押さえて窪ませている。

30～33はその他の遺物である。30は黒曜石製の縦長剥片で，作業面中央に稜線が走る。打面は調整打面である。後期旧石器時代のものである。31は石包丁の破片である。頁岩製で穿孔は表裏両面から錐状工具でV字形の切り込みを入れた後，体部と垂直に穿孔している。いずれも第１文化層に伴う遺物である。33は棒状鉄製品である。断面矩形でやや厚みがある。鉄鑿などの素材であろう。第１文化層からの出土である。

・H区

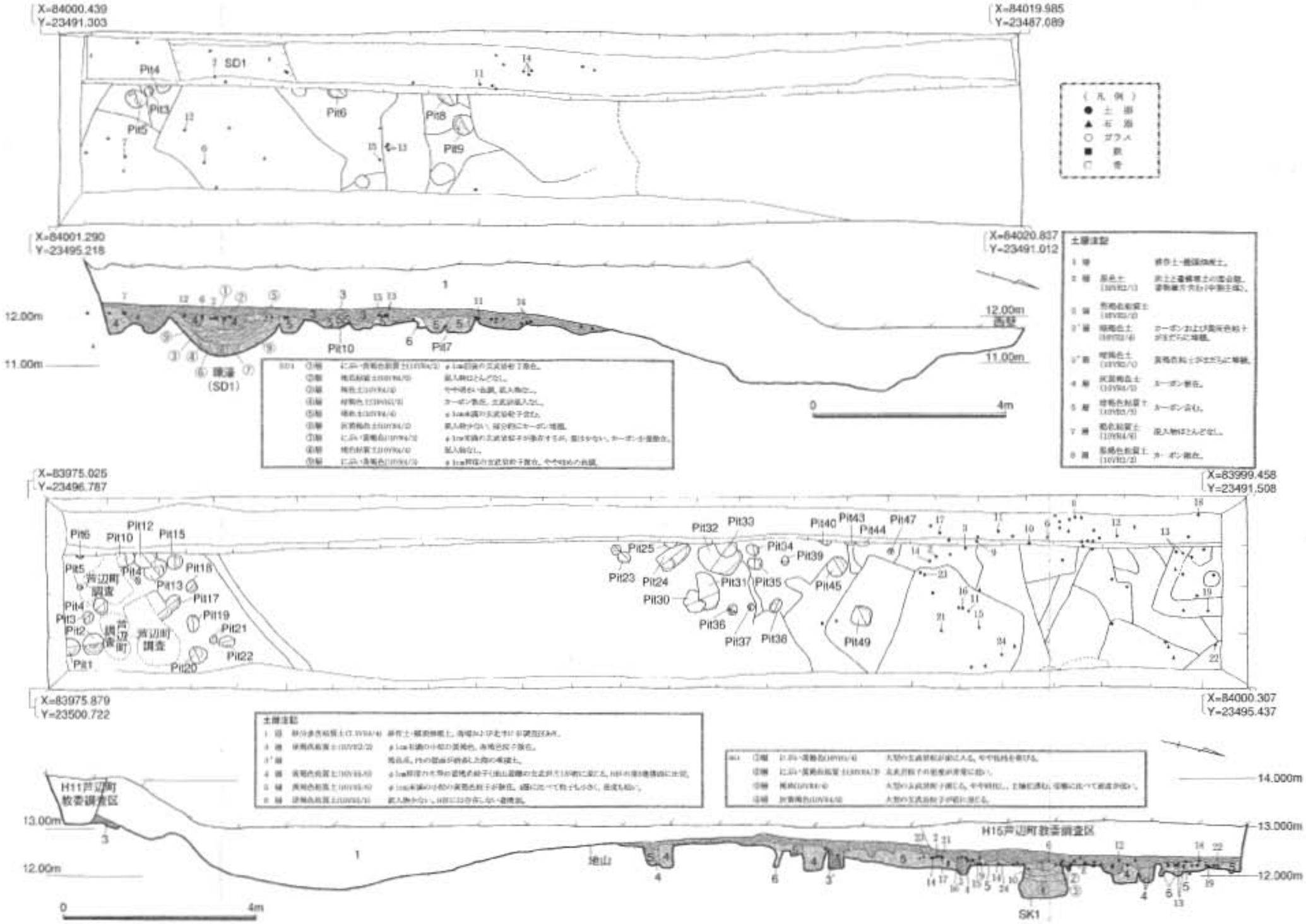
●基本土層

平成15年度に芦辺町教育委員会（現壱岐市教育委員会）が実施した調査区の北側に隣接する（第21図）。調査は，調査区全面を遺構検出面まで掘り下げた後，西壁沿いに幅１mのトレンチを設定して岩盤まで掘り下げた（第44図）。遺構検出面では，竪穴住居と考えられる遺構やピット群を検出し，検出状況を記録した後，ピット群のみ半裁して時期および規模を確認した。また，遺構検出面で出土した土器もドットマップを作製して取り上げた。トレンチ内は，第１遺構面の土器はドットマップを作製して取り上げたものの，第２遺構面以下は層位毎に一括して取り上げた（第44図）。

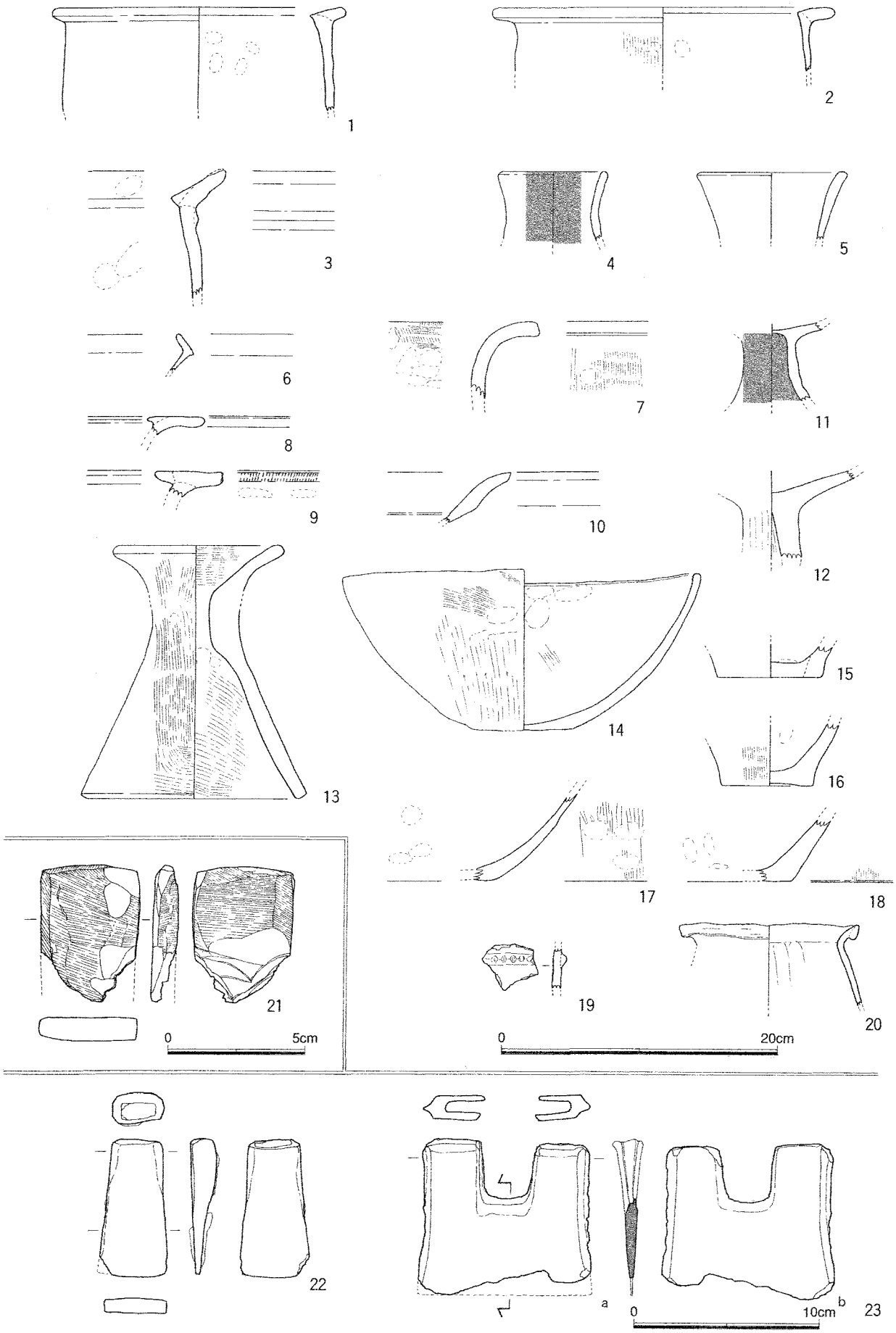
第１遺構面は３層黒褐色粘質土および４層である。ピット状の落ち込みも複数認められるものの，厚さ約15cm前後でフラットに堆積しており，調査区南半部に展開する。時期は遺構検出面出土土器と併せて，弥生時代中期末および弥生時代終末の２時期があり，複数の時期の遺構が存在するものと考えられる。第２遺構面は５層および４’層である。カーボンおよび黄褐色の小粒子を含む点が特徴である。最南端で検出した４’層は，３層黒褐色土に黄褐色粒子が散在し,3層と５層の特徴を併せ持つが，黄褐色粒子が混入する点を重視して第２文化層の遺構と捉えた。調査区南半部に展開し，ピット群を中心とする遺構を構成する。調査区南端部付近では，この文化層に伴う環濠を検出している。断面U字形で褐色系の覆土が堆積する。東西方向に伸びるが，周辺が未調査のためつながりは把握できない。第２文化層の時期は，出土土器から弥生時代中期初頭と考えられる。

●出土遺物

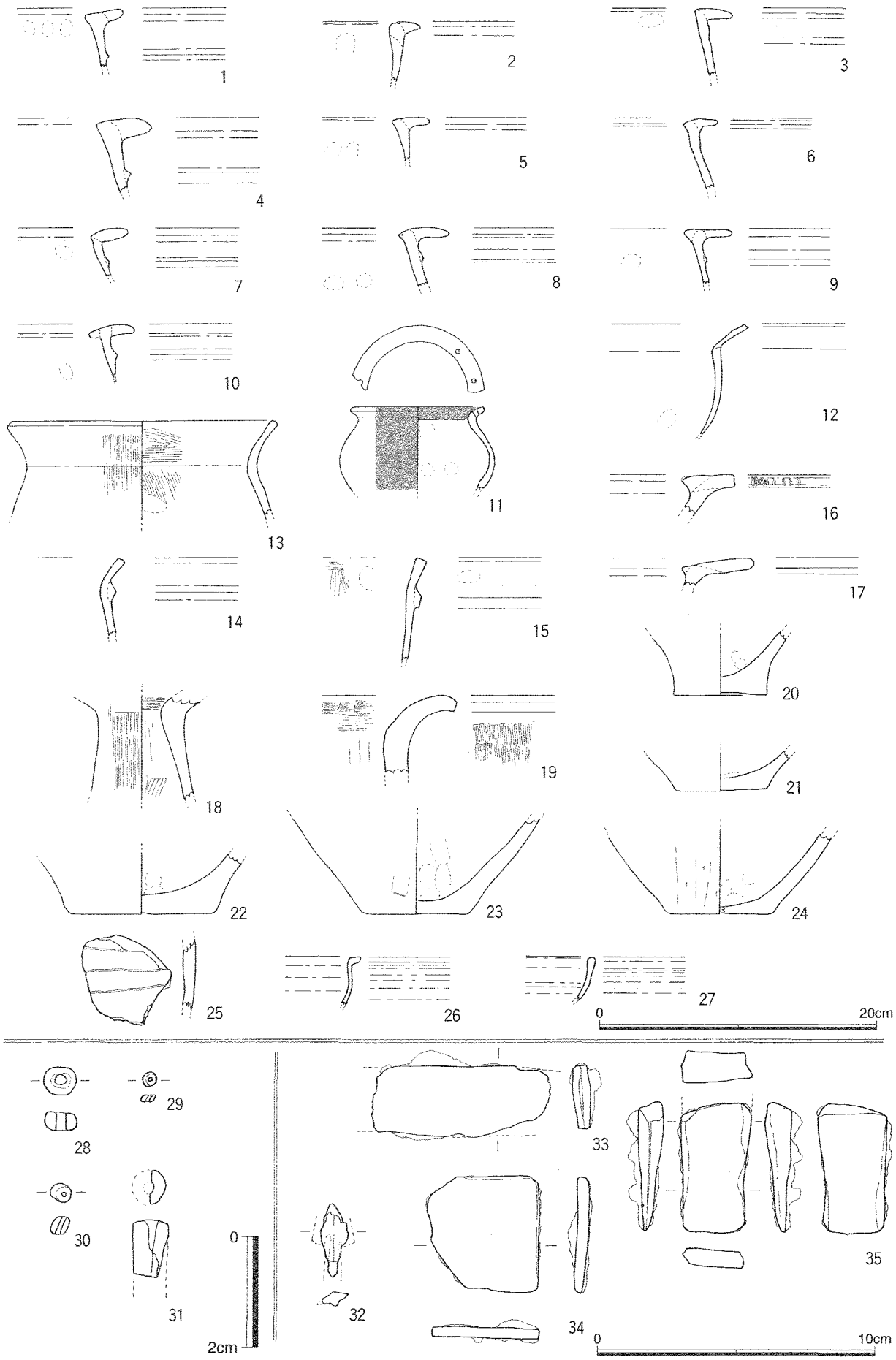
第45図１・４・５・19・20は第２文化層出土土器である。弥生時代中期初頭を主体とするものの，やや時期幅を持つ。１は口縁部上面が内傾し，口縁部外面の立ち上がりはわずかに稜線を持つ程度でゆるやかに外反する。19は刻目突帯文土器の胴部片で，弥生時代前期まで遡る可能性を持つ。20は朝鮮半島系無文土器である。口縁部が胴部から大きく外反し，口縁部に接して断面水滴形の粘土紐を貼り付ける。胎土には大きめの石英粒子を多く含み，弥生土器とは異質である。胴部内面には縦方向に指ナデの痕跡が残る。２・３・６～18は第１文化層出土土器である。弥生時代中期中葉～中期末の土器（２・７～９・15～18）と，弥生時代後期終末の土器（６・10～14・17）が出土している。14は大型の鉢で，底部外面を粗くけずっている。



第44図　高元H・I区平面図および土層図（S＝1/80）（第1文化層，第2文化層）



第45図　高元Ｈ区出土遺物



第46図　高元Ⅰ区出土遺物

21は黒色頁岩を長方形に研磨したもので，装身具であろうか。22は袋状鉄斧である。基部から刃部にかけて緩やかに開き，袋部の断面形は方形である。袋部の突き合わせは表面の肉眼観察では確認できないことから鋳造品の可能性もあるが，形態的な特徴から，袋部を丁寧に突き合わせた朝鮮半島産の鍛造鉄斧と考えられる。23は青銅製鋤先である。刃部を欠損するものの，ほぼ全体形を把握できる。凹字形で基部から刃部にかけて緩やかに開く形態である。基部の端部は，a面上端はやや突出するものの，b面はフラットである。横断面は横長六角形である。

・I区

●基本土層

平成11年度および平成15年度に芦辺町教育委員会（現壱岐市教育委員会）が実施した調査区に該当する（**第21図**）。報告書によれば，平成15年度の調査は遺構検出面に達することなく埋め戻しているが，今回の調査でもこれを追認した（**第44図**）。調査は，調査区全面を第１文化層遺構検出面まで掘り下げ，遺構検出ラインを図化するとともに，遺構検出面で出土した遺物はドットマップを作製して取り上げた。また，検出した遺構については，ピット群のみ半裁して規模と時期を確認するにとどめた。その後，西壁沿いに幅１mのトレンチを設定し，岩盤まで掘り下げて文化層の有無を確認するとともに，ドットマップを作製して遺物を取り上げた（**第44図**）。第１文化層は３層黒褐色粘質土である。厚さ20cm前後で南半部を中心に展開するが，一部は南端部でも確認できる。時期は弥生時代中期～終末までの土器を含んでおり，複数の時期の遺構が展開しているものと考えられる。第２文化層は４層・５層である。黄褐色粒子が混じる点が特徴である。調査区北半部で認められるが，やや北寄りで貯蔵穴と考えられる落ち込みを確認している。弥生時代中期中葉～後葉のもので，石鎌片も出土している。時期は明確で無いものの，弥生時代中期に収まるものと推測される。

●出土遺物

第46図は，いずれも第１文化層出土遺物である。弥生時代中期中葉～中期末，および弥生時代終末の土器が出土している。11は，須玖Ⅱ式新段階の小型短頸壷である。口縁部に相対する３つの穿孔が確認できる。表裏とも丹塗りである。14は弥生時代終末の甕である。口縁部はほぼ直立し，口縁部の付け根に幅広の三角突帯がつく。15も同様の土器であるが，口縁部の立ち上がりは直立に近く，口縁下の突帯は断面矩形である。25は沈線を施す土器。天地左右は不明であるが，３条の沈線が確認できる。26・27は楽浪系土器。いずれも鉢口縁部であるが，27は端部を丸く収める素口縁でるのに対して，26は口縁端部が肥厚し，口縁部上面はほぼ水平である。いずれも轆轤による回転ナデ調整の痕跡が顕著である。

28～30はガラス小玉，31は碧玉製管玉である。32は銅鏃であるが，大半を欠損し，鏑の周辺のみ残存する。33は鉄製刀子，34は鋳造鉄斧片と考えられる。35は小型鉄斧であるが，側面に双笵合の鋳合わせ痕らしき突線がわずかに確認でき，鋳造品の可能性がある。袋部は確認できない。

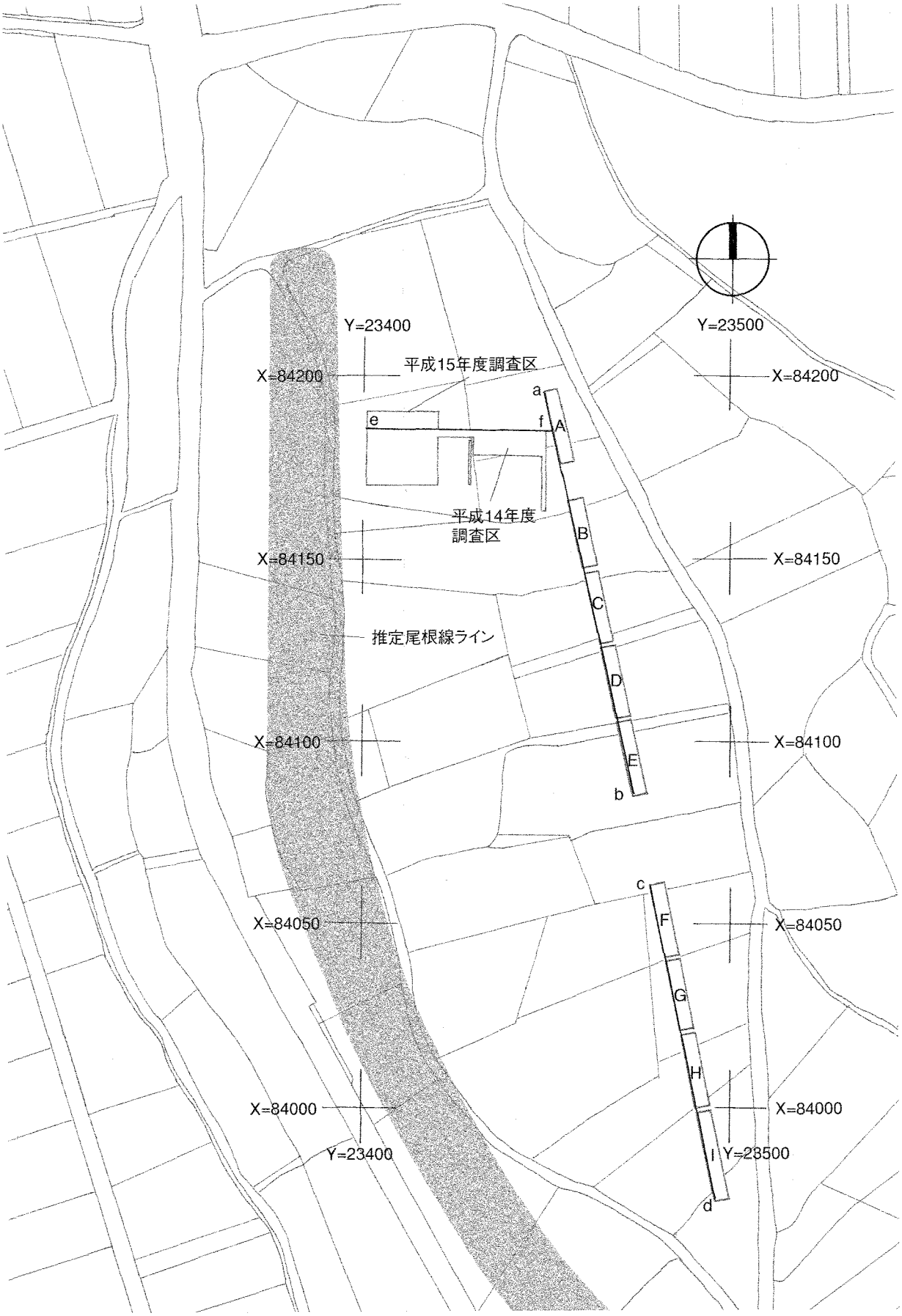
(3) 小　　結

①複数の文化層の確認と問題点

高元地区の調査では，各調査区で上下２つの文化層が確認された。第１文化層は，黒褐色粘質土を特徴とし，F区以南では弥生時代中期の土器も出土するものの，大局的には弥生時代終末～古墳時代前期の文化層と考えてよいであろう。土層の観察からは，ピットも存在するものの，下面が比較的フラットに堆積している例が多く，竪穴住居を中心とした構成になるものと考えられる。調査区全面に展開する文化層である。第２文化層は，基盤層である玄武岩岩盤由来の黄褐色粒子が混入する暗褐色系の粘質土である。F区・G区で対応する文化層が不明瞭となるものの，ほぼ全調査区にまたがって検出している。土層の観察からは，ピット群や土坑群を中心に構成されるものと考えられる。出土土器から，時期は弥生時代前期後葉～中期中葉である。

従来の調査では，第１文化層に相当する黒褐色粘質土を覆土とする竪穴住居群（古墳時代前期）が，弥生時代中期の第２文化層に相当する遺構群を浅く掘り直して構築される点は確認していたが，第２文化層については，調査区全体に文化層として存在するとは考えていなかった。本年度の調査を踏まえると，これまでの低台地上の調査は第１文化層を中心とした調査に終始し，第１文化層が削平されている地区では第２文化層まで調査が行われていたものと推測される。このように，文化層の把握ができていなかったこれまでの調査成果のみでは，原の辻遺跡の時期別の集落変遷を追うことは困難である。特に第２文化層の時期である弥生時代中期の遺構群は，すでに調査が完了している地区でも下層に残存する可能性があることから，従来考えられていたよりも広範囲に未確認の遺構群が展開している可能性が高い。今回初めてその存在が明らかになった，H区検出の第２文化層相当の環濠は，このことを象徴しているであろう。今後は文化層の存在を前提とすることで，より目的的な発掘調査が可能となろうが，特に第２文化層における遺構群の把握が，原の辻遺跡の集落構造を把握する上で重要になってくるものと考えられる。

また，F区・G区をはじめとして，地点によっては第２文化層以下にも遺構群が展開することが明らかとなった。G区では仮に下層文化層としたが，褐色系の色調でカーボンが散在する点が特徴である。周辺の調査区とのつながりは不明瞭で，面的な広がりについては不明な点も多いが，時期的には弥生時代前期末～中期初頭頃に位置付けられよう。この時期の遺物は低地部を中心に散見されるものの，遺構として認定できるものは少なく，集落構造の把握には曖昧な点が多い。原の辻遺跡が形成されて間もないこの時期の遺構群の把握は，原の辻遺跡の成り立ちを考える上で非常に重要である。下層文化層と同時期の遺物は，E区～G区にかけて比較的まとまって出土しており，ある程度の広がりを有するものと推測される。今後は，下層文化層の広がりを把握するとともに，遺構群の構成や時期を明確にすることが重要な課題となる。



第47図　地形復元ライン位置図（S＝1/1500）

②弥生時代における旧地形の復元

●地形復元の方法

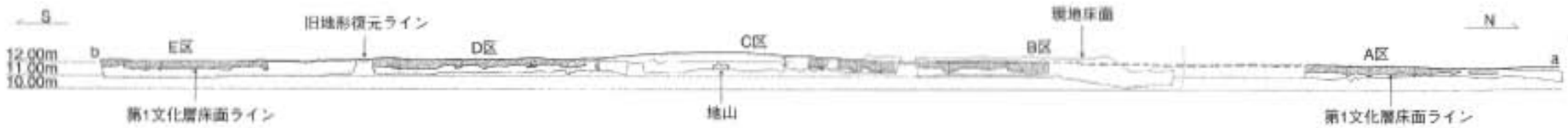
本年度の調査の大きな目的である弥生時代の旧地形の復元を試みる。現在の地形は，原の辻遺跡終焉後の約1,700年間に，畑地や水田化に伴って土地の改変が繰り返されてきた。このため，弥生時代の旧地形をありのままに復元することは不可能といわざるを得ない。今回は，調査区壁面で確認したピット群を対象に，弥生時代のピット群が旧地表面から一律に同じ深さで掘削されていたという前提で，ピットの床面標高から旧地形の傾斜を割り出すことにした。当然，ピット群は建物の種類や規模，地盤の状況によって深さが異なることが想定されるが，南北200mの地形の傾斜を大まかに復元する際には有効な方法であると考える。地形復元の基準ラインは，**第47図**に示したとおり，本年度調査区の西壁ラインと，平成14年度～15年度にかけて調査を行った低台地北端部の東西ラインに設定した。南北ラインと併せて東西ラインも復元するのは，より立体的な地形の復元が可能になることと，平成15年度調査区で検出した小児甕棺から，弥生時代の地表面標高が推測できると考えたからである。

ところで，今回の調査では複数の文化層が確認されたことで，旧地形の復元に際して一律に遺構群を扱うことはできない。そこで，第１文化層のピット群を対象に地形を復元することにした。この理由は，第１文化層が全調査区にわたって展開している点と，東西ラインで復元する平成14年度～15年度の調査で検出したピット群が，第１文化層に相当すると考えたからである。また，旧地形標高の推定に利用する平成15年度検出の小児甕棺は弥生時代後期後葉のもので，第１文化層の時期に近いことも理由の一つである。なお，今回の調査で確認したのは「文化層」であり，「遺構面（生活面）」を明確に確認したわけではない。同じ文化層の中にも複数の遺構面（生活面）が存在する可能性は十分に考えられるが，今回の調査では明確にできなかった。第１遺構面は竪穴住居を中心に構成されると考えられることから，ここで復元する旧地形は，第１文化層下面を弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴住居床面，すなわち「遺構面（生活面）」と想定し，竪穴住居群が掘り込まれた旧地表面が対象となる。

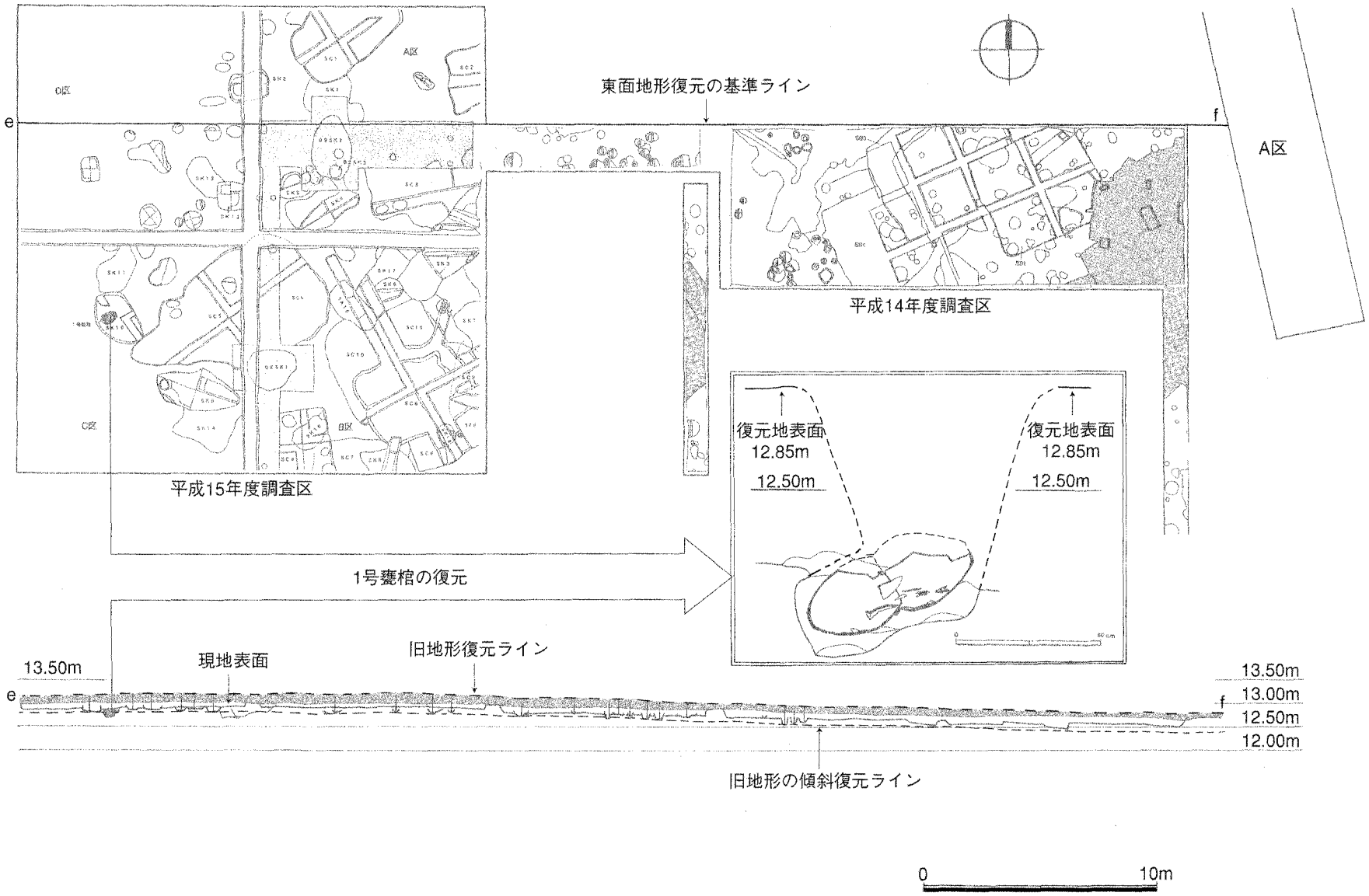
●東西ラインにおける旧地形の復元

具体的な地形復元に入る前に，現地形の観察から想定可能な旧地形について触れておく。**第47図**には，東西・南北の復元基準ラインとともに，低台地の推定尾根線ラインを図化した。推定尾根線ライン周辺は，現地形の観察から低台地上の分水嶺付近に相当し，実際の発掘調査でも遺構が確認できなかったり，他の地区と比較して遺構の残りが悪い場合が多い。このことは，弥生時代においてもこのライン上に尾根線があり，後世の削平の影響を大きく受けたためと考えられる。したがって，弥生時代の旧地形を考える前提として，低台地上の西側に偏る尾根線ラインを想定しておく。この尾根線より西側では比較的傾斜がきつく遺構群の展開が希薄であるのに対して，東側では傾斜が緩やかで，弥生時代の遺構群は，推定尾根線ライン上から東側に主体的に営まれている。

東西ラインは，この推定尾根線ライン付近から東へ約50mの範囲に相当する。これまでの調査で，弥生時代中期の土坑群および，古墳時代前期の竪穴住居群が主体的に展開していることを確認している（**第49図**）。東西地形復元土層ラインに沿って，周辺のピット群および土坑群の断面を投影したの



第48図　旧地形の復元（南北ライン）（S＝1/400）



第49図　旧地形の復元（東西ライン）（S＝1/250）

が**第49図下段**である。大まかな傾向として，西側に比べて東側の遺構群が残りがよく，ピットに関しても基本的に東側の方が遺構検出面から深く掘り込んだ状態で検出される傾向にある。ピット群の床面を線で繋ぐと，西から東へ傾斜する緩斜面となり，このラインが傾斜復元ラインである。西端と東端の比高差は約60cmである。傾斜復元ラインはあくまで傾斜を復元したにすぎず，実際には，この傾斜でピットの深さ分だけ標高を上げた地点が旧地形復元ラインということになる。問題はピットの深さをどの程度見積もるかであるが，弥生時代の地表面標高を推測する重要な手がかりが，１号甕棺である。　平成15年度に検出した１号甕棺は，単独で発見された小児甕棺である（**第49図**）。口縁部を打ち欠いた下甕と「く」の字口縁の上甕で構成され，下甕は完形で残るものの，上甕は上半部が削平されていた。掘り込みは，竪穴を掘削した後で横穴を斜めに掘り込んでおり，土坑床面は二段掘りとなる。原の辻遺跡でこれまで検出された小児甕棺のうち，比較的残りのよいものは，掘り込み土坑床面からの検出面まで深さ50cm前後である。これらの甕棺も残りがよいとはいえ，後世の削平の影響は無視できず，本来の掘り込みの深さは80cm程度と考えることができる。同様に，高元地区検出の１号甕棺の残存状況から掘り込み面，すなわち旧地表面の標高を推測すると，竪穴床面が標高約12.05mであることから，80cm上乗せして，標高12.85mが旧地表面の標高と考えることができるであろう。

１号甕棺検出地点の標高を12.85mとして，先に復元した傾斜復元ラインの標高をこれに合わせると，現地表面上約35cm付近に復元ラインが来ることになる。旧地形復元ラインからピット床面までの深さは約70cm，竪穴住居床面までの深さは約60cm前後で，ほぼ妥当な復元といえるであろう。傾斜は現地表面とほぼ同じであるが，東側では旧地形復元ラインの方が傾斜がきつくなる。

●南北ラインにおける旧地形の復元

本年度調査区西壁土層に第１遺構面床面ラインを合成したのが，**第48図**である。ピット床面の標高を比較すると，南側のＩ区が最も高く，北側に向けて徐々に低くなり，Ａ区が最も低くなる。東西ラインの旧地形の復元により，ピット本来の深さが約70cmと推測できたことから，南北ラインのピット群の深さを同様に70cmと仮定し，ピット掘り込み面を線で結ぶと，南北方向の旧地形復元ラインが復元できる（**第48図**）。北端部のＡ区から緩やかな傾斜を描いて徐々に標高が上がり，Ｃ区中央付近にピークが認められる。この地点は耕作土直下で地山を検出した地点で，元々標高が高かったために，本来は存在したであろう第１文化層・第２文化層が，ともに削平を受けたものと考えられる。この地点の推定標高は12.80m前後と考えられる。Ｃ区以南では，徐々に標高が低くなり，Ｆ区南端部付近が最も低くなる。Ｆ区推定最低地点の標高は，11.80mとなる。Ｇ区以南では徐々に標高が高くなり，Ｉ区以南ではやや急激に標高が高くなって南端部が最高地点となる。Ｉ区推定最高地点の標高は14.00mとなる。このように，南北ラインの旧地形は南から北にむけて傾斜する緩斜面として復元できるが，Ｆ区～Ｇ区の落ち込みとＣ区中央部の高まりが復元できたことは，集落構造を考える前提として重要な成果である。

●復元旧地形と文化層の関係

復元した旧地形をもとに，各文化層との関係や集落構造の見通しについて述べ，まとめに代えたい。

復元旧地形の特徴の一つは，C区中央で復元した高まりである。C区では，第2文化層は調査区北半部全面に展開するものの，第1文化層は北端部でわずかに検出したにすぎない。このことは，本来両文化層ともに調査区全面にわたって展開していたものの，高まりの部分が削平されることによって，標高の高い第1文化層が大きくけずられた結果であろう。また，落ち込みとして復元したF区～G区では，特にG区で第2文化層より下位から下層文化層を検出している点が注目される。元々谷状の落ち込みが東西方向に存在し，弥生時代前期末～中期初頭にかけて，水辺を中心に遺構を構築していた可能性が考えられるであろう。面的な広がりについては課題を残しているが，F区～G区の東側を中心に，下層文化層や旧地形の落ち込みが存在する可能性があり，今後注意が必要である。

原の辻遺跡の集落の変遷は，弥生時代中期には北部で土坑群が，南側では竪穴住居群がそれぞれ展開する傾向にある。未調査区が多く，調査の進展に伴って再検討が必要であるが，もしこの構造が妥当であれば，これら遺構群の分布をC区中央部の高まりが区画していた可能性も考えられるであろう。

このように，遺構群の展開だけでなく，旧地形の在り方を考慮することによって，今後原の辻遺跡の集落構造が具体的に明らかにできるものと考えられる。旧地形の復元方法の再検討も含めて，今後にゆだねられた課題は多い。

第5表　高元地区出土遺物観察表①

石器

報告番号		遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材
第23図	19	A区3層	縦長剥片	3.65	1.90	0.40	3.10	黒曜石
	20	A区表採	縦長剥片	3.00	3.85	0.90	8.80	黒曜石
	21	A区3層	縦長剥片	4.25	3.41	1.39	22.40	頁岩
第25図	20	B区3層	石錘	15.15	7.10	0.75	110.50	頁岩
	21	B区3層	石斧	23.45	20.80	6.20	3740.00	玄武岩
	22	B区3層	敲石	8.20	7.70	4.40	438.50	玄武岩
	23	B区3層	敲石	6.15	4.95	3.95	186.40	玄武岩
第27図	20	C区3層	扁平片刃石斧	5.30	2.60	1.60	37.40	頁岩
	21	C区SC1	磨製石剣	3.75	2.70	0.65	72.00	頁岩
第30図	32	D区一括	ブレ剥片	3.50	4.30	0.95	14.20	黒曜石
	33	D区2層	ナイフ形石器	3.10	1.10	0.55	1.70	黒曜石
	34	D区2層	局部磨製石鏃	1.85	1.50	0.30	0.50	黒曜石
	35	D区2層	石戈片	4.21	2.95	0.45	8.80	頁岩
	36	D区2層	石鑿未成品	4.65	1.50	1.65	19.00	頁岩
	37	D区SK1	敲石	8.25	7.35	3.60	333.50	玄武岩
	38	D区SC3	敲石	8.40	7.15	4.30	418.90	玄武岩
第34図	50	E区2層	縦長剥片	3.25	2.85	0.50	6.20	黒曜石
	51	E区3層	縦長剥片	2.40	2.30	0.60	3.30	黒曜石
	52	E区3層	縦長剥片	5.85	1.90	1.65	26.90	頁岩
	53	E区4層	石斧未成品	9.55	3.60	2.80	185.00	頁岩
	54	E区4層	敲打具	8.00	5.85	4.90	333.80	黒色頁岩
	55	E区3層	敲石・擦石	12.40	9.80	4.60	957.90	玄武岩
	58	E区3層	石製支脚	18.00	13.90	8.60	2.36	凝灰岩
	59	E区4層	石皿	35.30	32.60	14.40	25.40	玄武岩
第40図	78	F区3層	石鏃	3.10	6.65	0.45	1.40	玄武岩
	79	F区3層	石鏃	1.90	2.35	0.40	1.50	黒曜石
	80	F区3層	石鏃未成品	2.45	1.95	0.65	2.30	黒曜石
	81	F区2層	石斧未成品	8.70	3.60	2.00	90.50	頁岩
	82	F区2層	石錘	9.50	2.60	2.40	66.00	頁岩
	83	F区3層	柱状片刃石斧未成品	13.95	3.70	3.80	289.80	頁岩
	84	F区2層	石斧	12.60	52.00	3.70	45.00	玄武岩
	85	F区3層	石斧	10.40	5.80	2.00	200.00	頁岩
	86	F区表採	石斧	7.25	6.20	2.00	129.00	安山岩
	87	F区2層	石斧	7.10	7.10	20.00	134.00	安山岩
	88	F区2層	磨製石斧	12.80	5.50	4.50	515.00	安山岩
第41図	89	F区3層	石剣未成品？	12.10	4.05	2.00	166.40	頁岩
	90	F区3層	敲石（敲打具）	9.20	3.10	2.40	108.90	頁岩？
	91	F区2層	敲石（敲打具）	7.30	3.40	3.30	134.20	砂岩（花崗岩？）
第43図	30	G区2層	縦長剥片	5.40	2.40	0.85	11.10	黒曜石
	31	G区2層	石鏃丁	4.70	5.75	0.70	25.60	黒色頁岩
第45図	21	H区4層	不明石器	5.00	3.70	1.00	26.70	頁岩
第46図	31	I区2層	管玉	1.05	0.60	0.60	0.20	碧玉

骨角器

報告番号		遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	素　材
第41図	98	F区3層	鑿柄	4.25	2.95	2.70	22.00	鹿角

金属器

報告番号		遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	素　材
第25図	24	B区2層	銅鏃	4.50	1.25	0.45	4.00	青銅
	25	B区2層	銅鏃	4.75	1.85	0.40	2.70	青銅
	26	B区2層	銅鋼	3.65	0.60	0.25	1.80	青銅
	27	B区3層	鹿角柄付刀子	15.15	1.80	0.25	19.60	鉄
第30図	39	D区2層	鑿	3.65	1.05	0.90	8.40	鉄
第34図	56	E区4層	金属片	4.15	3.10	0.35	9.70	鉄
	57	E区3層	金属片	4.80	1.55	0.70	20.50	鉄
第41図	92	F区2層	鋳造鉄斧片	8.85	3.60	6.6~1.0	96.90	鉄
	93	F区表土	刀子片	3.95	1.80	0.20	52.00	鉄
	94	F区2層	鉄鑿	7.30	2.30	1.65	29.40	鉄
	95	F区Pit13	棒状鉄製品(鍛造品)	7.10	1.30	0.20	18.00	鉄
第43図	33	G区2層	棒状鉄製品	6.55	1.10	0.90	28.10	鉄
第45図	22	H区表採	鉄斧	7.60	3.80	1.40	104.00	鉄
	23	H区3層	鏃先	8.55	9.35	1.70	211.00	青銅
第46図	32	I区3層	銅鏃	2.70	1.00	0.50	2.40	青銅
	33	I区3層	刀子	6.55	2.50	0.65	34.60	鉄
	34	I区1層	鋳造鉄斧片	4.20	4.15	0.50	31.30	鉄
	35	I区2層	鋳造鉄斧？	4.65	2.60	0.95	44.60	鉄

ガラス

報告番号		遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	色
第23図	22	A区3層	ガラス小玉	1.30	1.25	0.75	2.60	灰白色
	23	A区表採	ガラス小玉	0.40	0.40	0.20	0.1未満	コバルトブルー
第41図	97	F区2層	ガラス管玉	1.00	0.45	0.35	0.20	灰白色
第30図	40	D区2層	ガラス小玉	0.60	0.55	0.35	0.10	コバルトブルー
第43図	32	G区2層	ガラス小玉	0.40	0.45	0.25	0.1未満	コバルトブルー
第46図	28	I区3層	ガラス小玉	0.50	0.60	0.35	0.10	コバルトブルー
	29	I区3層	ガラス小玉	0.25	0.25	0.20	0.1未満	コバルトブルー
	30	I区3層	ガラス小玉	0.35	0.40	0.35	0.1未満	コバルトブルー

第6表　高元地区出土遺物観察表②

土器

報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
第23図	1	A区SC	甕	褐色	7.5YR4/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	長石・石英	口縁部片	ナデ	ナデ	
	2	A区SC	甕	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	3	A区SC	甕	明赤褐	2.5YR5/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	4	A区SC	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片			板付Ⅱb式
	5	A区SC	甕	にぶい橙	5YR7/4	橙	5YR7/6	石英・長石	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	6	A区SC	壺	浅黄橙	7.5YR8/3	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	7	A区SC	甕	明赤褐	2.5YR5/8	明褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	ハケメ	
	8	A区SC	甕	灰褐	5YR4/2	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ・ナデ	
	9	A区SC	壺	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ヘラミガキ・暗文	ヘラミガキ	
	10	A区SC	壺	赤灰	2.5YR4/1	にぶい橙	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・暗文	ナデ	
	11	A区SC	鉢	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
	12	A区SC	壺	にぶい橙	5YR7/4	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	表面丹塗り
	13	A区SC	高坏	にぶい橙	5YR6/4	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	14	A区SC	鉢	にぶい橙	5YR6/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	15	A区3層	甕	橙	2.5YR6/6	褐灰	10YR4/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	16	A区SC	甕	灰褐	7.5YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ハケメナデ消し	指押さえ・ナデ	
	17	A区SC	甕	明赤褐	2.5YR5/8	赤褐	2.5YR4/6	長石・石英・金雲母	底部	ケズリ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	18	A区SC	高坏	橙	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
第25図	1	B区SC3	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	指押さえ	
	2	B区SC3	甕	橙	5YR6/8	明褐	7.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	指押さえ・ナデ	ハケメ・ナデ	板付Ⅱ式
	3	B区SC3	甕	明褐	7.5YR5/6	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	胴部片	ハケメ・沈線・ナデ	ハケメ・ナデ	板付Ⅱ式
	4	B区SC3	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・沈線	ナデ	板付Ⅱ式
	5	B区表土	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	黒	5Y2/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・沈線(ヘラガキ)	ヘラナデ	板付Ⅱ式
	6	B区SC3	甕	灰黄褐	10YR5/2	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・沈線・キザミ	ハケメ・ナデ	
	7	B区3層	壺	橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	8	B区SC2	壺	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	
	9	B区3層	壺	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	10	B区3層	甕	橙	5YR6/6	にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	11	B区3層	甕	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR6/8	長石・石英	口縁部片	ナデ	ナデ	
	12	B区3層	甕	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	13	B区SC3	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英(大)・金雲母	口縁部	ハケメ	指押さえ・ナデ	城ノ越式,表面一部剥落
	14	B区3層	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	15	B区3層	壺	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
	16	B区3層	高坏	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母(多)	口縁部	ナデ	ナデ	
	17	B区SC3	甕	橙	5YR6/6	にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・指押さえ	指押さえ・爪痕	
	18	B区3層	甕	橙	2.5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ヘラナデ・指押さえ	
	19	B区3層	甕	橙	5YR6/6	明褐	7.5YR3/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
第27図	1	C区SC1	壺	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/3	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	ナデ・ヘラミガキ・指押さえ	ヘラミガキ・ナデ・暗文	表面暗文
	2	C区SC1	高坏	赤橙	10R6/6	灰黄	2.5Y6/2	長石・石英	完形	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ	ハケメ・ヘラミガキ・ナデ	両面暗文,脚部穿孔2ヶ所
	3	C区SC2	甕	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	4	C区SC2	甕	橙	2.5YR6/8	淡赤橙	2.5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ナデ・ハケメ・指押さえ	ナデ・指押さえ・ハケメ	両面スス痕
	5	C区3層	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	表面一部剥落
	6	C区SC2	壺	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	表面丹塗り
	7	C区SC2	甕	橙	2.5YR6/8	明褐灰	7.5YR7/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	8	C区SC2	甕	赤橙	10R6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	9	C区SK1	甕	橙	7.5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	10	C区3層	甕	明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	11	C区SK1	甕	浅黄橙	10YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	12	C区3層	甕	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	13	C区3層	甕	褐	7.5YR4/3	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	14	C区SK1	甕	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	15	C区3層	甕	にぶい赤褐	5YR5/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	16	C区3層	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰	7.5YR4/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	スス	
	17	C区3層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	18	C区3層	甕	明褐	7.5YR5/6	灰黄褐	10YR4/2	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	19	C区3層	甕	橙	7.5YR7/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
第29図	1	D区SC1	甕	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	表面丹塗り
	2	D区SC1	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	3	D区SC3	甕	橙	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	4	D区SC3	甕	橙	5YR6/8	橙	5YR6/6	長石・石英	口縁部片	ナデ	ナデ	
	5	D区SC3	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ハケメ	
	6	D区SC3	壺	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄橙	7.5YR8/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ケズリ・ナデ	
	7	D区SC3	甕	橙	2.5YR7/6	にぶい橙	5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	両面丹塗り
	8	D区SC3	高坏	明赤褐	5YR5/8	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部	ナデ		
	9	D区SC2	甕	明褐灰	7.5YR7/2	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英	口縁部	ナデ	ナデ	
	10	D区SC2	甕	明赤褐	5YR5/6	赤褐	5YR4/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ		裏面スス痕
	11	D区SC2	高坏	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	裏面丹塗り
	12	D区SK1	甕	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	長石・石英	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	13	D区SK1	甕	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	14	D区SK1	甕	橙	2.5YR7/6	にぶい橙	5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	15	D区SK1	甕	明赤褐	2.5YR5/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	両面丹塗り
	16	D区SK1	甕	灰黄	2.5YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	17	D区SK1	甕	明褐灰	7.5YR7/2	灰白	10YR8/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	18	D区SK1	甕	赤	10YR5/8	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	表面一部剥落
	19	D区SK1	壺	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英	口縁部	ナデ	ナデ	両面丹塗り？
	20	D区SK1	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・しぼり	表面丹塗り
	21	D区Pit18	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ツメ痕	ヨコナデ	
第30図	22	D区SK2	甕	明赤褐	2.5YR5/2	明赤褐	5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	23	D区SK2	壺	赤褐	2.5YR4/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・しぼり	両面丹塗り
	24	D区SK2	甕	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	25	D区SK2	甕	橙 暗赤灰	2.5YR6/8 2.5YR3/1	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	26	D区SK2	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	27	D区SK2	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	28	D区2層	?	にぶい黄橙	10YR7/4	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	?			板付Ⅱ式
	29	D区3層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	30	D区4層	甕	橙	5YR7/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ハケメ・ナデ	表面一部剥離
	31	D区4層	甕	橙	7.5YR6/6	黒褐	10YR3/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	両面スス痕
第32図	1	E区4層	甕	橙	5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	板付Ⅱ式
	2	E区4層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	板付Ⅱb式
	3	E区4層	甕	黒	2.5Y2/1	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片			板付Ⅱb式
	4	E区4層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ヘラミガキ	ナデ	板付Ⅱ式
	5	E区4層	甕	褐灰	10YR6/1	暗灰	N3/0	長石・石英・金雲母	口縁部片			板付Ⅱ式
	6	E区4層	?	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母		ハケメ・ナデ	ナデ	板付系(突帯文土器)
	7	E区4層	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母		ハケメ・ナデ・沈線	ナデ	板付系
	8	E区4層	?	黒	2.5Y2/1	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母		ハケメ・ナデ・沈線	ハケメ・ナデ	板付Ⅱ式
	9	E区4層	壺	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英(多)・金雲母	口縁部片			板付Ⅱ式
	10	E区4層	壺	明黄橙	10YR7/6	灰	5Y5/1	長石・石英（多）	胴部	ナデ	指押さえ	板付Ⅱb式

第７表　高元地区出土遺物観察表③

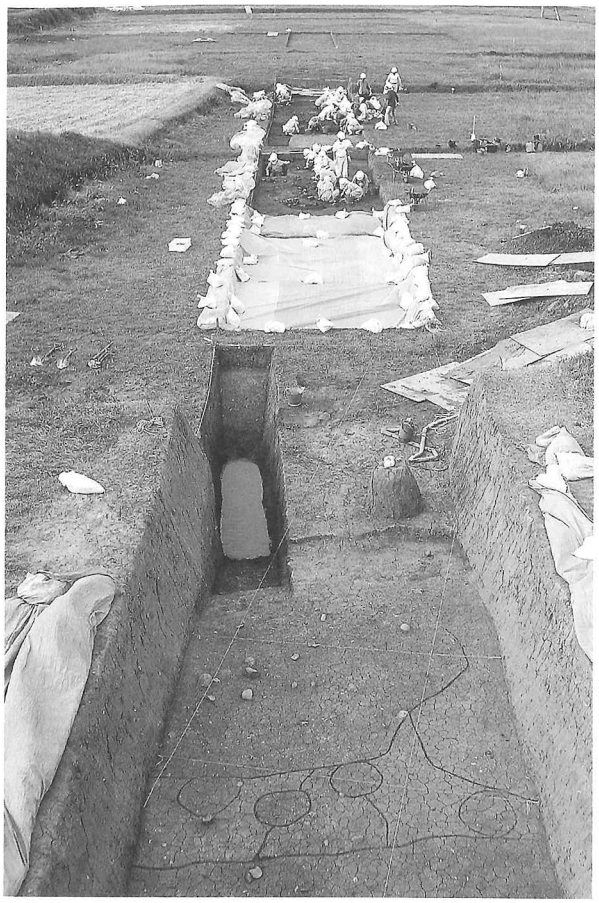
報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
	11	E区３層	甕	灰褐	5YR5/2	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	12	E区３層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	13	E区４層	壺	にぶい橙	7.5YR7/3	橙	2.5YR7/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・指押さえ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	14	E区４層	甕	橙	7.5YR6/8	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	15	E区３層	甕	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	16	E区４層	甕	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ	ナデ	
	17	E区４層	壺	浅黄橙	10YR8/4	褐灰	10YR5/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ・キザミ	ナデ	
	18	E区３層	甕	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ	表面一部剥離
	19	E区３層	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
	20	E区３層	甕	にぶい黄褐	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ナデ	ナデ・指押さえ	両面スス痕
	21	E区４層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい褐	7.5YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
	22	E区３層	甕	灰褐	7.5YR4/2	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	表面一部剥離
	23	E区３層	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	24	E区３層	甕	にぶい橙	5YR6/4	灰褐	5YR4/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	両面スス痕
	25	E区４層	甕	灰褐	5YR4/2	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ		裏面風化
	26	E区４層	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ	
第33図	27	E区３層	甕	灰黄褐	10YR6/2	灰白	2.5Y8/1	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ナデ	指押さえ・ハケメ	
	28	E区SC１	甕	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ハケメ・指押さえ	ハケメ・ナデ・指押さえ	両面丹塗り？両面スス痕
	29	E区３層	甕	にぶい橙	5YR7/3	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ハケメ・指押さえ	ナデ	表面スス痕
	30	E区３層	甕	褐灰	10YR5/1	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	31	E区３層	甕	橙	5YR7/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	32	E区３層	甕	浅黄橙	7.5YR8/4	灰黄褐	10YR5/2	長石・石英・金雲母	口縁～底部	ヘラケズリ・ナデ	ヘラケズリ・ヘラナデ・指押さえ	
	33	E区３層	甕	灰褐	7.5YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁～底部	ナデ・ハケメ	ケズリ・ナデ・指押さえ	
	34	E区３層	壺	橙	5YR7/6	橙	2.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁～胴部	ナデ	ナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ	
	35	E区４層	壺	にぶい橙	5YR7/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	指押さえ・ナデ		
	36	E区３層	壺	淡橙	5YR8/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母（少）	口縁～底部	ナデ	ケズリ・ナデ	両面丹塗り
	37	E区４層	壺	浅黄橙	7.5YR8/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ	指押さえ	
	38	E区４層	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁～底部	ナデ	指押さえ	
	39	E区４層	壺	灰白	2.5Y8/2	淡黄	2.5Y8/3	長石・石英・金雲母	口頸部	ケズリ・ナデ	ナデ・指押さえ	
第34図	40	E区４層	高坏	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	41	E区３層	甕	にぶい橙 黒褐	5YR6/4 5YR3/1	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	両面丹塗り
	42	E区３層	甕	赤	10YR5/8	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	底にスス痕
	43	E区４層	壺	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	ヘラ押さえ・指押さえ	
	44	E区３層	甕	明赤褐	2.5YR5/8	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	45	E区３層	甕	赤 暗赤灰	10R5/8 10R3/1	赤	10R5/8	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ナデ	
	46	E区４層	甕	にぶい橙	5YR7/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	
	47	E区４層	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部		ヨコナデ・指押さえ	
	48	E区３層	？	黒褐	10YR3/1	灰黄	2.5Y7/2	石英（細）	胴部片			瓦質土器
	49	E区３層	器	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	長石	口縁部片	回転ナデ調整	指押さえ・回転ナデ調整	楽浪系土器
第37図	1	F区３層	甕	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	板付Ⅱb式
	2	F区３層	甕	浅黄橙	10YR8/4	黄橙	10YR8/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ・ハケメ	板付Ⅱb式
	3	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ・沈線	ハケメ・ナデ	板付Ⅱb式
	4	F区３層	甕	にぶい黄橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	胴部片	ハケメ・ナデ・沈線	ナデ・ハケメ	板付Ⅱb式
	5	F区３層	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	胴部片	ナデ・ハケメ・沈線	ナデ	板付Ⅱb式
	6	F区３層	壺	明褐	5YR5/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	頸部片	ナデ・ヘラガキ・沈線・鋸状文	ナデ	板付Ⅱb式
	7	F区３層	壺	浅黄橙	10YR8/2	褐灰	10YR5/1	長石・石英・金雲母	頸部片	ナデ・沈線（縦横）	指押さえ	板付Ⅱb式
	8	F区３層	甕	橙	2.5Y6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	9	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰 にぶい橙	7.5YR4/1 7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	10	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	11	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	12	F区３層	甕	赤褐	2.5YR4/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英	口縁部	ナデ・ハケメ	指押さえ・ナデ	
	13	F区３層	甕	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・ヘラナデ・指押さえ	
	14	F区３層	甕	赤橙	10R6/8	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	15	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	16	F区３層	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	17	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	7.5YR8/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	18	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	19	F区３層	甕	明赤褐	2.5YR5/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	20	F区３層	壺	にぶい黄橙	10YR7/3	明褐灰	7.5YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	21	F区３層	壺	橙	5YR7/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	両面丹塗り
	22	F区３層	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	両面丹塗り
	23	F区３層	高坏	橙	2.5YR6/8	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	脚部～杯部	ナデ・ハケメ		両面丹塗り・一部剥落
	24	F区３層	器台	橙	5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	完形	ヘラナデ・ナデ・指押さえ	ナデ・ヘラナデ	
	25	F区３層	器台	橙	5YR6/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	完形	ナデ・指押さえ・ハケメ	ナデ・ハケメ	
	26	F区３層	器台	灰黄	2.5YR7/2	灰黄	2.5YR6/2	長石・石英・金雲母	完形	指押さえ	指押さえ・ナデ	
	27	F区３層	壺	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	28	F区３層	壺	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・キザミ・沈線２条	ハケメ・ナデ	瀬戸内系
	29	F区３層	壺	橙	5YR7/8	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	表面丹塗り
	30	F区３層	甕	赤褐	2.5YR4/6	赤褐	2.5YR4/8	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	31	F区３層	甕	橙	2.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	ナデ・指押さえ	
第38図	32	F区３層	甕	橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	完形	指押さえ・ナデ・ケズリ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	33	F区３層	甕	にぶい赤褐	2.5YR5/3	赤橙	10R6/6	長石・石英・金雲母	底部～口縁部	指押さえ・ナデ	ハケメ・指押さえ	
	34	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ・指押さえ	
	35	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英	底部	ケズリ・ナデ	ハケメ・指押さえ	
	36	F区３層	甕	にぶい橙	5YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部～底部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ・ナデ	底部スス痕
	37	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ・指押さえ	表面スス痕・一部欠損
	38	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR7/3	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	底部～口縁部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ・ナデ	
	39	F区３層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	指押さえ・ハケメ・ナデ・ケズリ	指押さえ・ナデ	
	40	F区３層	甕	にぶい橙	5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	41	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母（多）	口縁部	ハケメ・ナデ・ケズリ	ナデ・ハケメ・ナデ消し	
	42	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	43	F区３層	甕	灰黄褐	10YR6/2	浅黄橙	10YR8/3	長石・石英	口縁部	ハケメ・指押さえ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	44	F区３層	甕	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・指押さえ・ナデ	ハケメ・ナデ・指押さえ	表面一部剥落
	45	F区３層	甕	橙	2.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ	
	46	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ・指押さえ	表面一部剥落
	47	F区３層	甕	にぶい黄橙	10YR7/4	黄灰	2.5Y6/1	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ・指押さえ	
	48	F区３層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ	ハケメ	
	49	F区３層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ	ナデ・指押さえ	
	50	F区３層	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ・指押さえ	ハケメ・指押さえ	
第39図	51	F区３層	甕	橙	5YR6/8	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ・指押さえ	表面スス痕，一部欠損
	52	F区３層	甕	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR7/3	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ・指押さえ	裏面スス痕
	53	F区３層	壺	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部～底部	ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	54	F区３層	壺	橙 明褐灰	5YR6/6 7.5YR7/2	橙 にぶい黄橙	7.5YR6/6 10YR7/2	長石・石英 長石・石英・金雲母	口縁部 底部～胴部	ナデ ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ ハケメ・指押さえ	胴部欠損，表面スス痕
	55	F区３層	壺	橙	7.5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ハケメ	

第8表　高元地区出土遺物観察表④

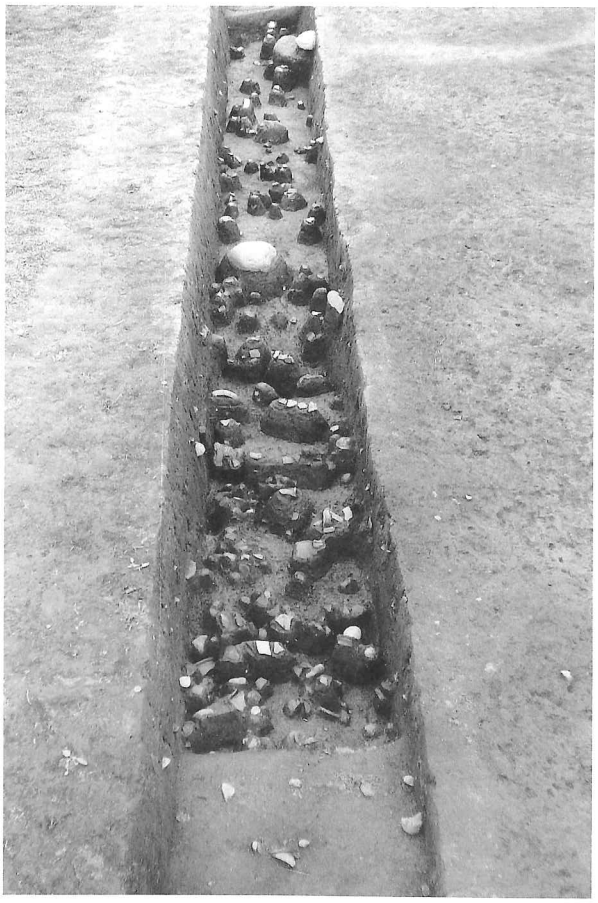
報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
	56	F区3層	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英	口縁部～胴部	ハケメ・指押さえ・ナデ・横撫文	ハケメ・ナデ	口縁部一部欠損
	57	F区3層	壺	にぶい赤褐	5YR4/4	黒褐	5YR3/1	長石・石英・金雲母	口縁部～底部	ナデ・ハケメ	ハケメ・指押さえ・ナデ	表面丹塗り
	58	F区3層	壺	にぶい黄橙	10YR6/3	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ	表面スス痕・表面一部剥落
	59	F区3層	壺	明赤褐	2.5YR5/8	黒	2.5YR1.7/1	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ		裏面スス痕
				明赤褐	5YR5/8	黒	5YR1.7/1	長石・石英・金雲母	胴部		指押さえ	
	60	F区3層	壺	にぶい橙	5YR7/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ	
	61	F区3層	鉢	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～胴部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	62	F区3層	高坏	橙	7.5YR6/6	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部～脚部	ナデ・ヘラガキ	しぼり	裏面一部剥落
	63	F区3層	高坏	橙	7.5YR7/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ	両面丹塗り
	64	F区3層	高坏	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部～脚部	暗文風ヘラミガキ	ハケメ	表面一部スス痕・脚部穿孔
	65	F区3層	高坏	橙	5YR6/8	明褐	7.5YR5/6	長石・石英・金雲母	底部～脚部	ハケメ・ヘラミガキ	しぼり・ハケメ・ナデ	脚部穿孔
第40図	66	F区Pit12	甕	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	67	F区Pit13	甕	赤	10Y5/8	赤	10R5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	指押さえ・ナデ	表面丹塗り
	68	F区Pit14	甕	灰白	10YR8/2	灰白	2.5Y7/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ・ハケメ	ナデ	
	69	F区Pit16	甕	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ハケメ	ナデ	
	70	F区Pit17	高坏	にぶい橙	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	71	F区Pit13	甕	にぶい橙	7.5YR7/3	褐灰	10YR4/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ヘラナデ・ナデ	ナデ・指押さえ	表面丹塗り
	72	F区Pit17	鉢	橙	2.5YR6/8	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	ナデ・ハケメ	ヘラ押さえ	両面丹塗り
	73	F区2層	鉢？	灰	N4/	灰白	N7/	金雲母	口縁部	ロクロによる回転ナデ調整	ロクロによる回転ナデ調整	楽浪系土器
	74	F区3層	壺	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	金雲母	口縁部	ロクロによる回転ナデ調整	ロクロによる回転ナデ調整	楽浪系土器
	75	F区3層	壺	灰白	5Y7/1	灰	5Y5/1	金雲母	口縁部	回転ナデ調整・わずかなタタキ	回転ナデ調整・わずかなタタキ	楽浪系土器
	76	F区表土	？	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	金雲母	胴部片	タタキ・沈線	当て具痕・ナデ	瓦質土器
	77	F区3層	？	黒褐色	10YR3/1	暗灰	N3/	石英	胴部片	タタキ・沈線	ナデ	瓦質土器
第43図	1	G区SK1	甕	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・指押さえ	指押さえ・ナデ	
	2	G区SK1	甕	にぶい黄橙	10YR4/3	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	3	G区4層	甕	橙	5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ	指押さえ・ナデ	
	4	G区4層	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	5	G区4層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	6	G区4層	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	7	G区4層	壺	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	
	8	G区4層	壺	橙	5YR6/8	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	9	G区4層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
	10	G区4層	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	
	11	G区4層	甕	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	12	G区Pit17	高坏	明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ	ナデ	両面丹塗り
	13	G区Pit17	壺	橙	5YR6/8	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	両面丹塗り
	14	G区4層	甕	橙	5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ツメ痕	ナデ	
	15	G区4層	壺	にぶい橙	7.5YR7/4	褐灰	7.5YR5/1	長石・石英・金雲母	底部	指押さえ・ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	16	G区Pit33	高坏	橙	2.5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英	口縁部片	ナデ	ナデ	頂部に穿孔
	17	G区Pit33	壺	橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・キザミ	ナデ・ハケメ	
	18	G区Pit34	高坏	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	裏面一部剥落
	19	G区Pit35	器台	橙	2/5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	20	G区Pit35	高坏	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	21	G区Pit38	壺	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	22	G区Pit39	壺	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	23	G区Pit39	甕	橙	5YR7/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	24	G区Pit44	甕	赤橙	10R6/8	赤橙	10R6/6	長石・石英	口縁部片	ナデ	ナデ	
	25	G区Pit44	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ハケメ	ナデ	
	26	G区Pit44	高坏	にぶい橙	7.5YR7/3	灰褐	7.5YR5/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	27	G区Pit44	台付鉢			にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	ハケメ	
	28	G区2層	甕	灰色	H4/1	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英（多）	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	板付式
	29	G区4層	壺？	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	頸部	沖文		
第45図	1	H区4層	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ	頂部スス痕
	2	H区3層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	灰黄橙	10YR5/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ・指押さえ	ナデ・指押さえ	頂部スス痕
	3	H区3層	甕	にぶい赤褐	5YR5/4	褐	7.5YR4/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	
	4	H区4層	壺	赤褐	2.5YR4/8	赤褐	2.5YR4/8	長石・石英・金雲母	口縁部		指押さえ・ナデ・しぼり	両面丹塗り
	5	H区4層	壺	にぶい橙	5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	6	H区3層	壺	橙	5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	7	H区3層	壺	橙	2.5YR6/6	にぶい橙	5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・指押さえ	ナデ・ハケメ・指押さえ	底面スス痕
	8	H区3層	高坏	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	9	H区3層	壺	灰白	10YR7/1	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ(ヘラ)・指押さえ		
	10	H区3層	高坏	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	11	H区3層	高坏	橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	脚部	指押さえ・ハケメ・ナデ	ヘラナデ	両面丹塗り
	12	H区3層	高坏	橙	5YR6/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ・ハケメ		
	13	H区3層	器台	にぶい橙	5R6/4	にぶい橙	5R6/4	長石・石英・金雲母	脚部	指押さえ・ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ	一部欠損
	14	H区3層	鉢	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	ハケメ・指押さえ・ケズリ	ハケメ・指押さえ・ナデ	両面スス痕
	15	H区3層	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい橙	7.5Y7/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	16	H区3層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・指押さえ	指押さえ	
	17	H区3層	鉢	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰	7.5YR4/1	長石・石英・金雲母	底部片	ハケメ・ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	
	18	H区3層	甕	橙	5YR6/6	明褐灰	7.5YR7/2	長石・石英・金雲母	底部片	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
	19	H区3層		にぶい黄褐	10YR5/3	黒褐	10YR3/2	長石・石英(多)・金雲母	胴部片	ナデ・キザミ	ナデ	発掘文系
	20	H区4層	甕	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	石英（多）	口縁部		指押さえ	無文土器(楽浪ライプ)・表面剥落
第46図	1	I区SK1	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	2	I区3層	甕	橙	2.5YR6/8	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	3	I区3層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	4	I区3層	壺	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	5	I区3層	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	6	I区3層	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	7	I区3層	甕	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	8	I区3層	甕	橙	5YR6/6	灰褐	7.5YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	
	9	I区4層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	10	I区4層	甕	明赤褐	2.5YR5/6	赤黒	2.5YR2/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	11	I区4層	鉢脚部	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ	ナデ・指押さえ	表面丹塗り,頂部穿孔2箇所
	12	I区3層	壺	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ	
	13	I区3層	甕	灰褐	7.5YR6/2	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ハケメ・指押さえ	
	14	I区3層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	指押さえ・ナデ	ナデ・指押さえ	
	15	I区3層	壺	灰白	2.5Y8/2	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ・ハケメ	ナデ・ハケメ	
	16	I区3層	壺	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	キザミ・ナデ		一部剥落
	17	I区3層	高坏	橙	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	18	I区3層	器台	にぶい橙	7.5YR7/4	褐灰	7.5YR4/1	長石・石英・金雲母	脚部	指押さえ・ハケメ	ハケメ・ヘラナデ	
	19	I区3層	器台	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	ナデ・ハケメ・しぼり	
	20	I区3層	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	底部	指押さえ・ナデ	指押さえ	
	21	I区3層	壺	赤橙	10R6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	
	22	I区3層	甕	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	23	I区3層	甕	灰黄橙	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
	24	I区3層	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ケズリ	ヘラナデ・指押さえ・ナデ	
	25	I区3層	？	にぶい黄橙	10YR7/2	黒褐	10YR3/1	長石・石英・金雲母	胴部片	3条の沈線		縄刻土器
	26	I区1層	鉢	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	金雲母（精良）	口縁部片	ロクロによる回転ナデ調整	ロクロによる回転ナデ調整	楽浪系土器
	27	I区3層	鉢	黄灰	2.5Y5/1	にぶい黄橙	10YR7/2	金雲母（精良）	口縁部片	ロクロによる回転ナデ調整	ロクロによる回転ナデ調整	楽浪系土器

図　　版

図版 6



高元地区調査区近景（南→北）



E 区遺物出土状況（南→北）

F 区遺物出土状況（南→北）

A 区完掘状況
（南→北）

B 区出土銅鏃

B 区出土刀子

図版 8

B 区出土銅釧

C 区北端土層（西壁）

D 区遺物出土状況
（SK 1 ）

E 区遺物出土状況

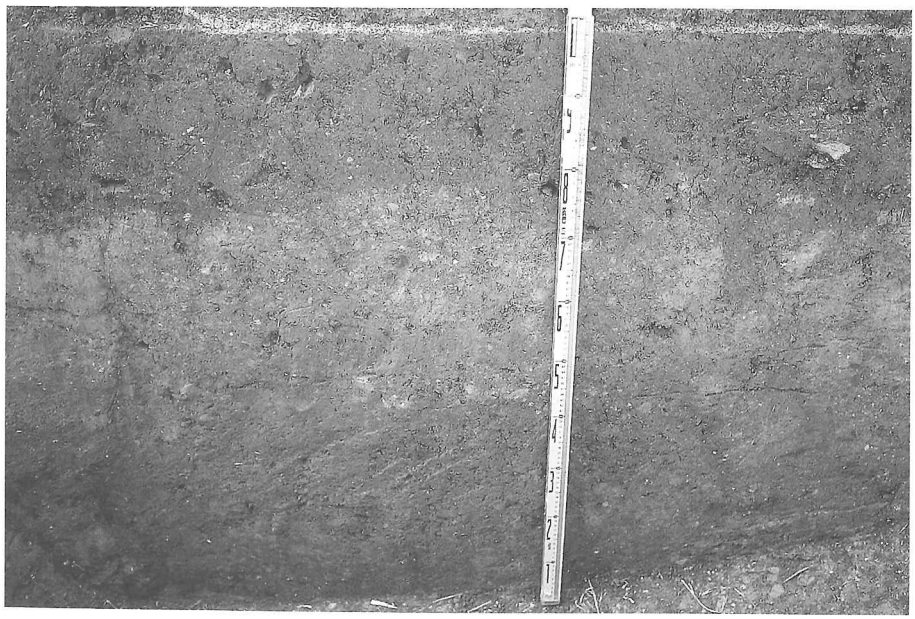
F 区北端遺物出土状況

G 区ピット掘り下げ風景

図版10

H区出土青銅製鋤先

H区環濠検出状況



I区貯蔵穴(SK1)断面

3．石田高原地区の調査

(1) 調査概要

石田高原地区は，集落が乗る低台地の東側低地部に相当する。この地域は，平成５年度の幡鉾川総合整備事業に伴う発掘調査によって先鞭が付けられた。この調査により，原の辻遺跡が多重の環濠をめぐらず巨大環濠集落であることが判明するとともに，東側から集落に至る道路状遺構の発見など，重要遺構の発見が相次いだ。しかし，この調査は低台地の縁辺部分を中心に実施したもので，東側への遺構群の展開には不明な点が多かった。そこで，平成14年度以降の調査研究事業では，石田高原地区を対象に，東側への遺構群の展開および環濠群のつながりを把握することを目的として，継続的に発掘調査を実施している。

本年度の調査区は，低台地の北東低地部に設定した（**第２図**）。平成５年度の調査で５号溝とした環濠が検出された地点で，この調査区の東側に隣接して，南北20m，東西40mの調査区を設定した（**第50図**）。調査面積は700㎡である。この調査区を東西に３つに分け，西側からＡ区・Ｂ区・Ｃ区とした。

また，平成２年の災害復旧に伴う緊急発掘調査の際，平成５年度検出の５号溝よりも西側（低台地側）の壁面で，弥生時代中期～古墳時代前期の大量の土器に伴って，環濠らしき土層の落ち込みを確認しており，この延長上と推定される地点にＤ区～Ｆ区まで３カ所の調査区を設定した（**第50図**）。

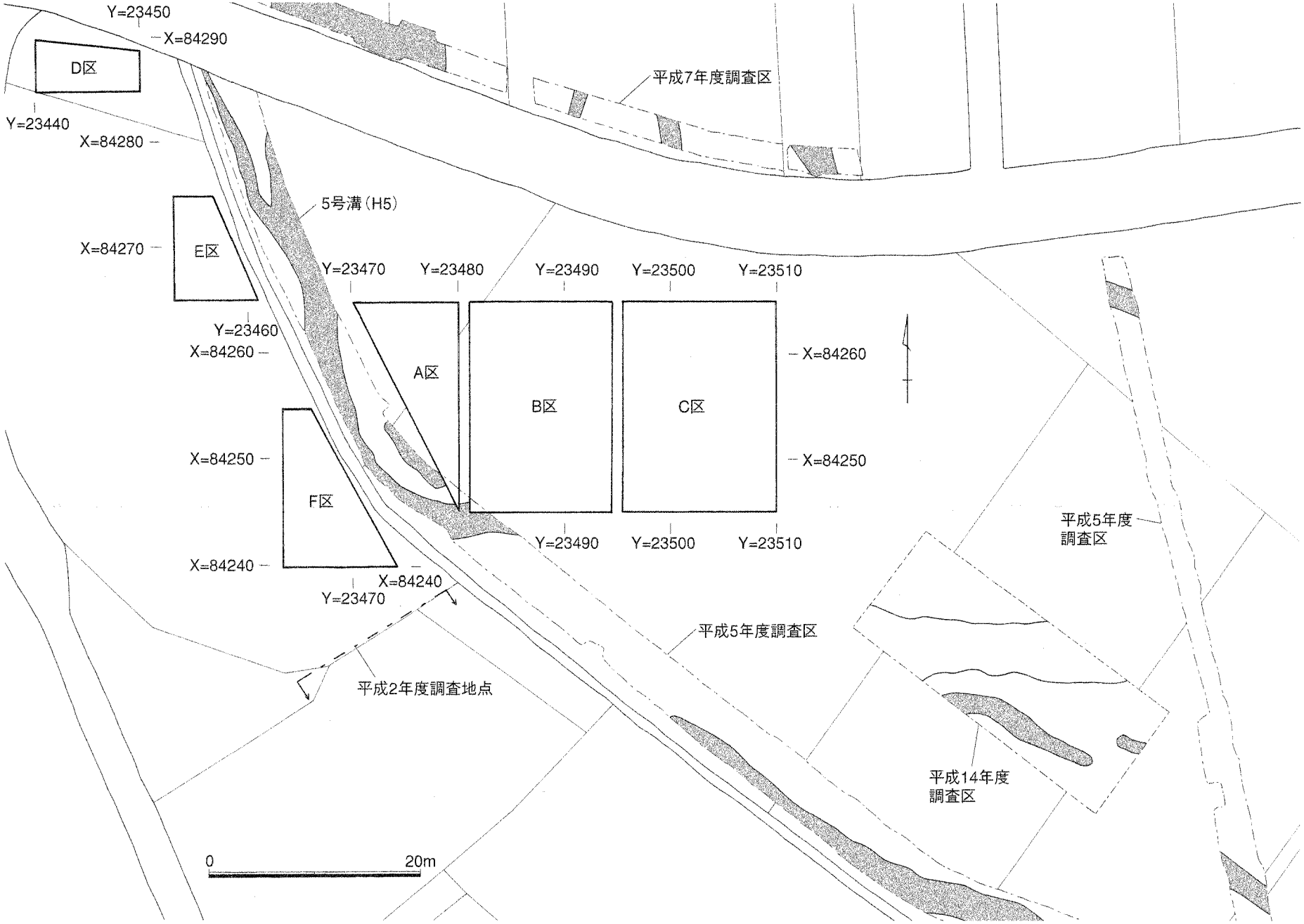
Ｄ区は調査面積45㎡で，北端部における環濠の展開を検討した。特に，現状での低丘陵先端部付近に位置していることから，この丘陵の北端を迂回して西側低地の環濠群とつながる遺構の検出が期待された。そこで現在の低丘陵に対して環濠がどのようにめぐるのかを探るために設定した。

Ｅ区は平成５年度検出５号溝の西側に隣接して設定した。面積は60㎡である。平成２年の発掘調査により壁面で検出した環濠の展開を探ることを目的とした。

Ｆ区は，平成２年の調査で確認した環濠の北側に隣接する地点に設定した。また，この地点は平成５年度検出の５号溝が西側に大きく蛇行する地点に相当し，５号溝の西側ラインの検出と平成２年検出環濠との関連を探ることを目的とした。調査面積は105㎡である。

その結果，Ａ区～Ｃ区およびＦ区で環濠を検出した。Ａ区～Ｃ区では，低台地の裾に沿って４条の環濠を検出した。また，この環濠埋没後に礫群が大量に投げ込まれていることを確認したが，８～９世紀以降の新しい時期の遺構であることが分かった。Ｆ区では，南東隅で環濠の一部を検出した。弥生時代中期中葉の土器がまとまって出土し，平成２年検出環濠や平成５年度検出５号溝と時期的に合致することから，両環濠の合流地点と考えられた。Ｄ区およびＥ区では遺構が検出されなかったが，とくにＤ区で遺構が検出されなかったことは，弥生時代の低台地北端部が現状よりも北側に伸びていた可能性を示唆するものであった。

以下，調査区毎に報告を行い，遺構群のつながりや時期別の変遷についてまとめることにする。



第50図　石田高原地区調査区位置図（S＝1/500）（▒これまでの調査で検出した遺構群）

(2) 調査区ごとの成果

・A区～C区

先述の通り，A区～C区では4条の環濠を確認した（**第51図**）。検出順にSD1・SD3・SD4・SD5である。SD2はA区南西隅で検出した溝状遺構であるが，後述するトレンチ調査でSD3と同一であることが明確になったため，SD3とした。遺構の検出状況は，C区SD1については帯状に伸びる明確な遺構として判断できたが，A区・B区のSD3～SD5については，環濠検出レベルよりも上位に礫群が密に堆積しており，環濠検出には困難を極めた。また，遺構検出面も旧水田面で足跡状のシミが面的に広がる状況で，環濠の面的な広がりを明確に捉えることはできなかった。そこで，環濠が伸びるものと推測された地点にトレンチを設け，岩盤層まで掘り抜いて土層断面で環濠を確認することにした。設置箇所は，A区SD3・SD4を断ち割る**トレンチA**，トレンチAを東側に延長しB区に設定した**トレンチB**，A区SD4を断ち割る**トレンチC**，B区SD3・SD5を断ち割る**トレンチD**，C区SD3を断ち割る**トレンチE**である（**第51図**）。遺構の詳細を報告する前に，調査区の基本土層および各トレンチ内土層について説明を加える。

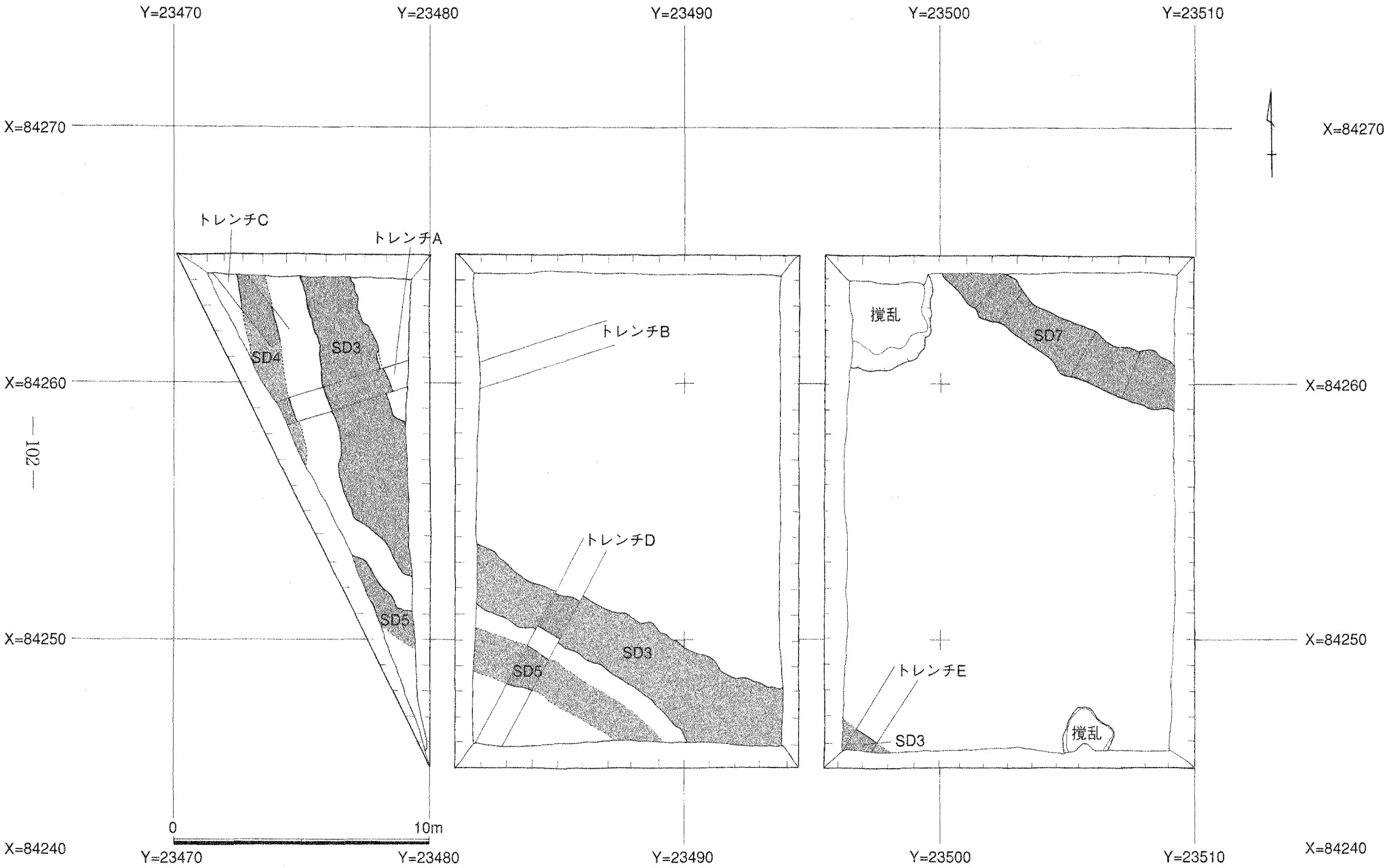
①基本土層およびトレンチ内土層（第52図・第53図）

A区～C区は，現地表面から約1mほどの深さまで近年の造成土が堆積する（**第52図**）。この層は黄褐色系の色調で，拳大から人頭大の礫を多く含む。平成5年度の調査終了後，水はけの悪さから土を造成したことを聞き取り調査で確認しており，その際の堆積物であろう。B区とC区の北側境界付近は1層が2m以上にわたって厚く堆積し，遺構検出面よりも下位まで伸びている。この部分については大きな削平を受けたものと考えられる。

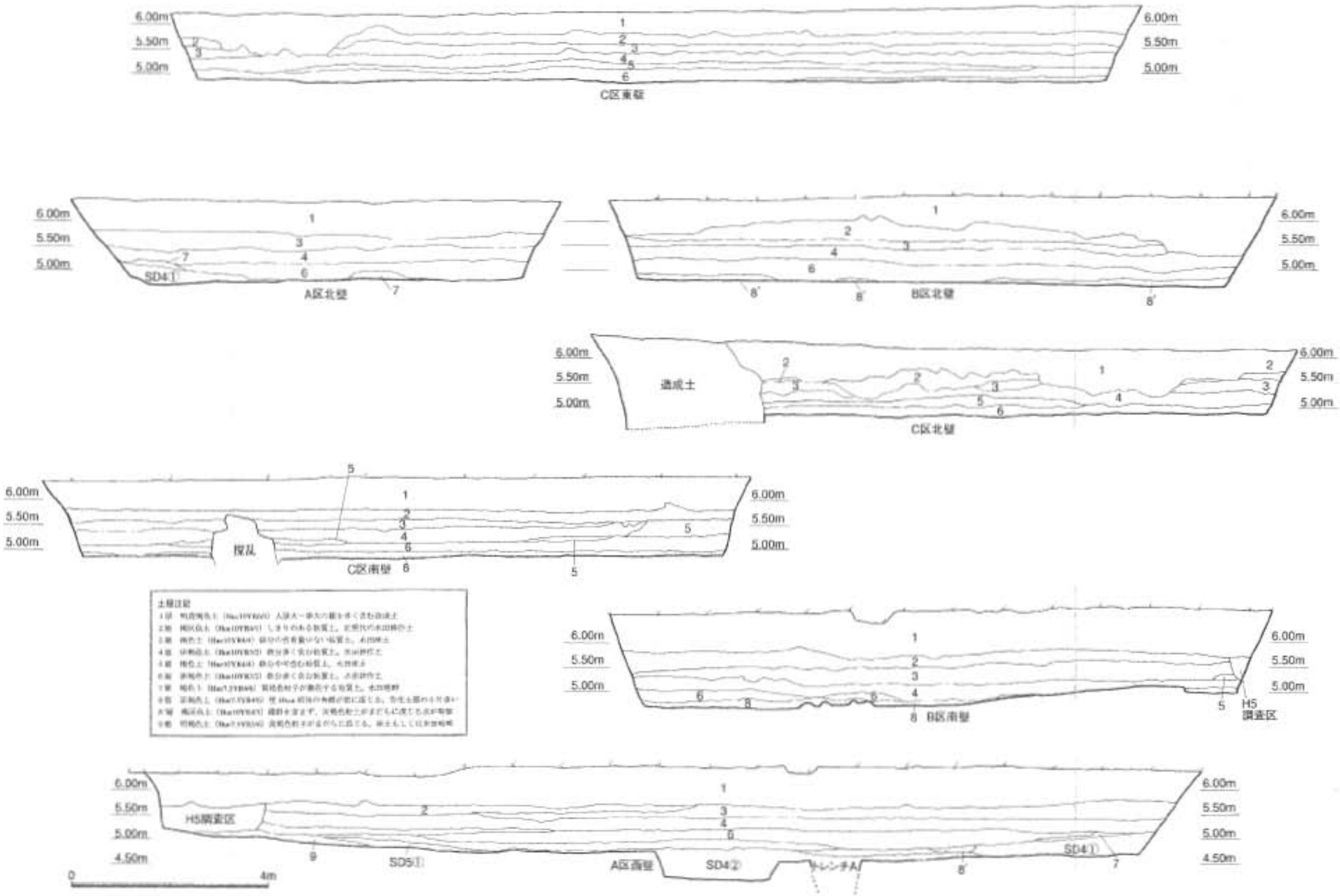
2層以下については，基本的に古代から近現代の水田面および床土で構成される。水田面は鉄分を多く含む赤褐色系の粘質土であるのに対して，床土は黄褐色系粘質土で鉄分の混入が少ない。2層から7層にかけてこれらの土層が交互に堆積しており，床土の堆積状況から水田畦畔と考えられるものも存在する。時期は明確にできないものの，少なくとも4枚の水田面が確認できる。いずれも弥生時代の遺構よりも上位に堆積する水田面であり，弥生時代に遡る水田面は確認できなかった。

8層は礫群である。A区全面およびB区南半部を中心に堆積していた。礫群は水磨を受けた円礫を中心に構成され，磨石・凹石・敲石に転用された石器も数多く含まれていた。また，石製支脚も相当数含まれており，土器も弥生時代中期～古墳時代前期を中心に数多く出土した。平成5年度調査時の所見でも環濠上層に礫群が堆積する様相が報告されていることから，当初弥生時代の遺構として調査を進めた。しかし，礫群に介在する弥生土器は小片が多く，接合する個体はほとんどないことや，遺物に鉄分が付着する例が多いことから，上位に堆積する水田面との関連が注目されることとなった。その後，出土遺物の整理か進む中で，8世紀～9世紀にかけての須恵器片が見つかり，これらの礫群は古代以降の新しい時期の遺構であることが判明した。

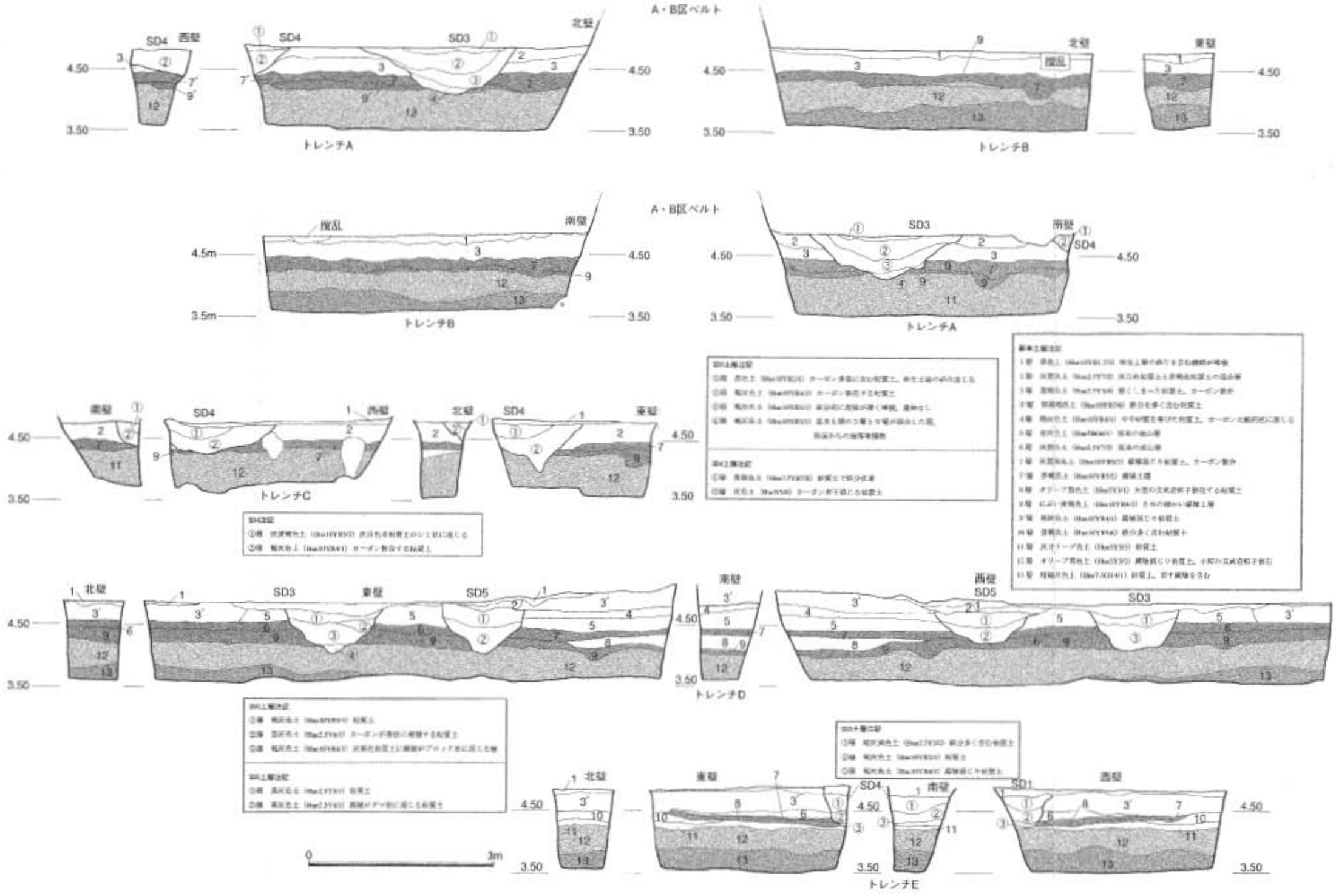
8層礫群の下位に弥生時代の環濠が存在するが，この環濠の堆積状況を確認するために5本のトレ



第51図　石田高原 A～C 区　遺構平面図（S＝1/200）



第52図　石田高原 A～C 区土層図（S＝1/80）



第53図　石田高原 A～C 区トレンチ内土層図（S＝1/60）

ンチを設定して調査を行った。**第53図**は各トレンチ内の土層図である。礫群と弥生時代環濠の関係は，トレンチDの成果を参考にすると，礫群の直下に灰白色粘質土（2層）および鉄分を多く含む明黄褐色粘質土（3’層）が堆積し，この2層を挟んで弥生時代の環濠が掘削されている。

環濠掘削以前の堆積層は，混入物の特徴から大きく3枚に分けられる（**第53図**）。最上層は黄褐色粘質土（3層）で，環濠はこの面から掘り込まれている。その下に堆積するのは腐植土層（7層・7’層・9層・9’層）である。トレンチE南側では，この腐植土層を二分するように粘質土（8層）が堆積する。ちなみに，トレンチE7層からは，後期旧石器時代のノッチドスクレイパーが1点出土している。腐植土層の下位には，腐植と粘質土の混合層（12層），さらに下には緑灰色砂質土（13層）が堆積して岩盤に達する。最下層に堆積する緑灰色砂質土は，B区北半～C区南半にかけて検出したものの，A区やB区の南端部など，当時の丘陵裾部分を考えられるところまでは分布していない。

環濠内覆土は，SD3・SD4・SD5は堆積状況が類似している（**第53図**）。褐灰色系の粘質土を主体に，下層に腐植混じりの粘質土が堆積するものである。したがって，これら3条の環濠は掘削時期・埋没時期ともほぼ同時期であった可能性が高い。

②各遺構の概要

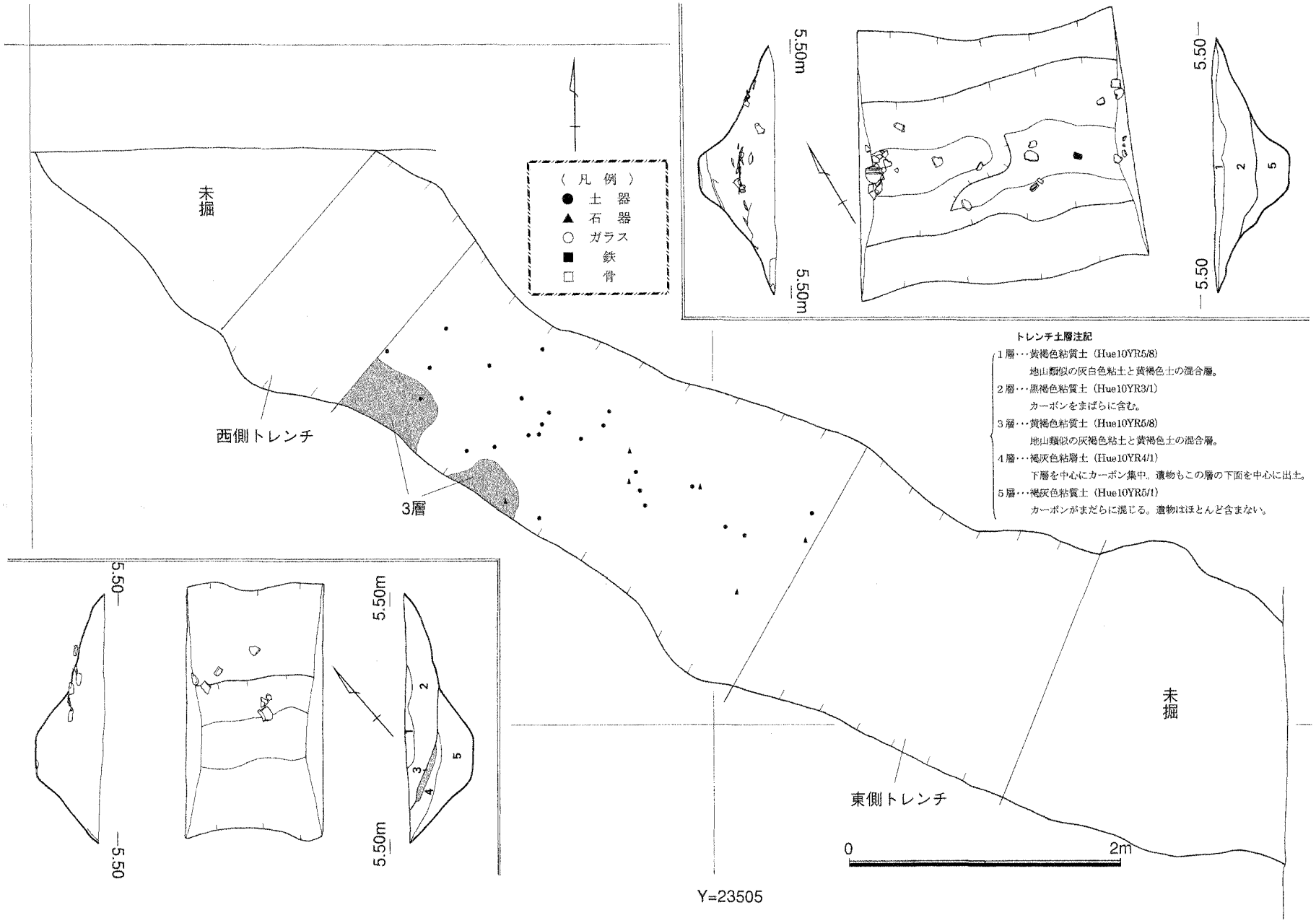
●SD1

C区北東隅で長さ約9mにわたって検出した（**第54図**）。幅2m，検出面からの深さ0.55mである。当初は，土層の堆積状況と床面の勾配を探るため，西側トレンチと東側トレンチの2カ所の調査を行ったが，西側トレンチで地山に類似した粘質土（3層）が検出され，土塁崩落土の可能性が考えられたため，両トレンチ間の1層および2層まで掘り下げ，3層の面的な広がりを確認することにした。

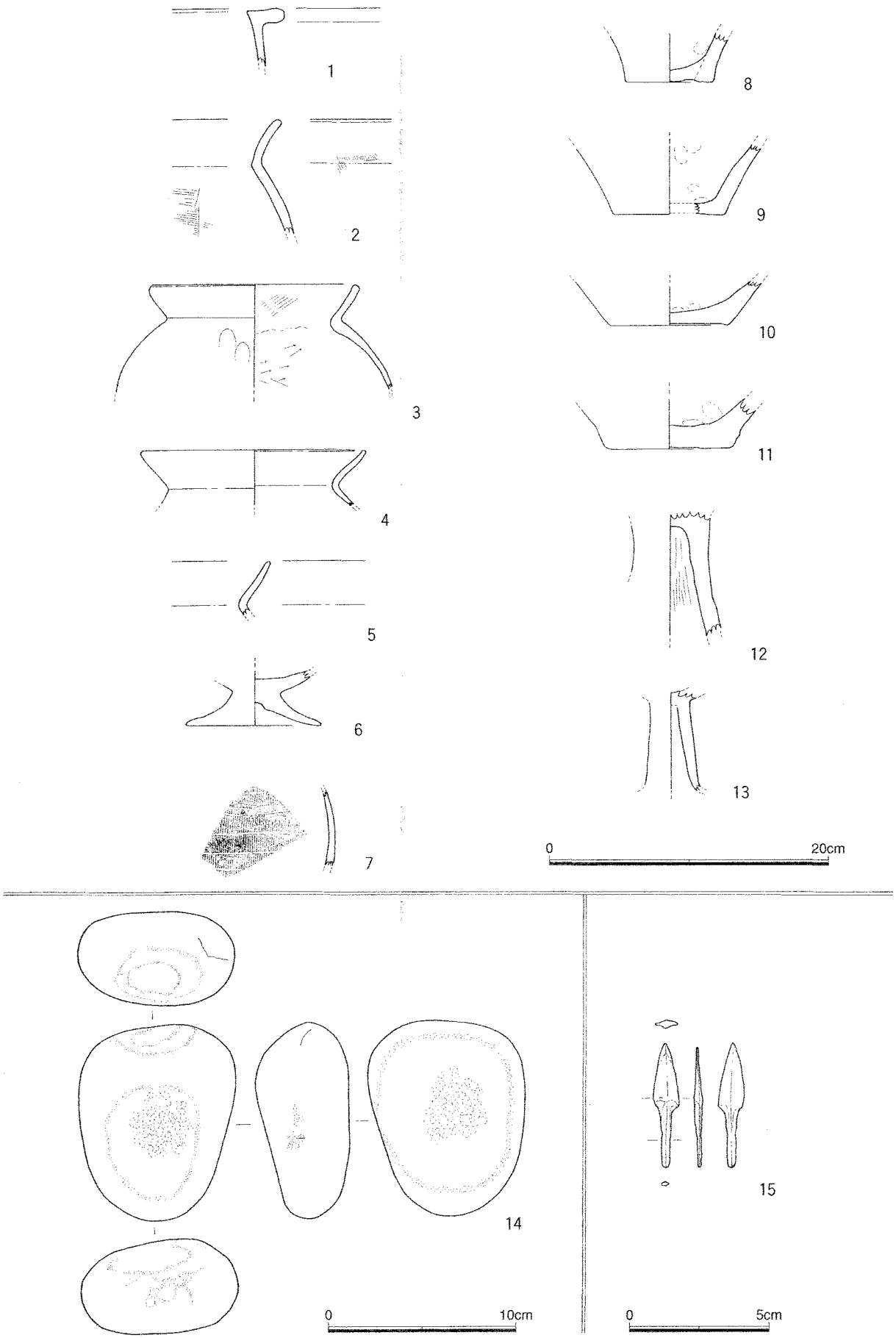
SD1の断面形は漏斗形で，土層上半は傾斜が緩やかであるが，土層下半は傾斜がきつくなっている。土層は5層で構成されるが，土層の堆積状況や遺物の出土状況から上下2枚に分けることができる。上層は1層および2層である。黄褐色系粘質土とカーボン混じりの黒褐色粘質土で構成される。遺物は，2層下面から古墳時代前期の遺物がまとまって出土している。

3層は無遺物層で，地山に類似した黄褐色粘質土である。東側トレンチでは確認できなかったものの，西側トレンチでは南側斜面から流れ込む形で堆積した状況を確認できた。原の辻遺跡では，西側低地部の調査でも同様の堆積状況が確認され，土塁の可能性が指摘されていたものの，面的な広がりを確認する調査は行われてこなかった。そこで，東西トレンチ間で3層の広がりを確認したところ，西側トレンチ東壁から約1.5m地点で途切れることを確認した（**第54図**）。厚さも10cm未満と非常に薄いことから，土塁の崩落堆積物ではなく環濠の掘肩が崩落して堆積した層と判断した。

下層は4層・5層が対応する。4層下層にカーボンが集中する箇所があり，この部分を中心に弥生時代中期の遺物が出土している。5層は遺物をほとんど含まなかった。



第54図　石田高原C区SD1　遺物出土状況（S＝1/40）



第55図　石田高原C区SD1出土遺物（S＝1/4，1/3，1/2）

このように，SD 1は弥生時代中期と古墳時代前期に掘削された環濠であることが明らかとなった。弥生時代中期に断面V字の環濠を掘削したものの埋没し，古墳時代前期には弥生時代中期の環濠よりも幅広に浅く掘り直したのものと考えられる。

第55図は，SD 1出土遺物である。**1**は小片であるが須玖Ⅰ式古段階のものか。下層から出土した。**2**は「く」の字口縁の甕である。内外面にハケメを残す。**3～5**は布留式の甕である。口縁部が内湾し，胴部内面にケズリが認められる。**6**は低脚の高坏もしくは台付鉢であろうか。胎土精良で丁寧な作りである。**7**は陶質土器である。縦方向の平行タタキの後横方向に沈線を5条巡らす。沈線はらせん沈線と推測される。**8～11**は底部片である。いずれもわずかに上げ底であるがほとんど平底に近く，底部の厚みも薄い。弥生時代中期後葉の土器群である。**12・13**は高坏脚部。**12**は厚みがあり内面にはシボリ痕をとどめており，弥生時代中期に属する。**13**は薄手で内面まで丁寧になでている。脚の下端部で外側に屈曲することから，古墳時代前期の高坏であろう。**14**は平坦面に敲打痕を残す敲石である。**15**は完形の銅鏃で，上層から出土した。薄手で関は斜め関。基部長と身部長の比率はほぼ1対1である。

●SD 3

A区～C区南西隅にかけて検出した（**第51図**）。幅2.5m・検出面からの深さ0.75mである。C区～B区にかけては南東から北西方向に伸びるが，A区では大きく北側に湾曲する。A区の最上層には，古墳時代の流路に特徴的な黒褐色土が浅く堆積していた（**第53図**）。時期の手がかりになる遺物の出土はみなかったが，土層の堆積状況からSD 4・SD 5とほぼ同時期と考えられることから，弥生時代中期～後期後葉にかけて環濠として機能し，古墳時代前期には大半が埋没するものの，浅い流路となっていたものと考えられる。

●SD 4

A区北西隅で検出した（**第51図**）。平面プランでは明確に環濠と判断できなかったが，トレンチC土層に基づけば，幅1.2m，検出面からの深さ0.46～0.74mと考えられる（**第53図**）。A区北側から南側に直線的に伸び，調査区外に抜けていくものと考えられる（**第51図**）。SD 4の南側での展開については，SD 4の堆積状況をB区SD 5土層と比較すると，両者が類似することから，SD 4はいったん調査区外に出るものの，南側でSD 5と接続するものと考えられる。

遺物は弥生時代中期中葉～古墳時代前期にかけての土器が出土している（**第57図29～48**）。**33**のような須恵器も出土しており，後世の攪乱を一部受けているものと考えられる。**29**は弥生時代後期前葉の甕で，胴部の一部を欠くもののほぼ全体形がうかがえる。「く」の字口縁で胴部は丸みを帯びつつ平底の底部に至る。胎土に金雲母を大量に含んでいる。**34**は弥生時代後期後葉～終末の器台である。口縁部および底部を欠く。全体的に厚みがあり，胴部上半で大きく開いて受け部となる。内外面ともハケメが残り，胴部内面にはシボリ痕も確認できる。**32**は弥生時代後期前葉の甕口縁部である。「く」

の字口縁で口縁直下に三角突帯を有するが，口縁部内面が突出しており，口縁部が二股に分かれているように見える。**41**は古墳時代前期の高坏脚部である。低脚で脚部下端は外側に大きく屈曲する。坏底部には焼成後の穿孔が認められる。直径３㎜と非常に細いことから，錐状の工具で穿孔したものと考えられる。なお，表裏とも丹塗りを施す。

●SD５

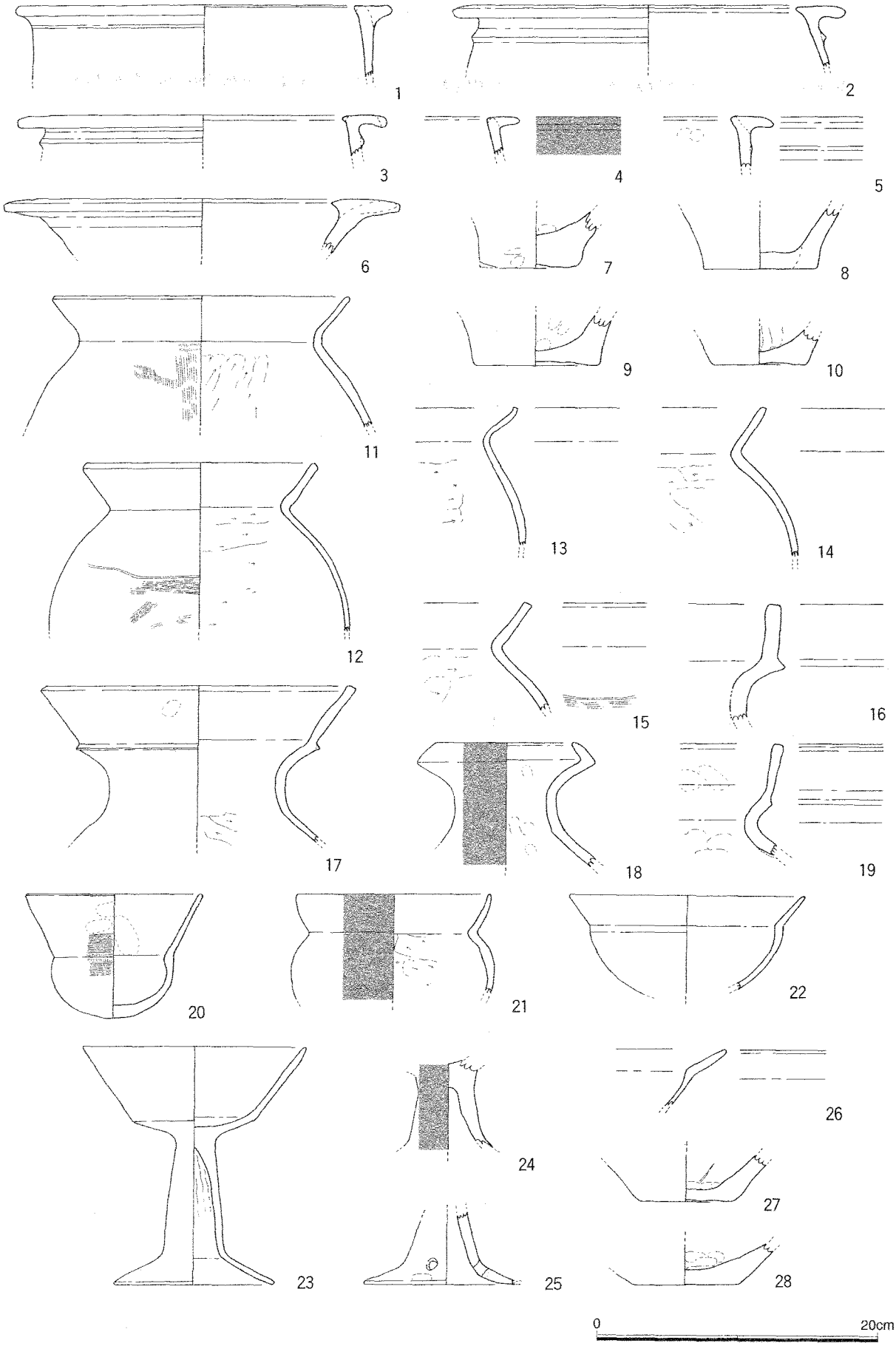
A区～B区にかけて検出した（**第51図**）。上部を礫群で覆われおり，A区については礫群を全て除去して平面プランを確認したものの，B区についてはトレンチD以外は礫群を除去しておらず，環濠の展開については未確認である。しかし，A区ではSD３と約１m前後の間隔を保って併走し，B区トレンチDの掘り込み部分でも同様の間隔であることから，SD３と同様，南東から北西に向けてB区を横断した後，A区にいたって北上するラインが想定できる。SD５は検出面で幅1.６m，深さ0.６８mである。

遺物はA区礫群除去後の環濠検出面を中心に大量に出土している（**第56図**）。弥生時代中期中葉～後葉（**１～10**）および古墳時代前期（**11～28**）の２時期が主体であるが，特に古墳時代前期の遺物は残りがよい。**12～15**は布留系の甕である。いずれも口縁部が内湾気味に立ち上がり，胴部内面にはケズリの痕跡が残る。胴部外面は上半がヨコハケ，下半がタテハケを基本とし，**12**のように波状沈線を巡らしたり，**13**のように沈線を意識した細いハケメを施すものもある。**16～19**は壷である。**18**は口縁部が内側に屈曲する袋状口縁壷で，外面には丹塗りを施す。**16・17・19**は山陰系の二重口縁壷である。**17**は口縁部と頸部の境に三角突帯を貼り付け，口縁部は外反する。頸部直下内面にはケズリの痕跡をとどめる。**20・21**は小型丸底壷である。**20**は胴部径に対して口縁部が大きく開き，胴部内面はケズリ調整である。**21**は丸みを帯びた胴部から，口縁部が内湾しながら短く立ち上がる。胴部内面はケズリ，外面はハケメ調整ののち丹塗りを施す。**23**は完形の高坏である。脚部は下端部付近で外側に屈曲し，坏部も底面から屈曲して立ち上がる。坏部は屈曲部以上が長く，結果として坏部自体も深くなる。調整は脚部内面にシボリの痕跡をとどめるものの，全体に丁寧なナデ調整で仕上げ，胎土もきめが細かく精良である。

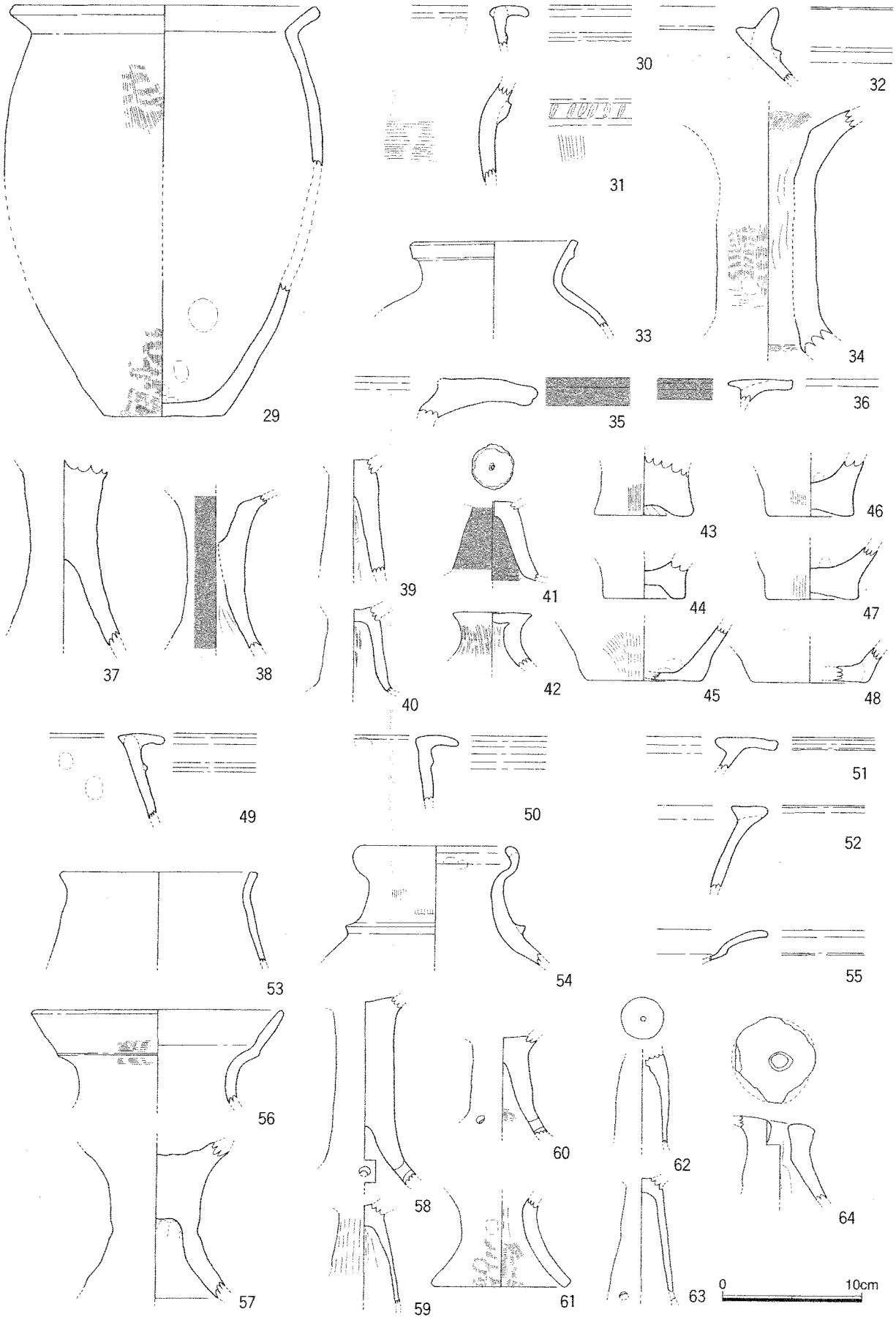
●礫群

礫群の特徴については，基本土層の項で述べたので割愛する。ここでは礫群出土遺物，特に石器・金属器を中心に説明を加える。

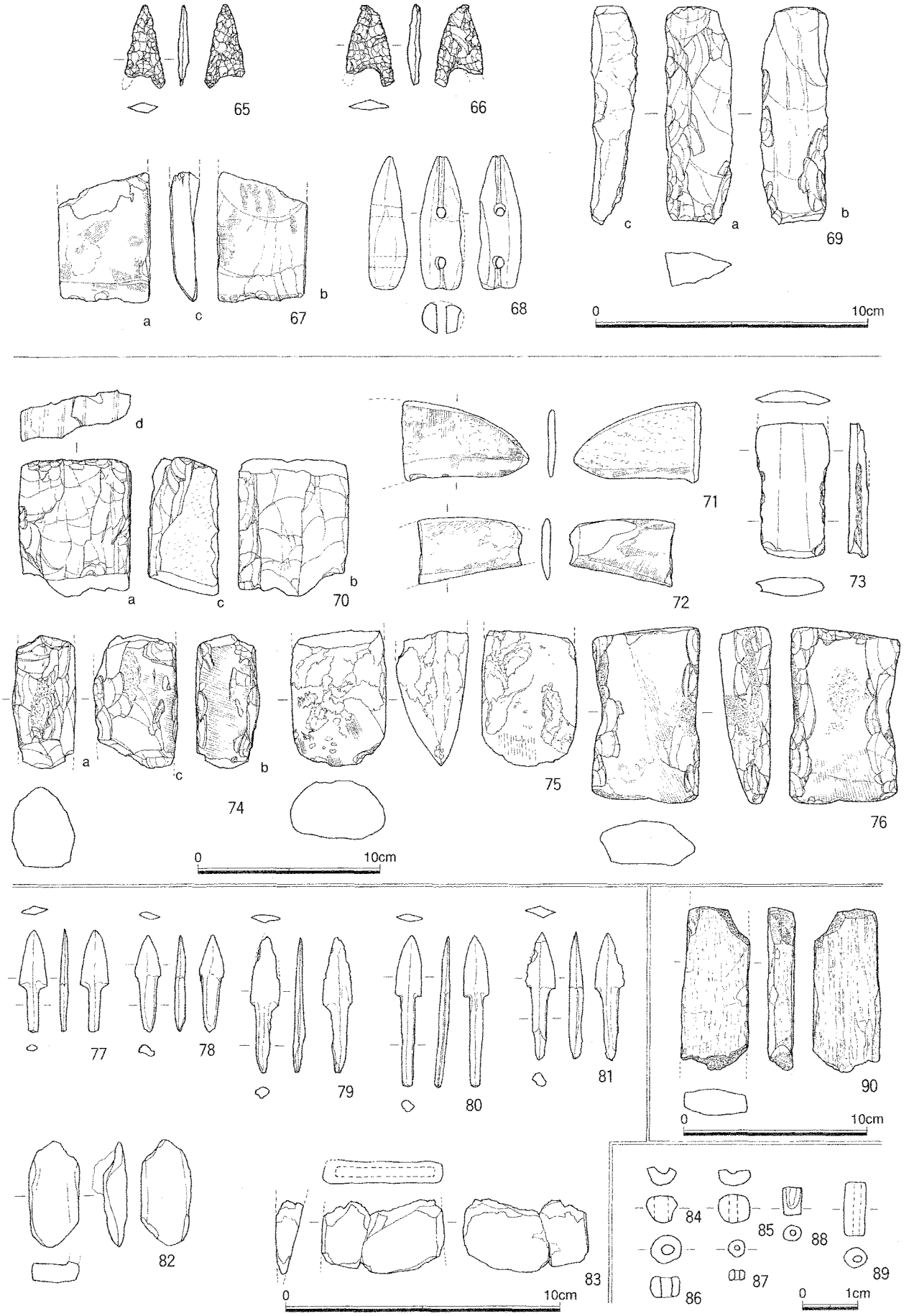
第58図～第59図には礫群出土遺物のうち，石器・金属器・骨角器・ガラス製品を掲載した。**65・66**は黒曜石製の打製石鏃である。いずれも抉りの深い凹基鏃で調整も身部内面まで丁寧に行い，断面レンズ状に仕上げている。**67**は扁平片刃石斧で上半部を欠損する。a面は全体を入念に研磨するものの，b面にはバルブの一部が残り，研磨もフィッシャーの凹凸を平滑にする程度でとどめている。**69**のような頁岩製縦長剥片を素材とし，剥片縁辺部を刃部にしたものと考えられる。**68**は重量20ｇにも満た



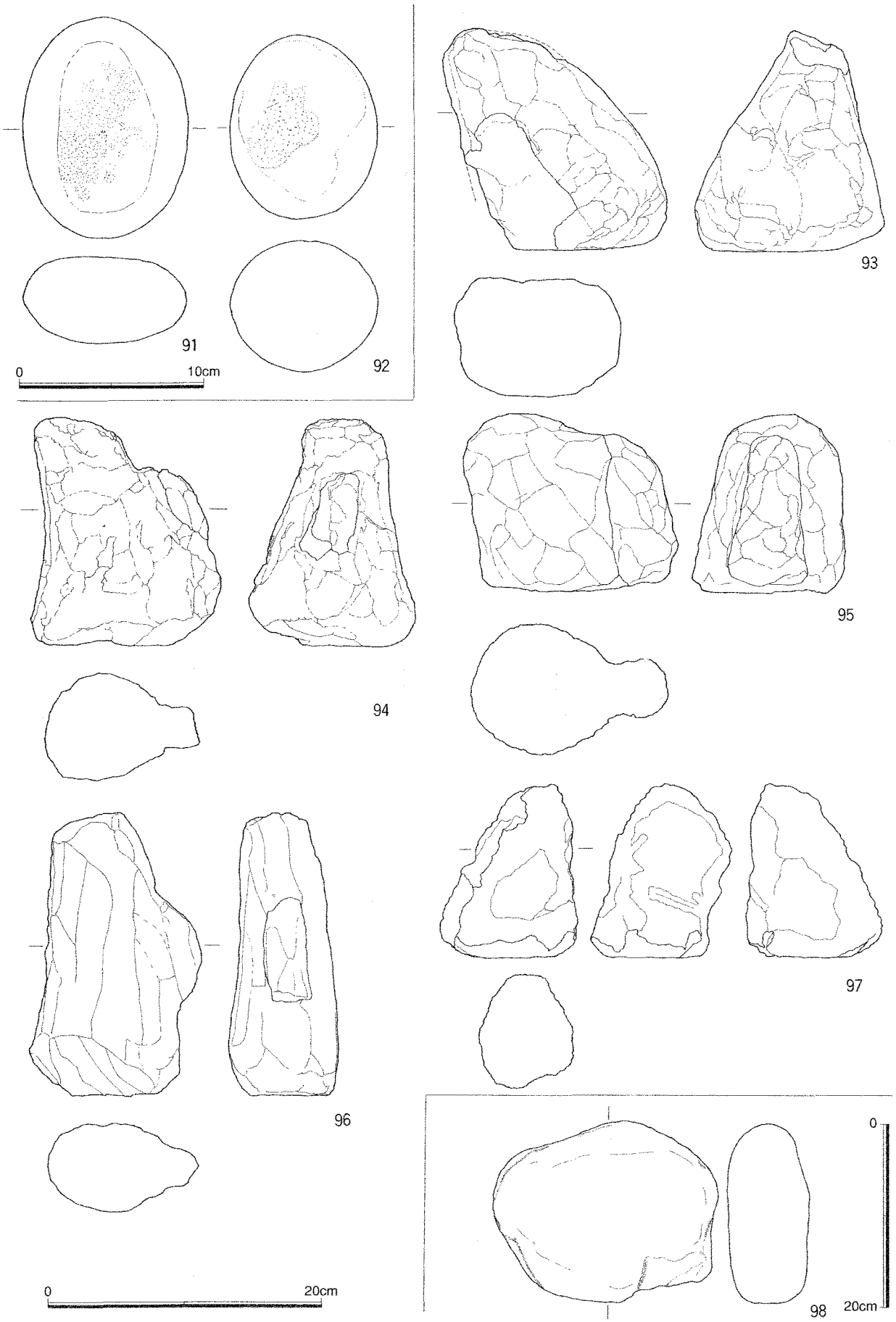
第56図　石田高原A・B区　SD3・SD4・SD5・礫群出土遺物①（S＝1/4）



第57図　石田高原A・B区　SD3・SD4・SD5・礫群出土遺物②（S＝1／4）



第58図　石田高原A・B区SD3・SD4・SD5・礫群出土遺物③



第59図　石田高原A・B区　SD3・SD4・SD5・礫群出土遺物④（S＝1/3，1/4，1/6）

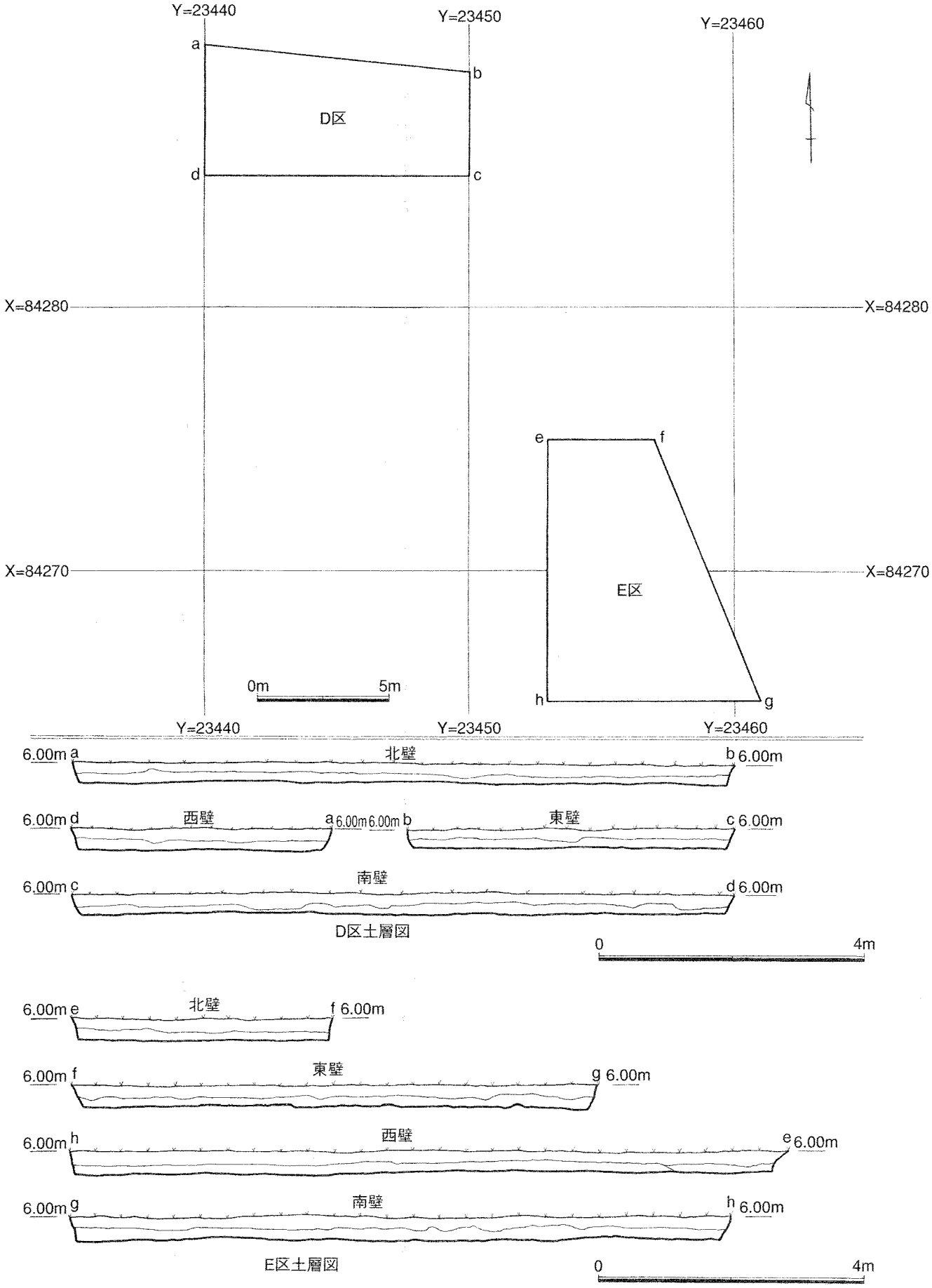
ない小型の九州型石錘である。凝灰岩製で，側面の一部を欠損するものの平面形は筍形である。体部の上位と下位に穿孔し，表裏の穿孔部を繋ぐように上面と下面を経由する沈線が巡る。69は頁岩製縦長剥片である。節理と直交方向に剥離し，a面・b面には節理が縞状にみえる。打面は自然面で打面調整は行っていない。側面には節理面を残す。剥片本来の横断面形は楔形であるが，a面左側縁やb面右側縁から調整剥離を加えることで，厚みを均一にしようとした意図が読みとれる。67のような扁平片刃石斧や石鑿など小型加工具の素材であろう。

70は頁岩製石核である。角柱状で2面の作業面が確認できる。いずれも作業面も石核の節理と直交方向に剥片を生産している。a面は作業面に対して鋭角な自然面を打面とし，3枚の剥片を生産した痕跡が残る。図中の左から右へと順番に剥離している。b面は打面がa面と180°異なる。b面の打面は折損しているため調整の有無は確認できない。2枚の剥片を生産した痕跡を残すが，剥片生産後，左側縁からの粗い剥離を施している。石核の両側面は節理面である。この石核から生産された剥片は，69のような縦長剥片で，これを素材として67のような扁平片刃石斧や石鑿などを生産していた。この石核の出土により，原の辻遺跡で石製小型加工具を一貫して生産していたことが明確となった。

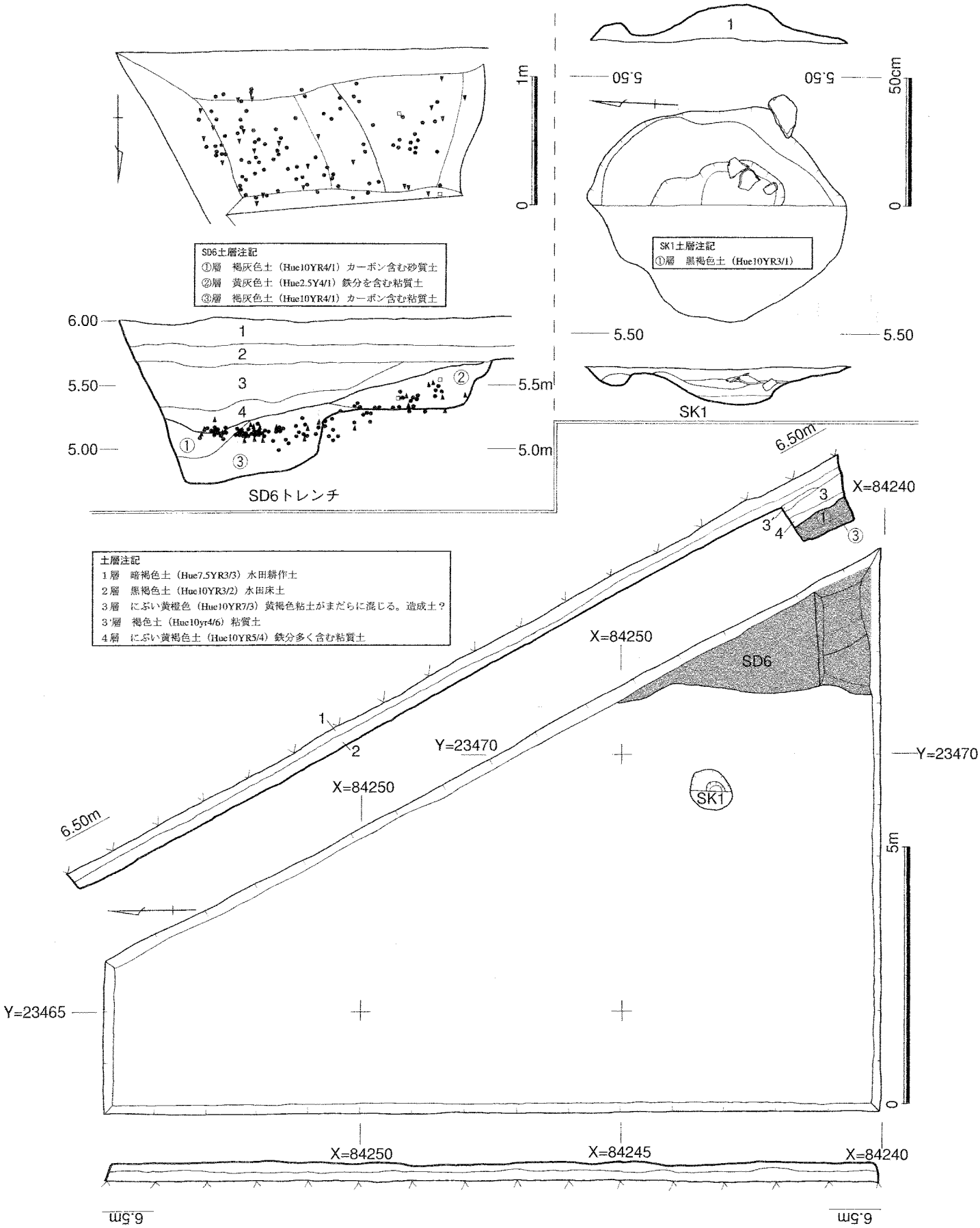
71・72は石鎌である。いずれも切先付近の破片である。刃部および背面を入念に研磨し，身部にも一部研磨が及ぶものの，大半は節理面をとどめる。いずれも頁岩製である。73は石剣の基部である。両側縁を敲打して細身にし，刃部との間に斜め関を作る。全面に研磨が及ぶものの，刃部付近のみをを斜めに研ぎ出して鋭利な刃を付けており，横断面は扁平な六角形となる。74～76は石斧である。74は頁岩製の柱状片刃石斧未成品である。a面を中心に入念な調整剥離を加え，稜線つぶすための敲打痕も残る。b面およびc面には研磨痕が残り，特にb面は平坦に研磨している。75は両刃の伐採斧で，身部に剥離痕をとどめるものの刃部を中心に入念な研磨を加える。76は玄武岩製で，扁平な礫素材の両側縁から調整剥離を加え，さらに敲打して浅い抉りを作って装着部とする。研磨は身部まで一部及ぶものの，基本的に刃部形成に重点を置いた研磨である。刃部には折損後敲打痕が面的に広がっており，敲打具に転用されたのであろう。

77～81は銅鏃である。いずれも有茎鏃で身部が二等辺三角形になる点は共通する。身部長と基部長の比率はほとんどが1対1に近いが，80は基部がかなり長く特異な例である。また，78は鋳型がずれたことにより，表裏で鎬の位置が左右にずれている。82・83はいずれも鋳造鉄斧の破片である。82は側面の破片で，垂直方向に立ち上がる体部の痕跡がわずかに観察できる。かなり摩滅しておりはっきりしないものの，下端部は鋭利な片刃状の刃部がついていた可能性がある。鉄鑿もしくはヤリガンナに転用されたのであろう。83は刃部片で幅狭・小型の鋳造鉄斧片である。かなり破損するが，中空の袋部の痕跡が残る。90はアワビオコシの体部片である。鯨骨製で両側縁はほぼ平行である。84～89は装身具類である。85～87はガラス小玉で，84・85・87はエメラルドグリーン，86はコバルトブルーである。88・89は管玉である。88は凝灰岩製，89は碧玉製である。

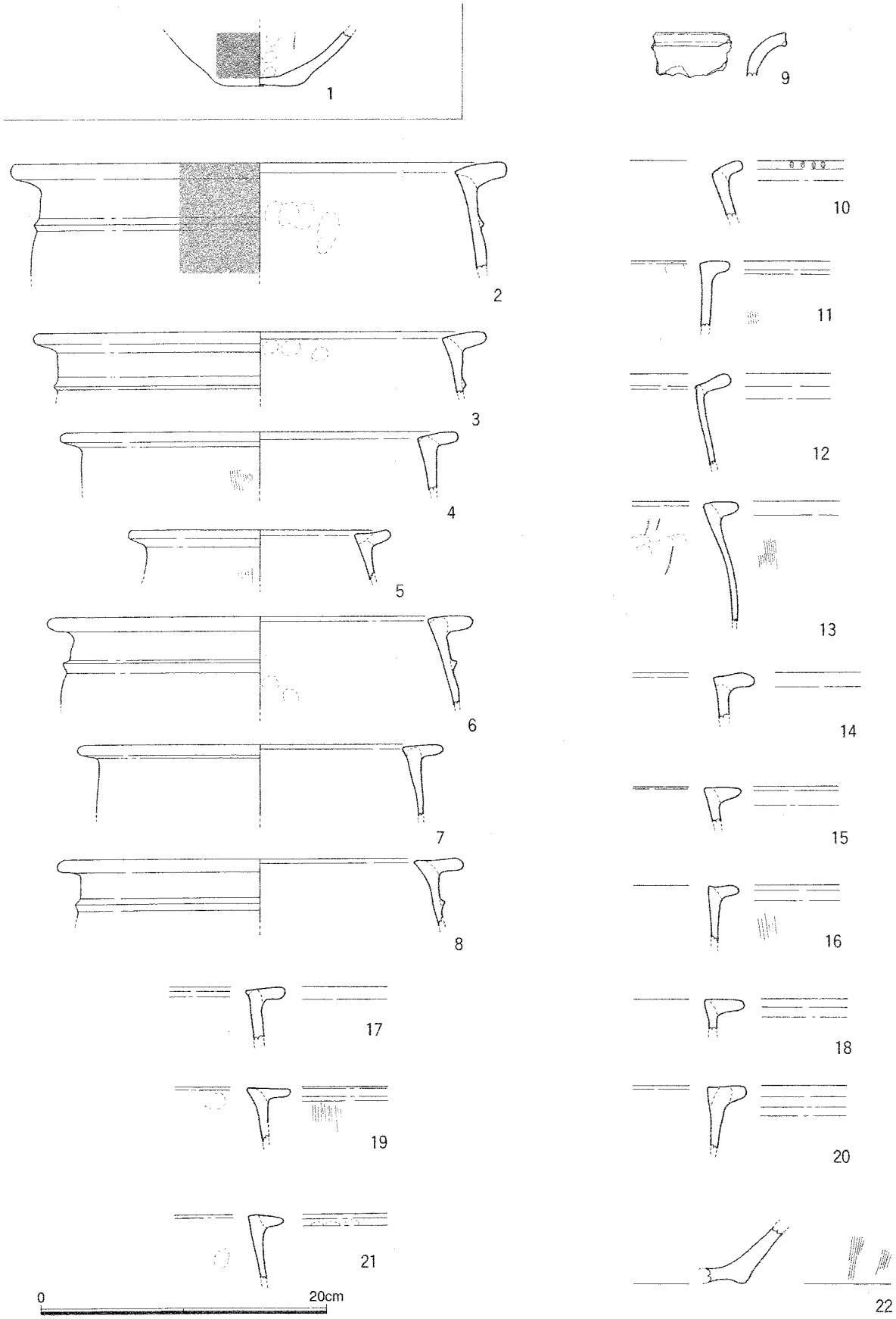
第59図91・92は磨石類である。円礫の平坦面にフラットな摩滅痕と敲打痕が広がる。93～97は石製支脚である。いずれも多孔質玄武岩製である。突起を削りだしてつまみとするもの（94～96）とつま



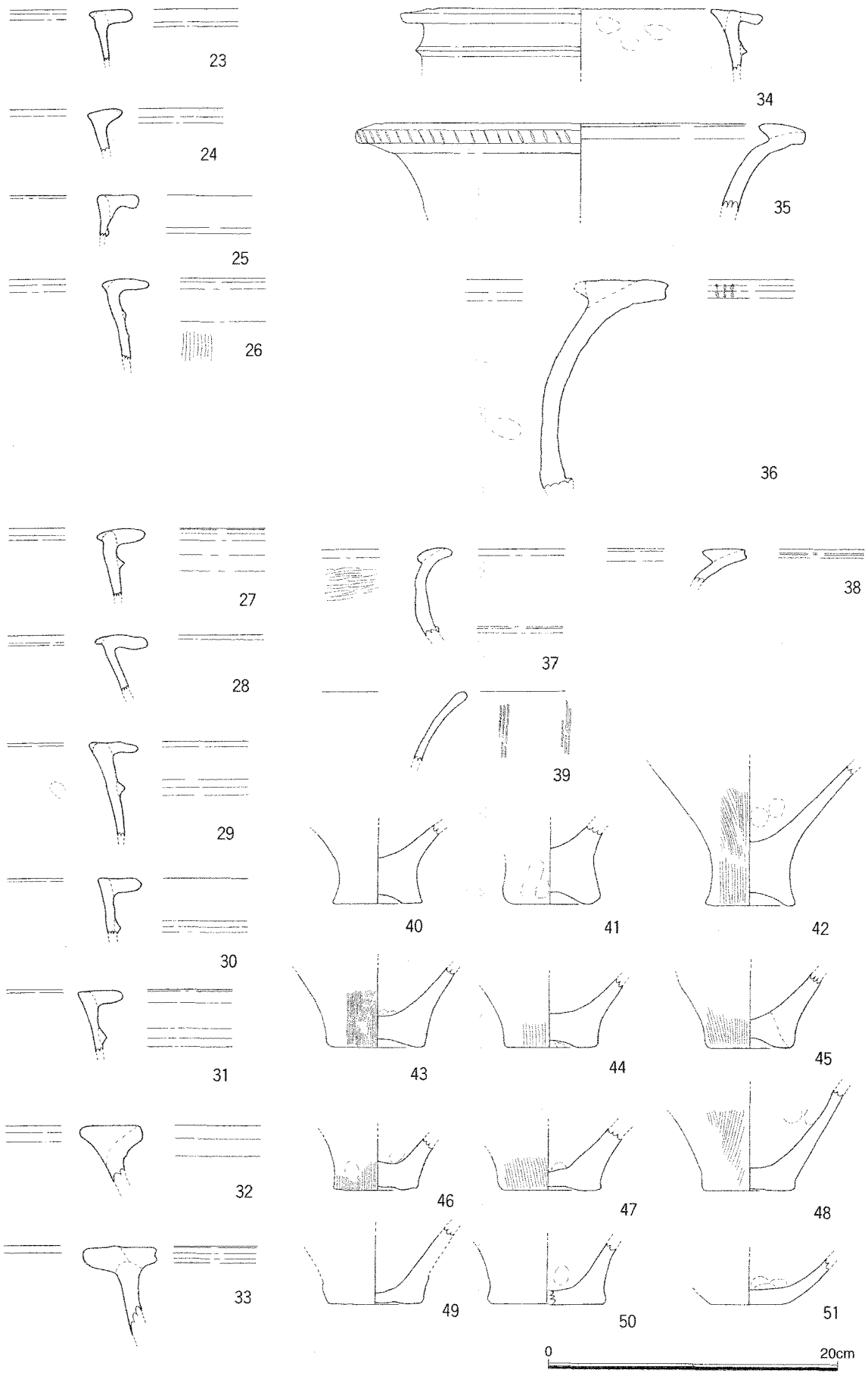
第60図　石田高原D・E区　調査区位置図および土層図（S＝1/200，1/80）



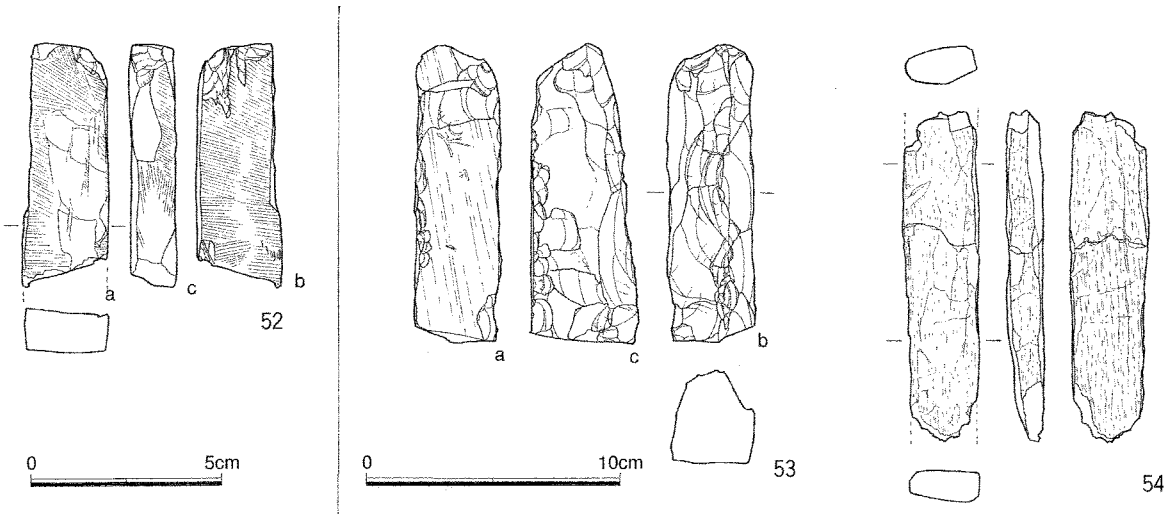
第61図　石田高原Ｆ区平面図および土層図（Ｓ＝１/40，１/20，１/100）



第62図　石田高原Ｆ区 SD 6 出土遺物①（Ｓ＝１／４）



第63図　石田高原F区SD6出土遺物②



第64図　石田高原F区SD6出土遺物③

みを持たないもの（93・97）に分けられる。また，器高を基準に大型（93・94・96）と小型（95・97）に分けられる。このようなバリエーションが存在するのは，時期差や使用方法の違いなどが考えられるであろう。

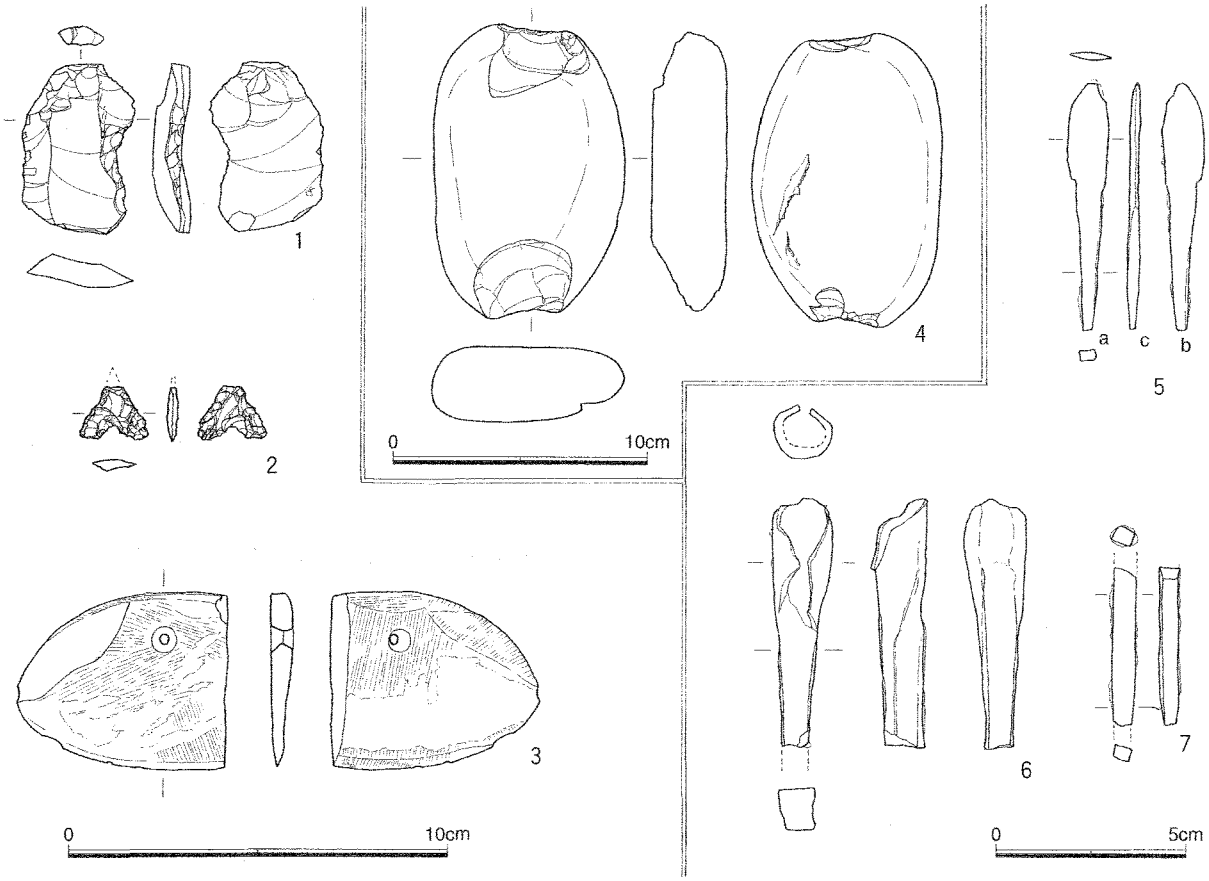
礫群は，先述の通り古代以降に形成された遺構である。礫群がこれら弥生時代の遺物で構成される背景には，原の辻遺跡の生活域である低台地上や低地部の開発が8世紀～9世紀にかけて活発に行われ，その際出土した弥生時代の遺物を当時低湿地であったと考えられる環濠埋没面に投棄して，地盤の安定を図ったものと推測される。

・D区・E区

平成5年度調査区の北西部に設置した調査区である（**第50図**）。遺構群の西側への展開を確認することを目的として設定したが，明確な遺構は確認できなかった（**第60図**）。土層は現代の水田面と床土で構成され，いずれの調査区でも地表下約20cmで岩盤に達する。D区・E区周辺は，現地形の観察でも大きいところでは3m以上削平されていることは確実で，本来遺構が掘削されていたとしても削平の影響を受けたことは想像に難くない。しかし，南側に隣接するF区では，後述するとおり環濠および土坑の一部が確認されていることから，D区・E区には元々遺構が存在しなかったと考える方が妥当であろう。なお，出土遺物は耕作土層中から弥生土器が出土したものの，いずれも小片で図化に耐えうる資料はなかった。

・F区

平成2年調査地点北側および平成5年度調査区西側に隣接する調査区である（**第50図**）。土層は現水田面および床土からなり，現地表面下約20cmで岩盤に達する。調査区南東隅で環濠1条（SD6）とSD6の西側に隣接して土坑1基（SK1）を確認した（**第61図**）。SD1は，西側ラインの一部を検出しており，東側ラインは平成5年度調査の5号溝に該当するものと考えられる。東半部は検出面下約45cmにわたって削平を受け，地山に類似した黄橙色土（3層）が造成されており，SD1の包含層



第65図　石田高原地区その他の遺物

は深いところでも約40cmにすぎない。掘方は二段掘りで，階段状の断面となる。土層は３層に分かれ，最上層に砂質土が堆積するものの，２層以下は褐灰色系の粘質土である。遺物は１層と２層に集中していた（**第61図**）。

SD６からは，弥生時代前期後葉～中期後葉にかけての遺物が出土しているが，主体となるのは中期初頭～前葉の城ノ越式～須玖Ⅰ式古段階の資料である（**第62図・第63図**）。器種構成では圧倒的に甕が多く，高坏も組成に加わるものの，出土量は少ない。また，**32・33**のように，甕棺の破片も出土している。**9**は板付Ⅱb式と考えられる土器で，SD６の中では最古の土器である。口縁部は外反し，下端部には粘土を貼り付けて若干突出する。**2**は器表面に黒色の顔料が付着する土器である。

第64図52は扁平片刃石斧の未成品で，頁岩製縦長剥片の剥離面を研磨している。b面の研磨は入念であるがa面には剥離面の一部が残る。c面は節理面であるが，節理の軟質部分を除去して入念に研磨している。**53**は抉入柱状片刃石斧の未成品で，基部付近のみ残存する。b面の体部中央の稜線上から両側面にかけて調整剥離を加え，横断面略三角形に整える。a面は自然面であるが，上半部を帯状に剥離している。この部分が抉りになるものと考えられる。全体的に剥離調整の段階であり，敲打・研磨に至る前に欠損し，廃棄されたものと考えられる。**54**のアワビオコシは，側面が下方に向けて徐々に厚みを減じることから，刃部付近と考えられる。両側縁はほぼ平行で，側面観は直線的である。

SK１は直径約１mの楕円形土坑で，中央部がさらに深く落ち込みことからピットの可能性もある（**第61図**）。深さは15cm程度しか残存していない。須玖Ⅱ式の底部片が出土している（**第62図１**）。

・その他の遺物

第65図1は，後期旧石器時代のノッチドスクレイパーである。縦長剥片の側面に，主要剥離面から調整を加えて抉りを作っている。トレンチDの7層から出土したもので，層位的にみて少なくとも環濠掘削以前の堆積層からの出土である。**2**は打製石鏃。周縁部を中心に入念な調整を加える。**3**は立岩産石包丁と考えられる。刃部付近に最大長を有し，穿孔は錐状工具で表裏両面から行っている。

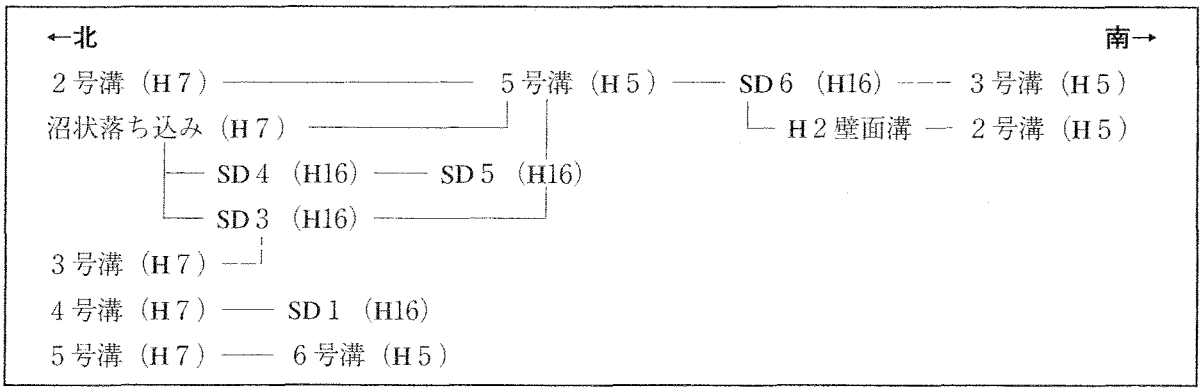
5～**7**は鉄製品である。**5**は柳葉形鉄鏃であるがa面左側面には関がつく。基部断面は矩形で厚みがあるのに対して，身部は扁平なレンズ状になることから，鉄棒の先端部を鍛打して製作したものと考えられる。また，形態的に銅鏃に類似しており，銅鏃を模倣して製作した可能性も考えられる。**6**・**7**は鉄鑿である。**6**は基部付近の破片で，円形の袋部が残存する。身部は方形であるが側面がやや抉れている。おそらく，袋部を作るために身部を鍛打した際に，圧迫されて身部の表裏面が側面に突出したものと考えられる。**7**は鉄鑿先端部で断面矩形である。**5**のような鉄鏃製作用の鉄素材の可能性も考えられる。

(3) 小　　結

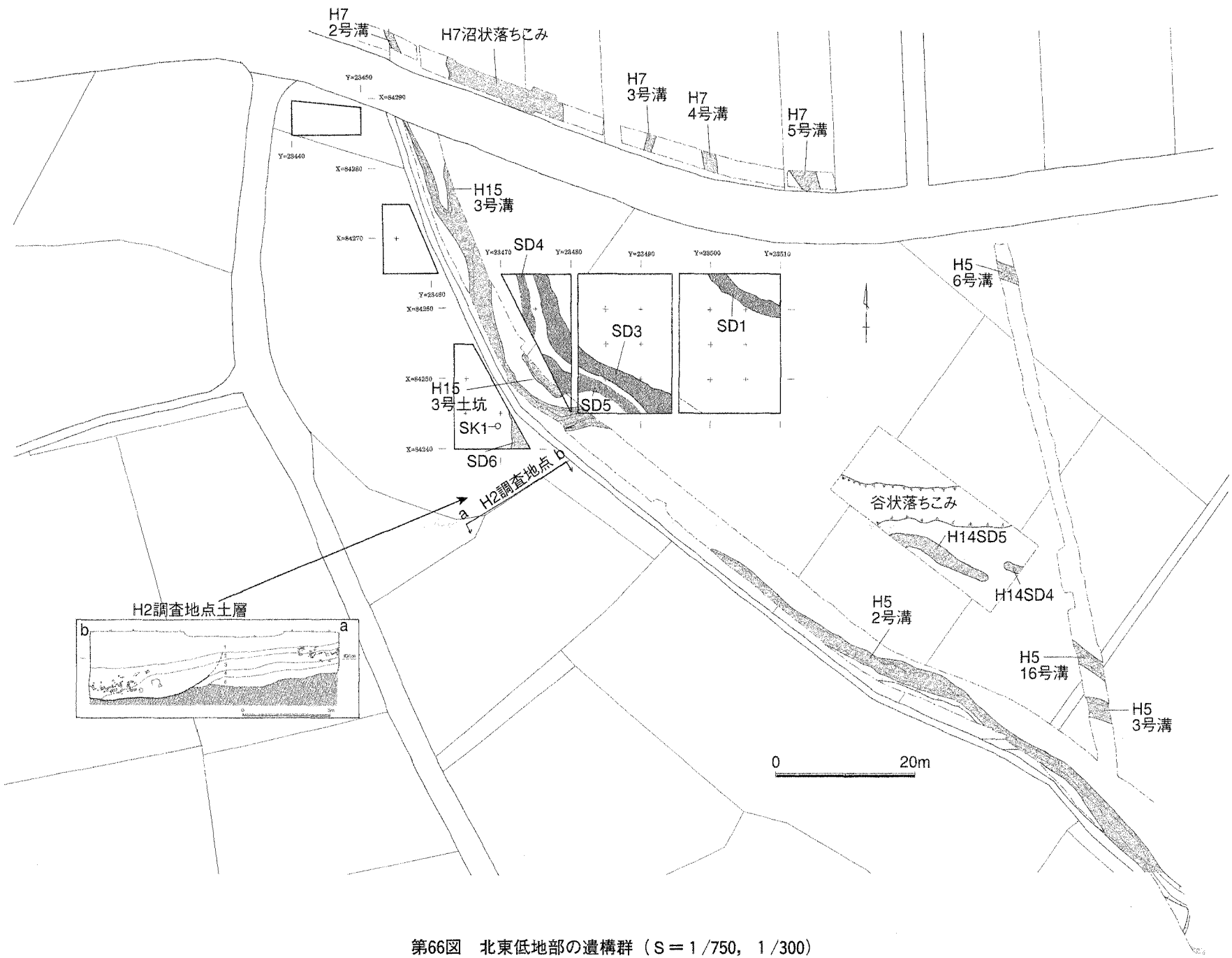
石田高原地区の調査は，平成5年度調査時の検出遺構に基づいて，東側や西側への遺構群の展開を探ることが目的であった。結果として，平成5年度検出の5号溝より西側では，F区で5号溝の西側ラインを検出したものの，新たな遺構は発見されなかった。一方で，東側では3条の環濠を新たに検出することとなった。ここでは，本年度検出遺構群と過去の調査において検出された遺構群のつながりについて検討した後，北東低地部における遺構群の時期的な変遷を概観してまとめに代えたい。

①遺構群のつながり

北東低地部において過去検出された遺構群と，本年度検出した遺構群を合成したのが**第66図**である。この平面分布と，各遺構の出土土器を考慮しながらつながりを推測すると，次のようになる。



低台地の裾を巡る遺構群は，平成7年度調査区で検出した沼状落ち込みが南側で3つに分岐し，それぞれ5号溝（H5），SD4（H16），SD3（H16）となる。さらに5号溝（H5）はSD6（H16）付近で東西に分岐し，西側の支流がH2壁面溝を経由して，南側の2号溝（H5）に接続するものと推測される。5号溝（H5）東側の支流は，本年度調査区B・C区南側付近でSD3（H16）・SD5（H



第66図　北東低地部の遺構群（S＝1/750，1/300）

第67図　北東低地部における遺構群の変遷（S＝1/1500）

16）と合流するものと考えられる。南側への展開については推測の域を出ないものの，覆土の特徴や堆積状況の類似性から，２号溝（H５）と併走して３号溝（H５）に接続するものと考えられる。

東側では，４号溝（H７）とSD１（H16）が接続する。SD１（H16）は弥生時代中期と古墳時代前期の土器が出土するのに対して，４号溝（H７）は古墳時代前期の土器が出土している。したがって，両者は古墳時代前期に接続することは間違いないものの，弥生時代中期のつながりは不明瞭である。この時期には，SD１（H16）が北西の沼状落ち込み（H７）の方向に伸びていた可能性も考えられるだろう。さらに東側では，５号溝（H７）と６号溝（H５）が接続する。６号溝（H５）からは，弥生時代後期の土器が出土しているのに対して，５号溝（H７）では時期の明確な遺物が出土していない。しかし，両者の断面形は逆台形で共通することから，一連の遺構と捉えた。

全体的な傾向として，北東低地部の遺構群は，基本的に低台地の裾ラインに沿って，北から南東方向に大きく湾曲しながら展開する点で共通する。しかし，東側での遺構群の展開が比較的単純であるのに対して，西側の遺構群は分岐・合流を繰り返し，非常に複雑な様相を示す。このような様相の違いは，東側と西側で環濠に機能差があったことを想起させる。

①北東低地部遺構群の時期別変遷

最後に，北東低地部における遺構群の時期的な展開についてまとめる（**第67図**）。

弥生時代中期には，低台地の裾付近で沼状落ち込み（H７）から３本に分岐して南流し，本年度調査区南端部付近で分岐・合流して，最終的に２号溝（H５）・５号溝（H５）－３号溝（H５）の２本に収斂して南側へと展開する。東側では，SD１（H16）が西側の遺構群に沿うように南北に伸びるが，この環濠も北側で沼状落ち込み（H７）に接続するものと考えられる。床面レベルの勾配から水の流れる方向を検討すると，若干の凹凸はあるものの，ほぼ北から南へ向かって緩やかに傾斜している。したがって，沼状落ち込み（H７）を起点に，南側へ意図的に水を流していたものと考えられ，防御的な役割や農業用水を確保する目的が強かったものと考えられる。

弥生時代後期には，西側においては中期と同様の展開を見せる。東側ではSD１（H16）が埋没し，さらに東側で５号溝（H７）－６号溝（H５）が掘削される。この環濠は，沼状落ち込み（H７）に接続せず，直接幡鉾川河道に伸びていたものと考えられ，この点も中期のSD１（H16）とは異なる点である。後期段階での環濠床面の傾斜は，西側遺構群に関しては後期包含層が特定できないため検討できないものの，中期段階とほぼ同じラインで展開していることから，中期と同じく北から南へと流れていたものと考えられる。東側では南から北への流れが想定でき，排水を目的とした可能性が高い。

古墳時代前期になると，西側遺構群では旧環濠上面に流路が形成されるものの基本的に埋没し，西側でSD１（H16）が再掘削される。古墳時代前期のSD１（H16）は，弥生時代中期の環濠に比べて浅く，立ち上がりの勾配も緩やかである。したがって，この時期になると防御的な性格は極めて薄くなり，生活用水の確保や水田経営に伴う用水路など，生活に密着した性格へ機能的に特化したものと考えることができるであろう。

第９表　石田高原地区出土遺物観察表①

土器

報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
第55図	1	C区 SD1②	甕	にぶい橙	YR6/4	明赤褐	5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	2	C区 SD1①	甕	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/2	長石・石英	口縁部片	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	
	3	C区 SD1②	甕	赤褐	5YR4/6	褐灰	7.5YR4/1	長石・石英・金雲母	口縁部	指押さえ・ナデ	ハケメ・ナデ・ケズリ	
	4	C区 SD1①	甕	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	長石・石英	口縁部片	ナデ	ナデ	
	5	C区 SD1②	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	6	C区 SD1④	高坏？台付鉢？	淡黄	5YR8/4	淡黄橙	7.5YR8/4	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	
	7	C区 SD1①	？	青灰	5B5/1	青灰	5PB5/1	長石	胴部片	タタキ・沈線		陶質土器
	8	C区 SD1①	甕	黄灰	2.5Y4/1	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ		
	9	C区 SD1②	甕	明赤褐	2.5YR5/8	赤褐	5YR4/6	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	10	C区 SD1①	壺	赤褐	2.5YR4/8	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	11	C区 SD1①	甕	浅黄橙	10YR8/4	灰	5Y6/1	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	12	C区 SD1①	高坏	橙	2.5YR6/6	赤灰	2.5YR4/1	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	しぼり	表面丹塗り
	13	C区 SD1①	高坏	にぶい黄橙	10YR7/3	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	
第56図	1	A区 SD5①	甕	明赤褐	5YR5/8	にぶい黄褐	10YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	2	A区 SD5①	甕	明赤褐	2.5YR5/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	3	A区 SD5①	甕	灰褐	5YR6/2	灰褐	7.5YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	4	A区 SD5①	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	赤	10R5/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	両面丹塗り
	5	A区 SD5①	甕	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ	指押さえ	
	6	A区 SD5①	高坏	橙	5YR6/6	明赤褐	5YR/5/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	7	A区 SD5①	甕	明赤褐	2.5YR5/8	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	底部	ヘラナデ・指押さえ	ナデ	
	8	A区 SD5①	甕	にぶい橙	2.5YR6/4	明褐灰	7.5YR7/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	9	A区 SD5①	甕	灰褐	7.5YR4/2	明赤褐	2.5YR5/8	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	10	A区 SD5①	壺	赤灰	2.5YR4/1	褐灰	7.5YR4/1	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	
	11	A区 SD5①	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ・ケズリ	
	12	A区 SD5①	甕	灰白	5Y7/1	暗灰	N3/0	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ（沈線？）・ナデ	ナデ・ケズリ	表面スス痕あり
	13	A区 SD5①	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい赤褐	2.5YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・沈線	ナデ・ケズリ	
	14	A区 SD5①	甕	橙	5YR6/6	橙	5YR7/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ・沈線	ナデ	表面スス痕あり
	15	A区 SD5①	甕	灰白	2.5Y8/2	灰白	5Y8/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ハケメ・沈線	ナデ・ケズリ	
	16	A区 SD5①	壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	山陰系・表面一部剥落
	17	A区 SD5①	壺	明赤褐	2.5YR5/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・指押さえ	ナデ・ケズリ	山陰系
	18	A区 SD5①	壺	明赤褐	2.5YR5/8	にぶい褐	7.5YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	表面丹塗り
	19	A区 SD5①	壺	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英	口縁部片	ナデ・指押さえ	指押さえ	山陰系
	20	A区 SD5①	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	完形	ナデ・指押さえ・ハケメ	指押さえ・ヘラケズリ	
	21	A区 SD5①	壺	橙	2.5YR6/8	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ・ケズリ	表面丹塗り
	22	A区 SD5①	高坏	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	23	A区 SD5①	高坏	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英	完形	ナデ	ナデ・指押さえ・しぼり	
	24	A区 SD5①	高坏	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部	ハケメ・ナデ	ナデ	表面丹塗り・両面スス痕
	25	A区 SD5①	高坏	にぶい橙	7.5YR7/3	明褐灰	7.5YR7/1	長石・石英	脚部	ハケメ・指押さえ	ナデ	穿孔
	26	A区 SD5①	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ハケメ・ナデ・指押さえ	
	27	A区 SD5①	壺	黒	N2/0	暗灰	N3/0	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ヘラナデ・ナデ・指押さえ	表面スス痕
	28	A区 SD5①	壺	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい赤褐	5YR4/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ	表面丹塗り・スス痕
第57図	29	A区 SD4①	壺	明赤褐	5YR3/4	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部～底部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	一部欠損
	30	A区 SD4①	甕	浅黄	2.5Y7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	31	A区 SD4①	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	黄灰	2.5Y5/1	長石・石英・金雲母	口頸部	ナデ・キザミ	ナデ・ハケメ	
	32	A区 SD4①	甕	橙	5YR7/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	33	A区 SD4①	壺	灰	N6/0	灰	N6/0	長石・石英・金雲母	口縁部	回転ナデ	回転ナデ	須恵器
	34	A区 SD4①	器台	橙	2.5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	頸部	ハケメ・指押さえ	ハケメ・しぼり	
	35	A区 SD4①	壺	褐灰	7.5YR6/1	にぶい橙	5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	キザミ		
	36	A区 SD4①	甕	明赤褐	2.5YR5/8	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ		
	37	A区 SD4①	高坏	にぶい橙	5YR6/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部		ナデ	表面剥落
	38	A区 SD4①	器台	明赤褐	5YR5/6	灰白	7.5YR8/1	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ・しぼり	ナデ	
	39	A区 SD4①	高坏	赤褐 赤灰	2.5YR4/6 2.5YR4/1	赤褐	2.5YR4/6	長石・石英・金雲母	脚部		しぼり	表面剥落
	40	A区 SD4①	高坏	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	しぼり	
	41	A区 SD5①	高坏	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	しぼり・指押さえハケメ・ナデ	両面丹塗り・坏底部に穿孔
	42	A区 SD4①	壺	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英	上部	ハケメ・ナデ	しぼり	
	43	A区 SD4①	甕	橙	5YR6/6	褐灰	10YR5/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・指押さえ		
	44	A区 SD4①	甕	橙	7.5YR7/6	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	45	A区 SD4①	壺	にぶい橙	5YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	46	A区 SD4①	甕	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	47	A区 SD4①	甕	灰白	2.5Y8/2	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	指押さえ・ナデ	
	48	A区 SD4①	壺	褐灰	10YR4/1	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	49	A区 SD3①	甕	にぶい黄褐	10YR5/3	明赤褐	5YR5/6	長石・石英	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	

第10表　石田高原地区出土遺物観察表②

土器

報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
第57図	50	A区 SD3①	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄	2.5Y7/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	
	51	A区 SD3①	高坏	明褐	7.5YR5/6	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	裏面丹塗り
	52	A区 SD3①	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	53	A区 SD3①	壺	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/6	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	両面丹塗り
	54	A区 SD3①	壺	にぶい黄橙	10YR7/2	浅黄橙	10YR8/3	長石・石英・金雲母	口縁部～肩部	ナデ・ハケメ	ナデ・指押さえ	
	55	A区 SD3①	高坏	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	56	A区 SD3①	壺	にぶい黄橙	10YR7/2	灰白	2.5Y7/1	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ	
	57	A区 SD3①	高坏	灰白	2.5Y8/2	淡黄橙	7.5YR8/4	長石・石英・金雲母	脚部	ハケメ・ナデ・指押さえ	指押さえ・ナデ	両面丹塗り
	58	A区 SD3①	高坏	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	穿孔
	59	A区 SD3①	高坏	浅黄	2.5YR7/3	にぶい黄	2.5Y6/4	長石・石英・金雲母	脚部	ヘラミガキ・ナデ	しぼり・ナデ	
	60	A区 SD3①	高坏	明赤褐	5YR5/6	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ・ハケメ・ナデ消し	穿孔
	61	A区 SD3①	器台	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	脚部	ハケメ・ナデ	しぼり・ハケメ・ナデ	
	62	A区 SD3①	高坏	橙	7.5YR7/6	黒褐	2.5Y3/1	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ヘラナデ・ナデ	坏底部に穿孔
	63	A区 SD3①	高坏	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	穿孔
	64	A区 SD3①	器台	にぶい黄橙	10YR6/3	明黄褐	10YR6/6	長石・石英・金雲母	脚部	ナデ	しぼり・指押さえ・ナデ	
第62図	1	F区 SK1①	壺	明赤褐	2.5YR5/6	灰褐	7.5YR6/2	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	ヘラナデ・指押さえ	表面丹塗り
	2	F区 SD6①	甕	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	表面黒塗り・両面スス痕
	3	F区 SD6①	甕	橙	5YR6/8	黒褐	5YR2/1	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	裏面スス痕
	4	F区 SD6①	甕	橙	5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	5	F区 SD6①	甕	明赤褐	2.5YR5/6	暗赤褐	5YR3/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	裏面スス痕
	6	F区 SD6①	甕	暗赤褐	2.5YR3/2	灰赤	2.5YR4/2	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	7	F区 SD6①	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい褐	7.5YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	裏面スス痕
	8	F区 SD6①	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	9	F区 SD6①	甕	淡赤橙	2.5YR7/4	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	板付Ⅱb式
	10	F区 SD6①	甕	橙	5YR6/6	褐灰	7.5YR6/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ	ナデ	
	11	F区 SD6①	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	黒褐	7.5YR3/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	ナデ	裏面スス痕あり
	12	F区 SD6①	甕	にぶい褐	7.5YR6/3	灰褐	7.5YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	13	F区 SD6①	甕	灰褐	7.5YR5/2	褐灰	7.5YR6/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ		
	14	F区 SD6①	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい橙	7.5YR6/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	15	F区 SD6①	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	灰褐	7.5YR4/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	16	F区 SD6①	甕	褐	7.5YR4/3	赤褐	5YR4/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	17	F区 SD6①	甕	橙	2.5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	18	F区 SD6①	甕	灰褐	7.5YR5/2	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	19	F区 SD6①	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ハケメ・ナデ	指押さえ	
	20	F区 SD6①	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい赤褐	5YR4/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	21	F区 SD6①	甕	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・指押さえ	指押さえ・ナデ	
	22	F区 SD6①	底部	橙	2.5YR6/8	褐灰	7.5YR6/1	長石・石英・金雲母	底部片	ハケメ・ナデ	ナデ？	裏面剥落
第63図	23	F区 SD6①	甕	橙	5YR6/6	橙	2.5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	24	F区 SD6①	甕	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	25	F区 SD6①	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	橙	2.5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	26	F区 SD6①	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい褐	7.5YR6/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・ハケメ		
	27	F区 SD6①	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	黒褐	10YR3/1	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ		
	28	F区 SD6①	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい黄褐	10YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	一部スス痕
	29	F区 SD6①	甕	暗赤褐	2.5YR3/2	にぶい赤褐	5YR5/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
	30	F区 SD6①	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR6/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	31	F区 SD6①	甕	にぶい赤褐	5YR5/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	32	F区 SD6①	甕	灰褐	2.5Y6/2	灰褐	5YR5/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	33	F区 SD6①	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	34	F区 SD6①	甕	にぶい赤褐	5YR4/4	橙	5YR6/6	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	指押さえ・ナデ	
	35	F区 SD6①	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/8	長石・石英・金雲母	口縁部	ナデ・キザミ	ナデ	
	36	F区 SD6①	壺	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・キザミ		
	37	F区 SD6①	壺	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/2	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ヘラミガキ・ナデ	
	38	F区 SD6①	壺	明赤褐	5YR5/6	にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ	ナデ	
	39	F区 SD6①	壺	明褐灰	7.5YR7/2	にぶい橙	7.5YR7/3	長石・石英・金雲母	口縁部片	ナデ・刺文	ナデ	
	40	F区 SD6①	甕	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/2	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	表面スス痕
	41	F区 SD6①	甕	赤	10R5/6	黒	7.5Y2/1	長石・石英・金雲母	底部	指押さえ・ナデ		一部スス痕
	42	F区 SD6①	甕	橙	7.5YR7/6	にぶい褐	7.5YR5/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	ナデ・指押さえ	表面スス痕
	43	F区 SD6①	甕	橙	5YR6/6	黄灰	2.5Y6/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	44	F区 SD6①	甕	橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ・指押さえ	裏面スス痕	
	45	F区 SD6①	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰	7.5YR5/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	ナデ	
	46	F区 SD6①	甕	明赤褐	5YR5/6	黒褐	7.5YR3/2	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・指押さえ	指押さえ・ナデ	表面スス痕
	47	F区 SD6①	甕	赤	10R5/6	褐灰	5YR5/1	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ	指押さえ	両面スス痕

第11表　石田高原地区出土遺物観察表③

土器

報告番号		遺構名	種類	色調（表）		色調（裏）		胎土	残存状況	調整手法（表）	調整手法（裏）	備考
第63図	48	F区 SD6①	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい赤褐	5YR4/3	長石・石英・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	指押さえ・ナデ	
	49	F区 SD6①	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい褐	7.5YR6/3	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ナデ	裏面スス痕・両面一部剥落
	50	F区 SD6①	甕	赤	10R5/8	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	指押さえ・ナデ	
	51	F区 SD6①	壺	灰黄褐	10YR6/2	にぶい橙	5YR6/4	長石・石英・金雲母	底部	ナデ	ケズリ・ナデ	

石器

報告番号		遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材
第55図	14	C区 SD1②	敲石	10.50	8.50	5.10	668.90	玄武岩
第58図	65	A区 SD5①	打製石鏃	3.10	1.50	0.40	1.10	黒曜石
	66	B区 SD5①	打製石鏃	3.00	1.80	0.50	1.90	黒曜石
	67	B区5層	扁平片刃石斧	4.80	3.30	1.10	25.00	頁岩
	68	A区5層	九州型石錘	4.95	1.60	1.40	12.10	凝灰岩
	69	A区 SD4①	縦長剥片	8.10	2.50	1.70	44.30	頁岩
	70	B区5層	石核	7.60	6.20	3.90	293.80	頁岩
	71	A区 SD4①	石鎌	7.00	4.40	0.45	22.90	頁岩
	72	A区 SD5①	石鎌	5.80	3.50	0.50	14.80	頁岩
	73	A区5層	磨製石剣	7.25	4.10	1.10	50.30	頁岩
	74	A区5層	柱状片刃石斧未成品	7.40	3.50	4.55	190.00	頁岩
	75	A区 SD3①	石斧	7.40	5.20	3.90	214.00	安山岩
	76	A区5層	磨製石斧	9.80	6.00	2.90	245.90	玄武岩
	88	A区 SD4①	管玉	0.50	0.35	0.30	0.1未満	凝灰岩
	89	B区5層	管玉	1.00	0.40	0.40	0.20	碧玉
第59図	91	A区 SD5①	磨石	12.10	8.95	4.80	867.20	玄武岩
	92	A区 SD5①	磨石	10.10	8.10	7.25	846.10	玄武岩
	93	A区5層	石製支脚	16.10	16.60	13.90	2313.50	多孔質玄武岩
	94	A区 SD5①	石製支脚	16.60	14.00	12.30	1933.70	花崗質玄武岩
	95	A区 SD3①	石製支脚	13.00	15.80	11.25	1639.40	花崗質玄武岩
	96	B区5層	石製支脚	20.70	12.60	8.00	1860.00	花崗質玄武岩
	97	A区 SD5①	石製支脚	12.70	10.00	10.35	728.70	花崗質玄武岩
	98	A区 SD3①	石皿	24.80	20.50	9.00	測定不可	玄武岩
第64図	52	F区 SD6①	扁平片刃石斧未成品	6.45	2.30	1.25	35.20	頁岩
	53	F区 SD6①層	柱状片刃石斧	11.90	3.45	4.35	269.70	頁岩
第65図	1	B区トレンチD	ノッチドスクレイパー	4.50	2.80	0.85	10.70	黒曜石
	2	F区2層	打製石鏃	1.90	1.80	0.30	0.60	黒曜石
	3	C区5層	立岩産石庖丁	5.50	4.65	0.65	22.10	あずき色凝灰岩
	4	B区5層	石錘	11.65	7.60	3.05	428.10	花崗岩

骨角器

報告番号		遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	素材
第58図	90	B区 SD3①	アワビオコシ	9.05	3.70	1.50	47.50	鯨骨
第64図	54	F区 SD6①層	アワビオコシ	13.10	3.10	1.45	47.70	鯨骨

金属器

報告番号		遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	素材
第55図	15	C区 SD1①	銅鏃	4.50	0.95	0.30	2.30	青銅
第58図	77	B区5層	銅鏃	3.75	1.25	0.30	3.10	青銅
	78	B区 SD5①	銅鏃	3.55	1.00	0.40	3.10	青銅
	79	B区5層	銅鏃	5.00	1.10	0.40	5.10	青銅
	80	B区 SD5①	銅鏃	5.55	0.95	0.35	5.10	青銅
	81	B区 SD5①	銅鏃	4.70	1.10	0.50	4.80	青銅
	82	A区5層	柱状鉄斧片	3.90	1.90	0.70	11.50	鉄
	83	A区5層	柱状鉄斧片	4.00	6.80	1.40	59.30	鉄
第65図	5	F区2層	柳葉形鉄鏃	6.50	1.10	0.35	4.90	鉄
	6	F区2層	鉄鑿	6.60	1.60	1.50	33.20	鉄
	7	F区2層	鉄鑿	4.20	0.60	0.40	4.60	鉄

ガラス

報告番号		遺構名	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	色
第58図	84	B区 SD5①	ガラス小玉	0.50	0.55	0.35	0.1未満	エメラルドグリーン
	85	B区5層	ガラス小玉	0.50	0.60	0.30	0.1未満	エメラルドグリーン
	86	B区 SD3①	ガラス小玉	0.50	0.58	0.39	0.10	コバルトブルー
	87	B区5層	ガラス小玉	0.30	0.30	0.20	0.1未満	エメラルドグリーン

図版11

A 区作業風景

B 区トレンチ D 完掘状況

C 区 SD 1 検出状況（東→北）

A区 SD 3 ・SD 4
検出状況

A区 SD 5 礫群
出土状況

A区 SD 4 須恵器
出土状況

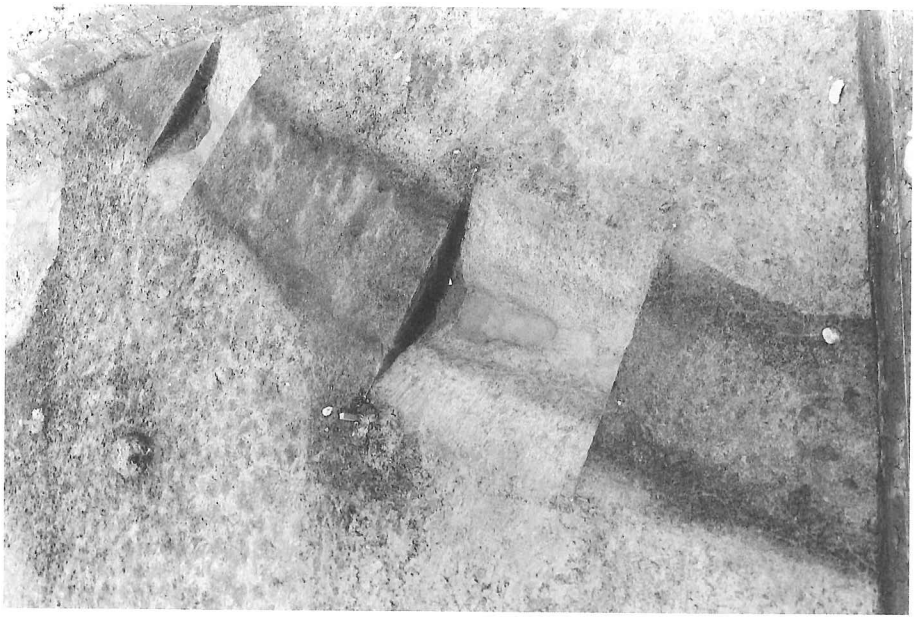
図版13

A区トレンチA南壁
（SD 3）

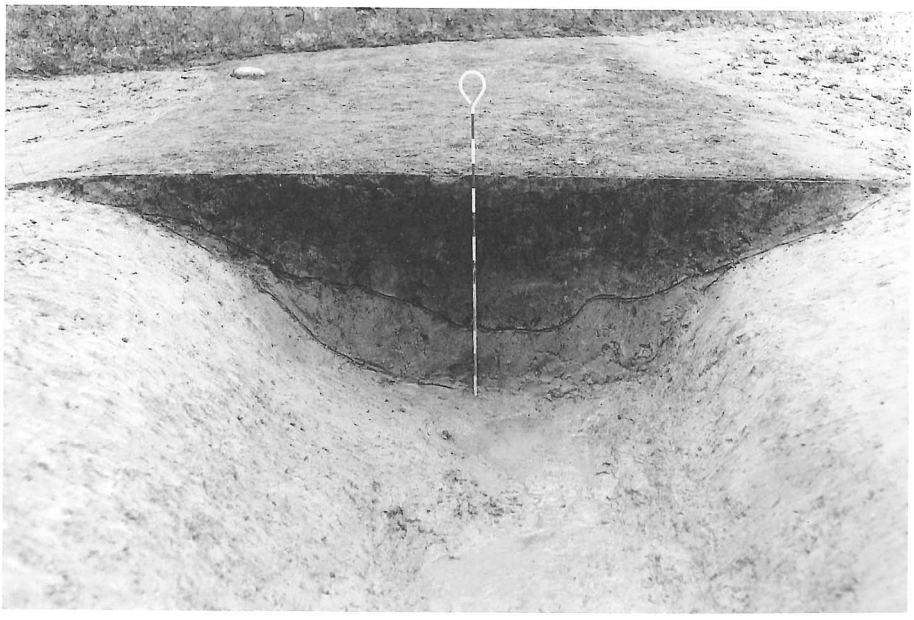
B区礫群出土状況

B区SD 5出土銅鏃

B区トレンチD東壁
（SD 3・5 断面）



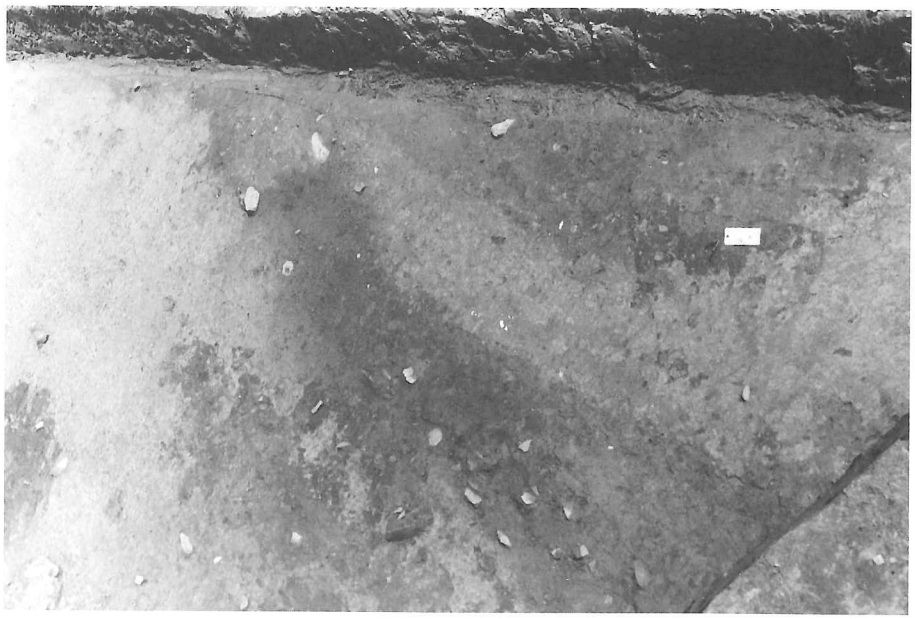
C区 SD 1 トレンチ
完掘状況



C区 SD 1 断面（東壁）

図版15

C 区 SD 1 断面（北壁）



F 区 SD 6 検出状況

F 区 SD 6 断面（南壁）

Ⅳ．ま　と　め

本年度の調査は，原の辻遺跡の居住域である低台地上に２箇所，環濠群が展開する北東低地部に１箇所の調査区を設け，合計1,770㎡にわたって調査を行った。各地区の調査成果については個別に検討を加えたが，ここでは問題点と今後の課題を提示して稿を閉じることにする。

１．原地区の調査成果と問題点

原地区では，祭儀場南端部の調査を行った。その結果，弥生時代中期には南側に「コ」の字形に張り出しながら東西に伸びる環濠，弥生時代終末には平面プラン隅丸長方形の周溝状遺構，古墳時代前期には調査区中央付近で途切れる溝へと変遷することが明らかとなった。原の辻遺跡の生活域である低台地上において，このような溝状遺構が長期間にわたって複雑に展開する箇所はほかになく，これらの遺構群の評価は，原の辻遺跡の構造を把握する上で重要な意味を持つであろう。

弥生時代中期における出土遺物は土器が中心で，器種構成は甕が主体となる。出土土器全体に占める丹塗り土器の割合も低く，この傾向は低地部で検出される一般的な環濠の在り方と共通する。「コ」の字形もしくは半円形に張り出す環濠は，佐賀県吉野ヶ里遺跡をはじめ，各地の弥生時代集落で確認されており，張り出し部分には物見櫓と考えられる掘立柱建物が建てられる事例が多い。今回検出した遺構でも，張り出し部や環濠の床面からピットを検出しており，環濠に伴う何らかの構築物が存在した可能性は高く，他の遺跡での事例と共通点は多い。ただし，ピットの直径は10㎝のものが主体で深さも浅いことや，配列が不規則であることから，恒常的で規模の大きな構築物は想定しがたい。調査区周辺は原の辻遺跡の最高地点に位置し，周囲の平野を見渡せる非常に見晴らしのよい場所である。一方で，季節風の影響を受けやすい場所でもあり，このことが大規模な構築物を作らなかった理由として考えられるであろう。いずれにせよ，この時期は実用的な空間利用であったと考えられる。

弥生時代終末の周溝状遺構は，南北8.5m，東西7.2mの隅丸長方形に復元できる。周溝内出土遺物は土器が主体で，器種構成は壷と甕がほぼ拮抗する比率となるが，昨年度調査時の出土遺物を勘案すれば，壷の占める割合がかなり高かったものと考えられる。昨年度調査時の出土土器の中には，口縁部を意図的に打ち欠き，体部に穿孔した大型の壷が出土しており，土器を廃棄する際に何らかの祭祀が行われたものと推測される。このことは土器以外の遺物からもうかがえる。特に，長軸方向に湾曲した鉄鎌や，厚みが均一でない鉄剣など，実用品かどうか疑問の残る鉄製品が出土しており，これらも祭祀の対象となった可能性がある。しかし，具体的にどのような祭祀が行われたのか，現段階では明確にできない。過去の調査での出土分も含めて，改めて出土遺物の再検討が必要であろう。

古墳時代前期に展開する溝状遺構は，調査区中央部を起点に，南側へ不規則な展開を見せつつも，基本的に東側へと伸びる遺構である。出土遺物は土器が主体であるが，器種構成は鉢・小型短頸壷・小型丸底壷・ミニチュア土器など祭祀系の器種が主体となる。このほか，ガラス小玉や鉄片・ランダムに砕いた黒曜石片なども出土しており，弥生時代終末以降も祭祀空間として利用されていたことを物語っている。

原地区で発見されたこれら遺構群の意義は，まず，祭儀場とされる場所ではじめて祭祀関連の遺構・

遺物が検出された点にある。これにより，具体的に祭祀を行った時期や空間が明確になったものと考える。今後は，具体的な祭祀の内容を検討する必要があろう。

このほか，祭儀場北半部の遺構群の再検討が必要である。この点は昨年度指摘したが，祭儀場北半部のピット群をどのように解釈するかで祭儀場の規模や構成が大きく変わってくる。この点も今後の重要な課題である。

2．高元地区の調査と問題点

高元地区の調査成果で重要な点は，低台地上で複数の文化層が存在することをはじめて確認した点にある。従来の調査でも，古墳時代前期の竪穴住居の床面から弥生時代中期の土坑が検出される事例があり，複数の時期にまたがって遺構が展開することは把握していたが，層位を異にする文化層として確認したのは今回が初めてである。堆積物の供給が少ないと考えられる低台地上にあって，このように複数の時期の遺構が文化層として検出される背景には，自然堆積だけでなく，人為的な要因も考慮する必要がある。特に，第２文化層を構成する黄褐色土は，基盤層である玄武岩粒子を大量に含むもので，この段階の遺構の埋没に際して，人間が関与した可能性を示唆するものである。今後は，各文化層の時期を明確にするとともに，遺構群の内容を確認し，人為的な造成を含めた土地改変の歴史を明らかにしていく必要があろう。

3．石田高原地区の調査と問題点

北東低地部の遺構群は，従来の遺構群とのつながりを確認するとともに，東側への展開もある程度明らかにできたものと考える。石田高原地区は，南東低地部を中心に，調査研究事業に伴う発掘調査で継続的に調査を行ってきた。本年度調査した北低地部の遺構群は，弥生時代中期の段階ですでに分岐・合流を繰り返す複雑な展開を見せており，同時期の南東低地部遺構群が比較的単純なのとは対称的である。また，北東低地部と南東低地部の遺構群のつながりについても，まだ課題を残している。環濠同士のつながりについては，主として土層の堆積状況や断面形態を重視したが，これまでの調査成果でも明らかな通り，環濠は分岐・合流を繰り返しており，途中で止まるケースも見受けられる。したがって，遺構群のつながりを把握するには，やはり発掘調査によるところが大きい。特に，過去の調査で検出した遺構とのつながりは，旧調査区の一部を調査区に取り込んで，遺構を再検出して検討する方法が最も有効であると考える。

4．その他の成果と問題点

最後に，紙面の都合で掲載できなかった自然科学分析の成果に触れておく。本年度は土坑検出種子の同定および年代測定を行った。高元Ｄ区 SK１（弥生時代中期前葉）から出土した炭化コムギを加速器質量分析法（AMS）で測定したところ，2080±40年 BP という値を得た。コムギの年代としてはかなり古いもので，原の辻遺跡の農耕活動を考える上で興味深い成果である。今後機会を見つけて成果を公表することにしたい。

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査研究事業報告書
巻次	
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	中尾篤志・溝上貴稔
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2005年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 (はるのつじ)	長崎県壱岐市 (ながさきけん いきし) 芦辺町・石田町 (あしべちょう いしだちょう)	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20040517 ～ 20050225	1,770m²	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	濠・周溝状遺構 土坑・竪穴住居 ピット	弥生土器 磨石・敲石 鉄剣・鉄鎌 銅鏃・青銅製鋤先	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第31集

原の辻遺跡

2005. 3. 25

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂